時間の実験

ジョン・ウィリアム・ダン

2019.12.2　初版公開

2020.3.16　最終改訂

目次

序（第三版への序・第二版解説からの抜粋）……4
第一部　定義集……10
第二部　難問……46
第三部　実験……74
第四部　時間の持続と時間の流れ……148
第五部　連続時間……189
第六部　批評家への返信……294
第三版付録
Ⅰ　アーサー・エディントン（王立学会特別研究員）による注釈……320
Ⅱ　年齢因子……322
Ⅲ　新しい実験……333
解説に代えて……377

時間の実験

ジョン・ウィリアム・ダン

本文中の＊は原注および翻訳者による注があることを示す。注は、参照する際の便宜を考慮して、できるだけ見開きの左ページ端に置いた。

第三版への序

『時間の実験』は、一九二七年三月に初版が出版された。それは二つの版と一度の重版を経ているが、実質的な変更は何もなかった。この（第三）版で私は、この本を最初から最後まで徹底的に見直すべきだと考えた。新しい事項（新章十一（a）を含む）のおよそ八十ページを挿入し、分析的な章における議論をいっそう単純化するために最善を尽くした。しかし、最も重要な追加事項は付録Ⅲであり、そこでは得られた証拠の価値を評価する新しい方法を扱っている。これは実質的に、非常にすぐれた効果を上げる新しい実験に相当する。

一般読者の皆さんは、この本が科学や数学や哲学や心理学の予備知識を一切要求していないことにお気づきになることだろう。例えばコントラクト・ブリッジのルールよりも、はるかに理解が容易なのである。例外は、この序文の残りの部分である。それは完全に専門家のために書かれていて、決してこれから出てくることのサンプルではない。

＊　＊　＊

神秘主義者に好まれ、インドの哲学者パタンジャリの時代に遡る、多次元世界なるものは、私の琴線に触れたことがなかった。単なる仮説として（すなわち論理的に強いられることなく）新しい次元を導入することは、考え得る中で最も突飛なやり方である。それは、ほかのいかなる仮説に基づいても奇跡のように見えてしまうような、やや強烈な事実を説明する必要性によってのみ正当化され得るものだろう。そして、我々がさらにもう一つの次元の可能性を考慮することを敢行するよりも前に、新しく、いっそう素晴らしい奇跡が発見される必要があるだろう。その場合でさえ、克服されるべき大きな困難が残ると思われる。例えば、五次元世界の五次元的観察者は、その世界をたった三次元の中で拡張されたものだなどと考えることがあるだろうか？「無限後退」として哲学者に知られているものの結果として展開していく世界は、前述の異論から完全に自由である。

知識のない人に説明しておきたいが、この「無限後退」というものは、「自意識」や「意志」や「時間」を研究し始めるとすぐに現れる、奇妙な論理的展開なのである。自意識のある人とは、「自分が知っていることを知っている人」である。意志のある人と

は結局のところ、選択を決定する動機が考慮に入れられ、それらの**動機**の中から選択できる人である。そして時間とは――この本は、ただこれのみを扱ったものである。

どんな後退にも対処できる通常の哲学的方法は、「矛盾と曖昧さに満ちた」ものとして、できるだけ早くそれを捨てることである。自分が困惑した経験の初期の段階で、私はこの態度が正しいと思った。しかし、「時間」という概念においての明白な後退は、九歳の時以来私の好奇心をそそってきたものであった（私はそれについて自分の子守に尋ねたことがある）。その問題は、私が年を取るにつれて、時折頭に浮かんできた。私は、この問題以外に十分多くの問題を抱えていて、それが邪魔にならないようにしたかった。それでも結局私は、**何が**矛盾しているのか、**どこが**曖昧なのかを発見しようと取りかかった。私は、想定された誤謬を探すのに二年間を費やした。思うに、この後退に、より激しい、より多彩な、より根気強い攻撃を加えることは不可能である。非常に驚いたことには、この襲撃は失敗してしまったのだ。ゆっくりと、また不承不承に、私は敗北を認めていった。そして、最終的に私は、「自意識」「意志」そして「時間」の後退が、完全に論理的で、完全に正当であり、すべての認識論の真の基礎であるという驚くべき事実に直面しているのに気づいたのである。

しかしながら、私が後退の重要性がどこにあるのかを十分に理解し始めたのは、何

年も経ってからだった。後退は、単なる数学的級数である。そしてそれは、単なる関係の表現である。しかし、そのように表わされた関係は、関係する級数の第二項を検討するまでは明らかにならないものである。今、時間の後退の第二項は、人類にとってかなり重要な関係を明るみに出す。後退が主張するのは、こうした関係の存在である。しかし、このように正体が隠された情報は、我々が第一項だけに検討を限定するならば、完全に失われてしまう。とはいえ、それが人類がやってきたことなのだ。

このことに気づくとすぐ、私は腰を据えて本の執筆に取り組んだ。これには、時間後退についての、これまでに完了した初めての分析が含まれている。付随的に、人間の不滅性についての初めての科学的議論も含まれている。これは完全に予想外のことであったと言ってよい。それどころか、執筆に従事していた時間の大半、私は、より大いなる世界で生き延びるという人類の最後の希望を、奪い去っていると思っていたのである。

一九三四年三月十五日

J・W・ダン

第二版解説からの抜粋*

我々は出来事が発生する以前にそれを習慣的に観察している、ということをしぶしぶながらも認めようとする一方で、そのような未来予見というものは、ちょっとした論理的困難として扱うのが適当で、我々のいずれかの科学の些細な見直しによって、あるいは我々の形而上学にわずかに超越主義（トランセンデンタリズム）を付け加えることよって対処されるべきだ、と思っている人がどれほどたくさんいるのかを知ることは、なかなかの驚きであった。その類いのことをいじくりまわしたり手を加えたりしたところで、ほぼ何の役にも立たないということが、おそらく強調されるのだろう。予見が事実であるとするならば、それは宇宙についての過去のあらゆる見解の根拠全体を完全に破壊する事実である。例えば、予見される出来事は避けられるかもしれないということに留意してほしい。では、その構造はどのようなものなのだろう？

私は、我々の消滅した基盤が、本書で述べられている「連続理論*」のような単純なシステムで置き換え可能であるということは、おおむね幸運なことであると提唱するものである。

もっと簡単な説明を見つけたいと望む人には、直面している困難――すなわち、我々は「observe events before they occur（出来事が発生する以前にそれを観察している）」ということ――についての自分自身の言い方を検討してみるとよい。その**「before（以前に）」**という語が、どの時間順を指しているかを自問しよう。発生している出来事が並べられた最初の時間順でないことは確かだ！　そのとき、自分の言い方が（そしてそれと同じ一般的な形を取るはずの自分の問題のあらゆる表現が）、それ自体、時間が連続であるということの直接的な主張であることを理解できるかもしれない。

もし時間が連続であるのなら、時間について説明されるように宇宙も連続でなければならず、また記述も、正確に言えば同様に連続しているはずである――二十五章で提唱されるように。もしそうであるならば、そのような方針に沿って物理学と心理学の書き直しに着手するのが早ければ早いほど、我々はそれだけ早く、現在ある亀裂に対処し、新しくより安全な知識の道へと乗り出したくなるだろう。

J・W・ダン

＊第二版解説からの抜粋……第二版の解説から、正誤表を除いた部分を再掲している。

＊連続理論……原文 serialism。この語の訳し方については二四三ページ訳注参照。

第一部　定義集

第一章

おそらく、ここで言っておくことが賢明であろう――読者はこの先のページをちらちら見ているかもしれないので――これは「オカルティズム」についての本ではなく、また「精神分析」と呼ばれるものについての本でもない。

これはただ、やや奇抜な方向性を持った、極めて用心深い偵察踏査の説明にすぎず――関係のある実際の出来事の物語に、関連性があると思われる理論考察の記述を加味し、慣習的な形式で提示した説明であって――、物語の最初の方の芝居がかった、見かけは**奇怪な**性質に、読者が疑惑の念を抱く必要はない。その段階で達成されなければならなかった課題が、紛らわしい材料の蓄積からただ一つの基本的な事実を（化学者から用語を借りると）「単離すること」であったということが、容易に理解され

るであろう。このような分離プロセスの説明には、当然、分離がもたらされた材料の記述を含めなければならない。そして、そのような材料は非常にしばしば、また今回の場合は大部分が――がらくたのようなもの、なのである。

＊　＊　＊

従うのが困難だと感じられそうなものは本書のページ内には現れない。ただし、十七、十九、二十一、二十三、二十四、二十六章にある、角括弧で囲まれた、特定の目的のためのパラグラフを避けるならば、だ。それらは専門家のためにより詳細に書かれている。また、第五部は二回読む必要があるかもしれない。とは言っても、時折不意に現れるであろう少数のありふれた準技術的表現があるだけである。専門家ではない人が、本書の筆者が伝えたいと思っているものとはやや異なる意味を、それらの言葉に結び付けやすいという可能性は常にある。明らかに、そのような誤解は、本書の大部分を通じて、我々が互いに意図を誤解し合う結果に終わらせることになるだろう。それゆえに、これらの用語がどのように正確に用いられるべきかについてではなく、それらがほかならぬ本書で何を意味することを**意図されている**と見なせるかについて、

ある種の大まかな予備的合意に達することが賢明であろう。そうすることで、いずれにせよ我々は、読者を苛立たせるすべてのものの中でも最悪のもの――脚注や用語集への参照によって何度も中断されるテキスト――を避けることになる。

そうした合意が完全に一方向的になることが、達成をいっそう容易にするであろう。

第二章

要するに、こういうことである。

住民が全員盲目で生まれる国からの訪問者を、あなたが接待しているとしよう。そして、「見る」とはどういうことなのかを、客人に理解させようと頑張っているとする。さらに、幸いなことに自分たち二人がこれだけは共通して持っているということに、あなた方が気づいたと仮定してみよう。あなた方は二人とも、物理学で使われている技術的表現すべての意味にすっかり精通している、ということに。

相互に理解しているこの分野を使って、あなたは自分の論点を説明しようと努力する。あなたは、我々が「目」と呼ぶその小さなカメラにおいて、離れた物体から放射されるある電磁波が網膜でどのように焦点を合わせられ、そこで影響を受けた範囲一面にどのように物理的変化を生み出すかを言葉で述べる。この変化が、脳の中心に通じる交差した神経内の「神経エネルギー」の流れとどのように関係するのか、そしてそれらの中心での分子あるいは原子の変化が、離れた物体の輪郭の記録を「見る人」にいかに十分に提供するのか。

このすべてを、あなたの訪問者は完全に理解することができるだろう。

今、注目すべきポイントはこれだ。ここにあるのは、その盲人が以前には概念を持っていなかったことに関する知識の一部である。それは彼が、本人が直接行う通常の実験プロセスによって自力で獲得することができない知識、あなたが理解できるようには理解できない知識である。代わりにあなたは、物理学の言語で構成された、一つの説明を彼に提供した。そしてその代用品は、問題になっている知識をあなた自身から彼に伝えるという目的を果たしたのだ。

しかし、もちろん「見ること」には、単なる輪郭の記録以上にたくさんのものがある。例えば——色。

それであなたは、次のような方向性でもう少し続ける。我々が「赤い」炎と呼ぶものは、ある**長さ**の電磁波を作り出す。「青い」炎も、その長さに関するわずかな違いだけを除き、まったく同様に波を作り出す。視覚器官は、そのような長さの不等を示す波を分類するようにできており、それにより、これらの違いは、脳の中心で起こる身体的変化の対応する違いによって、最終的に記録される。

あなたの盲目の客人の観点からすれば、この説明もまた完全に満足がいくものだろう。今や彼は、肉体の脳が波長の違いをいかに記録し得るかを完全に理解すること

ができている。そして、もしあなたがそれくらいにしておくことで満足しているなら、彼は物理学の言葉が再びその課題に対応できることが証明されたこと、またあなたの物理学用語での説明が、例えばほかの人々が「赤」と呼んでいるものの、彼らが持っているのと同じくらいあらゆる点で完璧な知識を自分に授けてくれたことを確信し、感謝して去っていくであろう。

しかし、彼のこの仮定は笑止千万なものであろう。赤の、非常に顕著なある特徴の存在について、明らかに、彼はまだまったく何も知らないからだ。そしてその特徴（おそらく最も不可解で、間違いなくそれらすべての中で最も目立つもの）とは――その**赤み**なのである。

赤み？　そう。赤みというものが、物なのか、質なのか、幻想なのか、それともその他の何かなのかなどに悩むことなく、それがあなたやすべてお見通しの人々が非常に強く承知している赤の特徴であるという事実（1）からも、さらにはあなたの訪問者が、これまでのところ、あなたやほかの者がそのようなことを経験しているとか、経験すべきそのようなことが実際には存在するかもしれないとかいう考えを、ほんの少しも抱かなかっただろうという事実（2）からも、逃れる術はない。そのときあなたが、「見る」ということについての彼の知識を、あなた自身と同じレベルまで持ち

上げてやろうという自らに課した課題を完了するつもりなら、あなたの前にはまだ別のステップが残っている。

これを実現するため、あなたは心の中で物理学的表現のリストをちらっと見渡し、そして――一瞬の閲覧は、盲目の客人に**赤み**の説明を伝える目的のためには、何であれごくわずかでも役に立つものがそれらの表現の中にただの一つもないということを、あなたに示すに十分である。

あなたは彼に粒子（塊――慣性中心）のことを話し、それを、あなたが想像するのを好む複雑なダンスにおける振動、回転、旋回、衝突、反発として説明するかもしれない。しかし、そのすべての中にも、**赤み**の概念を導入するものは何もないだろう。あなたは波のことを話すかもしれない――大きな波、小さな波、長い波、短い波。しかし、**赤み**という考えはまだ生まれないままである。あなたは古い物理学に遡り、磁気や電気や重力の力（引力と斥力（せきりょく））について詳論するかもしれない。あるいは、新しい物理学、非ユークリッド空間とガウス座標の談義へと突入していくかもしれない。そして、盲人がうなずいて感謝の微笑みを浮かべている間、あなたは消耗が生じてくるまでこうした進め方で弁舌を振るうかもしれない。しかし、そのすべてが終わった後でも、彼は（ウォードが書いた）「ポピーの野原を見たとき直ちに経験する」のは

何なのかということに疑念を抱かないだろうし、その点で彼が最初の状態と何ら変わらないことは明らかである。

ここでの物理学的説明は、経験が与えたであろう情報を提供することができない。そのとき、赤みは物ではないかもしれない――だがそれはまったく確実に**事実**である。周囲を見回してみるがいい。それは現存する中でも最も派手に目立つ事実の一つである。それは至る所で説明されることを要求し、騒ぎ立て、あなたに挑戦してくる。**そして、物理学の言語は、その説明を提供するという任務には、根本的に適さないのである。**

赤みを「幻想」と呼ぶことが物理学者の助けにならないことは明らかだ。物理学は、その幻想の中への**赤み**の要素の侵入を記述したり説明したりすることに、どのように取り組めばよいのだろう？　物理学によって描かれた宇宙は無色の宇宙であり、その宇宙においては、「幻想」を含むすべての脳の偶発事は無色のものである。説明する必要があるのは、幻想だろうがそれ以外の呼称だろうが、その絵の中への色の侵入なのである。

あなたが、赤みとは位置の複合体、運動の複合体、圧力の複合体、数式などを超えた何かであるということを一度でも完全に理解したならば、色がその種の唯一の事実

ではないことを把握するのはほとんど難しいことではない。もし架空の訪問者が盲人ではなく聴覚障害者であったとしたら、彼に物理学の本を読ませたとしても、**聞かれる**のと同じようには、「音」の性質に関する疑念の始まりさえ彼の中に喚起することはできないだろう。今、音は、聞かれるように事実である（この本を下に置いて聞いてみてほしい）。しかし、物理学によって記述されている世界においては、そのような事実が見いだされることはない。物理学が我々に示すことができるのはすべて、脳の粒子の**位置配置**の変化、またはそれらの粒子に作用する**張力**の変化である。そして、そのような変化の大きさと方向のカタログの中には、鐘が鳴るときにあなたが直接経験するような現象が宇宙のどこかに存在することを示すものは何もない。実際、「赤」における赤みの要素を扱うことができないのと同様、物理学は、その澄んだ鐘の音の宇宙への侵入を説明することは本質的に不可能なのであり、その宇宙では、集めたり押したり引いたりする動画図としてしかそれを描くことはできないのである。

しかし、もしそのような図の中に色も音もないとして、それは「味」や「匂い」のような現象をその中に探すのに役立つ見込みはあるだろうか？　我々が見いだすことを望める最大限は、問題になっている経験に**伴う**脳の粒子の動きであろう。あるいは、もしかすると、今のところは気づかれていないエネルギー回路に関する伝達方程式

が、いつか見いだせるかもしれない。架空の訪問者とあなた自身は、それぞれがこれら脳の変動状態について持ち得る限り最大の知識、まだ書かれていないようなエネルギー方程式の最も完全な知識を持っているかもしれない。しかし、もし**あなた**が味わい、嗅ぐことができ、彼ができないのであるならば、それらの現象それぞれについてのあなたの知識は彼にはまったく知られておらず、実際、まったく想像できないようなものを含むことに反論の余地はない。

今、「物理学的」である何らかの出来事について口にするとき、それは、それについて物理学用語で潜在的に記述可能であることを意味している（さもなければ、その表現はまったく意味がないだろう）。従って、我々の感覚神経が関係するすべての偶発事においては、そこからあらゆる既知の、あるいは想像可能な物理的構成要素を取り除いた**後で**、我々はある種の明らかに非物理的な**残滓**（ざんし）を見いだす、と述べることは完全に正しい。

ところが、これらの残りものは、我々の宇宙においては最も目立つものなのである。あまりにも目立つので、それらを、体外の神経終末に位置しているとか、その終末も超えて外の宇宙に広がっているとか想像してしまう我々の錯覚によって、支援され、そそのかされつつ、それらは燃焼の光、色、刺激臭、騒々しく無秩序な音といっ

た、広大な外の世界の効果を生み出す。それらは集まって、極めて驚異的な、明確に区分された諸現象の嵐という塊となる。そしてそれは、物理学がその発言を完了した**後で**、考慮されないままになっている嵐なのである。

物理学

そしてまた、今述べたことは驚くようなことではないのである。何となれば、物理学の理想的な目的は、人間の観察者の存在からは独立した存在と信じられるような自然の中の要素を探し出し、分離し、記述することだからだ。物理学とは、このように、宇宙ではなくて、純粋に感覚的な性質のあらゆる効果をその宇宙から抜き取った場合にそこに残るであろうと思われるものを、特に研究するよう意図された科学なのである。いちばん最初から、それは色や音など、我々が直接知覚するようなもの――人間の観察者の存在に本質的に依存し、その者がいなければ存在しないもの――へのあらゆる関心を放棄しているのであり、またそれは、それ自身の制限された領域にふさわしい事実の記述のためにのみ役立つ言語と一揃いの概念とに、それ自身を制限するのである。

心理学と精神的

しかし、自分が置かれている状況の科学的な研究者として、我々は、自分が知っている世界全体を構成するほど大きくて目立つ現象の塊の研究を、もちろん無視することはできない。その結果として、それらおよびそのほかの、大きすぎて扱いにくい物理学の残りかすを扱うことを試みる別の科学が徐々に現れてきた。この科学は**「心理学」**と呼ばれ、それが扱う事実は「心的（メンタル）」、あるいはより一般的には「精神的（サイキカル）」と称されている。

第三章

現在、純粋に物理的なメカニズムと見なされている脳が、「色」「音」「味」等と呼ばれる生き生きとした精神的現象のいずれをも、何かの助けを借りることなく無から創り出すことはできないということには、科学的に議論の余地はない。にもかかわらず、対応する感覚器官の刺激が伴わなければこれらの現象が発生しないということは、実験的に確立されたと考られているようだ。また、それらは関係する感覚器官の性質に応じて性質がさまざまである。光と色は視神経の活動を伴う。音は耳の存在と関係している。味は口蓋だ。感覚組織の場所が異なれば、精神的現象も異なるわけだ。人間の色の経験は、目に飛び込んでくる電磁波の波長に応じて、紫から深紅に及ぶ。その波長がさらにほんのわずかに増加するならば、関連する心理的経験はただ熱のみとなる。しかし、関連する高感度の光学素子の非常にわずかな変化があれば、その熱の経験は可視の赤外線色の経験を伴うであろうことを、我々は知っている。

このように、物理的な脳は、そのような感覚的現象を創り出すことはできないというのに、その**特徴づけ**においては主要素となるのであり、そのため、それらを出現さ

せる原因となるかもしれないどんなプロセスにおいても、重要な要素なのである。

これまでのところ、その状態は、通常、一方では今問題としている精神的現象があり、他方ではそれらに対応する感覚器官の刺激があって、この二つが常に互いに随伴し合っている、あるいはいわば時間の平行軌道上で実行されている、といった慎重な言い方で要約されている。注目すべきは、これが「説明」として提示されたのではないということだ。それは、さまざまな告知者に好まれるさまざまな形而上学的教義を持ち出すことなく、単に事実を告知し得る単純な方法であると思われる。

精神神経並行論

この精神的な、ならびに神経系の（神経性の）事象の「並行性」が、観察可能な思考経験**すべて**に及ぶという――対応する脳の活動がなければ観察可能な精神的活動もないという――仮定は、**「精神神経並行論」**と呼ばれる。どちらかのクラスの活動は、他方のそれの「相関物」と言われている。

この見解を支持する蓄積された証拠は、事実上圧倒的である。苛酷な思考は脳の疲労を引き起こす。脳を毒する薬は我々の推論プロセスを妨げる。脳の衰退は新しい記憶を作る我々の能力に影響を及ぼす。とりわけ脳「震盪（しんとう）」は、事故のすぐ**前に起こっ**

た出来事のあらゆる記憶を破壊するように見える――実際、医師が震盪と診断するのは、その事故の原因となったことを患者が思い出せないということによってなのである。これは、記憶の方法が、**その確実な確立のためにわずかな時間を要する**「脳痕跡」であるという、ほとんど議論の余地のない証拠を我々に提供する。

そのような脳痕跡（神経の流れの通過によって形成された隔離された経路）が実際に存在することは、かなりありそうなことである。そしてさらに、関連する思考を実行する個人の能力が高ければ高いほど、問題になっている脳の経路がその分岐においていっそう数多く、また複雑になることが明らかにされてきた。

観察者

今や我々は、**「観察者」**として現代科学に知られている、その非常に控え目な精神を持った存在を紹介する域に到達した。我々がこの個人を完全に追放することができないということは、外部の現実に対する我々の探求の道における永久的な障害である。我々がどう宇宙を描こうと、その絵は我々が制作したものに変わりはない。一方、我々がその絵をどのように彩色するかということ、我々が提供された絵の具でそれをしなければならないことも、おそらく同じように真実であろう。しかし、これらの制限の

いずれもが、我々の進路を安全に設定できるような地図であると見なされる結果を無効にしてしまうという理由はない。そのうえ我々は、その点についてテストをすることができる。そして、経験上、そのようにテストした結果が信頼性を証明することは明らかである。そこに我々の知識探求の正当性がある。

すべての科学における一般的な手順は、観察されたものの違いを正確な表にすることから始まる。その後、その違いが観察者の性格や行動に起因するということが判明した場合、我々はそういうものが違いの説明となることに留意し、それに応じて科学の下図を描くことができる。しかし、我々の知識へのその追加は、観察されたような違いの以前の分析を無効にするわけではない。

反対のことが明記されない限り、あらゆる科学は**標準的な**観察者だけを扱う。心理学もこのルールの例外ではない。その観察者は、通常は選定された個人であると考えられている。

今、精神神経並行論という教義は、この「観察者」にとってあまり励みになるものではないことを認めなければならない。それは、脳の働きが終わったとき、精神的現象も同様に骨折りをやめることを示しているからである。しかも、観察者を可能な限り遠くに押しのける科学的方法――観察されるもののカテゴリーにできるだけ多くの

絵を入れるため――は、映画の観客が、スクリーン上で自分の前に繰り広げられているストーリーの進路を変更する能力を持たないのと同じく、干渉能力を持たない無力な傍観者のレベルまで彼を引き下げる傾向がある。心と体のこの並行性についてのさまざまな形而上学的解釈（それらはいずれも**説明**を提供しない）の研究からも、得られる慰めはあまり多くない。理想主義者と現実主義者は、観察者が、いわば観察している現象に正確にはどの程度色を付けるのかということについて、激しく論争するかもしれない。しかし、その点について決定が下されたからといって、彼が与える色や、その色を付けたと認められるものを変える力を、彼が持っていると提唱する必要はない――まして、観察されるべき脳の活動がもはやなくなったというときには、観察を続ける能力もなくなるのだ。

アニミズム

しかしながら、これに関連して、我々は**「アニミスト」**として知られている、小さいながらも非常に精力的な哲学者のグループの存在を認識しなければならない。この二十世紀において、アニミズムの最も重要な解説者は間違いなくウィリアム・マクドゥガル教授であり、彼の著書『体と心』には、厳正なる公正さをもってその説に対する

賛否両方の議論が書かれている。実際、私はあれほどの破壊力でアニミズムに対する申し立てを述べていた人物を、誰も思い浮かべることはできない。

アニミズムは、観察者を取るに足りない者どころではないと考えている。その者は、「意識のある自動人形」ではない。彼は、確かに描かれた宇宙のすぐ外側に立っているのかもしれない。だが彼は、観察された出来事の進路を変えることを可能にする干渉の力を持った「魂」――脳を読むだけでなく、道具としてそれを使用する心――なのである。自動ピアノの所有者は、その演奏を聴くことも、自分でそれを演奏することもあり得るのと同じことである。

推論されるのは、この観察者が、観察しているその脳の破壊を切り抜けられるということである。彼の干渉に関しては、物理学側からの、それに対する打ち勝ちがたい反論というものはない。マクドゥガルは、神経系のエネルギー総量を増減することなく果たされ得る干渉のさまざまな方法を、引用したり提案したりしている。

普通の人は、科学者の大多数が「魂」という考えをひどく冷遇する理由が分からない。中でも信仰を持つ人は、自分の主張が単なる反対だけでなく辛辣（しんらつ）な侮蔑（ぶべつ）を引き起こす理由が理解できない。とはいえ、その理由はすぐに分かる。それは、その考えが人間の過度のうぬぼれに帰せられるということではない（これは時に思慮のない無分別さ

によってなされるにもかかわらず)。というのは、結局のところ、パブに入ってジョッキのビールを注文できる人夫の方が、かつて空に浮遊したうちでいちばん大きな冷たい糟(かす)の塊よりも、はるかに素晴らしいからである。それよりも、魂という考えが、最初は夢の観察の結果として原始人の心の中に生じたに違いないということは、疑う余地がない。彼は無知ゆえに、夢の中で、自分が一方の宇宙に眠る肉体を残し、別の宇宙へとさまよっていったのだという以外の結論に達することができなかった。しかし、その野蛮さがなかったら、そのようなものは「魂」なのだという考えは、人類の心に浮かびもしなかっただろうと考えられる。そういうわけで、このように**その源泉で汚染された**ケースを支持するために後から導入される議論は、誰の真剣な注意も引くことができないものである。

第四章

表象

心理学は、観察された**外観**（「現象」という言葉の、意味に忠実な言い換え）を、その原因が何であるかについての結論を予断することなく記述することから始めなければならない。従って、そのような現象について、それらがあたかも物事であるかのように話すかもしれないが、それが根本的に脳の働きに関連する現象以上のものだと主張しているとは見なされるべきではない。最初は、その問題は未解決のままである。

表象領域

そのような現象はすべて**「表象」**と呼び、それらは個人のプライベートな**「表象領域」**内にあると見なす（我々は、より一般的だがあまり明確ではない**「意識野」**よりも、むしろこの用語を用いることにする）。この表象領域は、任意の瞬間に、起こり得る観察に対してたまたま提供されるあらゆる現象を含んでいる。これが何を意味するのか、具体的な例を挙げてみよう。あなたは今この本を読んでおり、あなたの表象

領域は、あなたが見つめている印刷された語の文字と関連する視覚的現象を含んでいる。それはまた、同時に*ページ上部にある小さな数字に関する視覚的現象も含んでいる。これにあなたは「気づかなかった」。だが、問題となっている数字は、明らかにあなたの視覚によってカバーされた領域内にあった――それは目を**通して**あなたの脳に影響を及ぼし、その精神的「相関物」はあなたの意識に提供されていた。そしてその記述は、ほかの多くの視覚現象にも当てはまる。振り返って考えてみると、あなたは、その領域がそのとき、――意識に差し出されたのに「気づかれない」ままの――肉体に対する圧力のようなある筋肉の感覚や、極めて多くの音や、呼吸するときに肺に流れ込んでくる空気によって生み出される心地よい感覚や、そういうもろもろも含んでいたに違いないことにも同意するだろう。

注意

これらの比較的気づかれない現象が意識的に観察されなかったとしたら、安全とは言えないだろう。あなたが降雪を見ているとき、観察は、浮遊している一ひらの雪片に集中するかもしれない。しかし、それはあなたが残りの部分を知覚し損なっているということを意味しない。それらが消えて、その一雪片だけが空中に残ったなら、そ

の消失にあなたは驚いて、前に没頭していた対象から注意を直ちにそらすであろう。オーケストラの演奏を聴いているとき、あなたは音楽に聴き入ったままでも、前の座席に座ったいらいらさせられる者が自分のプログラムで拍子を取るのをやめたのに気づくことができる。とは言うものの、観察は、原則として多くの表象のうちのある一つの、ないしは別の特定の部分に明らかに集中しているように思われる――これが習慣の問題以上のものであることを示す精神的証拠はないのだが。このように中心となる観察は、**「注意」**と呼ばれる。**「注意の焦点」**にあるものとして中心となる領域の一部を話すことは普通であり、この「焦点」の周囲で、注意がより大きなまたは小さな明暗度のものに集中しているであろうことは、ほとんど周知の事実である。*

生理学（物理的な有機体として脳を扱う科学）においては、表象領域は、その瞬間にたまたま精神的現象の生産に関連した活動の状態にある、脳の特定の部分であるに

＊ページ上部にある……原文「下部」。底本では、このページのノンブルはページ下部にある。

＊（原注）……読者は、注意の焦点を合わせることと、観察を援助するために体の動きを実行することとを区別するべきである。彼の目が自分の前の鈍い物体に焦点を合わせているならば、彼は自分の視野内のより明るい物質に注意を集中させることができる。その後で彼は、より明るい物質に視野の焦点を移すことができる。

すぎないだろう。そして、注意の焦点は、神経エネルギーの最大電流がたまたまたどっているその脳経路でしかないだろう。そのとき、この最大の流れは、何であれ起こった最大の感覚刺激によって生み出されていると考えられがちである。しかし、それは原則にはなり得ない。昼食のテーブルにやって来る空腹の男性は、輝く銀の明るさではなく、よく焼けたマトンチョップの、はるかに鈍い感覚刺激に注意の焦点を合わせている。従って、注意は、有機体の外から引き寄せられるか、あるいは内側から指示されるかのどちらかであろう。もし我々がそのような指示を究極の観察者に帰するとしたら、干渉の力を持った完璧な「アニムス」の地位を彼に認めなくてはならないだろう。学校の生徒ならみんな知っているように、注意の集中は記憶の形成にかなり著しい効果をもたらすからである。しかし、生理学者は、我々には、この内部的な注意の指示を、純粋に機械的な脳の内部状態を超えるものに由来すると見なす権利などない、と説くことだろう。

今、いかなる瞬間でも、表象領域には、我々が考えてきたこれら感覚的外観以外にも、非常に多くの観察可能な現象が含まれているだろう。例えば**「記憶イメージ」**も含まれるかもしれない。

「記憶イメージ」とはどんな現象なのだろう？

印象

表象は、明確に異なる二つのクラスに分けられる。これらのうちの最初のものは、観察者の目には外側の感覚器官か神経終末の作用に直接帰することができるように見える、すべての現象を含んでいる。それらが実際にそのような表面的機構の活動と関係していることは、問題の器官または神経終末の活動ないしそれらへの外部の干渉が、観察される現象の性質を変化させるという事実からも、またそのような活動あるいは干渉がない場合は、現象は変化もなく**逃れることもできない**ままであるという、同じように重要な事実からも、明らかである。それらは、一般的に言うところの「意志的に譲られる」ということができない。そのような現象は**「印象」**と呼ばれる。

イメージ

ところで、今あなたが記憶している部屋を心の中に思い描いてみてほしい。あなたが観察しているものは**視覚的な**表象――心的な**像**――であることは疑いない。そのプロセスは、「ええと、その隅にソファがあって、別の隅にはピアノがあって、カーペットの色はこれこれで」などと心の中で考えていくのとは、まるで異なる。それよりも

むしろ、あなたが覚えているものの全体が、同時の映像という形で眼前に浮かんでくるのである。しかしながら、もしあなたが、そのような視覚的な像は言葉で細部を記憶されたカタログから丹念にこしらえ上げたものではないということをしっかりと確かめたいのなら、次の実験をしてみるのがよいだろう。風景の絵を注意深く見てほしい。次に、三十分後に自分が見たものをもう一度心に思い浮かべてみよう。あなたは、元の印象の正確な色の多くを再び観察することができることに気づくだろう――独特なオリーブ色、茶色、灰色――それらの多くが、言葉による描写はもちろん、あなたの芸術的分析力を完全に超えていたとしても、である。そのように、あなたは、あなたが印象として見たものに似た色の配置を、「イメージ」として観察しているはずである。

現実のトーン

ある印象と、それに関連するイメージとの間には、違いがある。それはすべての心理学者が記述に悩んできたことである。それは時に「感覚的生々しさ」と呼ばれるもの、私としては「現実のトーン」と呼んだ方がいいと思われるものの有無にあるのだ。あなたが目で見ることができる部屋と比較すると、あなたが記憶している部屋は非現実的なもののように思われるけれども、**視覚的**イメージとして認識できるほど十分にリ

アルである。まあそれは**聴覚的**イメージではないのだが、今度は、ワイングラスの縁を叩き、その音が消えていくのに耳を傾けてほしい。それは消えるまで次第に弱くかすかになっていく。だが、（ウォードが指摘するように）最後まで現実のトーンを保っている。完全に消えてしまった後、消える直前のように、あなたは鳴っていたものを思い出すことができる。その記憶は音の記憶――聴覚的イメージ――として認識できる。それは元のかすかな印象の音色的特性をすべて持っている。しかし、それは現実的な外観を欠いている。

さらに、本当の記憶イメージと、一般に「残感覚」と呼ばれる現象とを比較してほしい。後者は容易に観察されるだろう。鮮やかな赤のランプシェードを六十秒間じっと見つめてから天井を見上げると、ほんの少し後で、ランプシェードのような輪郭をした緑色のまだらが見えるだろう。この現象はぼんやりしており、その境界線内の細部は、もしあったとしてもほとんど姿を見せず、元の印象とは反対の色（補色）であり、また遠近感をまったく欠いている――全体に平坦に見えるのだ。しかしながら、それは現実のトーンを持っており、明らかに一つの印象なのである。それは、あなたが目を動かすと動く。だが、眼前に浮かぶこの緑色のまだらを実際に見ながら、あなたはランプシェードの元の印象の、本当の記憶イメージを観察することができる。それは

元のとおり赤色で、内部の多くの詳細を見せ、立体的に見える――すなわち、両眼視で見える奥行きを有するように見えるのである。

五分後、緑色の残感覚の痕跡がすべて消えたとき、あなたは赤いランプシェードか、あるいは緑色のまだらの、いずれかの鮮明な記憶イメージを、自由に観察することができる。

その場合、そのイメージは、単なる薄れゆく印象とはまったく別の現象であることに注意しよう。

第五章

記憶列

今、あなたが一連の観察された印象を思い出そうとした場合、これらに関連するイメージは、実際は元の印象が受け取られた順に対応する順で配置されているかのように観測される。誰もが知るように、この仮想の配置は**「記憶列」**と呼ばれ、起こった順に出来事を記憶するプロセスが、時にかなりの精神的努力を必要とするものであることは、注目に値する。しかし、あなたがもしわざと明確な目的を目指すことなく、単に心をさまよわせるだけならば――白昼夢のように――、そのとき観察される一連のイメージは、前に観察された出来事の連続とほとんど対応しない順序で配置されるように見える。

観念列

この奇妙なイメージの連続は**「観念列」**と呼ばれ、単純で方向付けのない観念列が続くことがどんな精神的な努力も疲労も伴わないように見えるのは、あるいは非常に

重要な事実かもしれない。

ほぼすべての人が、自分では意識せずに、あることを考えたり思い出したりすることに自分を導く観念列をたどることを、一度や二度は楽しんできた。「私はこれを見た」と彼は言うだろう。「そしてそれは私に何々を思い出させた。またそれは私にこれこれを考えさせた」など。どんな具合か、ここに具体例を示す。

今は夕方で、私の目の前には黒と白が隣接したチェック模様のティーカップがある。この光景（印象）は、今朝私が残感覚を得る実験の材料として使っていた、チェックのオイルクロスの床張りの記憶イメージを「浮かび上がらせる」。さて、その実験をしているとき、私は『ブリタニカ百科事典』にある、これらの現象についてのウォードの説明を考えていた。そして、私の前に現れる次のイメージは、問題のその赤い本のイメージである（私のは縮刷版である）。それに続いて、その本の開いたページのイメージ、さらにそれを読むときに伴う眼精疲労の感覚の非常に鮮明なイメージが現れる。それは、私が時々使う拡大鏡のイメージを「浮かび上がらせる」。それは、私が買おうとしていた*トラウト・フライを吟味するために、昨日の朝釣具店で借りたレンズのイメージを「浮かび上がらせる」。それは、私が友人のためにその毛針を買った、その彼のイメージを、私にそうするよう頼んだときに彼が立っていた様子で「浮かび

上がらせる」。そしてそれは、二日前にその友人の水から横領した二・五ポンドのマスの喜ばしいイメージを「浮かび上がらせる」。こんなふうに、ティーカップから始めて、私はマスへとたどり着く。

今、観念列の性質を考察すると、次の事実が明らかになる。

一般的イメージ

いくつかの部分的に似た印象が異なる時間に注目されているとき、それらいくつかの印象に関係するいくつかの記憶像のほか、それら別々のイメージすべてに共通する主要素以外のいかなるものからも構成されない、曖昧な一般的イメージが観察できる。例えば、私が見て、喫煙して、手に取ったことのある何百もの喫煙用パイプのイメージには、一般的な「パイプ」のはっきりしないイメージとしてそのときの私にとって明らかな共通要素が、すべて含まれている。それは、例えば傘のような何か別の物品からパイプを区別するのに役立つ、あらゆる本質的な特徴を提示する。そのような特徴とは、空洞のボウル、管状の柄（え）――要するに、喫煙目的のために有用な外観である。ところが、この不明瞭なイメージは、特定の色や正確な寸法の表示を見せてくれるこ

＊**トラウト・フライ**……マス用の毛針。ダンはドライ・フライ（浮く毛針）の専門家でもあった。

とはない。しかしながらそれは、私の心的装置内に見られる**特定の**パイプの明確なイメージすべての核であるように思われる。というのは、もし注意がそれに向けられるなら、そのような特定のパイプの中の、時にはあるもの、時には別のもののイメージが、すぐに観察可能になるだろうからである。

これらの曖昧な、ほとんど形をなさない一般的なイメージは**「一般的イメージ」**と呼ばれ、それは特定の明確なイメージが放射状の糸の関係にある、その中心の結び目に似ているように見える。

連想ネットワーク

これらの糸――これらの明確なイメージ――の多くが、別の一般的イメージからも放射しているであろうことは明らかである。特定の木製パイプボウルの確定的なイメージは、一方では一般的イメージの「パイプ」に、他方では私が「木目のある木」と呼ぶ一般的イメージに属するかもしれない。その一般的イメージは、その別の構成要素として磨かれた胡桃（くるみ）のテーブルの一般的イメージを持つかもしれず、そのイメージは、さらに「家具」の一般的イメージに属している放射糸であるかもしれない。「家具」からの糸――例えば、店のウィンドウに見られる、ある特定の家具セットのイメー

ジ――は、「アンティーク」の一般的イメージと結び付くかもしれない。この段階で、目下我々は、観察者の側で意識的な努力なしに注意が導かれそうな、網に沿って結び目（一般的イメージ）と放射糸（限定的イメージ）が並ぶ、ネットワークに似たものに向き合っている。こんな具合に、結び目と糸とのネットワークに絵的な類似で結合された諸概念は、「連想的」と言われている。それゆえに、問題の構造は**「連想ネットワーク」**と呼ぶことができよう。

一般に、連想は二種類あると見なされている。**類似**による連想。ある出来事が、昔起こったかもしれない似た出来事を思い出させるときのような。それに、**隣接**による連想。これはすなわち、二つの出来事が近いタイミングで連続して起こったとき、一方の想起がもう一方の回想を導く場合である。

生理学者にとって、連想ネットワークは単なる脳経路のネットワークで、「結び目」はその中の部位――あるいはパターン――であり、「連結糸」は二つ以上のそのような部位――あるいはパターン――に関連する経路である。連想のあらゆる現象は、その仮定に基づいて適切に説明されているように思われる。そして、私が調べた限りでは、ほかの理論では**「類似」**による連想を説明することは完全に不可能である。

別の手引きがない場合、観念列がたどる経路は、かなりの部分はイメージの**新鮮さ**

という要素によって調整されるように思われる。ほかのものが同じなら、直近で確立されたイメージの方が、長時間見逃されてきたものよりも、浮遊している注意をより強く得ようとする。読者は、少し前に出た観念列の例（ティーカップで始まったもの）において、あらゆるイメージが直近に起こった経験に関連していたことに気づくであろう。例えば、ティーカップの白黒のチェック模様は、私の中で非常に目立つ一般的イメージであるチェスではなくて、私がその朝見ていたリノリウムの一部へと私を導いた。生理学的には、これは直近で通過された脳経路が、使われないままにされていたものよりも、神経エネルギーの流れにとってよりよい経路を提示したことを意味する。

「記憶列」と考えられるものは、連想ネットワークを通る特定の経路、直近でたまたま通過した経路にほかならない。「記憶列」を少なくない距離で逆にたどろうとしてみると、その経路は明らかに取り上げられるのをやめてしまうことに気づく。そのイメージは、いわば自発的な、確実に正しい順序でやって来ることはない。どの出来事が次に起こったかについての**推論**によって、記憶は援助されなければならない――そして、時には誤った推論がなされるのだ。

夢

夢は、ほかの多くの心的現象同様、主として連想ネットワークによって供給されるイメージで構成されている。しかし、それらはいくつかの重要な点で心の迷走とは異なる。後者の活動形態においては、ネットワークに沿ってたどるべき進路を決定するため、ほとんど常に理性がある程度作用している。しかし、夢においてはこの手引きはほとんど欠けているようで、夢のイメージは、現実的な――奇妙に不安定ではあるが――、部分的にしか筋の通らない性質の、個人的な冒険物語のエピソードのような姿で現れる。

統合

夢のイメージ間の関連は、時に十分に明確である。しかし、原則として、そのような関連は**「統合」**として知られている奇妙な形態を取る。この語は、次のようなことを意味する。「構成要素が質的に区別できる、関連イメージの組み合わせ」(この定義は、ボールドウィンの『哲学と心理学事典』からのものである)。例えば、月曜日にショップで見られたピンクのドレスのイメージと、同じ場所が火曜日に再訪問されたときに見られた店員の女の子のそれとは、火曜日の夜の夢で、ピンクのドレスを着た店員の

女の子という単一のイメージに合成されるかもしれない。しかし、覚醒して夢を思い出してみると、夢のイメージの持つ二つの構成要素、ドレスと少女は、元の別々の印象のイメージとして明確に区別できる。

＊　＊　＊

概念

前述の定義リストにおいては、「心象」と呼ばれるあの思考過程のクラス――精神神経の連結が非常に容易に思い浮かぶクラス――を探求する試みがなかったことに気づくであろう。高位の思考過程は、まだ適切に――あるいは、おそらく不適切にさえ――理解されていない。それらについての我々の知識は、非常に漠然とした説明からのものである。例えば、我々が「食べる」「遊ぶ」「想像する」など、あるいは「困難」「真実」「欺瞞（ぎまん）」「相違」などを考えるときに用いるような、**「概念」**と呼ばれる特定の一般化された観念があるように思われる。だが、これらがそのような単一のクラス名のもとに合理的に集められているかどうかは甚だ疑問である。例えば、「食べる」と「相違」を比較してみよう。前者の観念は、脳経路の**叢**（そう）における広範なパターンのうち、

より広く確定的なラインの刺激にほかならないだろう。だが後者は、我々が定式化できるあらゆる単一の観念との関連を、主張したり共有したりできるかもしれない。

アニミストが、観察者の干渉の力なるものを守るために、最上の抵抗を示すことができるのがここである。しかしここでも、唯物論者は、係争中の領土のかなりの部分を侵略したと主張するかもしれない。脳が病に冒された人は、「食べる」ことを忘れているように見えるかもしれないし、あるいは、自分とバッタ間の「相違」の存在についてかなりぼんやりとしか感じていないかもしれないのだから。

我々の現在の道は、特にこの戦場の向こう側まで我々を運ぶことはない。戦闘員の声の届く距離内は通過するけれども。しかしながら、そこから我々は、概念が、多くの場合、連想ネットを通って注意がたどる経路の決定要因となる、という情報を受け取るかもしれない。コースを導かれていない注意が、その主な観念に明らかに関連した一般的イメージ、あるいは特定のイメージにさえ直面していることに少し後に気づく、ということなしに、何らかの概念を思案することなどほとんど不可能だ。

第二部　難問

第六章

この節では、できる限り簡潔に、最初の章の第二パラグラフで触れた、遺憾ながらも芝居がかった、すこぶる人を惑わせるような出来事をお話ししておく必要があるだろう（読者はその中でなされた確約を覚えているだろう）。問題の出来事が、「千里眼」「幽体浮遊」「死者あるいは死にかけた者からのメッセージ」などと言われる多くの古典的な例を、完全に模倣していることに気づくであろう。それらは単に例証的価値のために、また「関連性のある現実の出来事の物語」の一部を形成しているために記載されていることが理解されるであろう。しかし、ある観点から見れば、これらの出来事はまったく類のない価値を持っていたのである。これは、そのような問題において普通そうなるように、私がそれらを「千里眼」や「霊媒」からまた聞きで――重要な点がみんな省略され、誤解を招くような大量の暗示が付け加えられつつ――受け入れ

ることを強いられなかったためである。というのも、それらは何もかも私自身に起こったことだったからだ。

＊　＊　＊

最初の出来事は、「千里眼」として容易に通用しそうなことの、非常に適正な例を提供した。

それは一八九九年、私がサセックスのホテルに泊まっていたときに起こった。ある晩、私は、正確な時刻についてウェイターの一人と議論をしている夢を見た。私は午後の四時半であると断言し、彼は真夜中の四時半だと主張した。すべての夢に特有の明白な不合理さで、私は自分の時計が止まったに違いないと結論し、そして、自分のチョッキのポケットからその機械を取り出すとすぐ、私はそれを見下ろし、それがまったく正しかったと分かった。それは止まっていたのだ――四時半を指した状態で。そこで私は目が覚めた。

その夢は奇妙なもので（この本がまったく扱わないような奇妙さだが）、結果どうしたかというと、私は時計が本当に止まっているかどうかを見るため、マッチに火を

付けたのだった。驚いたことに、それは、いつもならそこにあるはずの枕元にはなかった。私はベッドから出て探し回り、それが整理だんすの上にあるのを発見した。案の定、それは止まっており、針は四時半を指していた。

解決策は、まったく明白であるように思われた。時計はその前の午後の間に止まったに違いない。私はそれに気づき、それを忘れ、夢の中でそれを思い出したに違いない。その点については納得して、私はその機械のゼンマイを巻いたが、本当の時刻が分からず、針が指しているままにしておいた。

私は翌朝階下に行くと、時計を正しく合わせるために、いちばん近くにあった時計に直行した。もし私が思ったように、前の午後の間にそれが止まっていて、夜の何時か分からない時刻にゼンマイを巻いただけだったとしたら、数時間狂っている可能性があった。[*1]

非常に驚いたことに、私は、針がほんの二、三分しか遅れていないことに気づいた——**夢から覚め、時計のゼンマイを巻くまでの間に経過した時間の長さが、だいたいそれくらいだ。**

もちろんこれは、実際の夢の瞬間に時計が止まったことを示している。[*2] 夢はおそらく、聞き慣れたカチカチ音が聞こえないことによってもたらされたのだろう。しかし

――その夢の中で、時計の針が、実際にそうであったように四時半を指していることを、私はどうやって把握したのだろうか？

もしほかの誰かがそんな話を私に伝えたなら、たぶん私は、彼が最初から最後まで、起きることとゼンマイの巻き直しを含む全エピソードを夢で見たのだ、と答えたはずである。だがそれは、私が自分に与えることができなかった答えである。私は、立ち上がり、整理だんすの上にある時計を見たとき、自分が覚醒していることを**知っていた**のだ。それでも、何か代案があるだろうか？「千里眼」――闇と閉じたまぶたを通して宇宙を見渡すこと？　そうした透視力のようなものをもたらし、それからヴィジョンを見せることができるような未知の光線があったとしても――そんなものを私は信じてはいなかったが――、時計は自分の両目よりも上の高さにあったのだ。角（かど）を曲がって進むというそれは、どんな光線であるというのだろう？

＊**（原注1）**……言い換えれば、私が正しく四時半に四時半の夢を見たということは、まずありそうになかった。C・G・ニューランド氏は手紙で、この問題は本質的に確率の問題なので、私はそれをよりはっきりさせるべきだと指摘している。

＊**（原注2）**……四時半に、夢でも四時半であるということの起こりにくさには、その前の午後に時計が止まってしまったことに困らされ、しかもそのような事実のほんのかすかな記憶をも保持することがなかったという起こりにくさを、乗算する必要がある。

私はサセックスからイタリアのソレントに行った。ベッドに横になっていたある朝、私は目を覚まし、何時なのかが気になり出した。私には、自分の時計を見るだけの気力がなかった。それはモスキート・カーテンの外側、手が届く範囲の小さなテーブル上にあったのだが、頭が枕の上にあるときには見えなかったのだ。思いついたのは、以前経験した一見「千里眼」のようなやり方で、その時計をもう一度見ることができるかどうかを確かめるための実験をすることだった。目を閉じ、何時なのかを知りたいということに考えを集中しつつ、私は依然として状況を把握しているという、よくある半仮眠状態に落ちていった。少しして、私は自分が時計を見ていることに気づいた。私が見たそのヴィジョンは、双眼のもので、直立して、鼻から一フィートくらい離れて宙に浮き、普通の陽光に照らされ、残りの視野を満たす濃く白っぽい霧で囲まれている、というものであった。短針はちょうど八時を指し、長針は十二と一の間で揺れていた。秒針はぼんやり霞んでいた。もっと真剣に見ると完全に覚醒してしまうと感じた私は、長針を人がプリズム・コンパスの針を扱うように扱い、その揺れの弧を分割しようと決心した。それで八時二分三十秒という時刻が得られた。それが、目を開き、モスキート・カーテンの下に手を伸ばし、時計をつかんで中に引き込み、自分の前にそれを持ち上げることを決意させた。私は完全に覚醒し、そして――針は八

時二分三十秒を指していたのである。

今回はもはやどうにもならないと思われた。私は、自分が何かしら奇妙な**見る**能力を持っているという結論を出さざるを得なくなった――障害物を通し、空間を超え、角を曲がって見るという。

しかし、私は間違っていた。

＊　＊　＊

それから、まったく異なる性質の出来事があった。

一九〇一年一月、私はイタリアはリヴィエラのアラッシオにいたのだが、それはボーア戦争から傷病兵として送還されたためであった。ある晩私は、ハルツームからナイル川を少し上った、ファショダと思われる場所にいる夢を見た。その夢はごく普通のもので、ある特定の一点を除いては全然鮮明ではなかった。それは、南部からやって来る三人の男の突然の出現である。彼らは驚くほど粗末な格好で、粗布（あらぬの）の色褪（あ）せたカーキ色の服を着ていた。ほこりっぽい日よけヘルメットの下の顔は、ほぼ真っ黒に日焼けしていた。実際のところ、彼らは最近南アフリカで**トレッキング**[*]していた隊列の兵

＊**トレッキング**……南アフリカの入植者集団の牛車旅行、集団移住のこと。

士たちと寸分違わぬように見えたので、私は彼らをそのように見なした。なぜ彼らがその国からスーダンまではるばる旅をしなければいけなかったのかについて、私は当惑させられ、彼らにその点について質問した。ところが、彼らは私に、自分たちはそれを本当にやったのだ、と保証した。「私たちは、喜望峰からここまでずっとやって来たのです」と一人が言う。別の者が付け加えた。「ひどい時間を過ごしました。私は黄熱病で死にかけたのですよ」

夢の残りの部分は重要ではない。

当時我々は、イギリスから『デイリー・テレグラフ』を定期的に受け取っていた。夢を見た翌朝、朝食時にその新聞を開くと、私の目は次の大見出しに吸い寄せられた。

喜望峰からカイロへ
「デイリー・テレグラフ」
ハルツーム遠征

特別特派員より。

ハルツーム、木曜日（午後五時）

デイリー・テレグラフ遠征隊が、

壮大な旅の果てにハルツームに到着した云々。

新聞の別の箇所の記事には、この遠征はリオネル・デクール氏に率いられたと書かれてあった。* その後私は、一行の三人の白人のうち一人が途中で死んだということを聞いたか読むかしたのだが、それは黄熱病ではなく腸チフスであった。それが本当だったのかどうか、また三人の白人先導者がいたのかどうか、私は知らない。

ここで一、二点所見を書いておくのがよいだろう。

数年前、私は、リオネル・デクール氏がこのような大陸横断の旅を考えていることを耳にしていた。しかし、その計画から何がもたらされたのかは知らなかった。遠征が始まっていたことを、私が考えもしなかったのはもちろんである。

遠征隊は、ロンドンでニュースが発表される前日、従って私が夢を見るずっと前にハルツームに到達した。新聞のその号は、ロンドンからアラッシオまで届けられねばならかったのだから。そして、夢は新聞の到着の前の晩まで生じなかった。これは、

＊（原注）……読者は、私が書いた時代、アフリカ探検はすべての人間によって大きな関心の的であったことを心に留めておくべきである。これが、「暗黒大陸」がこの方向で踏査された最初の機会であり、この出来事はきわめて重大な「ニュース」であったのだ。

いかなる「幽体浮遊」の事象も完全に問題外のものにする。

私は説明を試みようとはしなかった。

＊　＊　＊

次の出来事は、超自然的なものを愛する人なら誰でも望みそうなほど劇的だった。

一九〇二年の春、私は、（当時の）オレンジ自由国内リンドレーの廃墟のそばで、第六騎馬歩兵隊と野営していた。我々はちょうど**トレッキング**を終えたところで、郵便物や新聞はめったに届かなかった。

ある晩、私は異様に鮮明で、かなり不快な夢を見た。

私は高地に立っているようだった――丘や山の支脈の上部斜面であろうか。地面は奇妙な白い地層だった。そのあちこちに小さな裂け目があり、それらから蒸気の噴出があった。夢の中で、私はその場所を、以前夢で見たことがある島だと認識した――火山の切迫した危機にさらされていた島である。そして、蒸気が地面から噴出しているのを見たとき、私は喘(あえ)いだ。「あの島だ！　主よ、何もかもが『爆発』しようとしています！」私にはクラカタウのことを読んだ記憶があったからで、そこでは海が、

海底の割れ目を通って火山の熱に侵入しつつ蒸気を流し込み、山全体が木っ端微塵に吹き飛ばされたのだ。私は直ちに、何も知らない四千人（私はその数を知っていた）の住人を助けたいという狂わんばかりの願望に胸を締め付けられた。それをするには明らかにただ一つの方法しかなく、それは船で彼らを脱出させることだった。これに、最悪の悪夢が続く。私は隣の島にいて、疑り深い**フランス**当局に、島の危険が迫る住人たちを移動させるため、どんな船でもとにかくあらゆる船を急派させようとしたのだ。私は役人から役人へとたらい回しにされた。最終的に、私は、ある「市長閣下」の馬車を引く馬たちの頭にしがみついたのだが、その市長は食事に出ようとしており、事務所が翌日開かれるときにまた来るよう私に求める、という夢の中での自分の尽力によって目を覚ましたのである。この夢全体を通して、危険に陥っている人々の**数**が私の心に取り憑いた。私は会う人ごとにそれを繰り返しており、そして目を覚ました瞬間には「市長！」「お聞きください！　でないと四千人の人間が殺されてしまいます」と叫んでいたのだった。

　我々が次の新聞の束を受け取ったのがいつだったか、今ではよく覚えていないのだが、それが来たとき、『デイリー・テレグラフ』もその中にあり、そしてその真ん中の紙面を開くや否や、私の目に入ったのは次の内容であった。

マルティニーク島
にて
火山大災害
炎の殺到で
押し流された町
四万を超える命が
おそらく失われた
イギリス汽船炎上

世界史上最も恐ろしい災害の一つが、西インド諸島にあるフランス・マルティニーク島の商業の中心地、かつて繁栄したサン・ピエールの町に降りかかった。木曜日の八時には、一世紀も休火山であった火山モンプレーが云々。

しかし、現代史におけるこの最悪の噴火の物語は、説明を要しない。

同じ紙面の別のコラムは次のようで、見出しはいくらか小さかった。

山が噴火

そこにはスクーナーの**オーシャン・トラヴェラー号**からの報告が続いていたのだが、当船は*セントヴィンセント島火山からの砂の落下のせいでそこから離れることを余儀なくされ、その後、不幸なサン・ピエール方向への逆流のためにセントルシア島に到達することができなかったという。その記事は次のような語句を含んでいた。

「船が一マイルほど離れたとき、火山モンプレーが噴火した」

語り手は、続いてその山の斜面が下方へとぱっくり開いていったように見えた様子を記述していた。

＊セントヴィンセント島火山……このあたりの島は、北から順に、マルティニーク島（サン・ピエールの町、火山モンプレーを含む）、セントルシア島、セントヴィンセント島（火山スフリエールを含む）という並び。火山スフリエールは一九〇二年五月七日に噴火、火山モンプレーはその翌日に噴火。

言うまでもなく、どの船も、近隣の島々に生存者を運ぶのに、その後しばらくは忙しかった。

ここには触れておくべき注目点が一つある。

死亡と公表された人の数は、私が夢の間じゅう固執していた四千ではなく、四万であった。私の方はゼロが一つ不足したのだ。しかし、新聞を読んだとき、私は慌ててその数を四千と読んでしまったのだ。その後の話をすると、私はずっとその印刷された数字を四千だったと言っていた。十五年後にその記事を書き写したときに初めて、本当は四万であったことを知ったのである。

さて、次の新聞束が届いたとき、それらには実際にはどれくらいの生命が失われたのか、より正確な概算が載っていた。私は、本当の数字が、私が夢で見た四と〇の配列、および最初の報告から拾ったそれとは、何の共通点もないことに気づいた。そういうわけで、私の素晴らしい「千里眼」のヴィジョンは、その最も目立った点において間違っていたわけだ！　しかし、その間違いが、その正しさと同じくらい重要な事柄を証明する可能性が高いことは明白だった。夢の中で、私は**どこから**四千という着想を得たのだろうか？　明らかに、それは**新聞記事が原因で**私の心に浮かんだに違いなかった。これは、一部始終が、医者が「識別記憶錯誤」と呼んでいるものであった

という極めて不愉快な考えを示唆していた。実際には、私はそのような夢をまったく見なかったということ。それなのに、新聞の報告を読んだときに、その記事で伝えられていた詳細すべてを含んでいる夢を事前に見ていたというような誤った考えが心に生じていた、ということ。

さらに、よく考えてみると、喜望峰からカイロへのヴィジョンも同じ性質である可能性が非常に高いことが分かった。

実際、二つのエピソードを考えれば考えるほど、どちらのケースも、夢はまさに、印刷された報告を読んだ**後に**経験すると自分が予測していたかもしれないようなものであったことが、次第にはっきりしてきた――ものを読むという個人的な経験に基づいた、ごく普通の夢を経験するという予測。とすれば、それらの夢が、ものを読む行為によって引き起こされた**誤った記憶**ではなかったと、どうして確信できるだろう？

しかし、考慮に入れるべき時計の事例がある。あれは確かに、信じる気にならないほど自分がひどく狂っていたのでなければ、この新説に適合させることはできない。

しかしながら、私は、ケープからカイロまでもモンプレーも、夢が「幽体浮遊」や、空間を何リーグも突っ切っての直接のヴィジョンや、上演された現実のエピソードにおける俳優たちからの「メッセージ」ではなかったことに、いたく満足した。これら

の夢は、記事を読むことによってもたらされたか、さもなければその記事を書いた『デイリー・テレグラフ』編集局の記者からのテレパシックな通信によってもたらされたかの、どちらかだった。

第七章

私が大いに安心したのは、二年後に起こった次の経験が、「識別記憶錯誤」理論を完全に封じ込めたことである。

私は通路のような場所に立っていて、そこには柵のようなものによって左側に並べられた横向きの厚板があり、その向こうには濃い霧が立ちこめた深淵があった。頭上は雨覆いのような印象を受けた。とはいえ、この最後のものははっきりとは見えなかったのだが、それは私の前方の張り板三、四ヤード分、それに付随する柵、および深淵の一部を除くすべてを、霧がある程度隠していたからである。突然私は、深淵のはるか下方のどこかから上向きに突き出ている、ものすごく長くて薄い、巨大な木摺（きずり）のような、影のようなものに気づいた。それは厚板のある通路の上方にまで達しており、上端が霧を通して見えていて、雨覆いに突き当たって傾斜していた。私がじっと見ていると、それは柵をこすりつつゆっくりと上下に揺れ始めた。しばらくして、私はその物体が何かを悟った。映画撮影の初期の頃、私はかつて火事の映画映像でその

＊木摺……壁の下地に用いる細長い板。

ようなものを見たことがあったのだ。当時も同じように、私はその揺れる木摺のようなものが何であるかについて同じ困惑を経験し、その困惑は、それが邪魔になっている煙を通して撮影ができるようにするための、消防車のホースからの長い水噴流（すいふんりゅう）であると分かるまで続いたのだった。そのとき、その深淵のどこかに消防車があったはずで、それは私が立っていた、煙に隠された柵のある構造物の上に水流を放っていたのだ。私がこれを理解したとき、その夢は完全に忌まわしいものになった。木製厚板のある通路は人でごった返してきて、煙を通してぼんやりした光景になった。彼らは群れをなして落下していった。空気はすべて恐怖、息苦しさ、喘ぐような叫びで満ちた。そのとき、黒く厚くなった煙があらゆるものを覆って重苦しく立ち籠め、全光景を隠した。しかし、恐ろしく、息が詰まったようなうめき声が続いた――こういう次第で、目覚めたとき、私はひたすら感謝したのである。

今回、私は「識別記憶錯誤」を当てにしなかった。覚醒後に夢のあらゆる詳細を注意深く思い出し、それをし終えるまでは朝刊を開かなかった。それには何も書かれていなかった。ところが、夕刊が予期していたニュースをもたらした。

パリ近郊の工場で大火災があったのだ。確実ではないが、ゴム工場だったと思う。いずれにしてもそれは、燃えるときにぞっとするような煙を出す物質のための工場で

あった。たいへんな数の女工たちが炎によって行く手を遮られ、あるバルコニーの方へと逃れざるを得なくなった。その時点では、そこなら彼女たちは比較的安全だったのだが、使える梯子（はしご）は短すぎていかなる救助も許さなかった。もっと長いものが用意されようとしている間、消防車は、その避難所に火が付くのを防ぐため、バルコニーに水流を向けた。その後、火事の歴史の中でもほかに類を見ないに違いないと思われるようなことが起こった。不幸な娘たちが実際に外に立っていたというのに、バルコニー背後の壊れた窓から、燃えているゴムあるいはほかの物質からの煙が、かなり分厚い量で広がってきて、彼女たちは全員、新しい梯子が到着する前に、その煙で窒息死したのである。

　この夢は、事をそれまで以上に厄介なものにした。説明できるものは何もないと思われた。「千里眼」では説明にならないからである。それは無意味な表現であり、単なる不可解さの容認にすぎない。また、「テレパシー」は、それが事実に適用され得る前に、膨大な量の拡大解釈を必要とした。

＊　＊　＊

次は、物事をやや単純化してくれた夢が来た。それは、以下の事象を明らかに除外したからだ。精神病、千里眼、幽体浮遊、霊のメッセージ、そしてテレパシー。だがそれは、これらのどれよりもはるかに驚異的な何かに私を直面させたままにした。

火事の夢から数か月経った一九〇四年、私はオーストリアのアーヘン湖畔にあるショラスティカ・ホテルに泊まっていた。ある晩、私は、二つの野原の間にある一種の歩道を歩いている夢を見た。歩道は、八、九フィートの高さの高い鉄の柵で野原と分割され、手すりは小道の両側にあった。私の注意は、不意に**左側**の野原にいる一頭の馬に引き付けられた。それは明らかに気が狂っており、興奮して暴れ回り、これ以上ないくらいの凶暴さで蹴ったり突進したりしていた。私は、その動物が野原から抜け出せる開口部があるかどうかを見るために、柵に沿って前後に慌ただしく視線を走らせた。それがないことに満足し、私はそのまま歩き続けた。しばらくして、私は背後に雷鳴のような蹄（ひづめ）の音を聞いた。振り返って見ると、その獣が結局はどうにか野原から抜け出して**しまっていて**、歩道を全速力で私の方にやって来るのに、私は動揺させられた。これは本格的な悪夢である――私は野ウサギのように走った。私の前方では、その歩道が、上に向かう木の階段の最下段で終わっていた。そこに到達しようと必死になっていたときに、目が覚めた。

次の日、私は弟と一緒にアーヘン湖から流れ出ている小さな川に釣りに行った。それはウェット・フライ*による釣りで、弟が叫んだとき、私は何度も水に釣り糸を投げ込んでいた。「あの馬を見て！」川の向こうを一瞥（いちべつ）したとき、私は自分の夢の場面を見た。**だが、本質的には合っているものの、細かい点がまったく違う。**間に柵を巡らした歩道が伸びている、二つの野原がそこにあった。馬はそこにいて、まさに夢でしていたのと同じように振る舞っていた。歩道の終端には木の階段があった（それらは川を渡る橋に通じていた）。しかし、柵は木製で小さく――せいぜい四～五フィート程度だ――、夢での野原は公園のような広さだったのに、そこでは平凡な、小さな野原だった。さらに、その馬は小さな獣であり、夢の荒ぶる大きな怪物ではなかった――その振る舞いは、同じように不安を抱かせるようなものだったにもかかわらず。もう一つ、馬がいた野原も違っていて、もし私が夢の中でのように橋に向かって小道を歩いていたなら、**右側**になったであろう側の野原であった。私はあの夢について弟に話し始めたけれども、その獣があまりにも奇妙な振る舞いを見せたため、それが野原から抜け出せないことを確認したくて、中断した。夢と同じく、私は柵に沿って、批判的に視線を走らせた。夢と同じく、どこにも隙間は見えず、門さえもなかった。満足して、

＊ウェット・フライ……沈む毛針。

私は「いずれにしても、**この**馬の方は野原から抜け出すことはできないな」と言って、釣りを再開した。ところが、弟は「気を付けて！」と呼び掛けてそれを遮った。再び顔を上げて一瞥すると、私は運命からは逃れられないと分かった。その獣は、夢とすっかり同じように、不可解にも野原から抜け出して**しまっていて**（たぶんフェンスを跳び越えたのだろう）、そして、これも夢とすっかり同じように、木の階段に向かって雷鳴のような音を立てながら歩道を走っていたのである。それは階段を通り過ぎて急に向きを変え、川に飛び込み、我々の方にまっすぐやって来た。我々二人は石を拾い上げて川岸から三十ヤードほど走って後退し、回れ右をした。結末は何ということもなかった。我々がいた側の水から姿を見せるとすぐ、その動物はただ我々を見て、鼻を鳴らし、道を走り去っていっただけに終わったからである。

　そのとき私には、この出来事から一つのことが十分明らかであると思われた。これらの夢は、遠く離れた、または未来の出来事を**知覚した表象**（印象）ではなかった。それらは、夢特有の、いつもの半ば支離滅裂な流儀で組み立てられ、歪められた覚醒時経験の**イメージ**で構成された、普通のありふれた夢であった。すなわち、**もしそれらが対応する出来事よりも後の夜に発生したのであれば、**異常度など少しも示すことなく、普通の夢がするのとまったく同じくらい、その夢を引き起こした覚醒時経験に

関する真実および偽りの情報をもたらしたであろう――そのような夢はほとんどないのだが。

それらは、平凡で、夢としてふさわしく、当たり前の夢であった。だが、それらは**間違った夜**に発生したのである。

時計の夢でさえ、その時計を見た**後で**見るべき夢でしかなかった。私が経験したその出来事の最初においては、私は覚醒時に、整理だんす上に**上向きに**置かれている、針が止まった時計を見た。それに対応する夢のイメージは、止まった時計のそれで、上向きだったのだ。二番目の例では、**私は頭を枕に乗せたまま、鼻先一フィートくらいの位置で、時計を自分の方に文字盤を向けて持っていた**。そして読者は、対応するうたた寝時のイメージが、正確にその位置の時計であったことを覚えているであろう。白い霧はもちろん、本当の時計を見たときにそこにあった、焦点の合っていないモスキート・カーテンのイメージであった。

そう、これらの夢のいずれにも、夢として普通とは言えないものはなかった。それらは単に**時間を置き換えられた**だけであった。

このことはもちろん、十分驚異的なことであった。が、それでも私は、このさまざまな現象すべてをただ一種類の出来事に帰着させることは、大きな進歩であると感じ

た――神秘的ではあるにしても、単純な日付の転移である。

だが、この憶測すべてにおいて、私はまだ真実からは程遠かった。

私がこの節で語るつもりのあと二つの出来事は、時間的な異常が混乱したミステリー全体を生ぜしめるという私の中途半端な意見を変えるものを、何も含んでいなかった。しかし、もし私がこの半端な発見をしていなかったら、私が次の出来事を、「霊界」あるいは「死者の幽霊」からのメッセージであると見なしたであろうことは確実なのである。

＊　＊　＊

一九一二年、私はソールズベリー平原で多くの時間を過ごし、自分の安定版飛行機の一機を試していた。軍用機の競技会が進行中で、当時まだちっぽけだったイギリス陸軍航空隊の士官の大半がそこにいた。そのうちの一人はそれ以前に会ったことがなく、その後もほとんど見ることがなかった。実際、私は一度しか彼と話したことはなかったと思う。これらの記録は証拠ではなく、またそのように見なされることを意図してもいるので、彼のことはB中尉と呼んでおけば十分だろう。ほかの士官は全員が

私の旧友だった。競技終了後間もなく、毎年恒例の軍事演習が始まったが、それとは無関係だったので、私はパリに行き、自分が設計し、そこで組み立てられている別の機械を点検した。

その都市にいる間のある朝、私は、見覚えのない風景の中にある、かなり広い草地に立っている夢を見た。この草地に単葉機が着地したのだが、五十ヤードくらい離れた所でかなりひどく墜落大破したのである。その直後、私は墜落機の方からBがこちらにやって来るのを見た。私は、ずいぶんひどい被害があったのではないかと尋ねた。彼は、「おお、いや、それほどでもありません」と答え、それからこう付け足した。「まったくいまいましいエンジンですよ。でも、やっとコツがつかめました」。この夢は、要は飛行機事故に関するやや長いもの（今日でも私がよく見るタイプの悪夢）で、Bの墜落は、私が見た中で最悪のものというわけではなかった。私は目を覚まし、モーニング・ティーを持った使用人がベッドのそばにいるのを認め、その事実から引き続き、夢を見た時間を午前八時近くであると決定することができた。

Bは、その朝の七時から八時の間に、オクスフォード近郊の草地に落下して亡くなった。だが私は、ほぼ一日半後になって初めてその事故の記事を読んだのである。

しかし今、次の点に注意してほしい。

1　エンジンの故障は事故とは何の関係もなく、Bが一瞬でもそれを考えたということもあり得なかった。単葉機はそのとき降下中だったのだから――エンジンの一部または全部が止められていたのだ。事故は、メインの「リフト」ワイヤの一つでクイック・リリース・ガジェットが外れたため、片翼が上方に折れてしまったのが原因であった。もちろん、その降下が強いられたもので、エンジン故障に起因した可能性もある。しかし、Bの心には、おそらく翼が壊れていたということが浮かんでいたことであろう。

一方、あの平原にいる間にBが私の姉に言ったのは、私が夢で彼から聞いたのとほとんど同じようなエンジンについての意見で、彼女がそれを私に繰り返し言っていたということはあり得る。彼女は当然そうしていたであろう。

2　Bは飛行機の乗客でしかなかった。それは私の知らない別の人間に操縦されていたのであり、その彼もまた亡くなっている。夢にはそのことについては何もなかった。

しかし、私がその大惨事についての記事を読んだとき、私の注意を引いたのはBの名前だけだった。数年後に事故の記録を調べるまで、私はその別の男性の死を知らなかったのだ。

3　その記事は事故の原因に触れておらず、そのため（おそらく）エンジンに関する

Bの過去の発言以外、私には判断する材料が何もないままだった。

4　時間の一致はそれほど注目すべきことではない。上述のように、飛行機事故の夢を当時の私はかなり頻繁に見ていたし、七時から八時の間は、路上での自動車交通の騒音が私の意識に侵入し始め、特にこの種の悪夢をしょっちゅう見る時間帯になっていた。

そういうわけで、私はここで再び、夢は記事を読むという個人的な経験に関連している、と結論づけたのである。

＊　＊　＊

一連の出来事のうち、次に述べる最後のものにおいては、時間順の異常ははるかに無視できないものであった。

その夢は一九一三年の秋に現れた。私が見た場面は、高い鉄道盛土であった。夢の中で、私は――尋ねることもなく、その土地に精通している者が知っているように――その場所がスコットランドの**ファース・オブ・フォース橋の真北**であったことを知っていた。盛土の下の地形は開けた草原で、その上を人が複数の小集団で歩いていた。

その場面は何度か去来したけれど、その最後の回で、私は、北に向かう列車がちょうど盛土から落下したところだったのを見た。斜面の底に向かって何台かの客車が横たわっているのを見、大きな石塊が転がったり滑ったりして落ちていくのを見た。これはたぶん、自分がよく見る奇妙な夢だろうと悟ったので、私は現実での発生日付を「取得する」ことができるかどうか、確認しようと試みた。私がかき集めることができたのは、この日が次の春のどこかであるということだけだった。私自身が記憶しているのは、私が最終的に四月中旬に決定したということなのだが、姉は、翌日その夢を聞かされたとき、私が三月だと言っていたと思う、という。我々は、冗談にだが、次の春のどの時点だろうと、スコットランドの北を旅行することに対して、友人たちに警告しなければならないという点で一致した。

次の春の四月十四日、あの時代の最も知られた郵便列車の一つである「フライング・スコッツマン」が、フォース橋から十五マイルほど北、バーンティスランド駅近くの手すり壁を飛び越え、二十ヤード下のゴルフ場に落下した。

＊　＊　＊

上記の出来事は、事故発生時に綿密に検討され、注意深く記憶されたという理由だけで、およそ二十個のグループから選ばれた。その他のものの大部分は、いわばついでに書き留めただけで、今となってはほとんどすっかり忘れ去られている。奇妙なことに、私はやがて来たるべき大戦の夢を思い出すことができない――一つのことを除いては。その一つとは、ドイツ艦隊によるローストフト砲撃に関することだ。私はその場所をローストフトと認識したが、砲撃している船団の国籍についてはまったく分からなかった。

第三部　実験

第八章

思うに、自分が変人だという仮定から大きな喜びを引き出すことができる者などいないだろう。個人的には、私は自分が「霊媒」であることをすぐにでも発見したいところだった。そこには宗教団体のチャンスがあるかもしれないし。が、残念ながら、この問題の中には「霊媒の能力」も「鋭敏さ」も「千里眼」も存在しないことは、完全に明白であった。私は、表面上は、現実との関係性における異常な欠陥に悩んでいた。ほかの点ではごくありふれた個人的経験が、たまに時間の正しい位置からずらされるという大きな障害を知覚することを強いられる、あまりにも類を見ない間違った何かに。そのようなことが仮にも起こり得るということは、極めて興味深い一つの知識ではあった。だが、残念なことに、このような状況では、それはたった一人だけの知識で終わるかもしれなかった――私だけの。

しかしながら、この奇妙な形で得られた知識の一部を指針として用いることで、かなり望み薄ではあるものの、それまで見過ごされてきた時間の構造の特異性を発見できるかもしれないという可能性もあった。私はその課題に専念した。

そこでの進展は明らかだったが、恐ろしく遅かった。第四の次元としての時間の概念には、役立つものが何もなかった。時間は、科学畑の人々によってあたかも第四の次元のように扱われてきた。示されるべきだったのは、その次元における**変位**の可能性であった。私は、ベルクソンから慰めとなるものをかき集めることも、あまりしなかった。時間の部分部分は明らかに置き換えられるということを突きつけられている者に、時間には部分はないなどと言ったところで、明らかに無益だからだ。私は、時間が「思考の一形態」なのか、あるいは現実の一側面なのか、はたまた（これは後のことだが）空間と合成可能なものなのかは、少しも気にかけなかった。私が知りたかったのは次のことである。それはどのように**混じり合った**のか？

「混じり合った」は正しい言葉だった。夢と、それに対応する覚醒時の経験の間においては、夢の記憶がやって来て、一方の覚醒時の経験の記憶はすべてそれらの後に続いたのだ！

ところが、第一次大戦の到来が、それ以上の調査を一時的に中断させてしまった。

一九一七年になるまで、新しい展開は何も起こらなかった。

その年の一月、私はガイズ病院にいて、手術から回復中だった。ある朝、本を読んでいると、アルファベット文字が浮き彫りにされている輪を回すことで外される、よくある「ダイヤル」錠に触れた部分に出くわした。これを読むうち、ほんのつかの間、いわば自分の記憶の中で何かが呼び覚まされるように思われた。しかし、何であれ、それはすぐに鎮まった。私は一瞬休止したが、それ以上は何も進展がなかったので、本に戻った。それから、幸いなことに私は考えを変え、その本を脇に投げ、読んだあの文で瞬間的に連想したことは何だったか、苦労してでも正確に答えを見いだそうと固く決心した。少ししてから、それは戻ってきた。前の夜の間、私はまさしくそのようなダイヤル錠の夢を見ていたのだ。

そのような曖昧で平凡な二つの出来事が関係していたところで、偶然の一致の可能性が指摘される必要はなかった。しかし私は、一年かそれ以上の間、そのような錠を見たことも聞いたことも考えたことも、思い出すことができなかったのだ。そして、自分の夢が時々未来の経験のイメージを含んでいることを過去の偶発事から知っていたので、前夜の夢での錠のイメージの出現は、自分の特異性の事例をもう一つ重ねたのだろうと思われた。いずれにしても、そのような仮定は考慮に値するということが

判明するかもしれなかった。

数日後、*シルバータウン大爆発が発生し、建物全体が揺れ、窓は割れ、ツェッペリンが頭上にいるのではないかとの仮定のもと、看護婦たちに灯りを消させるという事態となった。そのような経験が、一つの夢を作り出すのに当てられた。そして私は夢を見たが、いつものように違う夜だった――関連する出来事の前夜である。その大惨事の後、私はこの経験を、仲間の回復期患者に話した。彼は「待った！」と言って中断させ、それからこう言った。「不思議だな、それ。そういえば、私もゆうべ爆発の夢を見ていたんだ」

彼は、そのときまでにはもう自分の夢の詳細を思い出すことができなくなっていたし、また戦時中はあらゆる種類の爆発音がごくありふれたものだったため、この出来事は偶然の一致が深く関与したものだったのかもしれない。だが――もしそれが事実ではなく、その夢が私のものと同じ部類だったとしたら？　どういうことになるのか？

こうして、検討すべき二つの新しい仮定があった。別々に見ると、それぞれはこの上なく荒っぽく見えた。しかし、一緒に考えてみると、それらはもう少し綿密な注意

＊シルバータウン大爆発……空襲ではなく、弾薬工場の爆発事故。七十名以上が死亡。

を払うことが十分正当であることを示唆していた。

このうち最初のものに考慮に値する妥当性があるとすれば、それは、私の夢の事前イメージが、非常にエキサイティングでドラマティックな出来事のみならず、ダイヤル錠について読むといった小さな事柄のような、これ以上ないくらいのささやかな出来事とも関係している、ということを意味しているだろう。そのとおり、実際には、過去の出来事の夢のイメージは、より印象的な経験とまったく同じくらい頻繁に、重要でない偶発事と関連している。繰り返すが、私がその夢を思い出そうとしたのは、ほんの些細（ささい）な運命の偶然によってであった。そして、もし私がそうしなかったなら、その出来事に気づくことはなかったはずである。これによると、おそらく私はこの手の夢をかなりの頻度で見ており、すぐにそれらを忘れたか、その後に続いた関係する出来事との**関連に気づき損なった**ということになるかもしれない。

しかし、もし友人の夢についての仮定、それは私の夢と同種のものだという仮定が正しいとすると、**この、関連を観察し損なったということが、まさに彼のケースで起こったことであった**。彼は夢を完全に忘れたわけではなかったが、実際の爆発の発生は、それを思い出すのに役立たなかったのだ。

問題の友人がやや興奮状態でやって来たとき、私は自分の思索をそれ以上は進めて

いなかった。「君は、我々が夢について話したことを覚えているか?」と彼が尋ねた。「それでね、私は某氏に話したんだ（「某氏」とは、病院の外科医の一人である）。すると、彼は別の夜に自分に起こったおかしなことを話してくれた。彼はちょうどベッドに入ったところだったんだが、目が覚めて骨折した脚の治療のために外出せざるを得なくなる、という夢を見ながら眠りに落ちたそうだ。その夢を見たほぼ直後、彼は目を覚ました。ちょうどそのようなケースの治療のために外出する必要があるという緊急メッセージが届いたからだ。で、その話をしてくれたとき、彼は、骨折した脚の対処をしなければならないという機会は、六週間以上もなかったということを指摘していたよ」

かくして、ここでおそらく第三の人間が関与する三番目の出来事が現れた。その出来事の記録はどうなるのだろうか、と思う。その外科医は、それを数人の友人に話し、彼らはその全部を偶然の一致という原因に帰し（た**かもしれず**）、やがては彼自身もすべてを忘れてしまうだろう。しかし――。

それに、ほぼすべての人間が時々経験している、あの奇妙な感覚はどうなのか――そのとき起こっていることが**以前にも起こったことがある**という、思いがけない、つかの間の、不穏な確信は?

めったに手紙を書かない友人から予期せぬ手紙を受け取ったとき、前の晩の間に彼の夢を見ていたことを思い出したときの場合はどうなのか？

完全に忘れられた後で、はっきりした理由もなく、その日のうちに突然に思い出されるあのすべての夢はどうなのか？ **それらを思い出させる連想とは何なのか？**

騒音や、ほかの感覚事象によって引き起こされる、わけの分からない夢はどうなのか――問題の騒音が、最終的な夢の出来事として現れる夢は？ この締めくくりの出来事が、**その夢の前の部分に常に論理的な成り行きで繋げられる**のはなぜなのか？

最後に、これらすべてのケースのうち、心霊現象研究協会に選ばれ、表にまとめられた夢、次の日に確証的なニュースを受け取ることが続く、友人の死の夢はどうなのか？ これらの夢は明らかに「霊的なメッセージ」などではなく、**私の**「効果」の例であった――ただ**ニュースを読む**という来たるべき個人的経験に関連した単純な夢。

一週間以上、絶望的に非科学的な方法で考える以外のことは何もせず、自分の悪事を完うした方がよさそうだと思われた。そこで私は、すべてのうちで最も荒唐無稽な仮定へと、最終的な、荒っぽい飛躍を試みた。

これらの現象は異常なものではなく、**正常なもの**であった可能性があるのではないか？

夢――一般的な夢、あらゆる夢、すべての人の夢――は、過去の経験のイメージと、**ほぼ等しい割合で混合した未来の経験のイメージ**で構成されていた可能性があるのではないか？*

結局のところ、宇宙は本当は時間の中に伸び広げられたという可能性、そして、我々がそれについて抱いていた偏った見方――不可解にも欠けている「未来」の部分は、移動する「現在の瞬間」によって、増大していく「過去」の部分から切り離されるという見方――は、我々が目覚めているときにだけ存在する、純粋に心の中で強いられた障壁のせいであったという可能性があるのではないか？　そのため、実は連想ネッ

＊**（原注）**……現在の読者は、本書のこの節が純粋に歴史的なものであるという事実を、たぶん把握なさっていることだろう。一九一七年のその日、私は、実験的研究のための基礎として役立ちそうな、可能性のある事実の所説を自力で組織立てようとしており、ここでは、心に浮かんでいった一連の考えを記述しているところである。予見的要素と回顧的要素の均等配分という疑いが最初に浮かび、次のパラグラフで説明する、より合理的な理論、その配分をそれぞれの個人とそれぞれの夢で異なるであろう連想要素によって決定させる理論が、すぐに続いた。次の三ページに見られるように、真実へのこの最初の接近さえ、「明らかに不完全」なものとして除外された。最終的に受け入れられた理論は、一九二六年になって初めて開発され、それはこの本の最終節に記述されている。

トワークは、空間の方々の経路のみならず、時間の前後にも伸びていたということか。夢見人（ゆめみびと）の注意は、自然な、妨げられないやり方で分岐中の最も楽な経路をたどり、目覚めている我々がその全体を横切ってまったく恣意的に線引きした、正確には存在しない赤道線との交差を、断続的に繰り返しているのだろう。

以上の仮定は、可能性のある**説明**とは受け取られなかったことに注意すべきだ。実際の経験の、順番の交錯――すなわち、夢、夢の記憶、対応する覚醒時の印象、そしてそれについての記憶――が、まだ説明されなければならないだろう。しかし、それは問題をまったく異なった基盤に置くことになる。人がなぜ自分の未来の精神状態を観察できるのかについては、もはや疑う余地はない。それは普通で、常習的なことなのであろう。それどころか、最初の難問は次のようになるだろう。特定の状況において、その適切で包括的な見解から、人を妨げた**障壁**は何だったのか？

これはすべて、いわば一瞬の思考のうちに見られ、速すぎて分析しきれなかった。そしてそれは、さらにいっそうの迅速さで拒絶された。というのは、この種のことがもし真実であるならば、ここ何世紀もの間、普遍的な理解力と認識力からうまく逃げおおせたということは、まったく考えられないからである。

第九章

しかしながら、少し後になって、この突然の畏縮後退は非論理的であったと分かった。当然その仮定全体は、これらのイメージの普通の想起は、先立つ夢と覚醒時の爆発の経験とを関連付けることから私の友人を妨げていた抑制の一種によって困難を与えられる、という前の仮説に基づいていたからだ。それを甦らせる何らかの連想観念がなければ記憶が喚起されることは決してなく、またその連想が不発に終わったならば想起はあり得ないわけだ。

さらには、夢は、大部分が取るに足りないこと――その人の生活で毎日起こること――に関するものである。そのような夢は、たとえそれが実際には明日の出来事に関連していたとしても、自然と昨日の似たような出来事に起因すると考えられてしまう。それからまたさらに、すべての夢の十分の九が覚醒後五秒以内に完全に忘れられ、その少数の方もほとんどひげ剃り作業を超えるほども長持ちしないのだ。思い出され、心の中で注目された夢でさえ、たいていはその日の午後までには忘れられてしまう。さらに加えて、前述の、必要な連想に対する部分的な心的禁圧。さらに加えて、無意

識的な、事務的な不可能性の決めつけ。それで、過去においてともかくも注目されたのは、比較的印象的で、詳細で、また（おそらく）感情的な出来事の、ごく少数に限られるということが、かなりありそうなことになる。さらに、これらはテレパシーや「霊的メッセージ」に起因するか、あるいは、ほかの点ではどうも狂っているが、少なくとも、単一の・絶対的な・一次元的な、時間、という慣習的な用語で表現できるものに起因することさえあるだろう。

もちろん、正常性の理論が徹底的な検証を要するのは確かであった。直前の章で述べたことは、明らかに不完全だった。関係する過程の十全な説明は、すぐにはつかないかもしれなかった。しかし、代案は異常性の仮説である。そしてそれは、単に心の通性の過剰または欠乏という意味での異常性ではなく、心の通性それ自身が非常識であるという意味での異常性を意味していた。まったく無意味なものを信じるのは、実際は難しいのだ。

最後に（そしてこれが私を最も魅了したことだが）、正常性の仮定――あれこれの個人ではなく、時間それ自体に内在する何かについての――は、もし正しいのなら、ただ**記憶することと関連付けることという二つの最初の困難**を克服できる実験を考案できさえすれば、*問題となっている事象は現在の読者を含んだ非常に多数の人々に

よって直接観察可能であることを証明できるかもしれない、ということを意味するだろう。

その実験の手はずを整えることが、明らかに最初のステップであった。説明は、後でつくかもしれない（そして、この後見られるように、説明はついたのだった）。

＊（原注）……記憶することの困難さは、容易に克服できる。しかし、関連付けることの困難さは、時として克服しがたいことが判明している。時間順的に明確な過去の覚醒時の出来事に明らかに関連している出来事を、平均的な夢の中で発見することは常に困難であり、人々の夢の中には、そのような関連をたどるにはあまりにも複雑すぎて不可能なものもある。そうしたハンデのある人たちが、自分の夢の中に予見についての何らかの暗示を発見することが同じように不可能であることを発見するのは、明白である。

第十章

［第三版への注釈

この章で与えられている指示は、何もかもが極めて重要なものである。実際、読者がすべての細部に従わない限り、その人は結果を得る機会をほとんど消滅点まで減らすことになるだろうと言ってもよいくらいだ。その人は、何百万人もの人が自分の夢のいくつかを覚えているのに、そして何百人かはそれらを書き留めてきたのに、過去何世紀もの間、千人に一人も自分が未来を夢見ているということに**気づいた**者がいなかったように見えるということを、心に留めておくべきである。それに、明らかに、古めかしい手順で実験するのはその人にとって無益なものになるだろう――何らかの、まったく新しいテクニックが必要とされるのだ。そのテクニックがここで説明されている。しかし、本書出版以来の経験は、その重要性が十分に強調されなかったことを示している。それゆえ私は、以前書かれたこの章に、さらに数ページ、詳細な説明を加えることにした］

読者は、前章で言及した実験が試みられ、そしてそれが成功であったことが判明したと思ったであろう。なぜなら、そうでなければ、この本が書かれることがなかっただろうことは明らかだからである。

ところが、次の冬までは、私はそれをテストするのに十分なほど、本気で正常性の仮説を立てるする気になれなかったのである。その後、たくさんの不安と、ほとんど成功の望みが持てない状態のまま、私は自ら最初の必須実験を開始した。もちろん私は、自分が時折これらの夢を見ていたことを知っていた。だが、時にそれは一年かそれ以上の間隔を置いてしか現れなかったのだ。しかしながら、新しい理論によれば、私はそのインターバル期間すべてを通じて、自分では知らないうちに同じような夢を見ているはずだった。

概して、十のうち九の朝においては、私は夢を見たことを思い出すことはなかった。しかし、私はそのことにはあまり悩まなかった。多くの人が、自分は夢を見なかったと心から確信していることを、私は知っていた。だが、私が行った実験から、私はその「夢のない眠り」が記憶の錯覚であることに満足した。起こっているのは、その人が目覚めたちょうどその瞬間に夢を忘れるということなのだ。私自身、自分が麻酔下にあったときに生じた夢を数日後に思い出したのだが、私はそのとき、その挟まって

いたインターバル期間の間、自分が完全に無意識の状態にあったと信じていたのだ。

当時の私の出発点は、自分のこれら明らかに空白である夜の、失われた夢の断片を思い出すことができるという信念であった。今、新しい仮説によると、その断片は、過去と未来両方の出来事のイメージを含む可能性がある。**そうしたイメージの大多数は、はっきり区別されることも切り分けられていることもないだろうが、逆に、あまりに混ぜ合わされ入り混じっているために、その構成部分は、何らかの特定の覚醒時の出来事に属するものとしては見分けられないのであろう。**しかし、時折、そのようなイメージの混合物の一部を特定の過去の出来事に関連するものとしてはっきり見分けることができるのとまったく同じように（第一部「統合」参照）、時には、その混合物中の要素を特定の未来の事件に関連するものとして見分けることも可能なはずである。ポイントは（そしてこれは重要なポイントであるが）、**完全に**未来に関連する完全な思考や場面に出くわすことを、決して期待するべきではないということであった。私が言いたいことの一例として、読者は第二部で語られた馬の夢に戻るのがよいかもしれない。そこには、未来に関連する夢の大部分がある。しかし、馬の全体的な**外見**、それに野原や柵のそれは、私が信じる限りでは、過去の経験から集められた詳細であった。

夢は、もし思い出したなら、実験の残りを、二つの厳然たる重要な事実――記録と覚醒時の出来事――間の比較の問題とするために、書き留められることが望ましい。そして、その後の夢イメージの分析を容易にするため、それらは可能な限り詳細に記述されるのがベストである。細部の記述がいっぱいの短い記録は、曖昧な言葉で素描された長いそれよりも価値あるものとなるだろう。

とはいえ、細部の豊富さが不可欠となる理由としては、さらにずっと説得力のある理由があった。長い夢には非常に多くのイメージが含まれており、長い一日には非常に多くの印象が含まれている。実験が十分に拡張されれば、通常の偶然の法則によって、そのいくつかは必ず適合するであろう。このゆえに、裏付けとなる詳細は、重要な決定のためのテストである必要があるだろう。例えば、本の上にあるコインの山の夢に、次の日そのような場所にあるコインの山の観察が続くのは、いずれにせよ起こるべき運命にある偶然の一致の部類であろう。必要とされるのは、むしろ**赤い**本から外れて**ひっくり返っている六ペンス銅貨**の山のようなものに、そのような覚醒時の経験が続いたものであろう（こうした夢の残りの部分――テーブル、部屋、災難の原因――は、おそらく全然異なるであろう。だが、それは問題とはなるまい）。ポイントは、競馬好きが「ダブル・イベント」と呼ぶものの要素を含まないような未来に、明らか

に関連するものとして受け入れられるべきものは何もないということだ。

次に考慮すべきことは、タイムリミットの必要性であった。もし一致を探すための対象を自分の生涯全部とするならば、明らかに、赤い本を外れてひっくり返っている六ペンス銅貨の山の夢でさえ、同じような覚醒時経験と一致する可能性があるだろう。銀行員なら、二週間以内に実現を見ることすらあるかもしれない。私は、二日間が許容できる限度であろうと決めた。**しかし、これは出来事の奇異性と特異性に比例して延長してもよい**。それは判断の問題であろう。例えば、ローストフト砲撃についての私の夢は、この出来事の約一年前に現れた。それに私は、あらゆる疑惑の可能性を超えた、約二十年後に起こった出来事に関連する夢イメージの、明白な一つのケース——後で述べる予定である——も持っているのである。

その場合、満足のいく同定の可能性は主として出来事の特異性に依存するだろうから、実験のための最悪の時間選択は、前の日とまったく同じ毎日を重ねつつ、味気ない生活を送っている期間であろう。しかし、そのような状況でも、劇場や映画館への訪問が実験のかなり有効な補助になることが判明するかもしれない（これは非常に貴重な有益情報であると、今の私なら言うだろう）。また、読もうとしている小説の夢を見ることが期待できるということもあるかもしれない（私はここで、実際のところ、

その方法で最良の結果を得られることを付け加えてもよい）。**しかし、一般的に言って、旅行その他、状況の単調さの中で期待できる何らかの変化の、その前の夜を選択するのが最良であろう。**

もう一つの要素は、明らかに実現した結果の**数**であろう。満足感は、一つの非常に特異な出来事を事前に夢見ることから得られるであろう。あるいは、まったく同様に、複数のまあまあ特異な出来事からも、**その結果のうちのいずれか一つが、たとえその一つしかなかったとしても、やや異例な偶然の一致に正当に帰せられる可能性があるならば。**[*1] よって、単独で決定力のある類いのすべての結果には、＋印を付けることに決めた。そして、ほぼ決定的ではあるけれども、別の類似した結果の裏付けを必要とする結果は、⊕のような、ホットクロスバンのような印を付けることに決めた。[*2]

＊1（原注）……どれほど多くの人がこのことを見逃しているかは、驚くほどである。もしある期間内に特定の偶然の一致が発生する可能性が一〇〇〇分の一であるとすると、同じ期間内に第二の同じようにありそうにない偶然の一致が発生する可能性は一〇〇〇分の一×一〇〇〇分の一、つまり一〇〇万分の一となる。

＊2（原注）……私自身の記録では、過去の、時間順的に明確な出来事に関連しているように見える夢には、シンプルな丸記号を付けた。そして、私は自分の助力者たちの実験において、同様な回顧の証拠を探し求めた。

前述のことは、私がテストのために策定した条件の説明だが、私が遭遇する用意ができていた困難の性質についてもまた説明している。そして、私はこれらに大量に遭遇したのだった。それでも、私が見越していなかった二つの事柄があった。

夢を見ている心は、それが知覚するすべてのものに誤った解釈を付加する名人なのである。そのため、夢の記録は、（a）見られたものの実際の外観と、（b）その外観に対して与えられた解釈とを、別々の事実として記述するべきである。

例。テストの日々のうちの一日、私はたまたま一対のふいごで炭火に風を送っていたのだが、その際、その器具の吹き口を大きな丸太の（自分に面した）赤熱の表面に接触させた。読者がこれをしたことがあるかどうかは知らない。だが、その効果には、不安にさせるとまでは言わないまでも、かなりびっくりさせるものがあるのだ。非常に明るい密集した火花のシャワー――恒例のクリスタル・パレス花火大会さながら――が、その火からあなたの顔にまっすぐに飛んできて耳のそばを流れていき、目がつぶされることを恐れたあなたを飛び退かせることになる。しかし、その火花には熱はないらしい――とにかく、あなたの衣類には燃えた穴が空くことはない。その経験は、たいへん印象的で特異なものである。そして、偶然にも、前夜の間の夢で、まさにそのような火花のシャワーが私の耳のそばを飛んでいったのだ。ところが、私はその直

近の夢の印象を記録し落としており、それは単に小さな火花シャワーのそれであったが、代わりに**その後で**そのシャワーに付けた説明を書き留めていたのだ――すなわち、夢の中でたまたま存在していた群衆が、タバコの吸い殻を投げていた、ということである。夢の出来事の両方の面が記録されるべきだった。まず見られたイメージ、次にそれに添えられる解釈。これはすべての記録を通じてなされるべきである。

第二の困難は、慎重な注意が要求されるものである。私がついに探していたもの――時間的経験の性質におけるこの奇妙な特徴が、この何世紀もの間、普遍的な観察から逃げおおせてきた理由――を見つけたのは、ここであるからだ。

覚醒時の心は、夢と、それに続く出来事の間の関連付けを受け入れることを、あからさまに拒絶する。それにとって、この連想は**あべこべ**なのであり、自らに認識させるや否や、それは即座に拒まれる。その知的な反乱は自動的で、すこぶる強力である。書かれた記録という議論の余地のない証拠を突きつけられてさえ、人は認めることを避けるためにどんな言い訳にでも飛びつく。ほとんど常に飛びつかれる一つの言い訳は、その場面の隣接部分の不同性か、または「統合」の中に出来事に対応**しない**部分があるという事実である。もちろん、この問題は、要求される正確度に対応**する**場面または統合の部分があるという事実に、少しも影響を及ぼさない。

その結果、夢に続く日（あるいは二日間）の終わりに記録を読み返すとき、**覚醒時の出来事との関連性に気づくことさえなく、探しているまさにそのものをスルーしてどんどん読んでしまいがちである。**そのため、読む行為は、考察のため、またその日の出来事との比較のため、頻繁な休止を挟みつつ、ゆっくりとなされるべきである。私が関係づけようとしている結果のほとんどすべての場合において、関連性は、最初はほんの半分しか垣間見られず、**そのときはたちまち拒絶され**、最終的には、それまで気づかれなかった裏付けとなる詳細ポイントの蓄積の重さによってのみ受け入れられたのである。

この最初の気づき損ないを避ける最も簡単な方法は、これから読もうとしている記録が、これから来る夜の間に見ることになる夢のそれであるというふりを自らすることだ。さらには、その夢の原因であると合理的に見なせそうな過去の日の出来事を探すことだ。これは不公正なことではない。気づくことを可能ならしめる唯一の工夫なのである。判断を助けるための工夫ではない。その後ですることは、そのときは裏付けとなる詳細だけに関心を持ち、時間の順序を考えないことである。

＊　＊　＊

忘れられた夢を思い出すための手管は、まったく単純だ。ノートと鉛筆が枕の下に置かれた状態で、目が覚めたら**すぐに**、目を開きさえしないうちに、急速に消えていく夢の回想に取りかかることである。概して、思い出せるのは一つの出来事だけで、それはかなり曖昧で小さく、また孤立して見えるため、書き留める価値があるのかどうか疑わしいものであろう。それでも、それ以上のことを思い出そうとはせず、**その単一の出来事に注意を向け、その詳細を思い出すように努めてほしい**。不意に、その出来事が起こった夢の大きな断片が戻ってくる。しかし、さらに重要なことは、その断片とともに、通常はそこで、以前の夢から隔絶した出来事が視野に入ってくるということである。夢が部分的に形作った残りの部分は一時的に無視しつつ、それらの孤立した出来事をできるだけ多く手に入れてほしい。そうしたら、それらの出来事を、ノートに、できるだけ短く、迅速にメモしてほしい。それぞれは一語か二語で十分なはずである。

次は、第一位の出来事を取ることだ。それとともに、関連した夢物語の一部が再生されるまでそれにひたすら集中し、その物語の概要をできる限り短く記録してほしい。書き留めたほかの出来事についても、順に、同様にする。最終的には、このように

して付けられた短縮記録を取り上げて、略さずに完全に書き出す。可能な限り多くの**詳細**を書き留めること。**もし、その出来事が現実生活で起こるようなものであっても、それが奇異に思われるものである場合はいつでも、特に注意してこれを行ってほしい。証拠が最も得られやすいのは、その種の出来事との関連だからである。**

記録を完成するまでは、ほかのいかなる考えにもふけることのないように。

思い出そうと努めるだけで終わらせないこと。夢は、書き留めよう。真夜中に目覚めたとき、私は何度か、直近の夢を注意深く記憶した。ところが、その記憶がしっかり固まっていることをどれだけ確信していたとしても、朝、私はその断片が一つでも残っているのを見つけたことがないのである。起きる直前に記憶し、着替え中に記憶し直した夢でさえ、朝食が終わる頃までにはほとんどいつも消えてしまったのだ。

もちろん、**すべての**詳細を書き留めることは不可能だろう。夢の登場人物の外見一人分を完全に記述すると、十分間も忙しい状態が続くことになる。しかし、大ざっぱな詳細と、**目立って珍しいすべての詳細**は、書き留めることだ。最終的な記録を通読し、そこに記載されているそれぞれの画像をよく注意してもう一度心に思い浮かべることによって、残りの部分を記憶しておこう。そうすると、もしそれら書かれていない詳細の一つが後に重要であると判明するなら、それを思い出したのはそのときが初

めてではないということに満足することができるだろう。

もし、覚醒時、夢を全然見なかった、また一つの詳細も思い出せないと確信しているならば、夢を思い出そうとすることはやめ、その代わり、最初に目を覚ましたときに**考えていた**ことを思い出すのに集中するとよい。その考えを思い出せば、それが夢の結果生じたものであると分かり、するとその夢がすぐに甦り始めるであろう。**その実験の日々の終わりに、自分の記録を初めから読み直してみよう。**

そこで見つけることが期待されるようなことは、十一章（b）で述べることになる。

＊　＊　＊

［第三版への注釈

ここで、この章の導入部の注釈で言及されているのよりも、さらに詳細な説明を追加しておく。

語られる実験において、そもそも夢の大部分は、覚醒時の生活における――過去あるいは未来の――時間順的に明確な出来事との類似性を見せ**ない**ということが分かった。これは、一般的な仮説とは正反対のことであった。ごく微量の残余物が、ただ過

去独自、または未来独自の出来事との類似性で構成されているだけなのだ。ところが、これらの類似性のほとんどは、あまりにも微々たるものであるために、証拠とはなり得なかった。しかしながら、これらの見たところ些細な偶然の一致をいくつか綿密に研究してみれば、それが回顧または予見の証拠となる夢であることを示してくれるような、**以前には注意しなかった裏付けとなる詳細**が明るみに出るであろう。このように、総じてすべての夢は明らかに覚醒時の生活と関連しているというのに、それらが過去あるいは未来あるいはその両方に関連しているかどうかを実際の実験で証明するのは、誰にとっても極めて困難なことなのであろう。どちらの方向にしても、証拠が挙がるのはほとんど同じように稀だったのだ。

だが、その証拠に気づく困難さは、同じではないのであった。注意は、過去との些細極まりない類似性にはすぐに引き止められるのに対し、未来との同様な類似性の方はほとんど立ち止まることなく無視して通り過ぎてしまうのだ。そして、その理由は明らかだった。過去との類似のケースにおいては、**因果関係**が前提として予想される。そのため、類似性が乏しいという性質は無視され、その夢の記録はさらなる検討に値すると見なされる。しかし、未来との類似のケースにおいては、どれくらい似ているかが常識と対立する因果関係の**唯一の**証拠となるために、判断力は、その出来事を**検**

討の価値ありと見なす前に、はるかに高いレベルの類似度を要求することになる。その際、もし覚醒時の出来事と夢との類似性が、あらゆる細部が完全に見え、容易に適正価値を見積もることができるという状態で、すべて完全に目に飛び込んだのならば、このことは問題にならないだろう。**しかし、それは実際には決して起こらない**。類似は、一つずつ現れ出す。一つの非常に些細な類似点がまず気づかれ、そして、**もし**判断力がこれに引き止められたのなら、夢は再読され、裏付けとなる詳細がゆっくりと、一つずつ明るみに出てくるのだ。そして、すでに述べた理由から、この極めて重要な、最初の、かすかな類似は、**もしそれが未来に関連しているのならば**、即座に――ほとんど無意識のうちに――、あまりにもあり得そうにないために、さらに検討するには値しないものとして捨てられてしまうのである。

この心理的な罠は、本質的には熟練者、すなわち最初の些細な類似性がどれほどかすかなものであるかに気づいている人にとっての罠である。初心者は、類似性に実際よりも大きな価値を与えることによって、それを回避する傾向がある。

要するに、覚醒時の出来事と過去の夢との間の類似性に探求する価値があることに気づくことは、逆に綴られた場合に何かを意味するかもしれない言葉に気を配りながら本を読もうとするようなものなのだ。心はそれを長時間続けることはできない。作

業を分割する必要がある――まずは通常の方法でその本をどう読むかを見て、次に――**それを鏡にかざす**のだ。結果として、本書に書かれている実験者への指示においては、この「鏡」の工夫を試さない限り、被験者が実際に得た結果に**気づく**チャンスはほとんどないと断言できる。すなわち、記録した夢は次の夜に見る予定のものだと自ら思い込み、それからその夢の原因と見なせそうなものをその日の出来事から探すのである。もちろん、これは証拠の価値を判断できるようにする工夫ではないことは、注意深く警告される。何らかの判断されるべき証拠があるということに気づけるようにするのには、からくりがあるのである。

最近の記事で、サー・ハーバード・バーカーは、このことを、この解説書の実験におけるあらゆる規則の中で最も重要なものと呼んでいるが、私は彼の所見に賛同するものである。

私はここで、その実験を行うべき夜の選択に関する助言の重要性を、再び強調しなければならない。すなわち、それは毎日の生活の単調さの中に突然やって来る変化に先立つ夜であるべきだ、ということである。語られる実験において、B嬢、C嬢、B少佐、それに私自身が、まったく新しい状況下で休日を過ごし、割り当てられた期間内に、過去あるいは未来であることがはっきりしている出来事に似た夢を得ることが

できた。一方、L夫人は、自宅で通常の生活を送っていた。彼女の記録は、ほかの実験者全員のそれを足し合わせたものよりも長かったけれど、時間順的に明確な未来の出来事に似た夢は一つしかなく、同様に明確な過去の出来事に似たものも一つしかなかった」

第十一章（a）

［第三版への追加］

この段階で私が確認しようとしていることをより詳しく説明するならば、読者にとって問題が単純化されるかもしれない。

前世紀末頃の宇宙図は、ほぼすべてのタイプの思想家に受け入れられており、それは従来の「基本的に定義できないもの」である「空間」と「時間」という観点から描かれてきた。物理学は、第三の用語「物質」を加えたが、この三つだけで「放射」をどのように取り入れることになるかについて、無視できない困難に苦しんでいた。生物学は、むしろ素直に、自らをほかならぬこの物理学の一分野であると考えることを選んだ。**感覚与件***は、不正なものと見なされた。実際の結果は、複数の「ジグソー」パズルのピースをまぜこぜにし、半分を床に落とした後で、頭のいい人が組み立てたつぎはぎ細工のようなものであった。それは、部分的には異常なほどぴったりだったが、各部分部分は組み合わなかった。

いずれにせよ、今では、物理学的断面の不整合は、定義できない空間と時間を採用するという不完全な方法のせいであることが知られている。しかし、その時代の特徴は、非常に根本的な性質の誤りの可能性を考えることができない焦燥感であった。また、プランクの声は挙がったばかりだったこと、アインシュタインはまだ考えを表明していなかったことは、念頭に置いておく必要がある。

今、当時の人が、本書の前半で語られたのと同じような一連の夢を経験したとする。すると、その人は、時間の従来の見解とはきっぱりと対立するものを発見したことだろう。とはいえ、その見解は、批判を受け付けない神聖なものであった。一応は論争の余地がなさそうな物理学体系全体が、その正しさを証言していた。このような状況では、我々の仮想の夢見人は神秘主義に避難せざるを得なかっただろう。その者は、二つの分離された世界、一方は合理的で、他方は不合理な世界の存在を、受け入れなければならなかったことだろう。

ところが、一九一七年までに、状況は一変した。私が気にする必要が**なかった**ことの一つは、時間の古典的理論だった。それはすでに流動的なものになっていた。現代科学はそれと和解していた――そして、次に何をするべきかに思いを巡らせていた。

＊感覚与件……感覚を通して直接体験できるもの。色・形・音・匂い・味など。

そんな中、すでに述べた一連の夢すべてが純粋な偶然の一致によるものであるという確率が度を超えて小さすぎたため、私は、**時間の古典的理論の部分的な崩壊も考慮に入れつつ**、作業仮説として予見を仮定しなければならなかった。そのとき、私は科学の使徒として、反論の確実な証明がなされるまでは、予見は科学的に可能であると思い込まなければならなかった。すなわち、時間の性質が、宇宙の四次元的展望を観察者に許すということである。それは完全に合理的なことであった。もし現代科学が、その四次元的「時空」は真実であると強く主張するならば（後の章参照）、その世界の観察者たちも同様に四次元的であるはずだということに異議を唱えることはできないからである。だがそうなると、それは誰もが予見能力を持っているということを意味することになる。残念なことに、それが採用されることにはならなかった。夢見人にとって回顧の方をより魅力的にする、多くの個人的要因を挙げることが可能だったのだ。また、こんな困難もあった。私の立場を確立するためには、**常識の問題として**、予見の疑惑を十分強力に喚起する未来との類似性を提供する夢は、大衆に分け与えられているわけでは**なく**て、それどころかごく少数の個人の特権なのだ、ということを主張する者の異議を、克服しなければならなかったのである。

私は、この障害の性質について、読者に対し、完全に明らかにしておきたいと思う。

科学においては、考えられる原因についての推測はさておいてある現象を考察したいときには、「効果」という言葉が使われる。今触れたばかりの強い「効果」は、偶然の一致によるかもしれないし、そうではないのかもしれないが、難儀なのはそのことではなかった。私が対処しなければならない異議は、強い「効果」が予見の決定的な証拠にならないということではない。異様に少数の人間しかそのような効果を少しも観察できないということの方が、はるかに手ごわい主張だったのだ！

さて、私が正しかったのなら、そして我々の時間の考えの中にまだ気づかない論理的誤謬が残っていたのなら、当然その誤謬は自明であることが証明されるだろう――一度それが発見されれば。そのうえ、その発見が、科学のあらゆる部門に効果を及ぼし損なうことも、そのそれぞれから確証の割当量を収穫しそびれることも、ほとんどあり得まい。夢の正確とは言えない証拠は、厳密な科学理論の必須基盤の一部を提供することができず、そうしようと試みることは最悪の手段となるだろう。しかし、私はその証拠を**無視する**ことができなかった。私の反対者たちは、夢の予見という普遍的能力の存在が私の命題の必然的な**系**であると指摘することができるだろうし、またなぜ千人に一人もそれらの推定上の好機を利用しなかったのかを知りたいと要求するだろう。「その夢の証拠は」彼らは言うだろう、「あなたの理論に深く関係している。

そしてその証拠はあなたにきっぱりと反している」と。

このような状況では、問題の目立つ印象的な効果が、推定される一般的見解よりも、**個人個人に**はるかに広く分配されていると私が納得するまで、極めて困難な時間の問題にさらにエネルギーを消費するのは不得策であるように思われた。

その一般的見解に密接に関連しているのは、予見は可能だが、それには特別な、「超常的な」能力の利用が必要となるはずだと信じる人たちの意見であった。この見解は、あらゆる部門の神秘主義者たちに大切にされていた。そしてそれらは、何世紀にもわたって神聖視された彼らの砦は平凡な科学によって侵害を受けやすかったという提言によって、少なからぬ抗議の声が上がりかねないものだった。不幸なことに、彼らは予見現象の調査に非常に多くの時間を捧げていた人々、すなわち、いわゆる「心霊現象研究」に従事しているさまざまな団体のメンバーの一部から強い支持を受けた。

この信条の奇妙な結論に注目するのは興味深い。超常性論者は、自らをある基準（好みによって異なる）に置き、それを超えると、偶然の一致をあまりにもありそうにないものとして排除する。ジョーンズの夢の一つが、この基準に達したとする――彼は自分の「超常的な」能力を用いたと高く評価される。スミスが、その基準に非常に近いが完全ではない夢を見たとする――スミスの夢は、平均的な夢の能力の行使による

ものだと判断される。**しかし、今度はジョーンズが、スミスのものに似た夢を見たとする。**今回の場合、ジョーンズが超常的な能力の行使を怠ったと言うよりほかに仕方がないわけだ。このように、ある能力から別のものへの交替は、偶然の一致の非実現可能性にごくわずかな差があるときに起こるのだ！

ナンセンス！　とあなたは言っただろうか？　そのとおり。それでは、超常性論者は、この困難をどのように克服するのか？　私は知らない。彼らはそれに気づいていないようだ。彼らの一人が、共同体全体から集めたような夢を研究する実務に就いた場合、彼は未来との類似性すべてに優・良・可・不可の成績をつける。彼は、普通の平均的な能力を理由に不可と判定する。優は、おそらくほかの、超常的な能力によって生み出されると彼が見なしたものだ（自分の信念に基づいた評価）。その中間の二評価は、疑わしいとして保留したものである。しかし、彼は、これらの中間的な効果の存在が、**想定される能力の交替は、尺度中の特定ポイント——証拠としての価値がほぼ同じである二つの夢の間のポイント——で発生する**、という考えを強いられることを完全に忘れている。

要するに、唯一の首尾一貫した超常性論者——上記の不条理を避けている唯一の人々——とは、尺度中に中間評価が存在**せず**、また自分たちの信念に基づいた効果は

ほかに類がなく、観察可能であるような下位の効果から大きな隔たりによって隔離されている、という一般的見解を固守する人々である。この人たちは通常、重要な例として数える価値がある効果は、めったにいない特別に恵まれた個人に付随するという、さらなる一般的仮定を受け入れる。

私は、計画された実験の目的が、予見能力が存在するとして、それは人間の、時間への普遍的な関わりの正常な性質であるという理論に、一般的な夢の証拠が本当に従うかどうかを見ることである、ということを明らかにしたと期待するものである。言い換えれば、私は、上で引用した諸分野の反対者たちと形勢を逆転させることができること、また、予見であることを暗示する効果があまりにも多くの人々に観察されるため、その人たちが何らかの超常的な方法において仲間とは異なるという仮定は受け入れられないと証明できることを願うものである。

＊　＊　＊

発見されるかもしれないようなあらゆる効果が、予見という**事実**の証拠として一定の価値を持つのは明白だ――存在すると仮定される予見の**分配**に関する証拠のそれと

は、区別されるべき側面である。私が関心を持っていたのは、後者の側面であった。しかし、読者は前者に関心があるだろうし、それどころか、そのような証拠に対する私の態度に関して、私が何かしらコメントするべきだと思うかもしれない。よろしい、私は最善を尽くすつもりである。

そもそも、当然のことながら、我々は、偶然の一致の可能性には限度が**ない**ということを認識しなければならない。従って、予見の証拠は、純粋に統計的な性格のもの――確率のバランスの問題――なのである。我々は精密科学を扱っているのではなく、確率が高くなるにつれて精密科学に向かって着実に接近する方法を扱っているのだ。

今、偶然の一致である一連の効果に対する可能性は、二つの要素に依存している。すなわち、

（1）個々の効果の奇異性

（2）発生頻度

である。**好事家**は、概して第二の要素を完全に見逃している。それでも、それぞれの場合において十分の一という高さの偶然の一致の可能性を持つ一定期間における七つの夢の証拠は、実際は、百万分の一という低さの偶然の一致の可能性を持つ単独の夢の証拠の十倍の強度である。

上記の要素のうち、最初のものを考えてみよう。もし超常性論者が正しければ――もし予見的な夢が、回顧的な夢に用いられた能力よりも優れた能力の産物であるならば――、我々はいつか、疑う余地のない詳細の豊富さにおいてあまりに異常なために、単独の夢が極めて高い証拠的価値を持つような効果を発見したいと思うかもしれない。しかし、もし正常性の理論が正しければ――もし未来を夢見る能力が、過去を夢見る能力と**同じもの**であるならば――我々は、未来との類似性が過去との類似性よりも顕著であることを期待することができない。そして後者は、大多数の人々が想像するよりもはるかに詳細さに乏しいのである。

一方、正常性論者の見解は、超常性論者が認めるのよりもずっと一般的であるような効果を**認める**だろう。そして、観察されるかもしれないような効果は、証拠となる価値のあらゆる等級を示すべきだということが主張されるだろう――その状況において可能な限り最良のものから最悪のものまで。

手短に言えば、正常性論者は、与えられた証拠の価値が適度な質と適度な頻度から成ることを好み、超常性論者は、より高い質とより低い頻度を望むだろう、ということだ。

「適度な頻度」に私がどんな意味を与えているのか、と読者は尋ねるかもしれない。

答えは、それが個人に左右されるということだ。個人個人の夢の**明晰度**（めいせきど）は、人によって大いに異なる。十四夜の夢の記録の中に、時間順的に過去であることが明確な出来事との適度な類似点を三つ以上たどれない人は、未来の同様に明確な類似点をそれ以上見いだすことはほとんど期待できない。けだし、夢が明晰な人であるほど、それぞれの方向に類似点をより多く発見するだろう。

これらの正常性論者の基準で判断すると、次に書かれる一連の実験で生み出された証拠は、最良のものから中くらいのものまでさまざまになるように思われる。

第十一章（b）

［**第三版への注釈**

この章に書かれている実験は、次の点を確認することに向けられる。

適切に実施された個々の実験結果は、予見のための能力が存在すると仮定して、それが少数の規格外の個人だけに所有されるという一般的見解に有利に、あるいは不利になる可能性があるだろうか？

私自身の実験は、効果の頻度が正常性を示しているかどうか、ほかの人の実験を価値あるものにするのに十分かどうかを確かめるための予備調査であった］

以下の実験の説明は、ここでもまた科学的な証拠ではなく、またそのように見なされることを意図するものでもない。それは私にとっての証拠であり、出版の理由の一部である。当然、読者にとっての証拠ではない。読者にとっての確信は、結びの諸章における進んだ議論の説得力か、あるいは読者がその理論に従って自分で実験をした場合に得られそうな結果か、そのどちらか――あるいはその両方――にかかっている

はずである。

個人的には、このイメージ探索は魅惑的で、わくわくさせるような作業であるとさえ感じられた。しかし、それは新しいスポーツのようなもので、未熟な初心者に対してはあらゆる起こり得る失敗を犯しやすくした。私は、覚醒状態が三十秒間かそれ以上になるまでは、夢を思い出す試みを遅らせた。それだけでなく、書かれた記述の詳細についての重要性も十分に理解していなかった。五十語で記述されるべき出来事が三語で記録されていた。その結果、夢は未来の経験を思わせる多くのものをもたらしてくれたが、私は時間のどちらか半分に属するものとして**認定できる**ものを、初めのうちはほとんど見つけることができなかったのだ。前章で詳述した火花のシャワーと、五つのさらにやや疑わしい結果があった。完全に記述されたイメージが一つあり、その元の出来事は四年後に見られた。しかし、それはテストの規定範囲外であった。実際は、十一日目になって初めて、期待していた明解で決定的な*結果を得ることになったのである。

その日の午後、私は原野での狩りに出ていた。私は、取得しておいた許可がカバー

＊**（原注）**……これらの特有な状況での私の経験が、上記の一般的見解に反していたのは確実である。

する境界についてやや確信が持てず、間もなく、いる権利がなさそうな土地に自分がいることに気づいた。そこを横切って進んでいると、二人の男が違う方向から私に向かって叫んでいるのが聞こえた。それどころか、彼らは一匹の激しく吠えている犬を駆り立てているようだった。私は、異常事態には気づいていないふりを装いつつ、慌てて境界壁にいちばん近い門へと向かった。叫び声と吠え声は次第に近づいてくる。私はやや歩みを速め、追跡者たちが視界に入る前に何とか門を通り抜けた。全般に、物事を気にしやすい個人にとっては極めて不愉快なエピソードであり、それについての夢を見させる可能性が非常に高いものである。

その晩、自分の記録を読み返していたとき、最初、私は何も気づかなかった。そして、ちょうどその本を閉じようとしたとき、終わりの直前にかなりかすかに書かれたものが目に入った。

「二人の男と一匹の犬に狩られた」

驚くべきは、私がそのような夢を見ていたことを完全に忘れていたことであった。書き留めたことさえ思い出すことができなかったのだ。

十二日目には、同一であると証明できるものはなかった。だが、十三日目には、もう一つの優れた結果がもたらされた。

その日のうちに、私は、登場人物の一人が古い家の屋根裏にある大きな秘密のロフトに隠れるという小説を読んだ。物語の後半で、彼はその家から飛び出さなければならなくなり、ロフトから煙突を通って逃げたのだ。

前夜の夢は、広い、いわくありげな、秘密のロフトに関するもので、私はそれを見つけると、大きな関心をもって吟味した。夢では、その少し後、その家から逃れた方がよさそうだという流れになり、私はロフトに立ち寄ってそれを実行する決心をした。

十四番目の夜、私は「ホットクロスバン」マークに値する結果を四つ得た。

実験の最終結果は、二週間経過中に「効果」の二つの決定的な例を確認することができ、単独に見たときは決定的ではないけれど、その数を考慮に入れた場合、偶然の一致に帰することがほとんどできないものが六つ確認できた。しかし、最も重要な点は次のことである。これらの例は、もし夢が記憶も書き留めもされなかったとしたら、いずれもまったく観察されず、覚醒時の出来事の後でその記録が再検査されることも絶対になかっただろう。*

＊（原注）……予見の証拠となる夢の数は、同様に回顧の証拠となる夢の数とほぼ同じだった。

＊　＊　＊

これまでのところ、当効果は人間と時間との一般的な関係――うわべだけの観察を回避するよう構成されたものではあるが――にすぎないという理論は、実験によって部分的に裏付けられていた。しかし、その理論の上では、問題の効果は、私自身にとってとまったく同じくらいに、ほかのすべての人にとっても実験的に観察可能であるべきである。これは私が、別の誰かに同じ試みをするよう説得する必要があることを意味した。

ある女性が、B嬢と呼ぶことにするが、その仕事を引き受けることに快く同意してくれた。私が彼女を選んだのは、主として、彼女がすこぶる普通の人で、いかなる種類の「心霊的」経験も持たず、（これが素晴らしい点なのだが）自分は夢をまったく見ていないも同然だと信じていたという理由による。実際、彼女は、生涯の全過程でたった六つか七つの夢しか見たことがなかったので、実験しても無駄になるだろうと私に断言したのだ。

最初の夜の翌朝、彼女は私の所に来て、まったく絶望的だと言った。彼女は、目覚

めた瞬間に夢を覚えておこうと試みた。だが、何も覚えていなかった。それで私は、夢の記憶を探そうとして苦労するのではなく、代わりに目覚めた瞬間に**考えていた**ことを思い出すよう努めること、また、それが得られたら、自分がそれを考えていた**理由**を思い出してみてほしいと伝えた。予想どおり、それはうまくいった。次からの六回の朝それぞれで、彼女は短い夢を見ていたことを思い出すことができたのだ。

最初の夢から実験が始まると見なすと、彼女は六日目に次の結果を得た。

プリマス駅で列車を待っていた彼女がプラットホームの片端まで歩いていくと、道路に通じている五本ないし六本の横棒のある門に行き着いた。その門に達したとき、一人の男が向こう側を通り過ぎたが、彼は三頭の茶色の牛を歩ませていた。彼は奇妙なやり方で牛たちの上に棒をかざしていた――まるで釣り竿のように。

夢の中で、彼女は知っている小道を歩いていたが、それはそこにあるはずのない、五本ないし六本の横棒のある門で終わっていることに気づいて、非常に驚いた。その門は駅のそれとまったく同じで、彼女がそこに到着すると、あの男と三頭の茶色の牛が向こう側を通り過ぎ、覚醒時の経験と寸分違わず、男は牛たちの上に釣り竿風に棒をかざしていたのだが、この全グループが、彼女が見たグループとまったく同じように配置されていた。

この夢は、覚醒時の経験の前の朝に発生した。

小道という「過去」のイメージと、門という「未来」のイメージの混合が、優れた統合の見本を提供したのである。*

＊　＊　＊

次に、私はいとこのC嬢に試行を依頼した。彼女は、自分がこの手の経験をしたことがないことに自信を持っており、また原則として自分が夢をほとんど見ていないと確信していた。彼女は失われた夢を取り戻すことに長けていて、細部に注目することが得意であることが判明した。しかし、最初のうちは、過去の出来事であっても、関連性を読み取るのが非常に苦手であった。例えば、彼女は何年間もいかなる屋根の上に乗ったこともなかったというのに、屋根の上を歩く夢が、前日私と一緒にバンガローの屋根に登って動き回った経験とどう関連するのかを理解することができなかったのだ。しかしながら、彼女は八日目に次のような第一級の結果を手に入れた。

とある田舎のホテルに到着した直後、彼女はすべての客が怪しんでいた奇妙な人間がそこに泊まっていると告げられ、客たちは、その女性がドイツ人であると結論を下

していた（これは戦争の最終段階の期間である）。その後間もなく、彼女はその人に――初めて――ホテルの敷地で遭遇した。敷地はかなり珍しいものである。たくさんの大きくて珍しい木々を含んだ長い道が伸び、それがホテルのものであると知らない人には、公の土地であると誤認されているに違いなかった。噂のドイツ人は、黒白ストライプのブラウスと黒のスカートを身に着け、頭のてっぺんの「おだんご」に髪を束ね込んでいた。

いとこの夢は、黒いスカートと黒白ストライプのブラウスを着て、髪を頭のてっぺんの「おだんご」に束ね込んだドイツ人女性が、公の土地で彼女と会う、というものであった。いとこは、彼女がスパイであると疑ったという。

その夢は、出来事のだいたい二日前に現れた（記録には日付がなかったが、確証的な出来事が起こったときには記録は私の手中にあった）。

彼女はすでに、実験の早い段階で、完全ではないまでもほぼ決定的な結果を得ていた――ある夢が、その後友人から受け取った手紙に書かれたニュースに関連していたのだ。

＊（原注）……B嬢には、先立つ二週間以内に、特有な過去の覚醒時の出来事に似た夢が一つしかなく、また私が指摘するまで、彼女はこの夢を見つけ損なっていた。

＊　＊　＊

L夫人は、次に試行してくれた人であるが、いちばん最初の夜に優れた結果を出した。しかしながら、それは翌週中に起こった二つの別の出来事に関連していた。ここでは二日の制限は超過していた。しかし、一致があまりにも明確だったので、その結果は、例外的なケースにおいては制限の延長を許可するという規則下に置かれた。

覚醒時の経験は、コーウェンでの二つの市民集会に関連していた。L夫人は、このうちの一つに行き、そして、後でそれを私に説明する際に、建物を埋めるために虚空からやって来たように見えた大勢の聖職者に驚いたと言っていた。教会の特別利益団体がやるような、集会前の事業活動的な何かがあるようには見えなかったからである。

彼女は別の集会には出席しなかった。しかし、そちらには私の姉がいて、**L夫人に自分の経験を話した**のである。姉がドアから首を中に入れると、いつもの大混乱が進行中であることが分かった。目立たないように首を引っ込めようとしたとき、進行係が彼女を見つけ、こう声をかけた。**「ダンさん、お入りください。そして、我らウェールズ人の戦い方を見てください！」**

L夫人の夢では、彼女は市民集会に出席し、聴衆の中にいる一人の聖職者の妨害にかなりいらいらしていた。彼は議事を進めることを許す代わりに、祈りで終わる説教のようなものを述べることを主張した。彼女は諌(いさ)めた。その聖職者はかなり大きくふんぞり返ったため、彼女に触れた。聴衆の中の別の男が彼女の腕を押した。彼女は立ち上がり、それからテーブルをドンと叩いて叫んだ。「聴衆の振る舞いの責任は誰が取るのです？　私は**ウェールズ人が公の場での言動で悪名高いこと**を知っていますが、ここでそれを許すつもりはありません」

L夫人は、この夢を書き留めた後、これについてすっかり忘れてしまった。その記録は二日目以降再読されず、ゆえに二つの集会がその週の後半に行われたとき、彼女はそれを捉え損ねたのであった。私がたまたまそのメモを振り返って調べ、それを発見したのは、ただの偶然であった。*

＊**（原注）**……先に述べたように（**【訳注】**本訳では一〇一ページ）、L夫人は、時間順的に明確な過去の出来事に似た夢を一つだけ見ていた。彼女の記録は膨大なため、テストの間、私は再三再四その点について彼女に質問したのだが、彼女が明らかに結果を得損なったことに困惑させられたのであった。

＊　＊　＊

F少佐は話を持ちかけた次の人物であるが、少なからぬ興味を持ってこの実験に着手した。彼は、もしこの仕事で何かが得られれば、それはダービーの勝ち馬を見抜くことを意味するかもしれないと指摘した。彼は、私が完全に正しかったことに満足しただけでなく、残念ながら、夢見る心がその仕事を正しく理解していなかったことも納得したのである。

たまたま彼は、なかなか評判のよい海洋画家であった。テストの二日目、彼は、以前ビーチに置かれているのを見たことがある二艘（そう）のボートの絵を描いた、と言った。しかし、一艘のボートは**船首と船尾両方が尖（とが）っていて**、最後にここに来た後にひどく目立つ救命艇の色（赤と青）で塗られたことに気づいた。それでも彼はスケッチした——もちろん、ボートとその色に長時間周到な観察が必要とされる工程である。その船は短い緑色の芝の上にあった。少し離れた、その絵の中に入り込んだ桟橋（さんばし）の上には、もう一艘、**中央を何かで覆われた**長くて赤いボートのようなものがあった。F少佐がその物質が何であるかを確認するために双眼鏡で見てみると、それが**網**であることが判明した。

関連のある夢のイメージは、**中央を網で覆われ、緑色の芝生の上に置かれている、赤と青の救命艇**のそれであった。

この夢は前の晩に現れていた。

F少佐は最初、関連性に気づくことができなかった。彼は、類似性は夢の場面のほかのすべてにまで及んでいるはずだと思っていて、これが事実ではなかったことに失望したのである。それでも、彼は試行を続けた。

次の日は激しい雨だったが、我々は二人で、絵を描くための風雨を避けられる場所を探そうとした。我々は建設中の小さな家に入り、それから下方の窓からの視界があまりにも制限されていることに気づいたため、未完成の上の階の梁に梯子を立てかけ、上った。その梯子はかなり珍しいもので、各横桟が正方形であった。

前夜のF少佐の夢の一つは、どんな壁にも立てかけられていないように見える梯子を、彼が上っているというものであった。それは、いわば空間に向かっていくようなものである。そして、それは正方形の横桟を持っていたのだ。

彼は六年間、梯子を上ったことがなかった。

しかしながら、最終的に彼を納得させたのは次のことであった。彼は、彼が（現実に）おもちゃのボートをプレゼントした、自分の保護下にある小さな少年と一緒に、その

ボートを帆走させている夢を見た。少し後の夢では、彼は同じようなボートを見たが、今度は実物大で、マストは取り去られており、帆は水の上に水平に浮かんでいた。乗組員がそれらを洗っていた。その数日後、彼は、友人の少年が、新しいボートを走らせるために池に連れていかれたが、そうする代わりに、帆を取り外して池の水に水平に浮かばせ、それを洗うことを要求した、ということを聞いたのだった。

彼は、これら三つの結果は、総合すれば決定的であることに同意した。*

＊　＊　＊

その少し前、弟は、ベルギーの英雄レマン将軍の戦後の死を「得て」、それから朝食時に朝刊を開いたとき、自分はその告知を突きつけられていたことを知ったと、私に書き送ってきていた。

姉も、弟同様、実験をする必要もなく結果を得た（もちろん今でも、二人とも効果の監視を続けている）。しかしながら、彼女の証拠は、「*ビートン」が「ニュートン」よりも偉大な名前である科学の一分野に及んでいた。その分野については不案内だし、謙虚になるしかないのだが、私としては、この場合の出来事は問題から偶然の一致を

完全に除外するに足るほど細かいところまで一致する、という彼女の言葉を、そのまま信じる覚悟はできているのである。

＊**（原注）**……私は、F少佐の夢の出来事のうち、過去であることが明確な覚醒時の出来事に関連しているように思われるものがどれくらいあるのかについては記録を怠ったが、思い出せる限りでは、それはたった一つしかなかった。

＊**ビートン**……『家政読本』を書いたイザベラ・ビートンのことか？

第十二章

以上のような次第で、状況は少しだけ明確になった。効果は、明確に方向付けられた観察にのみ明らかなものであることが発見され、そのために一般の注意を引かなかったことが十分に説明されたのである。とはいえ、それを知覚できるようにする目的で考案された大ざっぱな方法は、かなりうまくいくように思われた。孤立した異常性という元の仮説は完全に葬られ、さらには、実験を踏まえると、自分が効果を観察するための際立って十分に発達した能力を持っているように思えることさえなかった。その他の人々は私よりも早く決定的な結果を得ていたし、ほとんどの場合、その結果はより明確なものだったのだ。*

実験の結果は、自分で効果を知覚できそうな人の数が、少なくとも、異常という考え方を不合理にするくらい多いだろうということを示した。さらに言えば、「以前起こった」ことがあるという奇妙な出来事の感覚を事実上誰もが経験しているということ、また、ほとんどの人が、忘れたように思われた夢を、その夢を思い起こさせる（すなわち関連する）何かが起こるために（ほかの理由はあり得ない）突然思い出す傾向

があるということ、などを考慮すれば、もしどこかに異常があるのなら、それはおそらく効果を観察することを心的に妨げられた――そのようなことがあると判明したとして――人々に関連するのだろうということが、かなり明らかになったわけである。しかしながら、その点についての統計は、書籍出版の結果として生じる大規模に行われた実験からのみ集めることが可能であった。

その一方で、説明は依然として遠くにあるように思われた。

問題は、効果がその方向性において極めて限定的であったことである。それは、包括的な一般論（例えば相対性理論や時間の二次元論など）でカバーできるような、広くて曖昧なものではなかった。それは特殊性に満ちていた。それは道標のように半ダースの解決を示す筋道を提示した――ほとんどは矛盾していたが。そして、事実のいくつかをカバーする説明を考案するのは容易だったが、そのすべてに適合するものを見いだすのは困難だった。

＊**（原注）**……あまり目立たない結果なら、助力者たちのそれよりも私の方がずっと多かった。だが、その場合の私の結果が回顧の証拠となったことも、同様に多かった。私がほかの実験者と異なっていたことを示すものは、結果――**両方向の**――を「見抜く」ためのより優れた才能を除けば、何もなかった。

追加データを得たいと思い、私は自分自身の実験を再開したのだが、当面の目標は、未来に関係するイメージと過去に関係するそれとの間に、観察可能な違いがあるかどうかを確かめることであった。結果として、最も慎重な観察も、そのような際立った特徴の展望をもたらしてはくれなかった。

しかしながら、このさらなる実験の過程で、私は特に啓蒙的なタイプの三つの夢に出会ったのだが、おそらくそれらを簡単に記しておく方がよいだろう。

第一のものは、「過去」から「未来」に連続している連想の鎖の、かなり明確な例を与えてくれた。接続のリンクはこぼれたインクの概念であり、その概念は関連している覚醒時の経験両方に入り込んでいる。

覚醒時の経験（1）：夢の前――テーブルに座っている友人が万年筆にインクを補充しているのを見て、彼がインクをこぼしそうだと思った。

覚醒時の経験（2）：夢の後――フランスの探偵小説を読む。その探偵はあり得ないほど無能に思われ、そして、本が終盤にさしかかった頃、私は彼が、彼を信用するよう読者が求められていた探偵スキルの何らかの徴候をいつ示そうとするのか、疑問に思い始めた。

大詰めにおいて、彼はつまずいたふりをし、そしてその際、悪者が座ったテーブル

の上にインクをこぼした。後者は、服を守るため、その洪水の上に両手を上げながら椅子の中を後ずさった。するとすぐに探偵は片手をつかみ、それをまずインクの中に叩きつけ、次に吸い取り紙の上に勢いよく置き、こうして片手分ワンセットの指紋を得たのである。それから彼は、勝ち誇ってその犯人を糾弾した。

夢：二つの覚醒時の経験の間――有名な探偵が、自分のスキルを我々に公開しようとしていた。我々は長時間待ったが、彼はまったく無能であるように思われた。最後に、彼はつまずいたふりをし、そしてその際、**万年筆から**犯人の上にインクをこぼして、それから彼は勝ち誇ってその者を糾弾した。

第二の夢も同様の連想の鎖を示したが、このケースではリンク――リヴォルヴァーで撃つ危険な狩猟対象動物――はずっと明確であった。

覚醒時の経験（1）：夢の前――ライオン猟遠征の写真を見た。弟はそのとき、そのような遠征に参加しようと考えており、私は、彼がどんな銃を持っていくべきかとあれこれ考え始めていた。さまざまな武器の長所と短所を考慮しながら、私はパリの銃砲店で見た巨大な七連発リヴォルヴァーを思い出し、その道具は現代的ライオン・ハンターの装備の一部であろうと思われた。私は多少面白がりつつ、リヴォルヴァーでのライオン猟はどんなふうになるのだろうと思った。

覚醒時の経験（2）：夢の後――エセル・シジウィックの『昇降口』を読む。二つの章が豹のエピソードに費やされており、それは**見世物用の動物集団から逃げた**ものだった。そいつは子供の学校のようなことをしていた田舎の家の近くに姿を現し、**山羊を一頭殺していた**。その後、主人公は引退した探検家によってその動物から救われるが、彼はあわやというタイミングで到着し、借りたリヴォルヴァーを二発撃ってその獣を殺す。

夢：二つの覚醒時の経験の間――田舎の家の窓から外を見ると、小麦畑を通して動いている一頭のライオンの頭と肩が見えた。近隣では、このライオンが**見世物用の動物集団から逃げ出した**こと、**山羊を一頭殺していた**ことが知られていた。私は窓からリヴォルヴァーでそいつを撃てるだろうかと思ったが、距離がありすぎると判断した。小麦畑の小道のそばに身を潜め、その獣が引き返してくるまで待つことにした。しかし、リヴォルヴァーよりも優れたもので武装した方がよいと感じられた。ライフルを手に入れようと外に出た。

第三の夢は完璧な統合の例を提供し、その構成成分は夢の前後に受けた印象に関連していた。

覚醒時の経験（1）：夢の前――一階に泊まっていたホテルの庭で、両側面のない、

古くて小さな平底船を見た。

覚醒時の経験（2）：夢の後――姉が、オリンピアのモーターサイクル・ショーの一つに一緒に行こうと誘ってきたが、それは彼女が、気に入った小さな「スクーター」についての私の意見を欲しがったからである。それは「ユニバス」という名の、すっきりした外観の小さなもので、シャフトやギア・ボックスなど自動車の原理に基づいて作られているため、ショーのほかのスクーターとはまったく違っていた。それには奇妙な形の小さなシートが装備してあった（我々がそれまで見てきたスクーターはすべて、人は底板の上に立って乗っていたのだ）。またそれは、婦人服の保護のためのシールドも備えていた。私はこの最後の特徴の利点を指摘し、普通のスクーターでは彼女の足をひどく濡らし泥だらけにするだろうと付け加えた。私がそう言ったとき、私の心の中を、これは以前にも起こったことだ、という古い奇妙な確信のようなものがよぎった。それが何を意味するのかに気づいた私は、頭を働かせ始め、間もなく失われた記憶を取り戻した。それは夢、さらに言えば、私が記録した夢に属していたのだ。家に帰ると、私はメモを調べ、それが**二年前**に書かれていたことを知った。

夢：二つの覚醒時の経験の間――ひどく奇妙な小型自動車に座った姉が、通りをやって来るのを見た（私はこの車のスケッチも描いていたが、それはまさにシールドのな

い「ユニバス」であった)。彼女の足を濡らすことについて、大声で何かを呼び掛けた。車道には、低い楕円形の踏み台くらいまで水位が上がってきている水が見えた。

メモには、このとても小さな車の踏み台が、私が九日か十日前に見ていた**平底船の部品**であると書いてあった。

ここまで書いてきた途中で、長い時間を隔てた夢との関連という問題に触れていたので、私がこれまでに経験した中で、それにいちばんうってつけの例を書いておいてもよいだろう。夢と未来の出来事との間の隔たりは、約二十年であった。

覚醒時の経験(1):夢の前——小さな少年だった十二歳から十四歳の間くらいの頃、私はジュール・ヴェルヌの『雲の飛行艇*』を大きな興味をもって読んだ。その本の読者は、フライング・マシンについての著者のアイディアのイラストを、おそらく覚えていらっしゃることだろう。それらは、衝角船首を持つことを除き、ほぼ現代の「駆逐艦」のサイズや形状に近い、長く黒い艇体で描かれていた。まるで間違えて海から飛び立って空に進入してしまったかのように見えるその物体は、細い金属製マストの森に取り付けられた大量の小さなスクリュープロペラだけに支えられていた。翼も、それに類するようなものも、何もなかった。

覚醒時の経験(2):夢の後——約二十年後の一九一〇年に、私は、完全な固有安

定性を持った最初の飛行機で、最初の決定的な飛行を行った。*それはかなりエキサイティングなエピソードであった。その機体は、あまりにも素早く離陸し、弾むように動いた――そして、私が落ち着きを取り戻したとき、私はそれが飛行場の境界を越えて轟音を立てて進み、一様に上昇し、また岩のように安定しているのに気づいた。それで私は余計なことはせずにそのままにし、機体が自分で自分の面倒を見るのに任せた。それはエンジンが力を失うまで続いた(当時は通常せいぜい三分間くらいである)。その感覚は極めて異様なものだった。その機械は、私がデザインしたすべてのそれと同様、無尾翼で、下から見ると矢柄(やがら)を**さっ引いた**広い矢じりのような形をしていた。それは一番先にポイントを移動し、そして、そのポイントに、軽い木の骨組みに白い画布を張って作られた、オープンの(甲板のない)カヌーのような機構が取り付けてあった。その中に座って何もせず、三百フィート下であちこち激しく駆け回っている牛たちを両側から見下ろしていたが、その飛行機の主要構造全体は視界のはるか背後

＊**『雲の飛行艇』**……ジュール・ヴェルヌの小説『征服者ロビュール』のこと。イギリスでは『雲の飛行艇』というタイトルで広まった。

＊**(原注)**……L・ギブズ氏は、それ以前、私がデザインした同様の機体で離陸するよう促した。しかし、そのときの飛行は数ヤードに留まった。

にあって、それで引き起こされた印象は、人間がシンプルなオープン・カヌーで空間を移動している、というものだった。

夢：二つの覚醒時の経験の間――小さな少年の頃、ジュール・ヴェルヌの本を読んだ数日後、私がフライング・マシンを発明し、それに乗って宇宙旅行をしている、という夢を見た。私が、大きくて金属製の、スクリューで支えられる「雲の飛行艇」以外のフライング・マシンのことを、聞いたことも可能性を考えたこともなかったことは、心に留めておく必要がある。それなのに、夢の中で私は、**木の骨組みの上に白っぽい材料で作られた、小さなオープン・ボートに**座っていたのだ。私は操舵をしていなかった。それに、そのボートを支えているものの形跡は何もなかった。

「ダン」複葉機のボート状**ナセル***は、その夢の、細々と生き残っていた、認識されない記憶のために加えられたのではなかったということを、ここで付け加えておく方がよいだろう。初期のマシンにはそのような特徴はなかった。これは単にパイロットの「頭部の抵抗」を減らすために後付けで装備されたもので、その抵抗は、特にその場所で、装置の安定に有害な効果を及ぼすと信じられていた。

私はその夢を決して忘れず、一九〇一年にボーア戦争から病気離脱していたとき、それを楽しい気分で思い出し、偵察についての大きな軍事的問題を解決すべく、「重*

航空機」の装置を考案するため本格的に仕事に取りかかった。けれども、その夢は少年ならいかにも見そうなものくらいにしか思えず、そのときの私は夢で見た機械の**外観**の重要性を理解してはいなかった――実際、それを理解するのは不可能だったが、それは関係する構造の開発が十年後まで行われなかったからである。そのときまで、私はその夢を重要なものとは見なさず捨ておいたのだが、小さくて白いオープン・ボートの裏付けとなるような詳細が、夢全体を未来の経験の先取りとして分類する、ということに私が気づいたのは、つい最近のことだった。

＊　＊　＊

仮に、夢を見ているときの注意が、どんな特定の「現在」にも注意を払うことなく、連想ネットワークのあちこちを動き回るとしたら、何年も「先の」イメージに偶然出くわしたとしても驚くには値しない。実際、これはまさに我々が期待すべきことであ

＊ナセル……飛行機や飛行船のエンジン室・積荷室・乗務室など。ここでは乗務室だろう。

＊重航空機……空気よりも重い航空機。飛行機・グライダー・ヘリコプターなど。反意語は「軽航空機」で、こちらは気球・飛行船などを指す。

る。というのも、「逆方向への」移動において、それはしばしば何年も「前の」イメージに出くわすからである。

しかし、与えられた一連の夢の中で、過去のイメージの、未来のイメージに対する比率を見積もるとなると、誤りが起こりがちである。それは、遠い過去の出来事に関連するイメージは、認識され、数え上げることができるからだ。対して、同様に遠い未来の出来事に関連するそれは、見分けることができない。そのゆえに、バランスを取る唯一の方法は、どちらの方向においても統計を数日間の範囲に制限することである。過去と未来にかなり等しく関係しているイメージ――友人や、日常の光景のそれのような――は、数えるべきではない。過去のもののように見えるイメージは、未来のもののように見えるそれと同様の厳密な検査を受けるべきである。偶然の一致は、どちらの方向にもまったく同じように有効に働くからである。

このようにして計算した結果、明らかに近未来に関連するイメージは、同様に明らかに近過去に関連するそれの数と、ほぼ同じであることが判明した。

＊　＊　＊

［**第三版への注釈**

上の太字のパラグラフは七*年前に書かれたものだが、前に述べたものよりもはるかに説得力があり、はるかに単純な統計的実験の輪郭を自分が素描していたことに、当時の私が気づいていないことに驚く。それはずっと大規模に行われる必要があるだろう。しかし、それがなされれば、存在すると推定される予知能力が個人個人に分配されている可能性が高いということの、非常に確実な証拠を提供することになるだろう。さらに、もしその規模が十分に大きければ、それは予見が**事実**であるということについて、反駁（はんばく）できない科学的証拠さえ提示するかもしれない。しかしながら、一九三二年になるまで、こういうことすべてが私には分からなかった。それから私は、この方針ですぐに小規模な実験に取りかかった。その結果は、新しい夢の理論を圧倒的に支持するものであった。それらはこの本の付録に掲載してある］

＊七年前……本書の初版は一九二七年、第三版は七年後の一九三四年出版である。

第十三章

なぜ夢の中だけなのか？　それはあらゆる進捗を阻む問いであった。時間というものを余すところなく存在するような何かに変えることを可能にするすべての解答が、現実に先行するイメージは、睡眠中とまったく同じくらい覚醒中も観察可能であるはずだ、と裁定を下していた。それなら、なぜ夢の中だけなのか？

私がその質問にはまり込み、**論点先取**に陥っていると気づくまで、どれほど長い年月が経過したかを告白するのには、まことに忸怩（じくじ）たるものがある。しかしながら、それを悟った瞬間、私はその問題の実験へと踏み出した。

少し考えて浮かんだのは、覚醒時の実験に取りかかるための最もシンプルな方法とは、続く数分以内に読むつもりの本を取り、そのタイトルを決然と考え――その未来の読書で出会いそうなものが何であれ、それらと関連的繋がりがあるはずの観念から始めるためである――、それから単純な連想によって心に浮かぶイメージの断片を待つといったものであろう、ということであった。

過去に関係していると認められたすべてのイメージを直ちに拒否することによって、

明らかに多くの時間を節約できる。また、覚醒して分別をわきまえている間にイメージが知覚されるので、その記憶については、それが睡眠中に形成されるときよりも自分の記憶をより当てにすることができ、それによって膨大な量の執筆を節約することも可能となる。それぞれのイメージは簡単なメモで十分であろう。

最初の実験は、大成功であった――自分がその本を以前読んだことがあったと気づくまでは。

しかしながら、覚醒時の心は、自分の記憶から逃れようとすると途方もない困難を経験する、ということが示されたので、興味深くはあった。私は過去のイメージを拒絶すること、および比較的空っぽな心で再び始めることに、はるかに時間を費やした。

その（すでに読んだ）本に関連した事柄を別にすれば、私はわずかな思考しか得られず、そのほとんどはロンドンと、諸クラブの外部と内部に関するものだった。唯一の例外は、どこからともなく自分の心に入り込んできたように思える**「ウッドナイフ」**という単語であった。少し内省してみたところ、自分の人生でそのような語に出くわしたことはないと確信するに至ったので、私はそれをメモしておいた。

その二、三日後、私はまったく思いがけなくロンドンに移転した。到着すると、私は自分のクラブに行ってみたが、さしあたりしておいた方がよいことは何もなかった

ので、図書館に赴き、新刊の小説を選び出して二度目の実験を試みた。結果は――皆無。十五分で私は八つだけイメージを得たが、それらは明らかに連想ネットワークの半分である「過去」には属していなかった。その八つのうちの一つは、オーストラリアでの**カンガルー狩り**に関係していた――跳躍する動物の後をあたふたと追いかけている騎手たちと猟犬たち。もう一つは**「イッカク」**という単語から成っていた。その本の中にはこれと適合するものは何もなく、やがて私はそれを放り出した。

それから私は小さな奥の図書室に足を踏み入れたが、そこはうたた寝をするのに良い場所で、私は快適な肘掛け椅子を選び、体裁のため、別の本を備えておくことにした――R・F・バートンの『剣の本』の真ん中あたりを開いて。

すぐに古代の短剣の小さな写真に目が留まったが、その下には**「ナイフ（木製）」**と書かれていた。その瞬間、私は座り直し、その本の拾い読みを始め、しばらくしてから一一ページに戻った。そこで私は、イッカクの角の言及に出くわした。それを読むうち、私は次のページにこんな語句があるのに気づいた。**「『老人』カンガルーは、強力な後ろ脚の長い爪で、たくさんの忠実な猟犬の腹をかっさばいた」**

そのとき、決定的なことは何もなかったが、それはまさに夢の実験の間じゅう得られ続ける、示唆に富むけれどもあやふやなものの一種にほかならず、その一方で決め

手となる結果が待たれているものであった。それゆえ、私は進むことを推奨されていた。

次に私はフォン・フッテン男爵夫人の本、『ジュリア』で試してみた。結果は――素材ノート四分の一枚分、その中で合致する唯一のものは**「ピンクの家」**、その本には**「ピンクの家々」**への言及がある（不十分）。

アーノルド・ベネットの『ライシマン・ステップス』が次の実験に役立った。私はわずか三行分の素材しか得られなかったが、それはこんな語句を含んでいた。**「私には言う資格がある」**。その本を開くや否や、私は最初のパラグラフに次の語句があることに気づいた。**「あの男自身には明らかに言う資格がある」**

次はメイスンの『矢の家』で試みた。ここで私は手順を変更した。最初に本を開き、ほかのどのページも見ないよう気を付けつつ、登場人物の一人の名前を見つけるのだ。物語の多くの出来事に密接に関連して現れやすい名前は、単に本のタイトルを考えた場合よりも優れた関連的繋がりを提供してくれるように思われた。

現在の読者が『矢の家』をご存じかどうかは知らないが、もしご存じないのなら、たとえ科学のためであっても、私がここで一流の探偵小説の楽しみを台無しにしてしまうのはどうにも気が進まない。そこで私は、もつれた状況全体の中心の結び目――プロット全体の決め手となるもの――が、**時計が十時半を指している**ことであると言

うだけにとどめたい。しかしながら、この特徴は、本の半ばまでは物語に入ってこない。

私が開いたページから関連的繋がりとして選んだ登場人物は、探偵の捜査にずっと同行していた。その人物に注意を集中した結果、見えてきて注目した最初のイメージは、**時計が十時半を指している**ということだったのだ。

ダンセイニ卿の本『エルフランドの王女』では、**「暗い海を見渡す水晶の長い崖。その海の上を舞う蛍たち」**を得た。なかなか良い夜景の描写が本の中に叙述されていて、そこでは長い水晶の崖が、霧に覆われた平原を見下ろし、その上をエルフランドの光が踊ったり、進んだり、後退したりしているのだ。

次に私はスネイスの本を試し、ヒロインの名前を関連的繋がりとして取り上げた。ここで私は完全に失敗した。しかし、この実験の最中に、私はかなり奇異なイメージを得た。

それは、完全に質素でまっすぐな、中棒（なかぼう）の細い延長にすぎないハンドルと、その中棒は先端の石突きに突き出た部分とほとんど同じ外観と寸法である、傘のそれであった。この傘は畳まれており、ちょうどピカデリー・ホテルの前に、**逆さまに、歩道にハンドルを接した**状態で、支えもなく立っていた。

翌日私は、その道を偶然バスで通りかかった。ホテルに着く直前、道のホテル側の

歩道を同じ方向に歩いている、極めて風変わりな人影が目に入った。それは老いた女性で、酔狂な、最初期のヴィクトリア朝風の黒服やらポーク・ボンネットやらを身に着けていた。彼女は、ハンドルが中棒の、質素で細くて磨かれていない延長にすぎず、その中棒は先端の石突きに突き出た部分とほとんど同じ外観と寸法である傘を持っていた。彼女はこの傘を――もちろん畳んだまま――杖として使っており、それを巡礼の杖のように握っていた。しかし、彼女はそれを**逆さに**持っていた。彼女は先端の石突きを握り、**歩道にハンドルを**強く突きながらホテルの方へと歩いていった。

生まれてこの方、傘をそのような方法で使う者を私が見たことがなかったことは、言うまでもない。

＊　＊　＊

これらの実験は、作業に安定した注意を向けられれば、起きているときにも、眠っているときとまったく同じくらい容易に「効果」を観察できることを示してくれた。しかし、注意を安定して保つのは容易なことではない。それがどんな特別な能力も要求しないのは事実だが、想像力をコントロールするのにかなりの修練が要求され

る。このゆえに、単に「効果」の存在に関して納得することを望んでいる人にとっては、覚醒時の試みよりもむしろ夢を記録する実験の方をお勧めすることになる。

しかし、問題を**研究**するためには、覚醒時の経験にはほかとは違う価値がある。心がしている多くのことに従うことができるからである。また、事を複雑にする夢の物語が存在しないということもある。

自分の場合、過去の知識と未来の知識を分ける**障壁**があるとして、主としてそれを探す目的でこの実験を用いた。そして、奇妙なのは、そんな障壁などまったくないように思われることだった。明白な過去の思考すべてを阻止しさえすれば、未来は切れ切れのひらめきの中で明らかになるのだろう（というのは、その手順がどんなに困難で面倒であったとしても、最終的にはそうなるものだからである）。とはいえ、過去から未来への「記憶列」を追跡しようとすると、抵抗する障壁よりもむしろ絶対的な空白が現れる。さらには（これは別の実験で発見されたことだが）、もし注意に対し、検討中のイメージから引き続き**明白に**関連している別のものに移ることを許したならば、いわばネットワークの「過去の」部分に留まってしまうのだ。そこが、注意が完全に気楽でいられる本拠地なのである。そこでは、関連イメージが素早く容易に連続して別のものに続き、注意が目立った努力も疲労もなく走り続けている。

注意に境界線をうっかり踏み越えさせるのは、最後のイメージと明白に関連しているものを拒絶し、見たところ**切れ切れ**のものがその代わりになるまで待つことによってのみ可能になるのである。

第十四章

説明されるべきもう一つの夢が残っている。たぶん、完全に決定的ではないかもしれないが、真剣に考慮に入れなければならないくらいそれに非常に近い。それに、もしそれが本当に未来に関連しているのならば、当時私がたまたま好んでいた解決策にあるいは当てはまらない可能性があったため、結果、その方針に従事することを放棄し、以前の理論に戻ることになった。後で分かったことだが、これはまったく幸運であった。

その夢を見た翌日、私は、服を着ながら、学校時代の長い記憶列をたどることに従事していた――完全に論理的な順序で、一匹の大蜂（おおばち）との珍事の記憶を導いた記憶列である。少年時代の私はその昆虫を恐れていたので、そいつと同じ部屋にいるのはほとんど無理だと思った。私の恐怖を想像してみてほしいのだが、そのとき、部屋の窓を開けて食事をしている間に大きな蜂が侵入し、私の方に飛んできて、首に止まったかと思うとイートンカラーの内側深くを這（は）い回り始めたのだ。私はテーブルクロスと同じくらいまっ白になって座っていたが、ある先生が私に、まったく無駄なことなのだ

が、動かないよう厳命した。今日に至るまで、私は、あの昆虫の、柔らかくかすかに感じられる徘徊の恐ろしい感覚を思い出すことができる。そして四十四年後のその朝、思考の列が私をこの人生初期の頃の記憶へと誘ったとき、私はあの這い回る足の感触を思い出そうとしてみた。それをしながら、私はたまたま髪をとかしていた。櫛が頭頂部の特定の場所を捉えると、たちまち私の心に昨夜の夢が甦ってきた。私は、頭皮のちょうどその位置で髪に引っかかっている何かを手で調べ、**大蜂がそこを這い回っている**ことを確信し、そいつを取り除くために仲間を呼ぶ、という夢を見ていたのだ。

さて、これが予見的な夢であったとすると――「効果」の例であったとすると――、考慮すべき次の事実がある。

頭皮に当たる櫛の感覚的な印象と、大蜂の足の記憶イメージの、意識への同時提示は、「接触」によって関連を形成するプロセスの十分簡単な例であった。そして、**その関連が形成される前に**、それは統合の形で夢の中に提示されたわけである。

経験の、非常に見事な混合である。

第四部　時間の持続と時間の流れ

第十五章

説明を探し始める前に、説明しなければならないのは正確には何なのかについて、手短に、わずかでも言及しておいた方がよさそうだ。

第一に、もちろん「効果」それ自体がある――提示が、時間的に無秩序に見えること。日記に記録されるような経験の実際の順序は、このように実行される。

a′　Aの前提示
a″　a′の再提示（記憶）
A　提示
a　Aの再提示

前章に書いた夢によって与えられた証拠を受け入れると、問題はその点において、より複雑になる。上のリストのAは、あたかも**複数の**提示の複合体のように見える。

第二に考察すべきは、次のことである。

未来の経験のイメージを観察した結果として、実験者は鉛筆と紙を取って、観察された前イメージの詳細を書き留めるか、あるいはスケッチさえする。そうすることで、その者は一定の物理的行為を行っている。**しかしそれは、彼がその前イメージを観察しなかったならば、決して実行されなかったであろう行為である。**言い換えれば、彼は、我々が「意識の自動装置」または物質主義的理論の背景として仮定する、その機械的事象の連続に干渉しているのだ。

これは公然たる「干渉」である。しかし、それはそれ以上の何かを含んでいる。**これら未来の出来事は、いずれにしても前提示として経験されるのに十分なほど現実的である。それでも——今見たように、観察者は、前観察の結果として自分の一連の行動を変えることができるので——、理論上、それらは起こることを妨げられるかもしれない出来事なのである。それなら、それらは部分的にしか現実ではないと言うべきだろうか？——例えば、過去の出来事よりも現実的でないと？　それは、我々の説明が答えなければならないもう一つの疑問である。***

＊（原注）……もちろんこれは、予言の概念に対する古典的な反論である。

そのうえ、観察者が脳の出来事の過程に干渉するというこの能力は、「自由意志」の問題を持ち込むことになる。解決策では、その点について満足のいく発言をしなければならないだろう。

最後に、説明が、心理学と精神物理学の既知の事実と矛盾しないことが極めて重要である。そして、それらの事実の中には、許容できる推測の範囲を大きく制限するものがある。心理的な面では、――第十三章で扱った――記憶の「列」は「未来」の中を通るという事実がある。それは「現在」で終わるのだ。精神物理学的な面では、並行性の通常の証拠に含まれるすべてのものがあり、特に、脳震盪が最近形成された記憶を破壊するか、麻痺させるという既知の事実がある。疑う余地はないが、ここには単なる「運動習性」以上のものがある。そのような直前の出来事に関する患者の心は、完全な心理的空白であるように思われる。

第十六章

ジョーンズにとっては未来にあることが、ブラウンにとっては現在かもしれないという意味で、相対性理論が時間において「先を見ること」を認めていることは注目に値する。しかし、ジョーンズの遠い未来の出来事が、もっと近い未来の出来事の一日か二日前にジョーンズに現れるということは認めていない。そして、それが我々の問題なのである。

＊　＊　＊

物質的な記録が刻まれているものに関する限り、その記録は**過去**だけを指標するものであることには留意しておかなければならない。ある瞬間に射撃の標的を調べたときに、その隅に丸い穴が空いていることに気づいたなら、弾丸がそのポイントを通過したと推測できる。しかし、その標的は、別の穴がその中のどの位置に現れようとしているかの指標を提供してはくれない――例えば、円の真ん中から半インチの位置、

などといった。あなたがもし最上級の知性のようなものを獲得しているならば、検査の瞬間に宇宙のその場所で起こっていたあらゆる機械的運動への完全な知識から、弾丸が間もなく標的円の、問題のポイントを撃ち抜くだろうと推測できることは事実である。しかし、それは問題を混乱させるだけだ。それは、我々が考えている指標に、**外部の**多くの指標を導入することになる――その一つは、標的の状態である。その状態は、空こうとしている穴に関する指標を提供してはくれない。それはあまりにも無口なため、予言を成し遂げる際、あなたは現在の損傷あるいは無損傷の問題を完全に考慮から除外することになるだろう。それは決定に影響を及ぼすことはできないのだ。**標的**は、それ自身の未来の「記録」を何も含んでいない――実際には、あなたが使う指標は、その表面**以外の**あらゆる場所にある。とはいえ、標的に空いた穴は、その標的の過去の歴史の記録である。弾丸の過去の衝撃を推測するのはその記録からであって、時間のやや早い瞬間に宇宙のその場所全体にわたって確かに起こっていたことの知識からではないのである。

標的の穴は、弾丸が取るであろう方向の証拠であるという意味での未来の指標であり、同じように標的の後ろの安土（あずち）に起こるであろうことの指標でもある。しかし、それらの穴は標的それ自身の未来の穴の指標ではない。

現在、脳は物質的な器官であり、ある瞬間の脳の状態は、標的の状態が次の弾丸がどこに当たるのか、あるいはそもそも新しい弾丸が当たるかどうかの指標ではないのと同じく、脳の外の世界が未来のその脳に提示するであろうものの指標ではないのである。

第十七章

「普通の人」の形而上学を笑うことは、安全であるとは言い切れない。大衆の言語の中に正式に位置を占めるようになった基本理念というものは、完全に馬鹿げているものでも不当なものでもあり得ないのだ。というのも、そんなふうに認められているものは、少なくとも、問題となっている概念が何世紀にもわたる試練に耐え、言論が進んだ場所ならどこであれ躊躇ない受容が与えられてきたことを意味するからである。

そのうえ、普通の人とは、とどのつまりは**人類**のことであり――時間の最初の発見者のことである。科学がその存在観を得たのは彼から、ただ彼からだけだったのだ。

自分の発見の性質に関する彼の結論は、統合においてやや不確実であるにしても、細部にわたって断固としたものであったように思われる。彼の考えは、時間的な偶発事は**四次元の動き**を伴うというものであった。

もちろん彼は、それを四次元と**呼んだ**わけではないのだが――彼の語彙は、それをほとんど受け入れていなかった――、彼は完全にこう確信していた。

1　その時間は、「過去」と「未来」を分けられる長さを持っていたこと。

2　この長さは、彼が知るどんな空間にも広がっていなかったこと。それは南北でも東西でも上下でもない、その三つのいずれとも違う方向に伸びていた――すなわち第四の方向である。

3　過去も未来も観測可能ではなかったこと。観測可能な現象はすべて、その時間の長さ中の固有の「瞬間」――過去と未来を分ける瞬間――にある領域に見いだされ、その瞬間を彼は「現在」と呼んでいた。

4　この「現在」という観察領域は、時間の長さに沿ってやや奇妙なやり方で**動く**こと。その結果、未来の最初の出来事は現在になり、それから過去になる。過去はこのように絶えず増大している。彼はこの動きを、時間の「経過」と呼んだ。ここに注目に値する点がある――後でもっと十分に議論しなければならない点である。この最後のパラグラフを検討すると、その中の言葉の多くは**もう一つの**時間について言及しており、観察の「現在」領域の通過が起こるはずの時間範囲には言及していないことが分かるだろう。おそらくこれは、問題の語句を太字にしてこのパラグラフを繰り返すならば、より容易に理解されることになるだろう。

4　この「現在」という観察領域は、時間の長さに沿ってやや奇妙なやり方で**動く**こと。その結果、未来の**最初の**出来事は現在**になり**、**それから**過去になる。過去はこ

のように**絶えず増大している**。

時間の背後の時間といったようなものにこの言及を使用することは、時間の長さを通る**動き**という仮説で始めたことの妥当な結果である。時間内の動きは計測可能なはずだからである。移動要素が時間の長さに沿って同時に至る所にあるとしたら、それは移動していないのである。しかし、その動きを計測する時間は、もう一つの時間なのだ。そして、その第二の時間の「経過」は、第三の時間によって計測可能なはずである。こうして**無限に**続いてゆく。* 我々の発見者がそれ以上の分析を断念したのは、いわばあるものが別のものを取り巻いているような、この無限の時間列を漠然と垣間見たからにほかならない。

しかし、彼は二つの主たる概念に固執した――時間の長さと時間の動きである。そして彼は、これら二つの非常に実用的で有用な考えを完全に理解している仲間に伝えるための、特別なフレーズを造り出した。彼は「長い」時間と「短い」時間について話した（広い、または狭い時間ではなく）。彼は、「遠い」過去と「近い」未来に言及した。彼は言った。「明日が来るとき」、そして「私がしかじかの年齢に達するとき」と。彼は、より詩的な気分で、その時間が「飛び去り」、年が「過ぎ去った」と言明した。彼は「人生の旅」と、「日々の」生活について書いた。

彼は、いくつかの方法でこの時間の一般概念を象徴化した。おそらく、最も徹底的であったのは、ピアノ曲の楽譜においてであった。そこでは、ページを上下に伸びる寸法は空間を表し、そのように測定された間隔は楽器の鍵盤に沿った距離を表す。一方、ページを左右に横切って伸びる寸法は時間の長さを表し、そのように測定された間隔は音符の長さとそれらの間の休符を示す。しかし、それは象徴を完成させなかった。これまでのところ、そのページは、今日なら「時空連続体」と呼ぶべきものを表しているにすぎない。象徴を完成させるため、演奏者の視点がその時間次元モデルに沿って左から右に**移動**し、書かれた和音が、動いている「現在」を表しつつ、その移動点がそこに達するときに演奏される、ということが意図された。

別の例では、時間の次元が円の円周によって表され、その長さが時間の距離を表す部分に区切られている。だがそれだけでは、彼の時間の概念を伝えるには十分ではなかった。動いている「現在」がない。そこで彼は、その「現在」を表す指針を追加し、それを機械を用いて象徴的時間次元上を動くようにした。そのとき、そのからくり全体は、象徴のみならず、彼が想像したように、実際に動く時間のモデルであった。そ

＊（**原注**）……これはもちろん、それまでも指摘されていた――流れている時間についてのニュートンの考えに対する異議として。

れは極めて有用な装置であった。彼はそれを「時計」と呼んだ。

今あるのは、針のない時計の文字盤、あらゆる和音が一発の鳴り響く大音響で演奏されることを指示する楽譜、それに、どの部分も等しく七十年間の観察者の心に浮かんでいる時間の長さの概念だ。これら三つのことは、普通の人にとっては価値においてまったく同等なのである。

というのは、彼は、とても正当で、かなり厳然たる若干の理由を除き、時間が長さを持っているとは思っていなかった（あるいは時間が長さを持っているとは推測しなかった）からである。その理由は、決して隠されておらず、不明瞭でもない。我々は皆、現象が二通りの秩序で並べられていると知覚している。単に空間的に分離されているように見えるものと、**「連続している」**ように見えるものがある。その違いは「与えられて」いる。それは、あるのだ。それは我々に突きつける、どうするのか、どう考えればよいのか。我々は、ただ単にこの現象の**連続**のように見えるものを説明する試みの要（かなめ）として、時間は長さを持つと思っていたか、理解していたはずである。だから、時間の長さとは、移動される長さとして、我々が一秒ずつ、一時間ずつ、一年ずつその中を移動する次元として、例えば我々が現世の旅で諸対象物に遭遇するように、時間で分けられた出来事に次々と遭遇する次元として考えられるべきだ、ということ

もまた、等しくその試みの要であっただろう。最初の概念は、単一のそれとして現れたに違いない――移動される長さのそれとして。この複合体における二つの思考要素――時間の長さと時間の動き――が、互いに**完全に**離れていると見なされる何らかの解析値を持つかもしれないことは、かなり高度な類推力を要求する。

比較的近年になって初めて、普通の人が想像はしたけれども洗礼を受けてはいなかった四番目の次元が、空間の三つの次元のいずれかと同族である「本当の」四次元であることが判明するかもしれないということを思いつく者が現れたように思われる。ダランベール（一七五四）が、この考えを思いついた友人について書いている。*しかし、私が読んだうちでこの主題を扱った最も初期の論文は、C・H・ヒントンによる『第四の次元とは何か?』という題のモノグラフで、一八八七年に出版された。

＊**（原注）**……私は、この情報についてエドウィン・スロッソン氏に恩恵を受けている。フリッツ・パネト教授が私に、フェヒナーがミセア博士の名で書き、ヒントンのもの（以下に述べる）に先んじ、この後の図1に近い図を含む第四の次元としての時間の説明を、『四つの逆説』（一八四六）に載せて出版した、と教えてくれた。

過去・現在・未来が共存する「永遠の今」という概念は、東洋哲学にはありふれたものの一つであると思う。

「ヒントンは、ほぼ直立しているが、違う方向に傾斜している線が、すべて固い枠組みに繋がっていると想像される小さなモデル・システムを記述した。固定され、傾いた線を持つこの枠組みが、運動の方向に対して垂直に伸びている水平の流体面をゆっくりと下方に通過するならば、「そのシステムの直線の数に等しい、水平面を動く多くの点を見ることになるだろう」。固体の糸がその線の代わりに用いられたなら、これらの動く点（糸の断面）は、流体面に棲息し、その面を存在する全空間と捉えている想像上の二次元的存在にとっては、動いている物質の原子のように見えるだろう。同様の考察は、三次元空間を通過する四次元の固体糸の配置にもよく当てはまるであろう。「そのような考えが採用されたなら、我々は、**かつて発生したか、これから共存することになる**すべてがその中にあるような、途方もない全体を想像しなければならないだろう。そしてそれは、ゆっくり通過しつつ、**狭い空間**と**単独の瞬間**に限定されたこの明滅する我々の意識に、我々にとってはただ無秩序な変更と変遷でしかないものの記録を残す」。強調筆者」

幾何学的図形を思い描くことに慣れていない読者は、ヒントンの説明に従うのは少し難しいと感じるかもしれない。そのため、この概念をもっと単純な形で提示したり、

略図を用いてこれを図解したりするのもよい方法であろう。しかし、そうする前に、一般的な時間の図に関する説明に一言二言費やしても不都合はあるまい。

次元は、線ではない。ほかのすべての方向と**完全に異なる**のは、ものを測定することができる**方向**である。幾何学においては、我々は**「延長」**と呼ばれる基本的なもの――単純に無の正反対のもの――を測定している。もし我々が、それぞれほかのすべてとはまったく異なるように見える方向でそれを測定しようとするならば、それらの方向は、ほかのすべてのものに対してそれぞれが垂直に見えるはずであることが分かる。従って、もし我々が、南北を一方向（一次元）と見なすことをスタートとして選んだなら、東西は別の方向と考えることができるが、これは北へも南へもまったく動くことなく東西の距離を計り取ることができるからである。ほかの二方向を侵害することなく計測するための第三の方向は、上下である。もし時間に長さがあるなら――それは延長だ――、そのとき時間は第四の方向を我々に提供することになるが、それはすでに述べたどの方向にも動くことなく、時間に沿って計測することができるからである。第五の方向は……だが我々は今までのところ、その他の方向のための**名前**は持っていない。それでも理論的には、そのような方向は無限にあって、それぞれがほかの方向すべてと垂直となるであろう。数学者なら、それらのうちの十個を考えるこ

とくらいは造作もないことである。ところが我々では、一度に三つ以上を**思い描く**ことは不可能だ。我々の体と脳は、三次元以上で働くようにはできていない機械だからである。

図形を描くということになると、我々は我知らず、紙が伸びている方向の二次元の使用だけに制限してしまう――すなわち、上下と左右である。しかし、我々はこれら二つの次元を使って、任意の**いかなる**二つの次元――例えば第四と第五、あるいは第一と想像上の第百など――でも表すことができる。なぜなら、我々が表すことを選んだ二つの次元はどちらにしても、紙の二つの次元と全く同じ方向において互いに垂直になるはずだからである。従って、紙の一つの次元は時間を表し、別の次元は空間を表すと言うことができ、それからこの空間次元に対する本当の時間の関係を示す図を描くこともできるわけである。というのは、もし時間が本当に伸びて（長さを持って）いるならば、まさにその方法で、時間である一つの方向と空間である別の方向に伸びた平面に、その図が配置されることが可能になるだろうからだ。

しかし、空間の残りの二つの次元はどうなのか？　そう、その一つは紙の平面に垂直に突き出ていると考えられるかもしれず、もしそうしたければ、透視図で示されることさえあるかもしれない。もう一つはまったく示されず、想像することさえできな

い。単に、それが別の三つに対して垂直に伸びていると**考えられ**はずだ、と知っているだけである。しかし、もっと単純な時間図は、一次元または二次元を超える空間の考察を必要としない問題を扱う。

今の図において、紙の左右の次元が時間を表し、上下の次元が空間を表すと考えよう。読者の中に、次元を線と混同する人が出てしまう可能性を全面的に避けるため、地図作製者がコンパスの方位を示す小さな図を自分の地図の隅に置くように、図の隅に小さな次元指標を置くこ

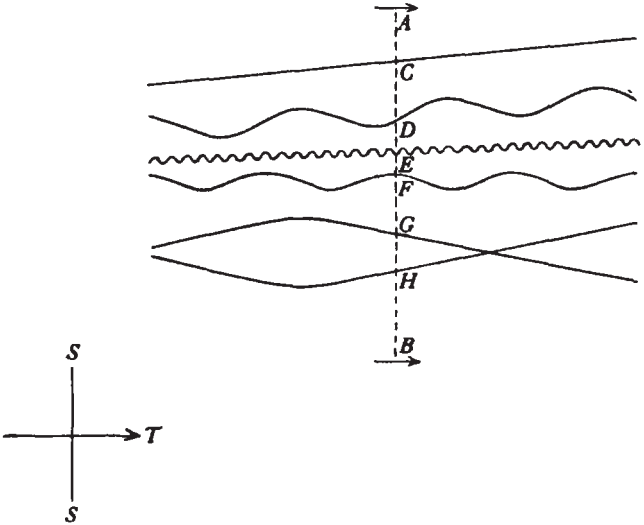


図 1

とを提案したい。時間はTで、空間はSで示される。

それから、ここに示すのはヒントンのアイディアで、二次元で描かれてはいるが、彼が考慮に入れたものよりもさらに多様な性質の線を伴うもので、モデル全体が垂直の代わりに水平に機能するよう配置されている。

実線は、時間内に伸びる（持続する）物質的な糸を表す。これらの線のいずれか一つを調べてみると、それが構成されている点が、時間のいろいろな瞬間（余白からのさまざまな距離）で、空間のいろいろな場所（ページ上のさまざまな高さ）に位置していることに気づくだろう。点線ABは、ヒントンが「流体面」と呼んだものの一部を表している（それ以外の部分は、紙に垂直に突き出していると想像することもできるだろうが、これはまったく不要である）。左下の小さな次元指標のうち、Tの方を向いている矢印は、ABが、一つあるいは別の方向に傾くことなく、時間の次元に沿ってまっすぐに動いていると見なされることを示している。動いている線の上下にある矢印は、ただこの考えを補強するためのものである。これらは、以下の図においては原則として省略される。

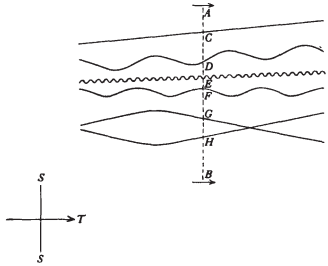


図1

もしＡＢが矢印のように移動するならば、ＣＤＥＦＧＨと交差している直線のわずかな部分は、ＡまたはＢのどちらかに向かって移動しているように見えるだろう――いわば、空間を移動しているように見えるのだ（ある紙の中にＡＢを表す細いスリットを切り、そのスリットがＡＢと平行になるようにその紙を図の上に置き、矢印の方向に紙をスライドさせれば、これらの外見上の動きをかなり明瞭に見ることができるだろう）。

観察範囲がこのようにＡＢに限定されている生物は、従って、動く粒子の小さな世界を認識するだろう。だがあなたや私のように、図全体をカバーする観察範囲を持つ者は、直線の**実際の小部分**が本当はページ上を移動しないことを理解している。起こっていることは、我々の目がＡＢの動きを追うのに従って、線の**断面**図が動くだけなのである。そして、我々にとってページ上を実際に動いているように見えるのは、線ＡＢだけなのだ。

そういうわけで、ヒントンの理論に従えば、時間の延長も空間のそれも見ることができる存在は、我々の三次元的世界の微粒子を、単なる四次元に伸びる固定物質的な

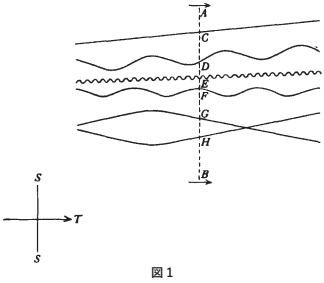


図1

糸の断面図と見なすだろうし、全宇宙で実際に動いた唯一のものは、我々が「瞬間的現在」と呼んでいる三次元の観察領域だったと考えることだろう。

ヒントンは、このように、過去と未来は「共存」しており、我々の変化の経験は、この時間の延長と、現在である「狭い空間と単独の瞬間」の間の相対運動によるものであると推測するのである。しかし彼は、そのような相対運動には**時間がかかる**はずだと指摘することは控えている。

この問題への貢献として、ヒントンの解説は、普通の人の漠然とした考えを慎重に解釈するうえで、物質によって演じられるべき役割を明確に示しているという点で、注目すべきものがある。ヒントンによれば、彼の「糸」によって例示されているように、物質は時間の次元内に**延長している**のである。

普通の人は、これまでのところ、自分の分析をきちんと行ったことはない。彼にとっては、何かが時間の中を動くということは必須であるように思われている。しかし、(a) 彼の三次元の観察領域が四次元物質の静止した世界を移動するシステムと、(b) 彼と三次元物質世界が空白を「揃って」一緒に動くシステムとの間には、たいへんな違いがあるということを、彼がかつて認識したという証拠はない。

後者の概念は、もちろん、まったく意味はない。それを受け入れることは、実際に

は大きな時間の誤謬を生ぜしめると言えそうである。そのような特徴のない千の次元を通る**全体的な**宇宙の動きでは、その宇宙で起こっていることにごくわずかな違いを生じることもあり得ない。それは、時間的な、あるいはそれ以外のいかなる現象も、説明することも明らかにすることもできない。変化も継続の経験もないだろうし、それらはその動きを想像しない限り、同じように明らかにはならないだろう。**そのような動きを考えることなく受け入れることができる概念からは、そのような動きの概念を敷衍（ふえん）したり抽象化したりすることもないだろう。**

占有されている時間――出来事から出来事へと自分が移動する次元――という自分の元々の概念から知らず知らず離れてしまうことを容認する人や、その代わりに空っぽの無益な連続体を自分が移動するという意味のない考えを受け入れることから始める人は、新しい考えの無意味さを認め、「時間のようなものはない」という決定を下す前に、自分の考えを非常に遠くまで推し進めることもほとんどないのである。

第十八章

ヒントンにとっては、時間次元と複数の空間次元との間に質的な違いはなかった。彼は拡張した四つの次元から**始めた**が、そのすべては基本的には等しいものであり、また彼の問題は、そのうちの一つがほかのすべてから特に区別されると人類が見なす理由を発見することであった。彼は、三次元の観察領域が四次元のブロックを上に移動するという考えに答えを見いだした。これは、観察者たちの体を表す固体の糸の束が、次元の延長全体においてたまたまどんな方向に傾こうとも、見かけの時間の次元をあらゆる観察者にとって同じものにしたことが注目されよう。彼の移動領域は、従って、個々の観察者の存在とは無関係に存在していた宇宙の構成要素ということになるであろう。

H・G・ウェルズ氏は少し異なった見方をしている。七年後に出版された『タイム・マシン』において、彼は、小説の登場人物の一人の口を通して、もしそれまであったとしてもそれ以上のものはめったになかったような明晰さと簡素さで、自分の主張を述べた。

彼は、時間を第四の次元と見なす**必要性**を主張することから始める（ヒントンはこれに気づかなかった）。それは、物質が測定される**はずの**方向である。

「瞬間的な立方体のようなものはあり得ません……どんな実体にも長さ、幅、厚さ、それに……期間があるはずです」

このように、彼にとっては、ヒントン同様、物質は時間内に延長（持続）していることになる。

「例えば、ここに八歳の男性の肖像があります。こちらは十五歳、こちらは十七歳、こちらは二十三歳、という具合です。これらは皆、明らかに、言うなれば断面図です。固定され改変不可能な四次元の存在の、三次元的表現というわけです」

（問題になっている肖像画は、彫刻された、三次元的な形状である必要があっただろう。しかし、意味しているところは明らかだ）

彼は、時間の次元と空間の次元の間に質的な違いはないという事実を繰り返し強調した。観察者によってなされた明らかな区別はあるが、観察者を除外した場合はそのような区別はない。

「実際には四つの次元があり、三つは我々が空間の三平面と呼ぶもので、四つ目が時間です。ところが、前者と後者の間に、実在しない区別をする傾向があるのです。な

ぜなら、我々の意識が、人生の最初から終わりまで、後者に沿って断続的に動くということが起こるからです」

少し後の方で、彼は時間を動く要素を「我々の心的存在たち」と呼んでいる。複数形の使用に注意してほしい。さまざまな観察者間の空間を満たす包括的な運動の**層**はないけれども、多数の「心的存在」は存在し、それは各観察者に一人ずついて、どの次元が時間なのかを特定するのはそれらの動きだけである。*

さて、その記述は、ウェルズがはっきりとは言及しなかったことを暗示している。そのような心的存在のそれぞれは、対応する観察者の脳の中心あるいは周辺に位置し、ゆえにその移動に当たっては、その脳を表すどんな四次元的延長の固定線の束も必ずたどるであろう。よって、もし観察者が時間と空間を不自然に区別する原因となったのが「心的存在」の移動であるのなら、それぞれの観察者は、時間を、**自分の体の線が延長された方向に伸びているもの**と見なしているだろう。すると、彼の体の線は、彼にとってはこの時間の次元をまっすぐに走っているように思われ、その方向や空間の方向を曲げることはないということになるだろう――すなわち、列車の中に座って、（彼がそれについて推測し始めるまでは）自分が静止しているように思われるだろう。

さらに、異なる観察者たちの体の線は平行ではない。我々の体は、空間で互いに一

定の距離を保って離れているわけではない。それゆえに、異なる観察者たちは、時間と空間の次元の正しい方向についてはわずかに異なる意見を持っているだろう。

残りの部分については、我々は、ウェルズがヒントンのように、時間内で動くすべてのものはその運動に時間がかかるはずだということに触れ損なったことに気づくかもしれない。

＊　＊　＊

相対性理論家は、十九世紀の時間次元主義者の手順を正確に逆転させた。ある光学的実験におけるある明らかな異常が、アインシュタインを、歴史上初めて、異なる個人が（時計によって知らされる）時間と（ものさしによって測られる）空間の両方について異なる見解を持つことができるという考えだけでなく、そのような見識はいずれも等しく有効だろうという宣言へと導いた。このことから、ミンコフスキーは、次

＊**（原注）**……続く物語では、主人公は、そのような理論が許すのよりもかなり大きな幾何学的自由度を与えられている。それでも、それは――読者にとっては――不平よりもむしろ喜びの種である。

元間の質的な区別はないけれども、それぞれの観察者は、時間を、自分の体の線の方向に、見たところまっすぐに伸びていると見なしている、といった明らかな区別だけはある、四次元的延長の存在を推論した。

しかし、アインシュタインの理論はさらなる推測を含んでいる。それは不幸なことに、普通の人の理解力を大きく超えた領域へと問題を移し去ってしまうものである。この「時空」の延長は、「平坦」ではなく「曲がっている」と言われているのだ。

時間的に拡張された対象の延長は、相対性理論では通常「世界線」と呼ばれる。が、それらは時に「軌跡」と呼ばれることもある。「個人とは」エディントン教授は言う、*「大きく引き延ばされた形の四次元的対象である。普通の言葉で言うならば、彼は時間における大きな延長と空間におけるわずかな延長を持つ、となる。実際には、彼は線で表される――世界を通る彼の軌跡で」。ほかの点では極めて完全な言説に、最後の部分を付け加えたことは、読者には「両賭けをした」ように見えるかもしれない――いったいどうすればその線が観察者と観察者の経路の両方になれると？　しかし、エディントンは、もう少し先で、彼自身の見解をはっきりさせるのに骨を折っている。（おそらく物理的な）観察者の「軌跡」は、その観察者**「自身」**なのである。強調はエディントン自身によるものだ。そして、同じページの下の方で、彼はもう一度言っている。

「自然の肉体は、空間だけでなく時間においても延長しており、従って四次元的である」

これは十分に分かりやすいと思われる。そのように固定された、客観的な線のシステムを見つめている特定の観察者にとっては、空間を表す次元内の動きの外観は、ヒントンのモデルのように、観察者の「軌跡」に沿った、見かけ上時間を表す次元に垂直な観察領域の実際運動によって生じさせることができる。しかし、その種のことの提案は、この時間を移動する観察領域が**精神的な**観察者に属することをほのめかすことになるだろう。物理的な観察者はすでに移動した「軌跡」として定義されるからである。

今、相対性理論家には、提示するのが非常に困難な問題があって、彼は確かに精神的な観察者という重荷で不利な立場に立たされることは望んでいない。その一方で、我々が連続して出来事を観察するという事実を、自分が無視しているように思われることも望んでいない。どっちつかずが意図されているように見える記述に彼を駆り立てるのは、この板挟みなのである。「観察者」は自分の「軌跡」に沿って動くと言われ、そして読者は自分がそこから好きなことを推論するに任される。

ところが残念なことに、読者は、「観察者」とは通常は無機あるいは有機の物理的

＊（原注）……『空間・時間・重力』五十七ページ。

装置を意味する、という推測を許されてきた。だから、彼は、「軌跡」はただ相対性理論家が言う「時空」の特有な歪みによって形成されるのだ、また観察者の肉体という物理的要素は前後が空のままの軌跡を移動するのだ、というふうに理解しようとしているとしても、ほとんど非難されるいわれはない。

しかしながら、もし彼が、これが相対論の教えであると主張するならば、彼は、それに沿って動いている想像上の三次元的物質の物理的性質すべてを説明する程度の、またそういう意味での現実性を持つ軌跡が、その断面のそれぞれで、想像上の物質自体と**物理的に区別が付かない**だろう、と言われることになる。物理的には、その軌跡は時間内に実際に伸びる物質**である**だろう。

そして、それがこの厄介ごとの急所である。軌跡に沿って動くと正しく見なされるものは、軌跡それ自体の固定部とは異なるものであるべきであろう。

しかし、相対性理論では、一つの極めて重大な事柄については完全に明らかになっている。**時間の次元は、どんな観察者にとっても、単に彼自身の世界線が四次元連続体を通ってたまたま伸びている次元である。**

第十九章

今我々は、二つの提案を受け入れることが正当であろうと思う。

1　脳は、我々が過去、関心を向けられた経験の記憶痕跡を含んでいること。

この結論からは逃れられないように思われる。脳震盪は、関係する記憶を、言葉やその他の方法で表現する能力を破壊するだけではない。記憶自体が何らかの方法で影響を受けるのであって、というのも、その記憶に関する限り、患者は自分の心が完全に空白であるように思えるからである。そして、その生理学的証拠が、そのような痕跡がどんな場合でも形成されるはずだということ、また破壊可能であるはずだということであるので、我々は事実について別の説明を探し求める理由はない。

2　時間は、年、日、分などに分割可能な長さを――各瞬間が二つの隣接する瞬間の間にある長さを――出来事が置かれている長さを持つものとして扱われることがあるということ。

これは古典的な概念である。そして、これを言うことは、時間がその長さを測定できる第四の方向であると言うことに等しい――拡張した第四の次元である。

しかしながら、我々は、単に一般的な見解を具体化しているという理由で提案2を受け入れているわけではない。それが提案1から論理的に導かれるからである。というのも、我々は、過去のものである脳刺激とずっと後の時期の同じような脳刺激は同一の出来事ではなく、間に介在する出来事によって分離された二つの出来事であると認識しなければならないと感じるからだ。我々は、その分離が何か四次元的な「記憶列」の中にあると想像したかもしれない。しかし、提案1はその考えを排除する。我々は、記憶とは脳の古い痕跡の再刺激にすぎないという概念から始める。それゆえに、我々は、脳の二つの出来事の分離は時間の中にあるものと見なさなければならない。*

ついでに言えば、これは我々の時間の長さが非占有状態ではないことを意味する。そこには物理的形態が含まれている。私は受け入れたが、もしも読者が、時間の長さがそのような出来事によって占有されていると見なさない限り、長さを持つものとしての時間の概念はまったく意味がない、という十七章での議論にまだ満足していないのであれば、この議論は有益であっただろう。さらに、もし時間に長さがあるのなら、時間における何かの持続は、ウェルズが指摘したように、その長さの延長を意味するはずである。

＊　＊　＊

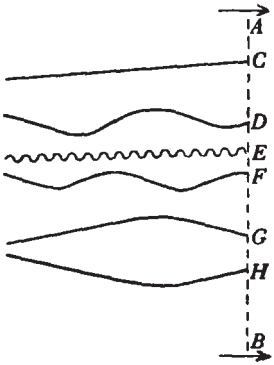
ここで我々は、時間が長さを持つという考えが、分析装置なのかそれとも「現実」の認識なのかについての問題をわざわざ討論する必要はない、ということに気づくかもしれない。分析装置は、その支援がなければ隠されたままであろう明白な違いや関係を表現するための道具でしかない。しかし、これらの関係がすでにあり、明るみに出されるのを待っているのでない限り、分析装置は今のところ何も表すことができない。そうした考案品が、それ自身の言語で現象を記述するかもしれないのは事実であるが――温度計の水銀柱が高さの区分によって温度を示すように、あるいは数学者がxとyによって変数を表すように――、それは問題には影響しない。分析装置が表すものは皆、裏に潜む現実に対応する特質を持っていなければならない。そしてそれはすべて、科学者が意識する必要があることである。

しかしながら、読者が、採用する気のなかった立場に引き込まれつつあるという疑いを持たないようにするために、このことを指摘しておいてもよさそうだ。彼が時間に関して自問する、すべての実際的で日常的な疑問は、時間が長さを持ち、物質界の

＊（原注）……本章の第三節にあるベルクソン哲学についての批判も参照。

状態がその長さに沿って配置され、彼はそれらの出来事を連続して経験する、という仮定を具体化している疑問である。従って、その疑問の答えは、その仮定の観点から**与えられなければならない。**

「現段階で、罠の性質を帯びている概念に対して読者に警告しておくこともまた賢明であろう。こういう疑問が生じるかもしれない。「なぜ、古今すべての時間次元主義者は、物理的な『世界線』を、図1のABで表される『現在の瞬間』の**先に**伸びているものとして表すのか？　なぜ図2に示すように図を修正し、世界



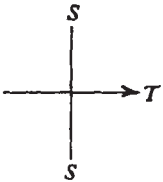


図2

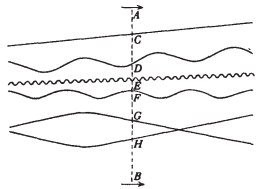


図1

線が時間内に**増大していく**と言おうとしないのか？」

その答えは、そうした概念は仮説体系の科学法則に反する、ということだ。その法則は、問題を考えるとき、事実をカバーするのに厳密に必要とされるのよりも多くの仮説を導入することを禁じている。不要な仮説は**不当な**仮説だからである。

この場合に法則がどのように適用されるかを考えてほしい。図3は、時間の長さについての明確な概念を導入するよりも前に考慮されるべき事実を表している。これは、粒子が動き回っている空間の世界を表している。

この図で我々が得るのは――

1　物理的対象C、D、E、F、G、H。

2　一種類だけの活動――空間を表す次元におけるこれら対象の上下の動き。しかし、これらの動きは速度が変化するかもしれない――理解したり定義したりするのが非

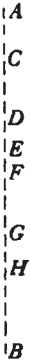


図3

常に難しいと感じられる特徴だ。事実我々は、数学の法則によって決まるような変化する速度を表すことができるようになるまで、ガリレオやニュートンの時代まで待たなければならなかった。

今、時間の次元を導入すると、我々は図1を得る（初出一六三ページ参照）。物理的対象が、図3よりも一次元大きい。

これと比べると、図2で得られるのは以下のことである。

物理的対象が、これもまた図3よりも一次元大きい。しかし、それに加えて――**これが不要な追加分なのだが**――これら拡張された対象は、**創造**の工程によって永続的

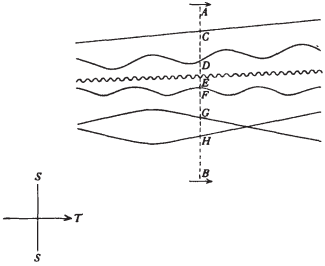


図1

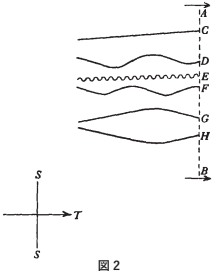


図2

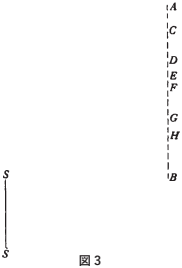


図3

に加えられるものと考えなければならない、ということになる。これは非常に奇妙な提案であり、まったく何も証拠がないものである。

動きが示される方向に目を向けると、図1で得られるのは以下のことである。

ここでもまだ**一**種類の活動しかない――時間の次元におけるＡＢの動きである。

しかしながら、これから得るものは大きかった。我々は運動を**一般化する**のに成功したのだ（数学的・哲学的見地からは非常に重要なことである）。図3の変化する往復運動のすべてを取り除き、その代わりに時間の次元におけるＡＢという、単一で、単純で、均一の運動に置き換えたわけである。

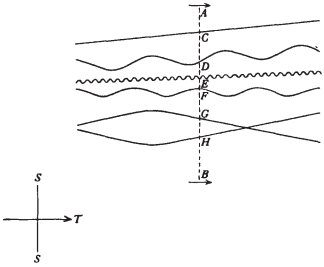


図1

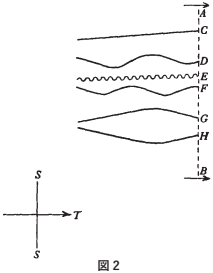


図2

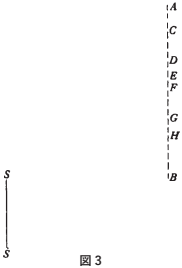


図3

これに比べると、図2で得られるのは以下のことである。

時間の次元の活動（図1のような）。世界線は、時間の次元での均一の増大によって構築されるものだからである。

しかし、依然として空間の次元での活動もある（図3のような）。世界線は、時間の次元同様、空間の次元での増大によっても構築されるものだからである。

さらに、図3の動きの元の複雑さも依然としてある。空間の次元での増大は、さまざまな速度を持つものだからである。

従って、図1は、事実をカバーするのに必要な最小限の仮説を含んでいると同時に、

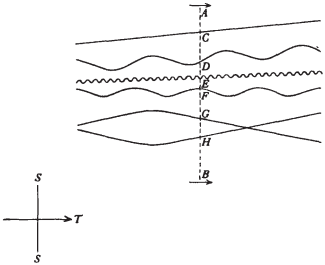


図1

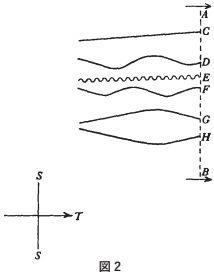


図2

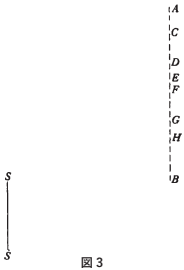


図3

付随的に動きをその最も単純な様相にまで縮小しているのである。図2は、付加的な、そして完全に不必要な仮説を持ち込む――もっと言えば、運動の考えを単純化する代わりに、そこにさらなる複雑さを加える仮説、それ自身極めて疑わしい性質の仮説を持ち込んでしまうわけである。

そういうわけで、時間の重要性を分析したいかしたくないかに応じて、我々の選択肢は図3と図1ということになる。

もし私がこの章を、特にベルグソン哲学の学生に向けられた章で締めくくったなら、読者はおそらく私を許してくれるだろう。

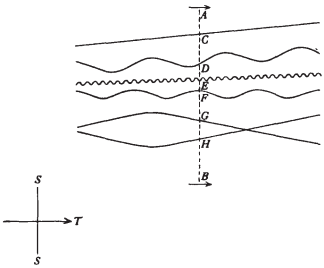


図1

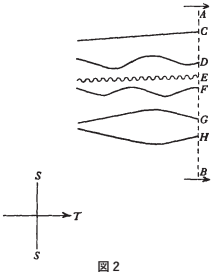


図2

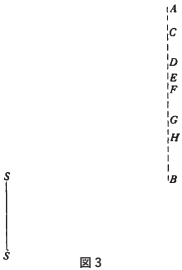


図3

＊　＊　＊

図2は、ヒントンのモノグラフが発表された翌年に出版された、アンリ・ベルクソン教授のエッセイに最終的に採用された時間の概念を、この上ない正確さで表しているように思われる。その日付は、時間の四次元理論が当時かなり注目を引いていたことを示すものとして興味深い。

ベルクソンは、想像上の拡張された四次元を考察することから始め――空間の三つと「持続」の一つ――、この最後の名前は偽物だと主張する。それにより、事の是非はさておき、読者は、「持続」が時間を意味するのだと、そしてベルクソンが時間の次元の装置を使うことなく図3の分析を試み

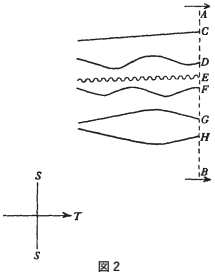


図2

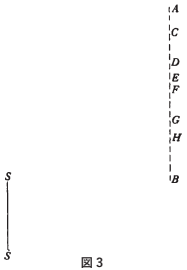


図3

ているのだと、思い込みがちである。

彼は、「純粋持続」の瞬間瞬間は、互いに互いの外にあるものではなく、たぶん、印刷屋が写真を重ねるように、「重ね合わされている」と考える。

しかしながら、「純粋持続」は「時間」ではないことが、間もなく明らかになる。「要するに」彼は言う、「自由に関する説明に対するすべての要求は、それと気づかれることなく、次のような問いに帰着する。『時間は空間によって十分に表され得るだろうか？』これに対して我々（すなわちベルクソン教授）は答える。『流れ去った時間を問題にするならば、はい。流れつつある時間について言うのなら、いいえ』と」*

そしてこれは、明らかに図2に表されているものだ。

このように「純粋持続」では、普通の人の「現在」と、ヒントンの動く「狭い空間と単独の瞬間」――図

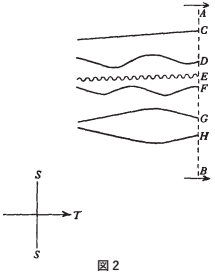


図2

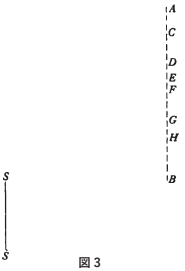


図3

＊（原注）……『時間と自由』二二一ページ。

2の線AB――との同一視が可能であるように思われる。

しかし、ベルクソンは、このように互いに外的である瞬間瞬間を持つ時間の次元を受け入れることでは十分ではないと見る。彼の「純粋持続」もまたその瞬間瞬間を持ち、こちらは互いに外的ではないが、重ね合わされている。

こうして彼は、二つの瞬間瞬間のセットを考えることを我々に任せる――重ね合わされたそれと、時間の次元の「過去」の部分のそれである。

これは完全に私自身の考えだが、言っておくと、ベルクソンの「純粋持続」の重ねられた瞬間瞬間は、あらゆる時間的解析への試みに割り込むことを要求する時間を含んでいる、その時間の存在を、彼が認めたものだと言うべきであろう。彼の増大する「過去」は、増大するのに時間を要する。しかし、ベルクソンは、そのような一連の時間を認識するのを好まず、また前の方のページでどんな種類の時間であれ時間の延長の何もかもを出し惜しむことを強いられたため、「重ね合わせ」の考えに逃避しなければならなくなっている。

H・ウィルドン・カー教授（『変化の哲学』一一四ペー

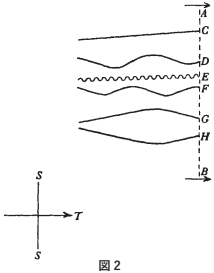


図2

ジ参照）は、少し異なる角度でベルクソンの理論を表しているように思われるが、図2において、過去の出来事の列として増大していく要素を「記憶」と呼んでいる。従って、思い出すことは、記憶の次元での、意識の後方跳躍ということになる。この理論は、おそらく、一般に認められている記憶の生理学的見解に対し、勇敢に、いやむしろ絶望的に、かもしれないが、そのように攻撃することに多くの時間を捧げることを、ベルクソンに強いるものであろう。だが、図2は、ウィルドン・カーの解釈を図解するのにもまったく同じように役立つ。次元指標のTを記憶を表すMに変え、動く線ABにベルクソンの「純粋持続」を表すDDというラベルを付け直すだけだ。

どちらの場合も、図は以前と同じ理由で非難されることになる。四次元の拡張に加えて、何もないところからの継続的な創造というまったく不要な仮説を導入している。そしてそれは、単純化の代わりに、可変運動の複雑な性質をさらに大きくするという代償が支払われるのである。

未来の出来事についてのベルクソンの態度は、強調されるべきである。図2のように、それらはどんな姿も形もまったく存在しない。彼の自由意志についての

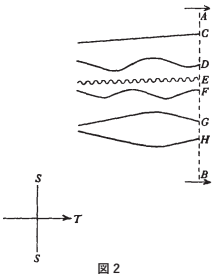


図2

議論は、それに基づいているのである」

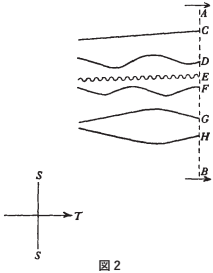


図 2

第五部　連続時間

第二十章

「連続」とは、ある種の確認可能な法則によって決定された順序で配置された、あるいは配置されたと見なされる、個々に区別できる項目の集まりである。連続の要素――個々に区別できる項目――は、「項」と呼ばれる。

項の性質は、それらが連続の要素としての資格とは別ものと考えられた場合、数学者にとってあまり問題ではない。項とは、例えば、さやの中のエンドウ豆や、振り子の揺れや、耕作地の畝（うね）・溝や、片持梁（かたもちばり）に沿った荷重などであろう――それはすべて、彼にとっては一つのものである。彼の関心は、各項間の**関係性**に集中している――それぞれの項を次のものに連結し、全体を規則正しい延長にまとめる法則を明らかにする関係性に、である。

各項間に特有の関係は、項自体の値に影響を及ぼすかもしれないし、及ぼさないか

もしれない。従って、私が知る限り、エンドウ豆一個の本質的な重要性は、それが同じような豆の列の中にあるという事実に大きく影響されるわけではない。しかし、振り子の揺れのそれぞれは、運動の大きさをその前の揺れに負っている。そして、片持梁の端に加えられた重さによって生じる、梁の任意の場所における荷重は、その構造に沿った一連の荷重を繋いでいる特定の関係性でその大小が決まる（例えば、単純梁においては、直立方向と斜め方向に働く力の値は同じ項の連続を構成する。しかし、縦材に働く力の値は等差数列の連続を構成する）。

ある連続の**最初の**項においては、各項を繋ぐ関係性が片側には欠けている。そして、この非対称性は非常に実用的な意義を持つかもしれない。従って、振り子の最初の揺れには、それを決定づけるための前の揺れはない。それは外部の力によって開始されなければならない。耕されたコース内の最初の溝は、ほかのすべてのものと接合部が異なる。そして、片持梁の終端部に働く力は、その連続のほかの場所のように、同じような部分部分で押したり引いたりすることによってではなく、外部から加えられた端部荷重によって反対側の端部で釣り合う。

今、我々は、時間が固定された観察者の前で、時間が、経過するか増大するか蓄積するか自身を消費するか、何であれ動かず変化しないでいる以外の何かをするとする

ならば、その第一の時間の活動またはそれに沿って時間を決める別の時間、その第二の時間で時間を決める別の時間、といった具合の、明らかに無限である連続があるはずだ、ということを理解している。そして我々は、この時間の背後にある時間という、目につきやすく確固とした知的展望に直面したことに気づいたあらゆる哲学者たちが、（a）その場合の真の連続要素は何なのか、そして（b）その連続性は重要性が判明するような類いのものであるのかないのか、等を確かめるため、一刻の猶予もなく、その明白なる連続の性質への徹底的かつ系統的な調査へと進んだのだろう、と思うかもしれない。というのは、もちろん、それが結局は完全に無視してよい問題であると判明する可能性もあるからだ。だが、宇宙の単純な説明を探すのに人生を捧げてきた人々にとっては、彼らのほぼ根源的なものの一つ――実際のところは無の捜索に近い――が連続的な性質を持つということが判明するかもしれないなどという考えは、ほとんど是が非でも避けるべき仮定のように見えなければならないのである。まったく正当に、彼らは立ち止まり、より短い道のりを求めて見回すだろう。とはいえ、そのような休止に対しては、期間上限を設けざるを得ない。二十二世紀の間、完全に開かれた道を見つめて立っていることは、認められた哲学的手段の伝統と必ずしも矛盾するというわけではない。しかし、この尊重すべき慎重さが、ありふれた惰眠と勘違

いされる危険性があるとしたら、気の毒なことになるだろう。

第二十一章

論理的衝動のために連続時間の分析に着手するのであろうと、どんな国がそのような道を明らかにする見込みがあるかについての好奇心という動機からそうするのであろうと、もし我々が、普通の、一般に認められたその連続の最初の段階でまだ明らかになっていない何かを発見したならば、その何かは一次元の時間に基づいて発展した哲学の範囲外のものであろうということを、我々は理解しなければならない。つまり、それは我々の現在の存在観にとって、まったく新規な何かであろうということだ。よって、我々には、ただ新しいものに遭遇したという理由から、立ち止まったり躊躇したりできる権利などないはずである――新しいものとは、我々が見いだすことを求めているものなのだ。そのうえ、我々は、時間の連続性がほかのものの連続性を知らせていることはほぼ確実であるということを、心に留めておく必要がある。実際には（読者は最悪の警告をされる方がよかろう）、それが**連続する観察者**を含むことを、我々は発見することになるだろう。

このような状況においての厳密に正しいあり方は、まず自分たちで分析を終わらせ

ることであり――我々の前提から論理的に導かれる限り、表されるものが空想的あるいはその反対に見えるかどうかにかかわらず――、**それから**その結果が我々の知識の全身と同化するかしないかの確認へと進むことであろう。そして、たまたまこれは、正しい方法の採択が必須であるケースの一つである。というのは、分析が終了して初めて、新しい概念が何らかの申し分のない重要性を帯び始めるからである。

次に、読者には、次の章に達するまでは意味と含意についてのすべての考えを完全に頭から払いのけ、クロスワード・パズル同様現実的な重要性のない単純な頭の体操として、当面の分析を見なすようお勧めする。さしあたり必要があるのは、本章の終わりに列挙される、我々の前提から正しく推論された法則に満足することだけであり、それらは我々の連続における各項間の関係を完全に正確に表しているのである。

＊　＊　＊

「客車の窓から」エディントン教授は言う、「我々は時速五十マイルで流れ去っていく牛を見て、あの生き物は休息を楽しんでいると言う」

これは、いろいろな意味で人を面白がらせる実例である。そして私は、あまり心を

そそられない色彩で描かれた絵に注意を向けるため、上のことについての読者の熟考を妨げなければならないことを遺憾に思う。それでも我々は乗り込まねばならない。

そのとき、我々は同じ客車に静かに座っている。しかし、それはまだ鉄道駅に止まっている。プラットフォームから遠い方の窓から見ると、我々は線路の上に停車している別の列車があることに気づく。見ていると警笛が鳴り、我々は自分の列車が発車し始めていることに気づくことになる。それは次第に速く進んでいく。反対側の列車の窓が、視界を横切って速く走っている。ところが……ここで疑問が生じる……、自分の車両におなじみの振動が感じられない。プラットホーム側の窓の方に目をやると、ちょっとしたショックとともに、自分の客車がまだ静止していることに気づく。動いているのはその別の列車の方だったのだ。

さて、これら二つのケースのうちの最初の方では、注意は牛の視覚的現象に固定されている。この現象は「表象領域」を横断し、それを注意がたどる。我々は、外の空間に固定されたものに対応するその表象領域内の一点に、注意が向けられていると判断する。そして、注意がこのように固定されている間に、表象領域、**および観察者**が、その空間と連係して動く。

もう一つのケースでもまた、反対側の列車に関連する窓の視覚的現象が、表象領域

を横断し、注意はその現象をたどる。再び我々は、注意が固定され、その領域が――**観察者とともに**――動いていると判断する。ところがその後、ほかの証拠に照らして、我々はその判断を覆し、その領域と観察者の方が固定されていて、注意が動いたに違いない、と言う。

このとき、それぞれケースにおいて判断は異なるかもしれない。しかし、いずれのケースでも、直接の心理学的**経験**は、同じ一般的な性質のものである。観察された現象は、それが牛であろうと反対側の列車の窓であろうと、表象領域を横断する――注意の焦点がそれをたどる――、それがその領域の端に消えるまで。**そして、いずれの場合においても、表象領域は、観察者に関しては固定されたままである。**

表象領域というものは、観察者に関しては固定され、「注意」と呼ばれる移動する焦点に凝縮された観察が行われていると仮定されるが、それが我々の分析の出発点となるはずである（計器の示度はすべて、その領域の中の状況として受け取られる）。しかしながら、その領域には視覚以外の現象が含まれていることを念頭に置いておく必要がある。実際にはそれは、注意が払われているか否かにかかわらず、観察のために提示されているあらゆる種類の心的現象を含んでいる。それは観察者の**宇宙観**を表している。そして、精神神経並行論（二三ページを見よ）によれば、それは、観察可

能な精神的現象の産出と関連した、明らかな活動の状態にある観察者の脳のその部分が占有するのと、同じ空間位置を占有する。

領域と脳のこの空間位置を、図4のCDで示すことにするが、紙の上下方向は空間と見なされる。時間の長さはまだ示されていない。

CDの中身は明らかな活動の状態にあると見なされるので、それらは空間を表す次元で外見上上下に動くものと想像する必要がある。さらに、CDの長さは不確かである。脳のより大きいあるいは小さい部分が、異なる瞬間に活動的であるかもしれないからだ。この図は、実際には、とあるモデルとしてだけではなく、**動いている**モデルとしても見なすことになるだろう。図の下部にある次元指標に二つの小さな矢じりを付けることでそれを表し、空間内の運動が発生しているらしいことを示す。（より一般に受け入れられている宇宙観に従えば、CD自体が全体で空間次元を動いているのかもしれないということを、覚えておくべきである）

図4が我々の出発点だ。これは時間の連続における「項」を表すものではない。時

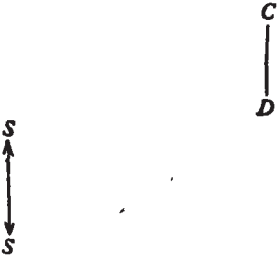


図4

間はこの中にはまったく示されていないからである。

表象領域が空間位置CDを占める観察者には、出来事は連続して提示される。彼にとって、時間は、存在の顕著な特徴を示すものとして明らかだ――極めて個人的な重要性を持つに足るほど現実的であるというのに、自分の空間的視野の三次元的制限という観点からは定義できないという特徴である。彼の領域における現象は、動き回り、変化し、消滅するように見える。また、これらの変化には「時間がかかる」ように見える。彼は、時計の針のような何らかの指針が動いたわずかな空間でもって、この「かかった時間」を確認しようと努力する。だが彼は、時計の針の動きは、時計の文字盤だけをよりどころにしては計れない、という知識から抜け出すことができず、そのために失敗する。針は、その動きに「時間がかかる」。それは、文字盤を速く、またはゆっくりと移動するかもしれないのだ。時計を止めたとしても、ほかの動きを「かかる時間」から妨げることはない。彼は記憶の蓄積が増大していくことに気づいている。しかし、その増大もまた「時間がかかる」プロセスであることは確かだ。暗闇の中に座って考えているときでさえ、その思考に「時間がかかっている」ことを、彼は知っている。また、麻酔から目覚めたとき、彼は時間が「経過した」証拠を持っている。

図4

彼は、「かかった」この「時間」が計測可能なものであると理解する。件の計測は、「延長」と呼ばれる、単純な、一方向だけのものであるということを。そして、この延長では、彼が観察する現象が、より長い、またはより短い期間持続する。また、彼と完全に意見が一致しているため、我々は、紙の左右の次元として延長の次元を図に導入することになる。

プロセス全体は、二つのハーフ・ステップに分ければ、より容易に進められるだろう。その第一の内容は、時間の中に延長（すなわち**持続**）を持つものとして、脳のCD内の物理的要素を示すことだけである。我々は図4の瞬間写真を撮ることから始める。相対性理論家とのトラブルを避けるため、我々はCDの所有者と並んで立っていると仮定しよう。こうして我々は、その写真において動いている要素が示す位置を、我々と問題の脳所有者の両方が「現在」

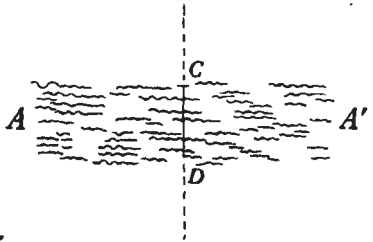
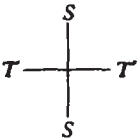


図5



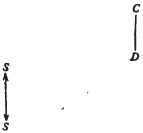


図4

の瞬間と見なしている時間の特定の瞬間の位置として考えることができる。その写真は、図5においてCDとして示されており、その線の点線による延長部分は現在の瞬間を示している。図4の動いている要素の「過去」と「未来」の状態を、時間の次元においてCDの左右に固定位置を占めるものとして示す。これらの「過去」「現在」「未来」の状態は、時間において持続している（延長している）波線群を、まとめて提供するだろう。

しかし、脳の要素の「過去」と「未来」の状態が、時間の次元において固定された位置を占有している実体として示されているにもかかわらず、我々が表象領域を同じように扱っているかどうかは疑問である。図5におけるCDが、我々および脳の要素所有者の両方が「現在」の瞬間と見なして撮影した時間の瞬間においての、図4の動いている要素のスナップショットであるという事実は、CDが全延長における唯一の表象領域であることを示唆しているように思われる。

この疑問をもっと詳しく考えてみよう。今我々は、二つのハーフ・ステップの第一を完了したが、結果としては、分析を開始した状況——図4に示された状態——の非

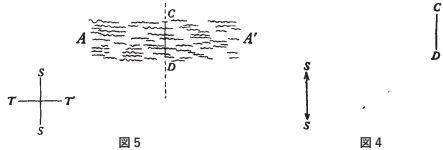


図4　図5

常に不完全な表現しか得られないことが分かるだろう。図4の諸要素は、空間の次元で上下に**動いている**と考えられ、そのような動きは図に示された脳の持ち主に対し、明白な心理学的現象の変化を伴う。その図は、**連続**の状態を示す動いているモデルと見なされることになっていた。ところが、図5では、観察者に変化が現れるという証拠はない。図4の諸要素を時間の延長で示す諸線――帯AA′――は、すべての次元で静止していると考えられる（そういうわけで、我々は小さな次元指標から矢印を削除する必要があった）。すると、その帯のさまざまな断面で表される脳の状態は、連続で観察者に提示されているものではない。それらが全部一緒に提示されているか、あるいは――「現在」の瞬間の状態、CDで――ただ一つだけが提示されているのだ。

二つのハーフ・ステップの第二の内容は、これら行方不明の動きの現象を再導入することである。我々は、明白な、そして実際のところ唯一の可能な方法でこれを行う――今の読者が慣れている方法で。我々は、CDが――ずっと疑っていたように――図の中での唯一の表象領域で、その領域が時間の次元に沿って矢印に示される方向に

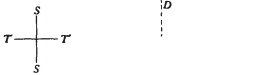


図5

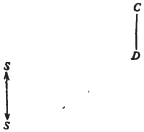


図4

動いていることを示すため、ただ次元指標のTに矢じりを加えるのみとする。これを図6で実施する。

［**第三版への注釈**

我々が時間の「後退的」性質と呼べるものの全論証が、前述の議論の妥当性にかかっていることは明らかである。この二つのパラグラフの中に、曖昧な思考の混乱があると疑う読者は、次のように自問するべきであろう。図6で示されたシステムは、A′方向に動く三次元的表象領域を伴うが、図4で提供されたのと同じ効果をその領域の観察者に提示するだろうか？　答えはこうなる。そのとおり。それなら、そのように動いている領域のない図5のシステムが、**その効果を供給することはあり得ない**］

もう一つ。次元指標のTの後に、数字の1を書き

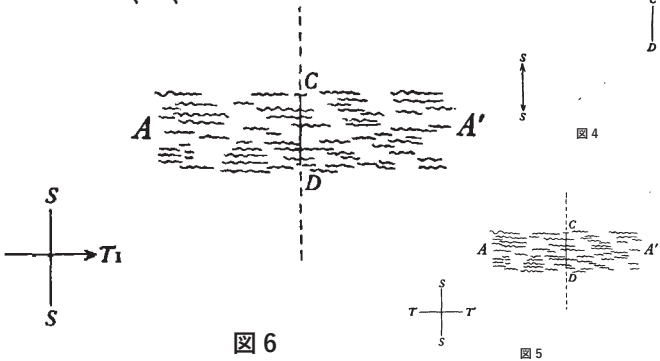


図6

入れる。理由はすぐに明らかになるだろう。

分析の第一段階はこれで完了し、出発点の単なる改訂版がもたらされる。図は再び動いているモデルとなり、それはもはや我々が図4に関して書いた記述と矛盾することはない。線CDは、最初に述べたように、やはり表象領域である。出来事はその領域の中に連続で提示されているものである。そして、その移動する領域と波線との交点がその領域の中を上下に動き、通常の空間運動の観察者効果を提供する。

表象領域が拡張された基層上を動くにつれ、その領域に提示された現象の中には、その領域のほかの現象に関連して動いているように見えるものがあるだろう。というのは、注意は、見たところ動いている現象に焦点を合わせるが、違いを知覚できるように、すぐ近くに隣接する比較的動かない現象をカバーする副次的焦点を持つからである。

しかしながら、この第一段階の結果にはまだ不満がある。我々の前提に含まれていたことを分析すると、結論に関する限り、我々は論理的に避けられないものに至った。

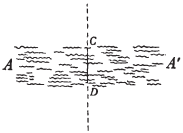


図6

図4

問題は、それが十分とは言えないことである。

何よりもまず、我々は考慮すべき新しい問題に直面していることに気づいている。すなわち、時間を移動している表象領域のことである。

今、時間の次元において、動いている表象領域を、その内容――動かれた基層内の脳の要素によって供給された内容――が提示されている観察者から分離することはできない。しかも、我々はこの観察者を三次元的なものと見なさなければならないのである。そこで、あり得る混乱を避けるため、この記述が意味することを正確に説明しておいた方がよさそうである。

時間の次元は、いかなる観察者にとっても、彼が経験する**すべての**出来事が、彼にとっては一定の順序で互いに続くように見える次元――彼（または彼の注意）が、その連続する経験の順序をひっくり返すために逆行することのない次元――である。そのため、彼の注意が前にも後ろにも動くことができる三次元の次元は、彼にとってはその時間の次元に垂直であるように見える。そのとき、各図において、その連続した経験の順序を実際に決定するのがどの次元であっても、その中で動いている観察者にとっては、それがその観察者の真の時間次元である。

我々がここで考えている観察者にとって、このように彼の連続した経験の順番を決

定する次元は、その領域に動かれる次元である。それゆえに、彼の注意の前後の動きは、その時間に垂直の三つの空間的次元に限られている。従って、彼は、**そのような観察のための能力**が三次元的である実体である、ということになる。我々が彼を三次元的**観察者**と呼ぶのは、つまりそういうことなのである。

彼が、別の立場、別の次元で延長を有するかどうかは、この章の議論にとって重要ではない。**観察者**として、彼は三次元的である。

そのとき、領域CDは明らかに、この観察者が、第四の次元を移動しつつ、AA′と交差する場所と見なされるはずである。

そして、ここで我々は、時間後退の性質についての明白な見解を得る。時間を付加的な次元として導入することで宇宙の概念を広げることは、かつて考えられた宇宙の観察者を導入することもまた我々に強いる。これは、彼が観察し描写する世界に彼自身を置く、という不条理を伴わないことに注意されたい（我々は図4にこの観察者を挿入しようとはしない）。この絵は、新しく、より大きいものだ。だが我々は、**彼が**描いた絵（図4）を正当なものとして受け入れている——一応は。

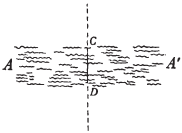


図6

図4

しかしながら、唯物論者に警報を出す必要があるものは、この中には何もないということに注意すべきである。この観察者が、自分の領域とともに脳の基層終端に達するとき、観察可能な現象が終わったことに気づくであろうことは十分に明らかだ。彼が、観察している脳の状態の連続に干渉するための能力を少しでも持っているかどうかということもまた、まだ何も示されていない。

今、この最初の段階には、考慮すべき新しい時間の問題が残されている。観察している実体は、領域CDとともに、静止するほどゆっくり移動することも、瞬時にあらゆる場所に行くほど速く移動することもない。それら二つの両極端間のどんな状況も、移動した距離ごとの所要時間に関して記述可能であるべきだ。しかし、移動距離は、最初に検討した時間の次元に沿っている。そうすると、かかった時間は、図の中のいかなる場所にも示されていない時間でなければならない。最初に検討した時間が、図4のどこにも示されていないのとちょうど同じである。このゆえに、我々は図6のTをT1と表し、それが、これらの図における真の、あるいは見かけの動きの時間を計る究極の時間ではないことを示す。この究極

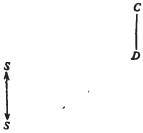


図4

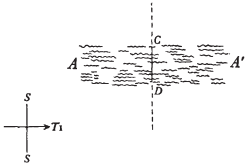


図6

の時間は、時間2と呼ぶのがよいだろう。

＊　＊　＊

以下の諸図を平易にするために、そのページと同じ高さに置かれ、そのページの下から上までを見上げている目に見えているように、帯A′を描くことにする。そのように見ると、帯は一本の線として見えるだろう。そしてその線は、図7のGHとして表される。領域CD――移動している観察実体が交差する場所――は、移動する点Oによって表される。そして、GとHの間の各定点は、単一の脳の状態、帯A′の空間的な断面図を表す。

図6に示す空間の次元は、ここではページに垂直に突き出している。別の空間次元を描き入れる余地はないだろう。それでも、それらは図と交差していると仮定していることを忘れないようにしよう。

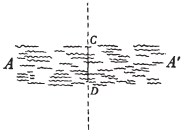


図6

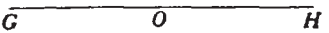


図7

図7に示された状況の表示は、連続の最初の「項」と見なされるかもしれない。そこでは時間が表され、分析され、それが究極の時間ではないことが示されている。

次の我々の仕事は、図4の諸要素が空間移動に要する時間を表示するのとまったく同じ方法で、図7の左から右へのOの移動に要する時間を表示することだ。

時間の新しい次元は、図4での最初の時間の次元がCDと直角にしなければならなかったのと同じように、GHに垂直でなければならないだろう。すでに述べたように、この新しい次元を時間2と呼ぶことにする。この時間2との関連では、時間1は理論的には空間の三つの「普通の」次元のいずれとも同類である。我々は今、第四の次元が時間である四次元世界の代わりに、第五の次元がその不安定な役割を演じる五次元世界を持つことになる。

この時間2においては、Oで移動している実体を含んでいるGHのすべての実体は、持続を有している。すなわち、移動するOを見ている間にも、それらは存在し続けているということだ。これらの持続は、時間2の次元における延長として示されなけれ

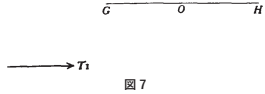


図7

図4

ばならない。

前と同様、新しい動いているモデルの瞬間写真を撮ることから始めよう。この写真は、我々にとって、究極の時間――GHに沿ったOの動きを計測する時間――すなわち時間2――の、「現在の瞬間」にあるものが撮影される。それは、その「現在の瞬間」での図7の状態を表す。この写真を図8のGHとして示し、線pp′が問題の「現在の瞬間」を示す。

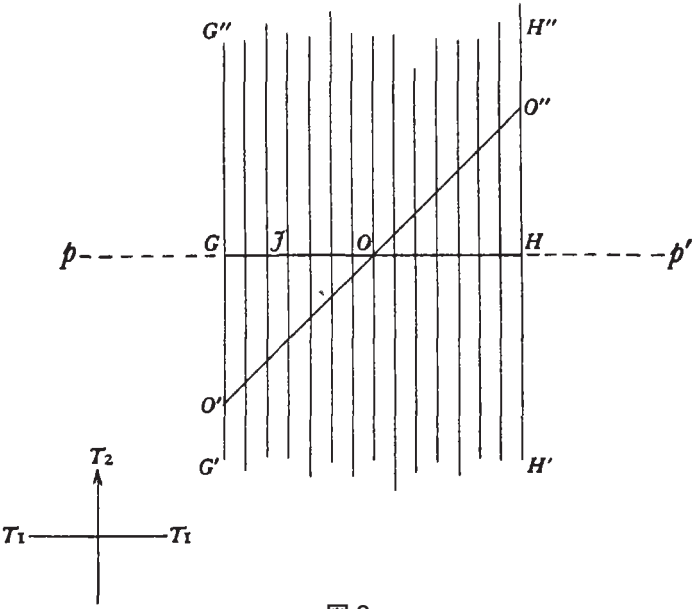


図8

次に、GHの定点で表される固定された脳の状態の（この時間2における）「過去」と「未来」の状況を、GHの「現在」の状況の上下それぞれに示さなければならない。これらの状態は、空間でも時間1でも位置を変えないので、その時間2での持続は、時間2の垂直に「まっすぐ」な延長として示されるべきである。こうして、図8におけるそれらは、今のところ指定可能な**いずれの方向にも制限なしで**、ページの上下に伸びる垂直線となる。ただし、ここでは図のように、選択された少数の点だけを扱う必要がある。*

我々は今、考慮すべきもう一つの実体を持っている――三次元的な領域Oで交差する三次元的な観察の実体である。図7の「現在の」状況（図8のGH）では、この交差の点は線の中央にある。しかしながら、この点は、図7においては時間1に沿って動いているので、その図の「過去の」状況における位置は図8のよりG′G″側の方に示されねばならず、「未来の」状況における位置はよりH′H″側の方に示されねばならない。

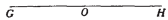


図7

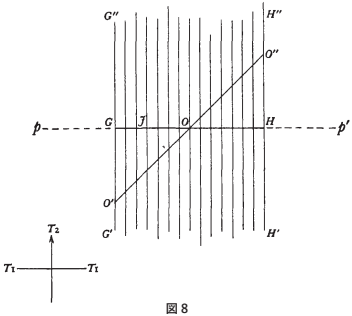


図8

これらさまざまな交点を結ぶと、O′O″のような対角線が得られる。この線は、その交差する実体の持続（時間的な延長）を表すだろう。

ここで我々は、第一段階で尋ねたのと同じ質問をもう一度自問しなければならない。我々は、動いているモデル（図7）における全実体の「過去」および「未来」の状態を示した――Oで交差する実体を含む――それら全実体の延長として、時間2の次元の「過去」および「未来」部分の定位置群を占有しつつ。しかし、我々は、元の三次元的な**表象領域**をそのように扱ったことがあっただろうか？　その現在の状態は示した。だが、過去と未来の状況の方は示しただろうか？

答えは、ノーだ。我々の図は、検討対象の実体の**持続**――五次元的な**長さ**――以外は何も示していない。図には、変化の効果が存在する領域を所有している三次元的観

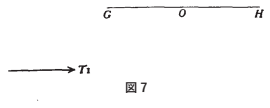


図7

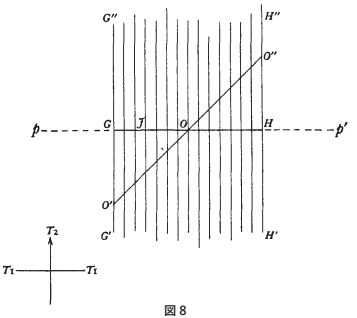


図8

＊（原注）……例えばGHのすべての点を扱うと、新しい図は一面真っ黒になってしまうだろう。

察者がいない。大きな四つの次元を持つO′O″は、基層のすべての脳の状態と交差するが、それが、この四次元的生物に、必要な、変化する内容を有する、単独の、唯一の三次元的領域を供給することはない。それでも我々の図は、図4と図6のように、その中に、そのような効果を持ったそのような領域が、究極の観察者――脳の保有者――に提示されるということを示さねばならない。

我々はその領域を失ってはいない。それは我々がそれを置いた場所、まだO′O″とGHの交点にあるのだ。しかし、図は、この単独の、唯一の領域が「動いている」ことを示し損なっていた。我々は、我々の絵の中でこの欠陥をどう改善するべきだろうか？

その領域は移動している、しかも時間1の中を移動していると見なされねばならない。そうしている間、それはO′O″に存続しているはずで、その対角線

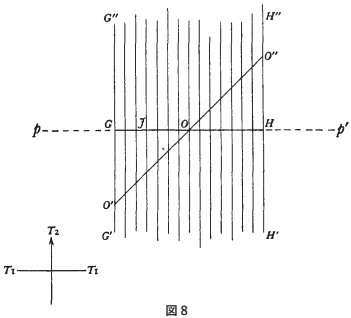


図8

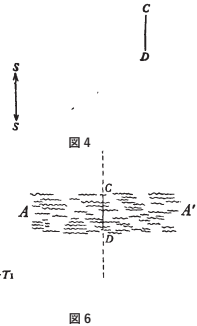


図6

を上に移動していると考えられるはずである。すなわち、時間2を上に移動しているのである。これは、我々の**究極の**観察者が時間1の瞬間の内容を連続して観察するためには、時間2の瞬間の内容を連続して観察する必要がある、ということを意味する。彼は、究極の時間――この場合は時間2――がどんなものでも、上に移動する表象領域を持たねばならない。

第一段階の類推により、図8の**GH全体**（我々には「現在」として見えている時間2の瞬間における図7の瞬間写真）が、この時間2を上に移動している表象領域であると判明することが期待できる――その存在が、図7が時間2で拡張されるまでは明らかにすることができなかった領域。ちょうど、第一段階において、活動している図4内の時間移動領域CDの存在が、図4が時間1で拡張されるまで明らかにできなかったのと同じように。

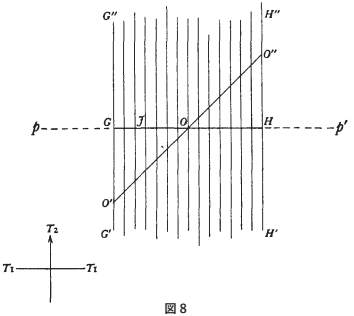


図8

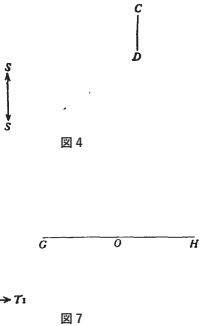


図4

図7

しかしながら、連続の最初の項は、そのほかのすべてのものと、ある点では異なる場合があることが思い出されることだろう。従って、ここでの類似を信用するのではなく、経験の連続という事実に関わっていることを直接分析することで、第二の項の特性を確立し続けることが賢明かもしれない。

では、Oは$O'O''$を上に移動している。**しかし、$O'O''$の中でOを定点として際立たせるものは、線GHだけである。**従って、この線は時間2を上に移動しなければならない。ところが、GHは、我々が時間2における「現在の瞬間」であると考えている時点での図7の状況を表している。よって、この時間2における「現在の瞬間」は、時間2を上に移動しているのだ。

ここで、時間2がこの段階での真の時間であるのと同じように、時間2の動いている「現在の瞬間」が真の動いている「現在の瞬間」であることを思い出すことが望ましい。古い方の、時間1の動いている「現

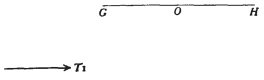


図7

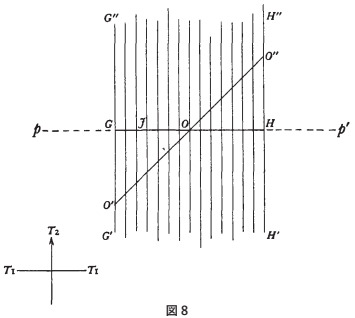


図8

在の瞬間」は、時間2における真の動いている「現在の瞬間」と、図の固定された対角線のただの交点となった。それはそれ自体では存在しないが、時間2の「現在の瞬間」によって決定される。点Oはp′pによって**決定される**のだ。科学用語で言えば、我々の時間は**連続**して配置されるのであり、**並行**して、ではないのである。

今、O′O″の各点は、究極の観察者がどんなものであれ、それによって意識的かつ**連続的に**O′からO″へと観察されている。そして我々は、これらの点が観察されている連続の順序を決定する**唯一の**ものは、**時間2**を移動している「現在の瞬間」であるということを見たところだ。だから、O′O″内の変化する点の**究極の**観察者は、時間2が真の、そして唯一の時間の役割を演じていることの観察者なのである。時間2は、彼の経験の順序を決める時間である。これは、時間2の方向が彼の表象領域の移動方向であることを意味する。そして、時間1は、彼にとって、真の、そして唯一の決定力のある時間であるものと、垂直である。時間1は、従って、彼との関係においては、「普

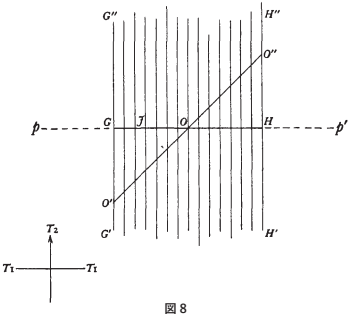


図8

通の」空間の次元に類似している。言い換えれば、第一段階で、究極の観察者が三次元世界において自分自身を三次元的存在として示したのと同じように、第二段階で与えられたより複雑な光景においては、究極の観察者はｐｐ′によって際立たせられる四次元世界において自分自身を四次元的観察者として示しているのである。この四次元的観察者は、ｐｐ′にあり、それと同じ方向に移動する四次元的表象領域を持つはずである。そのとき、明らかに彼は実体Ｏ′Ｏ″ではない。

しかし、増大している我々の図における新しい要素の発見が、以前の、その図が直立させられていたときの仮説を否認する権利を我々に与えることはない。この第二表象領域の存在についての議論は、Ｏ′Ｏ″を移動している点Ｏがあるという仮説に**基づいて**いる。そして、今我々は、Ｏ′Ｏ″がＯにおいて三次元的**観察者**であるということを否定することはできないだろう。それは、第一段階で、後に図に線Ｏ′Ｏ″を挿入することを可能にしたＧＨの、その点におけるそのような三次元的観察者の存在を、た

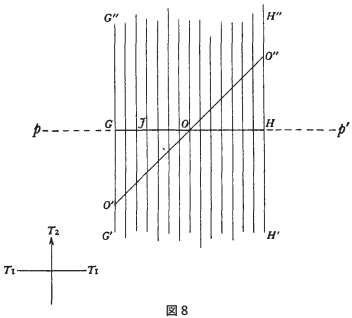


図8

だ我々が認めるということにすぎない。そしてそれは、分析の最初から始まっている。前に突き止められ、確認されたもので、後になって無視されるものは何もない。図が次第に複雑になるに従って、新しい要素を発見する可能性があるというだけのことである。

　このゆえに、たまたまOにあるO′O″のその三次元的断面は、これまでの究極の観察者の四次元的領域における実体であることが判明する。O′O″のこの断面を、「観察者1」と呼ぶことにする。四次元的観察者は「観察者2」と呼ぶのがよかろう。そして、我々が始めた状況の分析が、そのような観察者たちの全連続を明るみに出そうとしていることは、今や十分明白だ。観察者2が第五の次元（図8を垂直方向に、上に移動している）を**移動している**という事実は、その次元が真の、絶対的な時間を表すことができず、当該の動きを計測する時間を考慮することを我々に強いるであろうことを意味する。第六の次元としての時間を導入すると、以前の議論が繰り返される。その段階では、「究

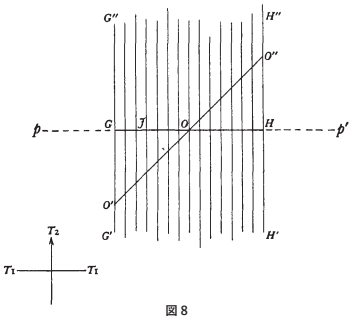


図8

極の観察者」の役割を演じるであろう観察者3を発掘することになるだろう。そして、そのプロセスに終わりというものはあり得ない。

しかしながら、当面の課題は、観察者1と2の観察活動がどのように相互に関連しているかを正確に発見することである。難しいことではないはずだ。

我々は、究極の観察者が、図4の三次元的領域CDにおいて彼に提示された、その基層の連続する三次元的状態によって影響を受けるという知識で始めた。その領域は、図8の、上に移動している観察者2の四次元的領域が実体O′O″と交差する場所であることが判明した。そして観察者2が、これまでのところ、影響を受けている究極の観察者である。

しかしながら、我々は、O′O″の各断面が、問題となっている基層の状態の一つによって影響を受けていることを見いだしている。

さて、観察者たちの連続という展開

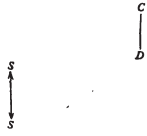


図4

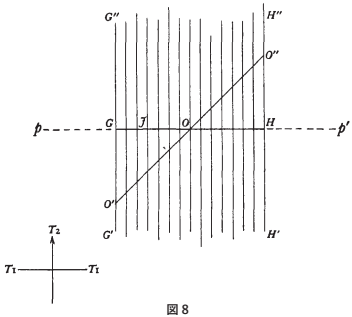


図8

は、観察者2と、その観察者2に何らかの形で影響しているOの基層断面との**間**（O′O″の断面）に、観察者1を配置する。結果、その特定の状態が観察者2に影響を与えるプロセスは次のようである。その状態においてのある特徴が、間にあるO′O″の断面に、その特徴に対応する変更を引き起こす。観察者2に影響するのは、そちらの再生された方の特徴である。

しかし、それは次のような困難を引き起こす。観察者2は四次元的生物であり、彼と基層の間にあるO′O″の断面は三次元のものでしかない。それゆえ、彼の観察領域は、O′O″がその領域を横切る場所を越え、四次元に拡張する必要がある。観察者2の領域のそれら外側部分には、間にある実体で再生され、観察者2に影響しているといったような特徴を含んでいる基層の、多くの別の三次元的断面がある。観察者2はその種の特徴の影響を受けやすいため、彼の領域にあるO′O″の断面によるのと同様、彼がそれら基層の別の三次元的断面に影響されることから防ぐためには、何があるのか？

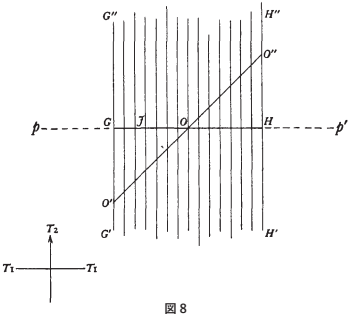


図8

察しはつくが、何もない。よって、何か障害が見いだされるまで、我々は観察者2がO′O″の断面に隣接する基層に影響されることを想定しておく必要がある。**しかし、この隣接断面の集合は、彼がO′O″の三次元的断面に影響されるのと同じようには、彼に影響を及ぼさない。**O′O″のそばの基層の小片は、四次元的観察者に**まとめて**提示される四次元的細片である――彼にとってそれは三次元的だと区別できる断面を持っていない。観察者1の機能（すなわちその領域内の、唯一の純粋に三次元的な実体の機能）とは、基層から、観察者2がほかの方法では精通できないそれについての様相を抽出することである。

さて、観察者2の領域は、pp′に沿ってどれくらい広がると言えるだろうか？

答えはとても簡単だ。もう一度図8を見てほしい。その領域2は、少し前に確認したように、時間2の方向に、すなわち図の垂直方向上に動いている。そうすると、観察者2は、基層の周辺的な小片を加えたO′O″のさまざまな点を連続して観察する。我々は、移動する領域2を、その線の中央にある領域

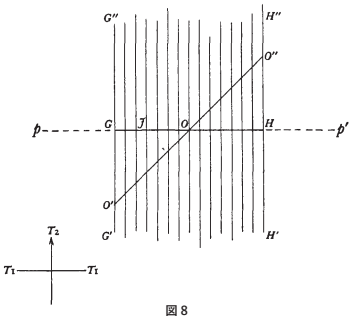


図8

1（すなわちO）を持ったGHにちょうど達したものとして示した。しかし、移動している領域2が図の底部付近にあったとき、領域1はO′にあり、観察者2はその点で基層の小片を**加えた**観察者1を観察していた。そして、領域2が図の頂上近くにあるとき、領域1はO″にあり、観察者2はその場所で観察していることだろう。それゆえ、観察者2は、左から右へ基層内のそれぞれの状態を観察することができなければならない。すると、彼の領域は図を垂直上方に動いているため、その領域は少なくともGからHへと伸びるはずである。

そのとき、もしG′G″が、（時間1において）最初に究極の観察者が心理的効果を知覚することを可能にするほど十分に発達した脳の状態を表すなら、そして、H′H″が、（時間1において）その脳が有益な活動をやめて崩壊する場所を表すなら、観察者2は、誕生から死までの、通常の、覚醒時の、時間1の人生**全体**を観察できるが、未知の何らかの理由のため、彼は、領域2に沿った（誕生から死まで）左から右へのその個人的な旅において、自分の**注意**が観察者

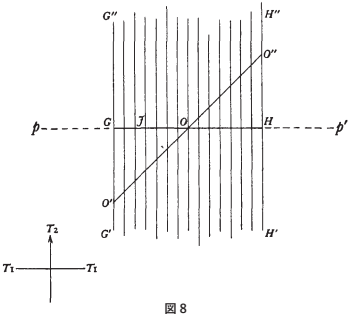


図8

1に従うままにしている、と言えるだろう。

我々には、全体として、観察者2の移動する領域内にたまたまあり、それに影響している基層に関する情報源としてその個人に用いられている箇所の断面から、O′O″を識別するための名前が必要になるだろう。O′O″のほかの部分――GHの前後――また、その基層の影響を受けるかもしれず、観察者2のための道具として役に立ったか、役に立とうとしているかもしれない。しかし、我々が調べている絶対時間のその瞬間には、それらはその個人の領域の外にあり、彼はそれらを利用していない。この本の以前の版では、O′O″には全体的に「反応物1」という名前が付けられていた。反応物とは、探知機として利用可能な物質である。そして、「計器」という語がこの場合にはよりふさわしいと思われるにもかかわらず、以前の読者を混乱させるのを避けるため、私は古い術語を固守した。究極の観察者に情報を伝えている反応物あるいは計器の断面は、すでに述べているように、観察者1と命名されている。

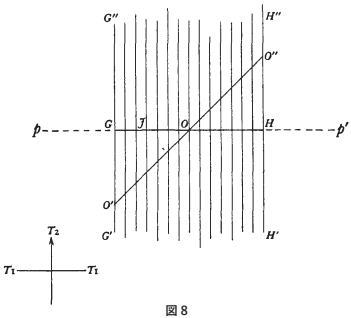


図8

今や、図6のCDのように、GHは表象領域であるという結論に至った。そしてそれは、それら第一段階の領域のように、時間の次元を横切って、脳の基層の端から端まで伸びている。この特質は連続の二つの項において有効なため、それをすべての項に現れるであろう反復関係と見なせるかもしれない。

次に我々は、GHが時間2を上に移動する表象領域であることを示すため、図8の次元指標の時間2に矢印を付けることで第二段階を終了する。時間1に沿った領域1の動きは、今再生された。GHが図を上に動くにつれ、GHがO′O″と交差する点Oは、GHに沿ってHに向かって動き、そうして左から右へと連続して次々と脳の状態に出会う。

我々の図――連続の第二項を表す――は、これもまた動いているモデルだ。そしてそれは、図7によって前に提供された情報と矛盾することはない。その

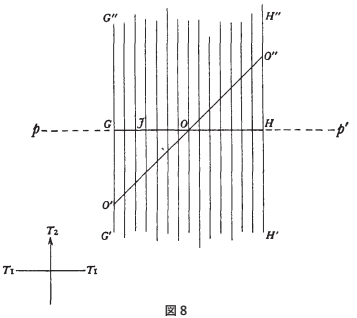


図8

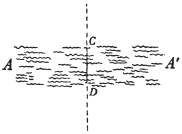


図6

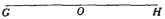


図7

図において、OはGHに沿って移動している交点であった。我々のより複雑な図はその記述を確認し、交点の**移動**が、交差しているGHの移動している時間2によるものだという追加情報を供給するにすぎない。GHが図7によって与えられた超圧縮図で見えなくされた表象領域であることを証明しているということだ。我々はまだ、時間1に沿って動いている元の三次元的観察者をOに持っているが、彼は自身が対角線の反応物という形で上下の時間的な延長の単なる断面であることを証明しているだけだ。

GHの動いている観察者は、順に、実体反応物2が平面図形G′G″H″H′で交差する線でなければならないことに注意すべきである。究極の時間——平面を上に移動するGH、そしてGHに沿ったOの動きを計測する時間——が、時間2ではなく**時間3**であるということも。

＊　＊　＊

図7

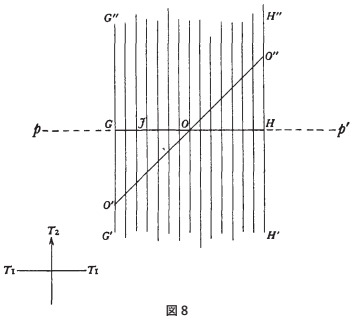


図8

「我々は、タイミングよく、分析をもう一段階進めてもよい。とはいえ、わざわざ議論を繰り返す必要はない。

当然我々は、究極のものと考えていた第二段階の時間と領域と観察者が、まったく究極ではなかったことを悟るだろう。そして我々は、今度は、その状態を保持するのは次の段階に到達するまでの間だけとなる、さらに大きな次元の多くの究極に出会うことだろう。そんなふうに無限に続いてゆくのだ。

図9では、時間の三つの次元を、遠近法によって見られる立

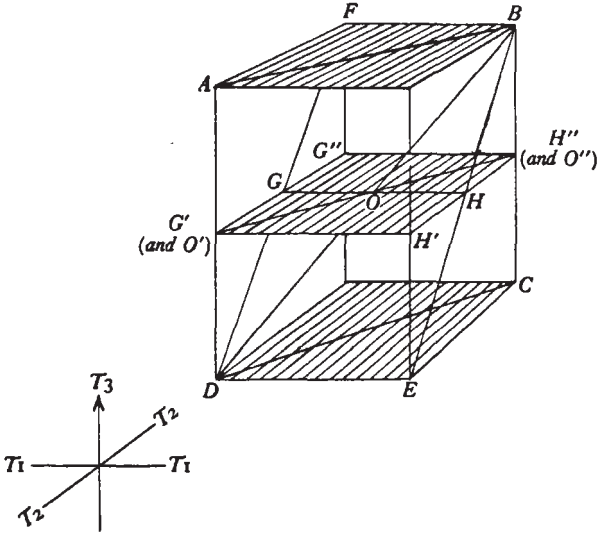


図 9

体図形の三つの次元として表している。全体像を明確にするためには、この図に想像上の境界線を引かなければならない。しかし、**実際には、上下と前後にそのような境界線はない。図は左右側面（時間1の誕生と死を表している）が固定されているが、時間2と時間3の次元での延長には制限がない。**

時間3は、ブロックの垂直方向の次元として示される。この時間との関連では、我々が時間1と時間2と呼んでいる次元は空間の次元に類似する。

このブロック図の中央の水平断面、平面G′G″H″H′は、遠近法で示された図8の瞬間写真である。時間の新しい次元において、図8で線を延長された時間2によって表される脳の状態の持続は、棚内の何枚ものトーストのように並べられた垂直面を形成するよう、時間3の次元で延長したそれらの線で示されるべきである。しかし、それらを埋めることは図を

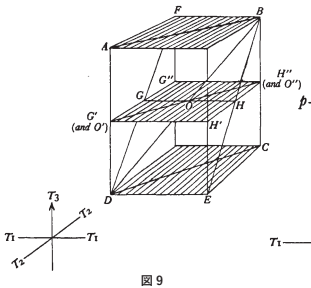


図9

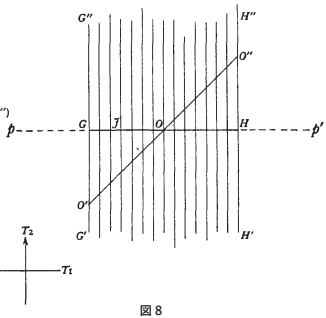


図8

混乱させるだろう。最初の反応物O′O″は、時間3では対角線でブロックを分ける平面として持続（延長）するだろう。すなわち、平面ＡＢＣＤである。

（ブロックの中央に示される）図8の「現在」の状況では、表象領域ＧＨ――それは、思い出してほしいのだが、図の平面と何らかの観察している実体との交点によって際立たせるべきである――は、平面の中央にある。（ブロック下部の平面である）図8の「過去」の状況では、この領域――この交線――はＤＥにある。（ブロック上部の平面である）図8の「未来」の状況においては、この領域はＦＢにある。交差している実体、第二反応物は、それゆえ、その持続を表す平面である傾斜面ＤＦＢＥに沿ってある。

この平面と平面ＡＢＣＤの交線が線ＤＢである。移動する新表象領域（領域3）は、平面Ｇ′Ｇ″Ｈ″Ｈ′である。この領域3平面がブロックを上に移動する

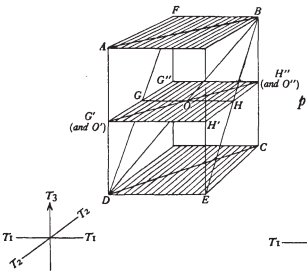


図9

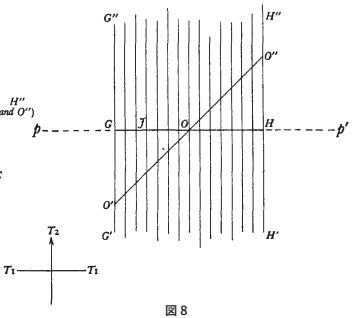


図8

につれ、その傾斜平面ＤＦＢＥとの交線（線ＧＨ）は、動いている領域３平面上をＧ″Ｈ″に向かって動く。すなわち、領域２は時間２に沿って動くのである。一方、（三つの平面ＡＢＣＤ、ＤＦＢＥ、Ｇ′Ｇ″Ｈ″Ｈ′が交差する）点Ｏは、Ｈに向かって動いている線ＧＨをに沿って動く。すなわち、領域１は時間１に沿って動くのである。」*

＊　＊　＊

分析が、あなたがそれをたどりたいと思う限り同じやり方で続くであろうことは明白だ。そこで我々は、時間のあらゆる次元に延長された客観的要素から成る固定された基層上を移動している、絶対運動で動く単一の多次元的表象領域を持つことになるだろう。この究極の領域の動きは、その領域と固定された要素の間の無限の交差箇所の動きを引き起こし、これらの交差箇所はより小さな次元の表象領域を構成する。我々は、ここでもまた無限に、さまざまな表象領域の、またはその中

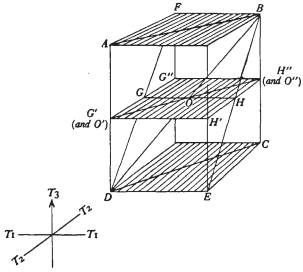


図９

の、あらゆる瞬間を計測するのに役立つ時間を持つだろう。この時間は、絶対的な過去、現在、未来を含む**「絶対時間」**となるであろう。この絶対時間の現在の瞬間は、「過去」「現在」「未来」の、時間の下位次元すべてのあらゆる瞬間を含むはずである。

Oが**本当に**たどる軌道を示すことは決してできないことに気づくだろう。図8においてはこの軌道はO′O″として見えているが、図9においてはDBとして見えている。我々は、時間の別の次元を導入するたびに、それを異なるように示さなければならない。

＊**（原注）**……図は、**連続的な**関係を図で表したもので、ブロック内の動きを考慮するときに、そのブロックが構築されたシステムを看過できないことを覚えておこう。例えば、同時にその動き、すなわち領域3が時間3を、領域2が時間2を動いている状況を認識することなく、点OがDBを上に動いていると見なすことはできないわけである。

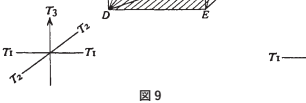


図9

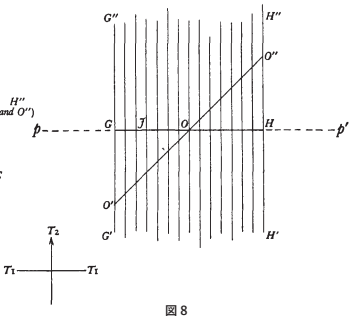


図8

しかし、描画可能な図における特定の各移動領域の観察者にとっては、Oの経路が**彼の領域内に**あるように見えることが分かるだろう（例えば、図9における領域GHの観察者にとって、OはGからHへと動いているように見える）。

その連続の性質は、今明らかになり始めている。それは「入れ子」様式――すべての項が同じように、ただしより大きい（この場合は次元がより大きい）項が含まれる様式――と類似する。

その法則は容易に確認できるだろう。我々が第一に得るものとしては――

1　時間移動するすべての表象領域は、一次元大きい領域に含まれており、時間のもう一つの次元、「現在」と同様に「過去」「未来」である出来事をカバーするより大きい領域を、より小さい領域へと移動する。

第二の法則は、連続的な観察者を呼び寄せる。

我々は、時間1の各瞬間の内容が、連続して高位の観察者に対してのみ提示され得るということを見たが、それは、時間2の各瞬間の内容が、あなたが考察することを

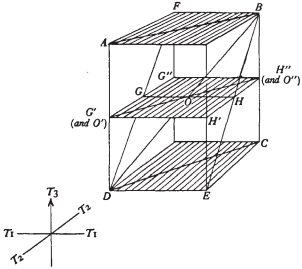


図9

選択した連続するほかの時間すべての瞬間の内容を伴って、同じように連続して提示されるという状況下でのことである。従って、この高位の観察者とは、その連続のその場所において時間の次元を上に移動している表象領域の観察者である。その領域の観察者として、彼はより小さい、含まれる移動する領域の観察者である。

（「高位」とは、時間あるいは空間において多少なりとも**離れている**観察者を意味しない。問題の観察者は、単に「今」「この場所」の、あなたの日常の自己である）

かくて、第二の法則として我々が得るのは——

2　表象領域の連続的状況は、連続的な観察者の存在を含む。この点において、あらゆる時間移動領域は、同じように移動し、同じように次元を定められた観察者にとって明らかな領域である。そのようなどの観察者による観察も、次元的により大きい領域に属するすべての観察者たちによる観察なのである。

このゆえに、「注意」は集中した観察のための名前にすぎないので、何らかの領域に属する観察者の注意は、次元的により大きい領域に属している観察者たち、そして無限の観察者の注意へと帰することができるはずである。しかし、注意の焦点（所定の集中度の観察によってカバーされる範囲）は、それぞれの場合において、観察者およびその領域を有するのと同じ次元数を持たなければならない。領域1においてはそ

れは三次元的であり、領域2においてはそれは四次元的であり、等々。

その結果、我々は第三の法則として以下を得る――

3　何らかの領域における注意の焦点は、その領域が有するのと同じ数の次元を持ち、より高いすべての領域における注意の焦点の次元的中心である。

では今度は、このすべてから作られるものがあるのかどうかを見てみよう。

第二十二章

我々の分析は、我々が連続した出来事を観察するならば存在するはずである時間の仕組みの性質を確認した。*今答えなければならない問題は、その仕組みの検査が何かほかのものを説明可能にするかどうかである。そして、その返事は肯定的である。

「自意識のある」観察者を合理的に定義するには、どうしたらよいだろう？——その者を、カメラのような自意識のない記録装置と区別するための定義とは？　あなたはおそらく、問題の個人は彼が「自分自身」と呼ぶ何かが観察していることに気づいているはずだ、という自明の理を言明することから始めるのではなかろうか。その言明は、言い換えると、この「自己」とその観察が自意識のある人間によって観察される、ということだ。しかし、彼はこの客観的実体を、自分に属するものとして観察することが不可欠である——彼はこう言うことができなければならない。これは**私**「自身」

＊（原注）……ここでは、観察されたシステム内の出来事と、観察に基づく出来事との間にある区別に注意してほしい。時間の「後退」全体は、これら二つのクラスの出来事が単一次元での位置を割り当てられる可能性がないという事実に依存している。

だ、と。そしてそれは、彼が**最初に考慮された「自己」を所有している「自己」**に気づいていなければならないことを意味する。この第二の「自己」の認識には、同じ理由で、第三の「自己」の認識が含まれる――以下、**無限に**続いてゆく。

そのような連続的な観察者が、空間の三つに限った次元のどこかにどのように存在し得るかを知ることは困難だが、直前の章における分析では、彼が時間の多数の次元に非常にうまく存在し得る――また実際に存在する――ことが示された。Oで脳の基層に反応する反応物1は、そこでは観察者2の移動領域における提示であり――その反応の状態において観察されている断面の特徴である。同様に、GH（Oで観察中）での反応物2は、観察者3の移動領域における提示である（二二五ページ初出図9参照）。以下、あなたが続けたい限り続く。

さりながら、分析が何かほかのものをもたらしたかどうかを見てみることにしよう。

実は、あるにはあるのだが……それは純粋な心理学への転落であり、そのように見なされなければならないものだ。心理学者たちは常に、我々が時間の

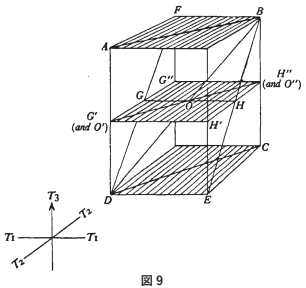


図9

経過をいかにして**知り得る**のか――すなわち、動きや変化だけでなく、動きと変化が時間の経過を伴うという事実をいかにして知り得るのかについての説明を求めている。時間が移動された長さであるはずだということは、結局のところ、かなり練り上げられた概念なのである。それでも、これが我々が習慣的に時間を考える方法であることは、教育を受けた人であれ――ずっと好奇心が強い――無学な人であれ、あらゆる人々に同意されている。子供は、自分の乳母が説明するときのぎこちない試みを即座に理解する。「昨日」が「通り過ぎ」、それから「明日」が「やって来る」と告げられることも、ほとんど必要ない。子供はどのようにこの驚くべき知識に到達するのか、また我々はどのようにその知識に到達したのか？

あえて推測されることが多い理論として、注意が実際には数学的瞬間に限定されることはない、というものがある。それはもう少し大きな期間をカバーする。すなわち、時間の次元において小さな延長があるわけだ。

今、この小さな延長は、実は連続の法則3で与えられている。その法則は、領域1における注意の焦点が、より高次の領域すべてにおける注意の焦点の次元的中心であると主張している。それは、領域1の焦点が観察者2からの注意が注がれている外辺、それがどんなに狭かろうが、その外辺に囲まれていることを意味する。さらにそれ

は、領域1における観察者1の注意を囲み、それをたどっている注意を有する観察者2が、自分の次元的により大きい焦点にカバーされる領域2において、静止した（脳の）表象に関する観察者1の見かけの動きを知覚しているはずだ、ということも意味する。このプロセスは、観察者1が自分の三次元的領域を横切って移動している対象を知覚するそれと、正確に同じである。それゆえに、観察者2は、観察者1が観察しているものを観察するのみならず、その個人を時間1において「過去」から「未来」に移動しているものとして知覚する。（哲学者は、「経験の連続」はそのように「連続の経験」を必ず含むということに注目するだろう）

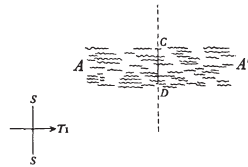


図6

観察者2の焦点による観察者1の焦点とのこの重なりに関して、ある程度の重要性を持つ別のポイントがある。時間1に沿って動いている注意の焦点は、基層内の不規則物に出くわすだろう――図6の基層線の波によって表した不規則物である。領域1およびその焦点とそれらの関係においては、その不規則性は、観察されているかどうかにかかわらず、三次元的空間における物理的要素の動きである。しかし、観察者2の、わずかに広い重複焦点は、それらかなりの数の不規則性を含んだ時間1の長さを

かなりよくカバーしているかもしれず、従って、その焦点によってカバーされる基層部分においての時間1の**パターン**として提示されるだろう。これは、自分の注意とともに領域1をたどっている観察者2が、客観的な宇宙の特性を、それら自身が持続する粒子の空間的配置と空間的運動として示すものを超えて、直接知覚できるはずだということを意味する。物理的**頻度**は、パターンとして表される――頻度は具体的なものとして現れるのだ。これは結局は、観察者の感覚としての頻度の解釈と何らかの正式な結び付きを持つことを証明するかもしれない。しかし、究極の観察者がこのように直接観察できるものは、物理学で**「作用」**として知られている、たいへん重要で非常に注目すべき特徴であると言ったとすれば、我々はおそらくその問題を最も重要な側面で示しているはずである。だが、このことはまた別の機会に。

我々は、ほかに何か収穫することができるだろうか？

できる。ついに夢の「効果」の説明を得るのだ。

法則3は、より低い領域での注意の焦点が、より高いすべての領域における注意の焦点に囲まれていると主張する。従って、覚醒の瞬間においての観察者2の注意は、領域2の境界を超えて前後に動いてはいないが、領域2を横切って横に動いている領域1における観察者1の焦点をたどる。しかし、領域1に注意の焦点がない場合はど

うなるだろうか？　領域1が、深い眠りに落ちているとき、脳の不活動のせいで、空白になった場合は？　そうした状況は図10に示されている。

図の中央を走っている隙間は、精神的現象の産出に関連したような脳の状態すべての欠如を示している。だから、時間2を上に動いている領域2GHが、図に示された位置にある（絶対時間の）

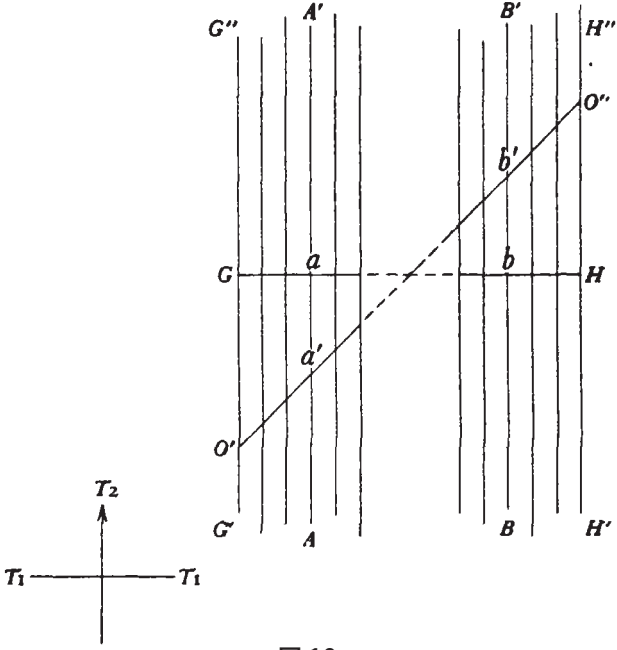


図10

瞬間、観察者1が注意する領域1（GHとO′O″の交点）には何もない。こうして、観察者2の注意の焦点が、同心円的連続焦点の**最初の項**になったわけだ。それは、たどるべきより小さな次元の焦点を持たない。それで、その表象領域GHの全次元において、それが――その時間の次元に直角に――移動することから制限するものは何もない。言い換えれば、観察者2が領域1において注意するものが何もないとき、彼の注意はどこか別の場所をさまようことになるだろう。そのような注意の放浪が、一般に認められた夢の現象すべてを説明するであろうことは、次の章で示されることになる。ここで指摘しておく必要があるのは、そのような放浪においては、注意は、時間1の（aのような）「過去」か（bのような）「未来」かどちらかの感覚現象、記憶現象、連想思考列といった、脳の相関物に遭遇するということだけである。覚醒時には、移動しているGHがO′O″と交差する領域1の点をたどっている注意は、すでにAA′の（a′での）脳の状態に遭遇しており、これからBB′の（b′での）脳の状態に遭遇することになる。

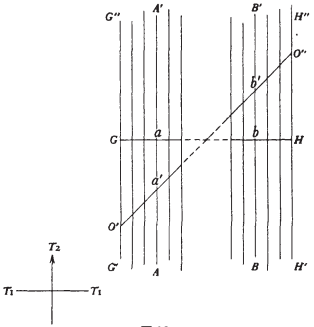


図10

ほかに何かあるだろうか？

ある。分析の結果は、「覚醒時の実験」の過程で発見されたすべてと見事に一致する。その分析は、元の脳の状態に帰することができる表象と、観察者に帰することができる（注意を含む）観察とを、はっきりと区別した。ゆえに、それが、特定の領域における特定の現象に注意を向けることを、最後に考えられた観察者に**強制する**法則がないことを明らかにしたのは、驚くことではない。覚醒している間、そのような注意が領域1の現象に、事実上習慣的に向けられていることは、十分明白である。理論上では、問題の唯一の強制としては習慣が残っているのみだ。そして、練習がこれを裏付ける。覚醒時の実験においては、読者も覚えておいでだろうが、注意は、関連イメージの簡単で素早い列をたどることが許されている限り、過去のイメージ以外には遭遇しなかった。その理由は、今はかなり明らかになっているようだ。関連イメージの列が素早く容易に観察状態になったことは、究極の観察者の注意が習慣に従って動いていたことを示していた。しかし、習慣は、その注意を領域1に保ち、その領域ではすべてのイメージが過去に関連している。にもかかわらず、その習慣は**法則**ではなかった。それは克服され得る。容易に差し出されたそれらのイメージに注意することをきっぱりと拒否することによって、領域1の注意は完全に停止され得るのだ。そして、これ

がうまく行われた稀な瞬間には、領域2の注意は、夢でのように、時間1の「現在の瞬間」以外のどこかに延長している連想の軌跡に沿って、自由に場を外すことができたのだ。

この章において、分析から推論できる最も単純なものに限定すれば、もう一つ注目すべき点がある。

連続した観察者が、自意識のある存在の束縛から自分を解放することが、そうとう困難になるだろうことは明々白々だ。実際には、彼がそれをどのように管理しようとしているのかはまったく分からない。

連続する表象領域の究極の内容を提供する基層は、時間の多くの次元においての、時間1における最初の延長の延長（持続）にすぎない。その時間1の延長には始まりと終わりがあり、それら二つの境界は考慮に入れられて時間の別の次元の延長のどこにでも現れる。だが、時間の二番目および「より高い」次元における延長を移動する領域は、**それら二つの境界から離れることも、それに向かって動くことも決してない。それらはその間をまっすぐ上に動く。**多次元図を使い切る唯一の領域は領域1である。死――すなわち、移動する領域の境界への到達――は、従って、連続する要素ではない。それは、睡眠の隙間や基層でのさまざまな時間の不規則性のように、それら**初項**

のみに見られる特質の一つであり、それは――先に見たように――始まりのあるいかなる連続にも存在するはずのものである。

もちろん、時間の別の次元では、基層の延長に対する恣意的な終了があるかもしれない――何らかの神がそれらを切り捨てるかもしれない――が、分析は、そうした干渉がない場合には、基層は、最初のものを保っているあらゆる時間の次元で無限に持続するということを示している。というのは、それが、時間1においては、時間に延長した諸線を、その伸長のもっと先の場所で分割する可能性を示す特質を、それら別の次元においては示さないからである。

そういうわけで、観察者1は、観察をやめる唯一の観察者であると思われる。

＊　＊　＊

読者は、前述の連続理論（＊シリアリズム）についての教義が、我々の夢の効果によって与えられた経験的な証拠から推論された**わけではなく**、いかなる宇宙であれ、論理的には、時間が長さを持ち、外界の状態が連続で観察されるような宇宙、そういう宇宙の性質であるはずのものの直接の分析で得たものだということに気づかれるであろう。

夢の効果の論拠は、従って、二重のものである――論理的であり、また経験的でもある。本書の手順は、実際、完全に逆になっていたかもしれない。我々は、連続で出来事を経験するという事実に関与するものを分析することから始めることもできた。その分析の終わりに、我々は夢の効果の確率に――真に重要なことの発覚に対するかなり些細な結果として――気づいたはずだ。そして、その場合は、その最終結論の妥当性をテストするために着手された実験を記述したかもしれない。それは科学的レポートの通常の方法となったであろう。

しかし、この場合の状況は独特である。「高位の観察者」は、己自身の非常に無知な自己よりも壮麗でも超越的なものではないけれども、その者がひとかどの**「アニムス」**のように危険に見え始めていることは明らかである。すでに第一部において、アニムスを信じることは、夢の研究から始まったに違いないことを指摘した。自分の夢を記憶している未開人やあまり教育を受けていない人たちは、夢の中では、自分たち

＊連続理論……原文 Serialism。本単語の、頭が大文字での表記はここが初出。ランダムハウス英和辞典では、特にダンが使用した語としては「継起説」「時間転移説」という訳語を当てているが、これらは定訳とは言いがたいため、訳者の判断で新しい訳語（直訳にすぎないが）を作成した。大方の叱正を乞う。なお、音楽では、この語は「音列主義」を指す。

は通常の覚醒時の生活とはまったく異なる存在領域にいたという以外の結論に達することはできなかったのかもしれない。その信念は、幼稚で不合理だと思われてきた。もし本当にそうだとしたら、アニムス論は、その源泉で汚染されていると見なさなければなるまい。

それゆえ、私は、法廷の前に未開人を置くことから始めることが、また夢の領域が覚醒時の領域とはまったく別のものであったこと、および彼の究極の自己が覚醒時の個人には享受できないある程度の時間的自由を楽しんだと信じることの十分な根拠を、彼の夢が彼および彼の「予言者」や「預言者」に時折提供することが事実上あるということを経験的に示すところから始めることが、正しい手順であると思っていた。

現在の本書第四部における進歩した証明なら、その実績に基づいて対応することができる。

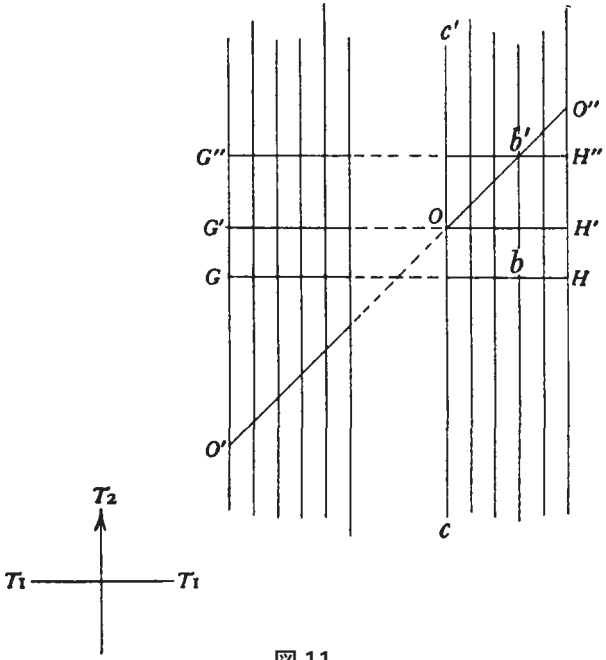


図 11

第二十三章

すべての観察は高位の観察者の観察であるため、時間1に沿って位置している脳の状態の、連続した、自動的な経験のすべては、必ずしも頭が澄み切った状態の個人のものとは限らない脳の思考である。しかし、この領域1の検査は、彼が実行する唯一の思考なのだろうか？　そして、その領域で提示されているものは、前の分析を通じて我々が推察したように、そのように常に純粋に自動化されているのだろうか？

（忘れないでほしいが、あなたの通常の日常的自己であるところの）高位の観察者は、領域2（図11のGH）において、脳の状態b b′に属するイメージbを観察し、その状態（垂線）はGHとO′O″の交点によってまだ到達されていない。言い換えれば、あなたは未来の出来事の夢を見ているのであり、またその出来事は、領域2がG″H″に動いたとき、一日後か

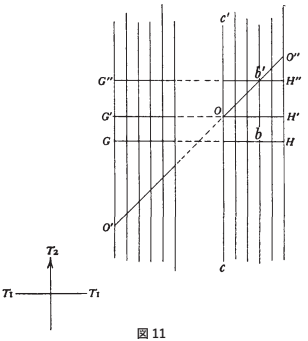


図11

二日後の覚醒時に経験される。その夢の翌朝――すなわち、領域2がわずかにG′H′まで動いたとき――あなたは、良いまたは悪い理由のため、夢見たことを一枚の紙に書き留める。

そのｂｂ′の夢経験の記憶痕跡は、明らかに、領域1であるOが夢を書き留めた瞬間に位置しているｃｃ′の脳の状態ではない。それゆえに――極力論理的にするには――それはどこか別の場所にあるべきである。

その記憶から夢を書き留めるという行為は、このように、時間1の脳の出来事の**自動的な**連続への明白な干渉なのである（この干渉が我々の図にどれほどの影響を与えるのかは、次の章で扱われる問題である）。また、その夢の記憶の特定の詳細を、あなたの知的探求にとって重要なものとして選ぶ推論の全プロセスは、単に領域1における脳の状態の検査ではあり得ないということもある。

従って、我々は、領域1で観察可能なものに**追加された**記憶痕跡および知的能力の使用を許可せざるを得ない。

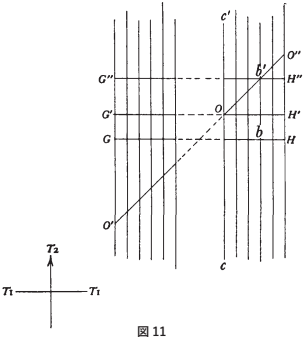


図 11

これらについて、我々は何を発見することができるだろうか？

眠りに落ちるときに何が起こるかを考えてみよう。

あなたの注意の焦点は、四次元的な表象――時間1の、単なる瞬間ではなく**期間**をカバーする表象――に直面した、四次元的な焦点となる（夢見人にとっては、もちろん時間2が究極の時間である）。これら領域2の表象は、通常の覚醒時の生活に属する感覚現象、記憶現象、そして連想思考列から成るが、時間1では――焦点の集中度によって差はあるものの――すべてが延長されたもののように見える。観察されるべき基層は、いつものように静止している。空間の三つの次元で進行している動きの外観は、目覚めているときに領域1で生成されるのと同じ方法で――すなわち同じ時間1方向における注意の焦点の動きによって――生成され得るが、ただしそれは、この次元において、この四次元的焦点が、覚醒時間中に領域1のほぼ中央にある真に三次元的な焦点をたどるときに持つ長さをあまり大きく超過することのない長さにまで収縮され得る場合に限られる。

しかし、夢の中のように観察者1が無活動のときには、動いている三次元的焦点がガイドとしてそこにいることはない。そして、移動している集中指標の欠落は、時間1の次元において四次元的焦点がほとんど何にも集中されないままでいること、また

その次元を着実に動くことを、かなり困難なものにするはずである。

この集中能力への言及は、もちろん、あなたが純粋に受動的な観察者以上のものであるという主張である。しかし、先ほどあなたには**干渉**力を許可したので、そのような干渉に費やされるはずの注意の集中力をあなたに許可しないわけにはいかない。

今や、上記の条件が、直接観察されるような夢現象の特徴をかなり正確に説明していることを認めなければならない。夢の間じゅう、あなたは夢の光景を、領域1で経験するものに似た三次元的光景の連続として解釈しようと努める。そして、あなたの焦点の長すぎる時間1の長さが、常にあなたを打ち負かす。見られるために固定されたままのものは何もない。すべてが流動的な状態にある。あなたの光景は常に、探し求められている時間1の瞬間の直前と直後から構成されている。そして、集中した焦点を維持しようとするあなたの試みの断続的な破壊のため、夢物語は切れ切れの光景の連続で現れる。あなたは旅に出る……そして、ついには不意に自分が何者なのかに気づく。あなたは常に、覚醒時の観察において慣れている方向――すなわち時間1の前方――に注意の動きを確実に保とうとするが、注意は必ず弛緩し、それをもう一度引き締めると、たいていは間違った場所に焦点が当てられ、夢物語の前の場面を再観察していることに気づく。あなたは、覚醒時なら関連イメージの列として認識してい

るであろうことを追跡し始める。ところが、その旅の最中ではあなたの注意はやや弛緩しているため、実際に知覚されるものは、その列の最初のイメージに直ちに最後のイメージが続くようなものかもしれない。壁を通ることなく家に入るように思われるのは、もちろん四次元世界では極めてありふれた偶発事の一つである。

しかしながら、あなたがまったく途切れない睡眠を取ることはかなり稀である。脳は時々、神経エネルギーのランダムな流れに身動きする――それは領域1が観察可能なものに出会うことを意味する。直ちに注意（1、2およびその他のもの）はその箇所に焦点を合わせられ、そして、注意1が再び薄れるにつれ、夢のイメージの中には、領域1が再び空白の空間へと動いたとき、領域1のイメージがそのちょうど中央にあった四次元的イメージが現れる。ここでの過程は、眠りに落ちる瞬間に起こるのと全く同じである。さらに、領域1で感じられる痛みや寒さのような身体感覚は、領域1の注意が出現し消滅するのに従って、真の夢のイメージと混同される。もしそのような経験への注意が持続するならば、あなたは自分が覚醒していることに気づく。

しかしながら、絶対時間のまさにその瞬間に実際に経験しているのでない限り、あなたが領域1で夢のイメージと混ざっている痛みや何らかの激しい身体感覚に気づくことは決してないということは、注目すべき事実である。そして、あなたの注意が過

去と未来の脳の状態の間を行き来しているという事実にもかかわらず、その身体的な不快感は、覚醒時にはっきりと訪れていたか、訪れることになるのである。

この理由はすぐに分かる。身体感覚の強さが注意の集中度にかなり大きく左右されることは、よく知られた事実である。戦闘中の兵士が、自分が負傷したことに気づかないことはよくある。競争で走っているとき、あなたは歯痛を意識していない。ひどい痛みに注意を向けると、それより小さい痛みの**消滅**が起こる。かなり小さい不快感であっても、注意を集中すれば、ほとんど耐えがたいものになるまで大きくなるのだ。さて、目印としての移動する領域1の三次元的焦点が欠落する場合、同心円状注意のほかのすべての焦点は、我々の現在の仮定によれば、あまり集中されなくなる。それゆえに、夢――途切れのない睡眠の本当の夢――の中では、あなたは明るい太陽に幻惑されることも、大きな騒音に耳を聾（ろう）されることも、着心地の悪い衣服に苛立たされることも、罵（ののし）られたりぎょっとさせられたり疲れさせられたりすることもない。夢は、十分現実のように思えても、覚醒時の生活のこれらすべての不快な強い特性を欠いている。我々は、自分の肉体の存在にほとんど気づかない。

もちろん、痛みというものは、現代的見解によれば、光や音と同じくらい、ほかの感覚とは性質が異なる感覚である。それはそれ自身の神経器官を持ち、今は過去での

ように、別種の感覚器官の過剰刺激に伴う**不快な**感覚と混同すべきではない。目の痛みは、並外れて明るい光とは異なるものだ。現代的見解なら、その痛みは、不快さの感覚というよりも、感覚の中でも最も不快なものと表現するかもしれない。ほかのすべての感覚同様、その経験可能な強度の範囲は制限されるはずである。色を、無制限の鈍さまで、あるいは無制限の鮮やかさまで知覚することはできない。ある程度の強度未満の痛みを経験しないことは、どの実験者にとっても明白である。その感覚の強さがある限界にまで上昇すると無意識状態が介入してくることは、中世拷問者たちの解決できない困難であった。痛みの極端な不快感と、それがほかの感覚からある程度注意をそらすという事実は、その観察可能な強度の**範囲**が、やっと知覚できる程度から絶対に我慢できない程度までの、**長い**ものであることを意味しない。確かにそれは、色の範囲のように多数の別々に識別可能な段階を含む範囲ではない。そのとき、「夢の国」の弛緩した領域2の焦点を使っている観察者にとって痛みがまったく明白ではないという事実は、この不快で威圧的な現象に属する観察可能な強度の**範囲**が、光の感覚の観察可能な強度に属する範囲よりもかなり短いということを意味するにすぎないのかもしれない。

今、夢を通じて、覚醒時の感覚的経験について考えるのと同じように、あなたはそ

の夢について**考える**。あなたは、自分が夢で見るものの重要性を値踏みする。あなたは夢の状況に対処するために素朴な計画を立てる。あなたは夢の中でつい今しがた起こったことを覚えている。そしてそれは、我々が調べようとしている追加された思考および記憶なのである。

そんなのはどう見ても幼児レベルの思考であると言ったら言い過ぎになりそうだ。というのも、それは大人の生活に属する概念――例えば政治思想のようなもの――を含むからである。とはいえ、我々は、領域1の連続する脳の状態の検査に伴うものに比べ、それが並外れて貧弱な種類の思考であることは全面的に認めてもよいかもしれない。それでも、それが覚醒時の思索と同じ一般的な性質の思考であることは、かなり明らかである。すでにお分かりのように、このことは、三次元的側面の連続を知覚することが、観察的経験の唯一可能な方法であるという考えに基づいている。探し求められている時間1の瞬間の直前と直後は、観察されているものの中のただの不安定要素と見なされ、無視される。同じく三次元的と思われる方法で、夢の中の過去のことが記憶される。そして、問題となっている思考者にとっては、時間がその次元に垂直であるという事実にもかかわらず、集中したとき、注意は、**慣れている**時間1の方向へと動かされる。

人が、夢の観察からではなく、覚醒後の夢の記憶の観察からこのすべてを確認するのは事実である。しかし、これらの記憶を調べているのは観察者1ではない。**それらは彼の領域にはない**。目覚めたとき、夢で見たことや、夢の間にそれについてどう考えたかを記憶するのは、観察者1の助けを借りずに達成されることである。

ここで、記憶と思考が我々の初項観察者のそれと完全に類似する、純粋に自動的な観察者2の、架空のケースを考えてみよう。この仮定の超個人は、時間2に対して直角に、連想ネットワークに伸びている記憶痕跡を備えているであろう。彼の思考は、連想神経叢上の注意の放浪――空間を左右に、時間1を前後に、さまよっている――から成るだろう。それは実際より誇張された四次元的な種類の思考で、時間2が唯一の明白な時間の次元であり、基層に関しては四次元的な方向が自然で明白な方向であるだろう。この観察者は、すべての四次元的事象が無限の三次元的断面から成っていることに気づいているかもしれない。だが彼は、我々が夢でするように、その断面の一つを無比なものとして、またそれ以外を不安定で混乱した追加として考えたり、考えようとしたりすることはないだろう。

今、真の観察者2の、夢における注意の放浪記録――あなたがそれらの夢を思い出すことができる記録――は、四つの次元に伸びている痕跡**でなければならない**（時間

1と通常の三つの空間次元）。そして、それらの痕跡が脳の基層にあるのか、それとも時間を移動している観察者2（彼が動く基層とは異なる四次元的実体）にあるのか、はたまたそれ以外の場所にあるのか、いずれにしても、それらは何らかの連想ネットワークを構成するはずである。

すると、我々は、実は四次元的な全体の中で表象を見るのに適した精神的**構造装置**を持っているのだが、それにもかかわらず、そのような表象を単なる三次元的現象と見なそうと努める観察者のケースに直面していることになる。

それゆえ、観察者1がいないときのあなたの思考は、四次元的連想構造の単なる**検査**を超えるものを伴う。それは、その構造の**解釈**を伴うのだ。

「こうなると、一つの主要な点において、W・マクドゥガル教授が正しかったかのように見え始める。というのは、彼が**「意味」**と呼んでいるものは脳によるイメージに関して提示されるもののアニムスによる解釈である、という主張が、アニムスの存在を支持する彼の議論のほぼすべてであるからだ。それでも、マクドゥガルの見解をそのまま単純に受け入れることは困難だろう。強力かつ大いに合理的であるがゆえに無視できない、逆の理論があるのだ。それは、「意味とは**文脈**である」と言明し、特定

の概念の意味とは、その文脈を構成する関連概念の単なる外辺である、という議論を進めているJ・S・ムーア教授によって、最もよく表明されていると思う。

連続理論によって与えられた解答では、ムーアが正しいように思われるが、それでもマクドゥガルが完全に間違っているというわけでもないようだ。

もし意味が文脈によって――結果として伴う連関性によって――与えられるのなら、それは部分的に弛緩した注意の外辺によって与えられるはずである。そしてそれは、我々の物に対する注意がかなり集中した状態にあるとき、その意味に気づくことを犠牲にしてその物の質や形に注目するという事実によって裏付けられる。今、観察者2の注意は、覚醒時の観察者1のそれを取り囲んでたどるとき、我々の理論では、時間1の次元で集中し続ける。そして、集中の変化は、主として空間の三つの次元で発生する。そのため、覚醒時の観察者にとって、文脈とは、主として空間位置と空間運動の関係である。そしてそれは、彼が知覚するものに付ける意味に確実に当てはまる。四次元での注意のほんのわずかに重なっている外辺によって供給される文脈は、観察者1の時間移動、および基層における時間1**パターン**のヒントを示すものである。

これらは皆、ムーアの定義と非常によく合致する。

しかし、我々が想像している自動的な観察者2にとっては、――観察者1が**不在**の

場合に――四次元的な流儀で考えるとき、四次元の文脈は通常空間の三次元のそれと同じくらい明らかな解釈であるはずだ。それなのに、真の観察者にとっては、それは明らかな解釈ではない、まさに四次元的文脈なのである。そしてそれらは、――彼によって――**誤って解釈される**ため、――彼にとって――明らかではないのである。それらは四次元的連想の延長と見なされる代わりに、得体の知れない**三次元的不安定要素**と見なされる。そして、時間1の未来から過去への、注意の後方への移動は、まったく気づかれることがない。その種の解釈は、関係する文脈の外辺の**観察者**による解釈であるはずだ」

ここでは比喩（アナロジー）が役に立つかもしれない。一定量の二次元的な印刷楽譜を読んだ経験を通じて、それらの楽譜を、左から右への連続した注意によってたどられる、一次元的な和音の配列物として解釈する習慣を身に付けた子供を考えてみよう。そのような楽譜を読むとき、彼は領域1を用いている観察者の位置にいる。睡眠中の観察者の位置にいる彼を表すよう比喩を広げるためには、我々は、彼に十分に集中できない視野の焦点を持たせ、その焦点に一度に一つの和音だけが入っているとは認められない状態であると想像しなければならない。しかし、今、和音がはっきりと分離されている

のではなく、互いにかなり密集しているために、それぞれが左右すぐ隣のものと部分的に繋がってしまい、和音を個々別々に見ることができないという結果になっている楽譜を彼が与えられたと仮定すれば、その困難を克服することができる。今は、そのような楽譜を見せられた子供が、いつもの慣れ親しんだ方法でその厄介物を読もうとし始めることを、あるいはそれを彼に強要した習慣が楽譜ではなく心の中にあることを、否定する者はいないだろう。ということは、夢の中で我々を悩ませる三次元的解釈の習慣は、観察された四次元的現象の特徴ではなく、観察者としての我々自身の特徴であるということだ。夢の中で時間1を逆行する注意の動きに我々が気づけないことについては、究極の思考者に定着している解釈の習慣が、このことを説明するのに十分である。楽譜を読むに当たって、新しい行の先頭に戻るときに視覚がさっと通り過ぎる、その途中のものを観察する子供はいない。あなたは（私はそう願っているのだが）この本の最初からすべての単語を読んできており、あなたの視線はページの右端から左に何千回も急速に戻ってきた。しかし、ある行を逆に読んだことは一度もないし、ある行の逆からの様相がどんなふうに見えるのかにさえ注意を払ったことはない。実際、それを試したとしても、あなたはその様相を知覚することはできない。そして、それについてあなたが達成できることを実現するための最短のアプローチは、

後ろから、と言っても、やはり左から右へと――鏡像的なやり方で――書かれた単語を見ることで得られる。そして、その様相に対してあなたを盲目にする習慣は、印刷されたページの中ではなく、あなた自身の中にあるのである。

こうして我々は、自分の注目に対して提示されるものを**解釈することを学んでいる**高位の思考者という興味深い概念、覚醒時間中の、絶え間ない三次元的注意や、その驚くべき連想機械装置部分のすらすらと動く自動的動作を備えた、脳、この彼の追従者であるものに含まれる教育的プロセスという興味深い概念へと至らされる。

これは、疑いなく、昔のアニミストの、まずい物質的器具の助けを借りて最大限の効果を生み出す最上の知性の個人としての「高等な」観察者の概念とは、完全に逆である。しかし、我々の夢の思考の性質によって与えられた明白な証拠から逃れることはできないように思われる。結局のところ、優れた知性のためのどんな能力が高位の観察者に潜んでいるとしても、それは発達を待つ能力なのである。最初は脳が先生で、心が生徒だ。心は、脳に基づいて自身を陶冶することによって、構造と個性を得るための奮闘を開始する。

進化は、ことによると八億年も、脳の発達に向かって進んできた。今日では、マッケンドリック教授が指摘するように、我々の肉体のほとんどすべての機能は、**灰白**

質の十分な栄養状態の終わりに向かって働いている。そして、その自立的で自己発達的な活動とは別に、脳が、萌芽期の魂に、考えることを教える機械としての役割を果たすことは、今や明らかである。*

我々は今、高位の観察者の注意を領域1に集中させ続ける習慣の**起源**は何かを考えるべき状況にある。領域1では、彼はただ三次元領域における単純な三次元的現象の連続を扱う必要があるだけだ。ところが領域2では、彼は四次元的領域における四次元的現象の光景を突きつけられる。そしてさらに、彼はその複製された四次元的現象を持つ。例えば、彼は時間1のすぐ前の出来事の記憶再生をa（二三八ページ初出図10）で見つけるかもしれない。彼にはまた、Gとaの間のどこかに、後に再生された記憶痕跡をもたらした元の出来事もあるだろう。領域3では、基層（二二五ページ初出図9参照）は五次元

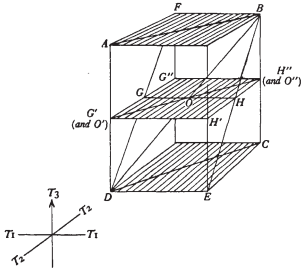


図9

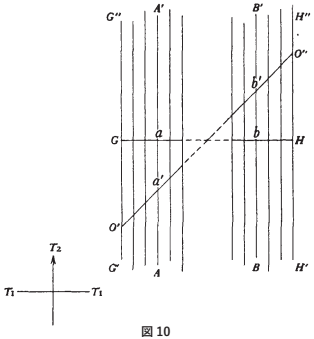


図10

的現象で混雑している（ただし、領域2では、よりシンプルな四次元的形式ですでに表現されていないものは何も含まれていない）。そして、これらの現象は、注意の焦点がより集中されていない場所のため、領域1あるいは領域2のそれよりも強度は下がる。それで、我々がその連続を上へと進むにつれて、提示物の明瞭度はどんどん悪くなり、鮮明さは低下する。

そのとき、幼児にとって、現象が最初にすべて識別可能になるのは領域1においてである。そして彼の注意は、それを向けるものがある場所に留まる。

次に、大人の注意は、領域1の範囲内でさえ、内側から向けられるのと同様、外側からも引き付けられるであろうことを我々は知っている。我々はまた、引き付けるポイントから向いている注意をそらすことは、学校の机でつらい思いをして学ぶ必要があるプロセスであることも知っている。そのため、幼い子供の注意は、大部分が引き付けられるままになるはずだ。そして我々は、注意を最も引き付けるのは、より未熟な肉体的快楽と肉体的**苦痛**であることを知っている。これらは領域1にのみ存在する。

＊**（原注）**……推論は、回顧的な仕事――過去の経験に照らして現在の状況を判断すること――である。直感は、領域2の単純な検査のパターンにより類似している。前者のプロセスは、後者を犠牲にして取りかかられ、冒険の人生に付きものである。

従って、苦痛は純粋に生理学的なもの以外の貢献を果たす。

最後に、子供は、領域1で、そうした快楽を得たり苦痛を避けたりするために**干渉**できることを、十分に早く学ぶ。そしてそれは、かなり速やかに、人間のひときわ大きな目的になる。

＊　＊　＊

この章の前の方を再検討すると、心――自由に使える複雑な構造の機構の、最も基本的な側面のみを認識できる心――は、我々が形作ろうと試みることができる何らかの**構造的**概念の外にあるものとして、常に立ち現れるはずだということになる。

＊　＊　＊

本書の第一部において、我々は、注意の内部的**方向づけ**が高位の観察者に帰されるものなのか、それとも純粋に自動的な脳の内部的条件に端を発すると見なされるものなのかについての疑問に取り組むことは、慎重を期して控えておいた。もし高位の観

察者を責任ある代理人と見なすならば、注意の集中が記憶痕跡の形成に著しい効果を及ぼすことは分かっているので、干渉の力を備えたアニムスの地位を彼に与えるべきであるということに触れるだけで満足しておいたのだ。

しかしながら、そのような注意の方向性――そのような干渉――が高位の観察者に帰せられるはずだと示せれば、軽率な思考者にとってあり得そうな罠を避けるためには最善の道となるだろう。

実際のところ、問題は、より高い領域において、注意が、領域1の「脳のエネルギーの最大流量」に類似する、何らかの基層の特徴と一致するはずだと言えるかどうかである。

我々は、前に、この分析が、何らかの特定の領域における特定の現象に、注意が己自身を向けるよう**強制される**法則はないということが明らかにされたのを見た。高位の観察者に帰せられる注意は、分析によって、注意に提示されたものとは、はっきりと区別されることが指摘された。すなわち、基層の内容と区別されるのである。今、「脳のエネルギーの最大流量」、またはより高い領域においてそれに類似したものは、基層の特徴であり、それ自体は「注意の焦点」とはまったくの別物である。理論上は、二つのことは区別されているかもしれない。そして、この理論的な区別は、実際的で

真の区別であり、単なる形而上学的な些事というわけではなく、「覚醒時の実験」によって示されている。というのは、そこには一つのものだけが存在し、それ以外は存在しないからである。

この覚醒時の実験の状況と、夢で得たそれらの間には、一つの大きな違いがある。前者の場合、領域1の注意の停止は、領域2の注意を解放し、**身体維持的脳活動の停止を伴わない**。目は、開いていて、視野の異なる部分で強度が異なっている光刺激を脳に伝えるかもしれない。さまざまな音量の雑音が耳を襲っている。脳の行動は、関連する領域を氾濫させ、注意（これは、見たように、まさに覚醒時の実験の核心である）が断固として拒まれるはずの、多くの関連イメージを提示することである。

これは、高位の観察者の注意の焦点と、それが習慣的にたどるかもしれない基層の線との間の理論的な区別が本当のものであり、またそれゆえに、そのような焦点はそのような線から切り離すことが常に**可能**であると見なす必要があることを示す。そして、そこで二つのものが一致する場合、高位の観察者は、その一致に対する受動的あるいは能動的な従犯と見なされるはずである。

もちろん、これらはすべて、高位の観察者は、やや曖昧に**「自由意志」***と呼ばれるものを行使する潜在能力のある個人であると認めることなのだが、彼がその能力を発

達させたとどの程度言えるかは完全に別の問題である。

彼が領域1で注意を方向づけることができること、またそれをしていることは、今や十分明らかだ。しかし、領域2での彼のコントロールは、その範囲での彼の理解力と同じくらいに制限されているように見える。それでも我々は、彼の夢を通して、彼の初歩的な知性が、観察しているものに解釈を加えることにおいて非常に積極的であるということに注目することもできる（実際のところは、先にも述べたように、彼は誤ったものを付け加える達人なのだが）。そして、彼が、自分の注意が焦点を合わせることになるさまざまな提示から発生した夢**物語**――個人的な冒険のドラマ――を織り上げる際、この解釈の機能を使うのは、周知の事実である。もし彼が、仮にこの領域で自分の注意に方向づけすることができるとすると、彼はその物語の趨勢を修正することができる。実際、そのドラマを自分の好きにするために構築することもできるのだ。彼は極めて豊富な材料を持っている。見てきたように、彼はそのコントロールを行使することが潜在的に可能であり、私自身の経験から判断するに、彼はわずかな

＊**（原注）**……「自由」とは、動機なしに駆り立てられるものだと思う者は誰もいない。しかし、観察者2の動機が、状況によっては観察者1のそれとはまったく反対である可能性もある。ここには非常に明白な「後退」がある。

範囲でそれを行っており、その点においての彼の有効効果達成率は練習で高まるような気がする。思うに、大人は、子供ほど自分の夢のなすがままになっているわけではない。彼らは（私は確実にできるが）、時に楽しめない状況を変えることができる。

しかしながら、これらは精神分析医対象の問題だ。だがおそらく、我々が四次元的文脈を「現在」全体として解釈すること――四次元的に考えること――、そして注意の動きを使いこなすことを学んだとき、領域1よりも領域2の方がずっと興味深いことに気づくかもしれない。とはいえ、観察者1の経験に対する注意の練習実践に二十四時間中十九時間も費やしている限り、理解力とコントロールの発達などほぼ起こりそうにない。

そもそも、知性やコントロールを達成し得る以前に、我々は生きなければならない。我々は、自分が死にかけていて、その新しい状況に不慣れでどうしようもないことに気づいていない限りは、眠らなければならない。そして、より広い理解に進む望みを抱くことができる以前に、我々は死ななければならないのだ。

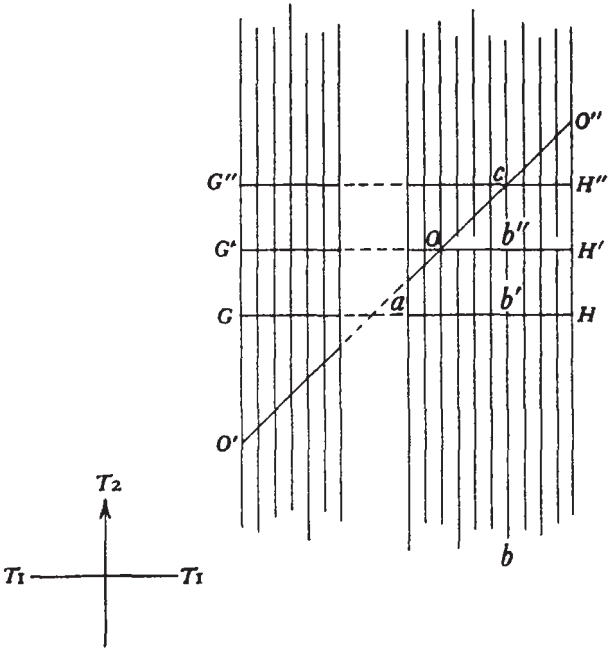


図 12

【訳注】線分ＯＨ′の上に伸びる垂線のうち、３本がＯＨ′に接していないのは、印刷のかすれではなく、意図されたものであるので注意。本文 p.270 参照。

第二十四章

今、図12に示される状況を考えてみよう。（絶対時間の）領域2がGHにあるとき、aとHとの間の基層は、時間1の未来部分すべてにおいて、三次元的な脳の状態の順序づけられた配置から成る。夢の観察者である思考者――現在としての領域2の観察を含む――が、例えば、その瞬間に、それら未来の状況の一つb′を観察するとする。覚醒後、領域2がG′H′にあり、領域1がOにあるとき、この思考者はOに干渉する。その干渉は、夢の記憶によるものと思われる。この本に書いたすべての語が、元々は私の同じような夢の記憶による干渉であるように（ただし、図は、この観察者の、ある程度訓練された心の別の活動に源を発する干渉行為の結果を図解するのにも、同じようにかなり役立つだろう）。今我々は、そのような干渉行為が、観察者1の未来経歷の一部を完全に変更する可能性があ

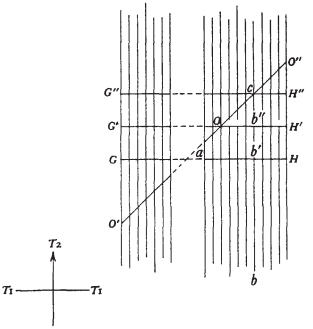


図 12

ることに注目しなければならない。サウサンプトン行きの急行に乗らずにドーヴァー行きの列車に乗ると、ニューヨークの警官に警棒で殴られる代わりにロシアの政治家に首を切られるところに導かれるかもしれない。そのため、彼はｂｂ″――夢の中で知覚される出来事――によって表される脳の出来事に遭遇することはないかもしれず、代わりに領域２がＧ″Ｈ″にあるとき、全然違った出来事ｃに遭遇するかもしれない。

平均的な文明人が過ごすような生活においては、干渉が、未来の経験を変えるのに何らかの非常に大きな効果をもたらすことはめったにない。そのため我々は、あまりにも多くの型にはまった生活を送るのである。ある者は、月曜日に土曜日のマチネのチケットを取るかもしれず、それに続く数日間で無数の小さな干渉行為を行うかもしれない。しかし、それらは必ずしも、土曜日に彼が座席に座るのを妨げたり、彼が月曜日の夜に夢で見たかもしれない場面をステージ上に見ることを妨げたりするわけではない。従って、Ｏでの干渉は、ＯとＨ′の間の出来事を変更するかもしれず、ほかのものは変更されないままにするかもしれ

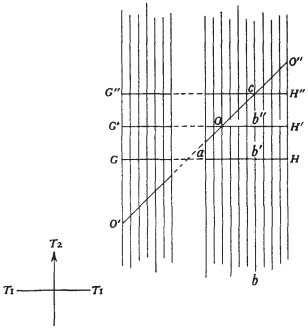
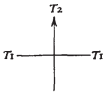


図 12

ない。実際、もし変更をOH′のすぐ上の垂線の途切れで表すなら、結果は図に見られるようなものになるだろう。

しかしながら、それら垂線における途切れは、（絶対時間で）観察者1がOに達する前に存在する固定された基層の特徴としてではなく、（絶対時間で）観察者がそのポイントに達する瞬間に起こるその基層における**変化**として見なされることは、注目すべきである。これは、途切れが、干渉によるものとして表現されていること、また夢の中でb′で知覚した出来事を高位の思考者が解釈する**結果として生じる**ことを意味している（我々は、直前の章で、そのような解釈は、基層のいかなる種類の文脈としても痕跡としても、表すことができないことを見た）。途切れを（絶対時間で）移動する時間地図での既存の固定不変部と見なすことは、高位の思考者が、古い出来事の夢を見たかどうかにかかわらず、新しい出来事に遭遇することを意味するのであろう。途切れは、**夢**の結果として起こるわけではないのであろう。

我々は、直前の章で、注意のすべての動きが、高



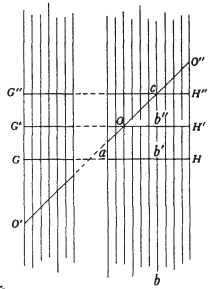


図 12

位の観察者側の受動的な承認または積極的な干渉を必要とすることを見た。そのような動きが、最大の脳エネルギーの流れを表すその基層線からの注意の逸脱を含む場合、図12で示されるものと同様の基層変化を伴う積極的な干渉がある。しかし、脳が睡眠状態で、推論への補助として使用できないときに干渉者が示す知能度を考えると、脳の思考を伴う干渉が、問題の機械が彼自身のある目的に向かって動作するという主張をはるかに超えるプロセスを処理するとは想像できない。実際、干渉者は、ピアノの助けを借りて作曲する熟練した音楽家ではなく、楽器の複雑な演奏への干渉が一枚の穴あきロールを別のものと交換することに限られる、*ピアノラのアマチュア・ユーザーに似ている。

＊ピアノラ……米国製の自動演奏ピアノ。ピアノロールという、パンチカードのように穿孔（せんこう）された紙を巻いたものを取り付けて使う。演奏は、足踏みオルガンのような送風ペダルを繰り返し踏み続けるだけである（ペダルを踏むペースはテンポとは関係がなく、テンポはレバーなどで指定すれば機械がコントロールしてくれる）。ストラヴィンスキーに『ピアノラのための練習曲』という曲がある。

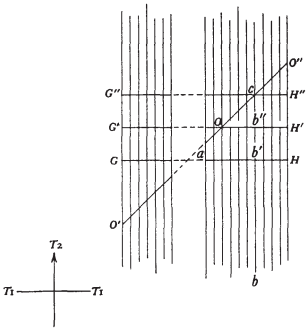


図 12

基層の変化がすべてOH′に沿って（絶対時間で）瞬時に起こることは、より習慣的な三次元的哲学の見地から干渉の効果を考えれば、十分に明らかである。別のありそうな出来事の発生を防止するために一歩を踏み出すとき、遭遇するその出来事（ただし離れた）の確率が、その一歩を踏み出した正確な瞬間に変更されることを否定できる者はいない。それを四次元的哲学の言語に翻訳すると、それは、彼が（絶対時間で）cに達したときに観察者1が出来事b b″に遭遇する確率が、彼が干渉する「正確な瞬間」に変更されることを意味している。その「正確な瞬間」とは、O′O″に沿った移動を計測する時間の瞬間で、その時間は時間3——図の絶対時間——である。従って、（絶対時間で）観察者1がOに達するときに途切れが発生し、それは（絶対時間の）領域2がG′H′に達したときである。OH′間の変更された進路は、そのすべての部分において、前とちょうど同じくらい完全な機械的連続であろう。

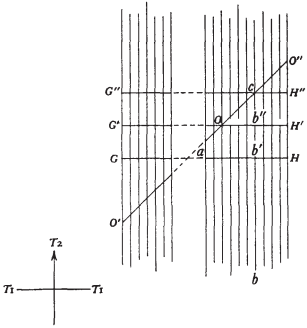


図12

［OH′に沿った基層の変更は、時間3における線の

持続を表す（紙に垂直な）平面として、その線のその延長にも影響を及ぼさねばならないことは明らかだ。その平面の「未来」部分は、線の変化とともに変化しなければならない。時間の全次元において、Ｏの先のすべての未来を通じても同様である。その結果、我々がそのすべての部分で選ぶことができる絶対に確実なＯの先の経路は、連続する時間地図のどこにもない］

＊　＊　＊

第二項を含む限り連続を検討することは必須で、そうでなければ連続の関係は完全には明らかにならないだろう。しかし、より遠い項を考慮することによって達成される実用的な目的は、ない。あなたは、観察者と、第三項で明らかになる観察されるものとの間に、新種の関係はないということに気づくことだろう。さらなる分析を実施することは、ただ高位の観察者と思考者を後退させることを意味するだけであり、それは、彼固有の役目や、追加の反応物の投入や、基層の内容物への反応や、その観察者がより鋭敏な視野を得るためにこれらを使う場合以外の無意識など、もろもろすべてを伴う。

そのときは、観察者2を含むものとしての世界を描けば十分だ。つまり、図8である領域3のように、である。これにより、完全な連続の関係が得られるのだ。

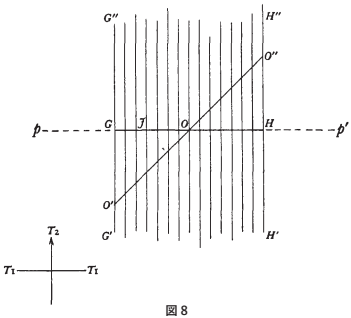


図8

第二十五章

観察者2は、観察者1の（時間1においての）「先」にあるものを見るので、そこには彼にとって見るべき何かがあるはずである。そして、そのように確実にそこにあるものが何であれ、それは時間1を用いる観察者1の視点からは「事前に決定された」ものであるに違いない。すると、疑問が生じる。この「何か」とは何なのか、そして観察者1は、どのように彼の時間1の「今」に干渉することによって、それを変えることができるのか？

本書*の以前の版および重版では、その疑問は、現代物理学を扱い、サー・アーサー・エディントンの、「作用」として知られる四次元的な物理量（すなわち時間を乗じたエネルギー）と「確率」との同定という線に沿った章で回答されていた。しかしながら、最近、連続理論がより明確な方法で物理学の領域に侵入し、その結果、先の説明はかなり単純化できることが証明された。とはいえ、これら新しい展開の十分な説明

＊本書の以前の版〜……第二十五章は全面的に書き換えられた。ここでは底本である一九五八年版の本文のほか、書き換えられる前の第三版の本文もこの後に訳出しておいた。

のためには、私のフェイバー・アンド・フェイバー社刊『連続宇宙』を現在の読者に参照してもらわなければならない。思うに、後の講義のテーマとなった考察で補足された一般的理論が、今は次のようであることをここで説明すれば十分だろう。

観察から記述されるいかなる世界も、これまで述べたように、記述している観察者に**関連している**はずだ。従って、それは、前記の観察者の記述を受け入れる者によって、その観察者を含むことができるものとして考えられない限り、現実との一致に達さないはずである。その結果として、あなた、究極の観察者であるあなたは、常に、統一性のある心の絵を描くことができる世界の外側にいる。もしあなたが異なる記述をするほかの観察者たちの存在を仮定するならば、**あなたとほかの観察者たちは、そのように共同して記述された世界に含めることができない混成観察者を一緒に形成しているはずだ**、ということになる。あなたは、その混成観察者の一部として、あなたの個性を保持している。

あなたが時間1に沿って配置された「感覚与件」として記述する心理現象の世界は、あなたの脳の生理学的偶発事として、仮定されたほかの観察者によって記述されるだろう。しかし、あなたと彼らは、あなたと彼らが各自でまたは連帯して記述できる世界――脳有機体の世界のような――に、各自でも連帯でも含めることができない。

あなたが描く絵は、あなた自身と関連した現実の世界を示している――すなわち、その世界があなたにどのように影響を与えることができるかを示している。もし多くの観察者の複合的取り組みとして描かれたなら、それは物質世界がどのように心全般に影響を与えることができるかを示す。現れる最も重要な事実は、あなたが不滅の混成観察者の不滅の一部であることが判明するということである――これは次の章で議論する問題の一側面である。

あなた（またはあなたとほかの者）が記述する物理世界は、時間1において決定論的なものとして現れる。しかし、それは移動している時間1の「今」において、あなたの観察者1との接触点があることを証明している。あなたはそこで干渉することができるし、すべての科学実験はそのような干渉なのである。これは**「作用量子」**として現代物理学に知られている、その非常に奇妙な量の存在によって可能となる。そのような干渉の結果として、観察者1の前に伸びている時間1は変更される。だが、そんなふうに変更されると、それは干渉ポイントから始まる決定論的な連続を再び形成する。あなたの移動している観察者1が、ほかの者があなたの脳と呼ぶものがその構成部分に分かれる四次元的基層のその場所に到達すると、あなたの干渉の可能性は絶対時間において消滅する。

【訳者注：以下は旧第二十五章。底本にはもちろん存在しないが、参考までに】

物理学は、相対性理論家の大勝利が顕著な影響力を及ぼし始めたのよりも少し前に、非常に重大な二つの衝撃に苦しんでいた――実際、あまりにも重大すぎて、被ったダメージは今でさえ十分には確認されていないほどである。その第一のものにおいて、物質は、すべてのものの中で最も根本的なものとして何世紀も続いた後、明らかに客観的宇宙の真の基礎であることが発覚した**「電子」**を残して、脇に押しのけられた。しかし、第二の衝撃は、**「量子」**と呼ばれる奇妙な実体の発見から生じたもので、さらに著しい状況の変化をもたらした。

量子は、長い間（数学・物理学表現以上に具体的なものは何もないと思われていた当時でさえ）、その種のものの中でも並外れて最も基本的なものと認識されてきたある物理量の実在の原子と、何らかの謎めいた方法で対応するようにように見えた。この物理量は**「作用」**と呼ばれる。習慣的な意味での「作用」と混同してはならない。それは運動エネルギーに時間を乗算するか、運動量に空間を乗算するといった奇妙な計算を含んだ量である。だが、一般の読者は、これら非常に奇抜な式の意味について

頭を悩ませる必要はない。物理学の現況においては、「作用」によって示されるもののイメージを描こうと試みる者は皆、実際のところは困難を探し求めているだけなのだ。門外漢は、その語は単に、知られてはいるけれどもまだ未確認の基本的実体を意味しているということで納得するように、と強く助言されることだろう。

「作用とは」、エディントン教授は述べている、「一般に物理学の実世界において最も基本的なものと見なされているけれども、永続性の欠如のために、知性はそれを不問に付す。そして、作用の原子性は一般法則であり、電子の出現は何らかの形でそれに依存していると漠然と信じられている。しかし、作用の量子論の正確な公式化は、これまで物理学者たちを困惑させてきた」

しかしながら、連続理論の観点から「作用」の原子を考えるなら、我々はそれを（いわば）時間1に沿って点在し、時間2に持続している小さな実体として――すなわち、領域2の現実的な実体として、領域1の電子と同じくらい現実的なものとして――考えなければならない。

量子の発見より前に、「最小作用の原理」と呼ばれる原理が、物理学という科学の非常に基礎的な概念の一つとしてしっかりと確立された。その原理は、「質量」を持つ物体群が、時間においてあるグループから後に別のそれに変化するときにたどる経

路に関するものだ。そして、それらの経路は、「作用」（時間量を乗じたエネルギー）がその状況で可能な限り小さくなるようなものになるだろうと定められる。従って、この原理は予言的な応用が可能である。

予言的であると主張できる、もう一つの精密科学がある。それは、たとえ機械的な因果の法則がその問題に含まれるにしても、計算ではそれを確認する手段を持たないと考えるという点、そしてそのようなものすべてを無視して、「確率」という概算によってその結果に到達するという点において、物理学とは異なる、純粋に数学的なものである。物理学は、気体を構成する分子それぞれに「最小作用の原理」を適用することで、それらの未来の状態を予言することができる。この別の科学――「確率」の数理科学――は、「最大確率の原理」と呼ばれるものを用いて、同じことを完全に正確に予言することができる。普通の人は、何らかの未来の出来事に関することを口にするとき、無意識にこの科学を用いている。「有利な機会がかなり多いので、それが起こるのはほとんど疑いないことだ」という具合だ。件の科学では、未来の出来事はすべて「確率」と見なされ、それらについてあなたが告げられるのは、確率の度合いである。これが発生を確実にするほど大きい場合、その科学は物理学と同じくらい真に予言的になる。

この数理科学の説明者にとっては、宇宙の未来の状況は一つ、たった一つしかない――現在の状況すべてを考えると、それは「最大の確率」を有する。物理学者にとってもまた、宇宙の未来の状況は一つ、たった一つしかない――現在の状況すべてを考慮に入れると、それは「最小の作用」を伴うだろう。

想定される未来の状況は両方の科学にとって同じであるので、我々はここで、明らかにまったく異なるルートによって一つの同じ結論に導く二つの原則を検討していることになる。そして我々は、これら二つの原則が、宇宙の構築における単一の根本的な原則に関して、ただ異なった方法を取ったにすぎないはずだと疑うに足る理由を持つべきである。

さて、数理物理学の領域を探求しているエディントンが、「確率」と「作用」両方において、ある非常にユニークな特徴が明らかであることにたまたま気づいた。これは二つのことが関係しているだけでなく、その関係はある非常に明確な数学的性質のものであるはずだということを示唆した。それから確認がなされた。この数学的関係は、二つの「原理」を考慮に入れることなく達成された。しかし、それをそれらの原則の数式に適用することで、彼は、それが実際には「最大確率の原理」を「最小作用の原理」に、また**逆もまた同様に**変換することを見いだした。従って、それらは単に

一つの、同じ根本的事実を表現する二つの異なる方法にすぎないということになった。

要約すれば、エディントンは、「作用」を「確率」の「関数」と呼ばれるもので分類する。「作用とは」、彼は考える（一般読者は数学の理解について心配する必要はない）、「存在する世界の状態の、統計的確率の対数を引いたもの」である（「存在する」とは、その場所が過去・現在・未来のいずれであるかに関係なく、考慮される時間における場所に存在するという意味である）。

読者は対数については何もご存じないかもしれない。だが、文中で想定されているありそうな「世界の状態」とは、ありそうな**「作用」**の状態のことではない、ということは理解できるだろう。というのは、もし「作用」の状態のことであるなら、この記述は、「作用」とは、作用自体の状態の、統計的確率の対数を引いたものである、と主張するだろうからだ！　では、「作用」の世界ではないとすると、エディントンの「存在する世界」とはどんな世界を意味するのか？　その答えは、（エディントンの同定は、「作用」が最も根本的な実体と見なされることにかかっているため、）「作用」よりも**根本的でない**特定の実体から成るものと見なされる世界にすぎない、ということになる。

その点を取り決めたとき、我々は、その同定が非数学的言語で表現されたときに何

を意味するのかを検討する立場にある。

そもそも、エディントンは時間次元主義者として書いていること、そして、彼にとっては、作用の構成単位は絶対的な、現在の宇宙に存在する実体であるということを、念頭に置いておく必要がある。一方、「確率」は、時間を単なる抽象概念と見なす科学で用いられる表現である。従って、それが念頭に置いている「ありそうな」未来のグループは、エディントンのものよりも少ない次元の世界に属する特定の実体グループである。

それゆえ、その同定は、二つの科学を調和させる声明である――一つは三次元的実体のありそうなグループを扱い、もう一つはより高い次元の実体の存在グループを扱う。そしてそれは次のことを意味する。我々が（三次元的科学の観点から考えて）想像上の時間の未来に最大確率の出来事があると考えるときはいつでも、（何らかの時間次元科学の観点から考えたとき）現在の存在する時間領域に、最小作用の条件に関するものとして配置された作用の構成単位（より基本的な実体の実際の配置）があることを考慮しなければならないのだ。

我々にとっては、「ありそうなグループ」についての記述が、我々の領域1を現在の存在する世界と考える物理学者が「物」と考えるであろうものに関する記述である

ことは、すぐに分かる。一方、対応する「作用」に関する記述の方は、我々の連続のより高い領域を現在の存在する世界と考える物理学者が物と見なすであろうものに関する記述である。

では、観察者1が、彼が観察している三次元世界に干渉していると考えてみよう。領域1の物理学で表現すると、常識的な言語でもそうであるように、これはその物質系の**ありそうだが想像にすぎない状態**の単純な変更になるだろう。領域2の物理学では、その干渉を、四次元の観察者2による**現在の、そして観察可能な作用**の変化として記述するべきであろう。

＊　＊　＊

現代物理学――量子論と相対論の両者を含む――と連続理論との関係は、フェイバー・アンド・フェイバー社から出版された『連続宇宙』と題された本で簡単に説明されている。

第二十六章

観察者の干渉の力が、自分を完全に自分の運命の支配者にするのに十分ではないということは、恐れるべきである。というのは、同じような能力を用いている別の観察者がいるからだ。我々の友人が就寝し、自分の未来の幸福な可能性を夢見ている間、この干渉マニアに苦しんでいる敵は、家に火を付け、そうなったかもしれない可能性を減少させる方向に踏み出すかもしれない（彼らはもちろん、常に時間2の過去の基層にある実体のままだろうが、実体が領域1に遭遇することは決してない）。そして、たとえ観察者が自分の時間1の終わりを別の観察者たちの干渉に負っているとしても、彼がその始めをほかの何にも負っていないことはかなり確実である。生まれる前の彼は、人生行路の未来の可能性以外の何ものでもないであろう。

このことは、異なる観察者たちの領域がどのように関連しているのか、という疑問をもたらす。

そのような観察者たちが干渉できるという知識は、彼らそれぞれの領域1が、時間1に沿った動きにおいて一定の範囲内に保たれるはずだということを理解する助けに

なる。というのは、もし観察者Aの領域が観察者Bの領域からだいぶ遅れたために、Aの干渉がBの基層に影響を与えるのをBの**後ろの**ポイントで許したとすると、そのときBは、自分の領域1において自分が経験したことが不思議にも変わっていることに気づくだろうからだ。実際には、彼は、やや後ろの、面識のないAによって殺害されて、不思議なことに気づいたら自分は死んでいた、などということになるかもしれない。そして、そういったことは我々の経験では起こらない。

今、全人類の「系図」の平面図を描き、その紙の一方の次元を空間とし、もう一方の次元を時間1として用いると仮定しよう。結果は、結婚を表す多数の交点と、誕生を表す多数の分岐を持つネットワークとなるだろう。そしてあなたは、そのネットワーク内で、自分が選択した任意の二点間で途切れることのない連結をたどれることに気づくだろう。人類は、皆そういうふうに関係しているのである。

この図が、関係している個々人の**脳**だけを表していると仮定するならば、それは、我々が単独ではなくすべての人間の観察者を一緒に扱っているような時間分析においての、最初の、第一段階の時間的延長となるだろう。

我々はここで、かなり興味深い問題に触れておくのがよさそうだ。線の間に広い空間的隙間のあるこの**ネットワーク**は、普遍的な領域2に最も近似したものなのか？

あるいは、その隙間を含んでいる、あらゆる空間を満たす領域2があるのだろうか？

この普遍的な、「系図」の脳の基層ネットワークを、もう一度考えてみよう。その一部は、図13の接続線AB、BC、BDによって遠近法的に表されると考えることができる。

その三本の線は、平面AA′B′B、BB′C′C、BB′D′Dの形で時間2を上方に持続するだろう。相対論への考慮を無視すれば、それらの平面が、それぞれの反応物AE、EC′、ED′と交差し、また領域2の（簡単にす

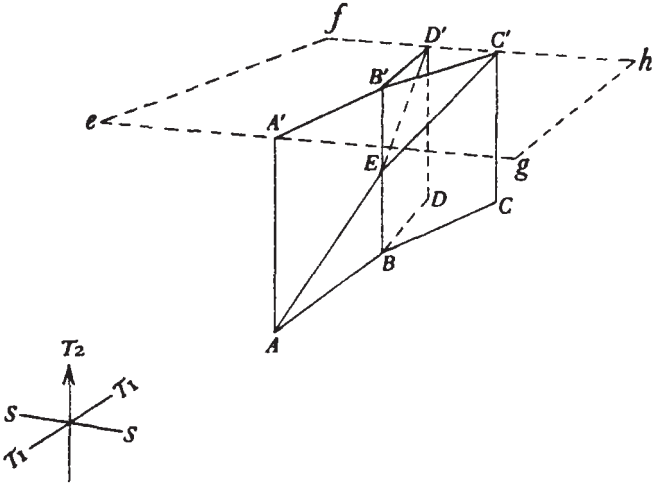


図 13

るため、図のいちばん上に示した）A′B′、B′C′、B′D′とも交差し、領域2のネットワークA′B′C′D′の一部を構成すると言うことができる。これで、個々の観察者2の線は、基層図の形状に一致するはずであることが分かる。例えば、水平な時間2の平面がEにあるとき、その点での干渉が基層の傾きを変更し、その結果B′C′とB′D′がBCとBDよりも小さい角度で互いに離れるならば、そのときは個々の観察者2の線は合わさって閉じるはずである。ところが、個々の観察者2は、思い出してほしいが、その領域の基層内容**ではない**のである。彼は、独立した実体であり、それらの基層内容を観察する者であることを、分析が示していた。それでは、あらゆる空間の曲がりと、あらゆる空間の位置における干渉的変化を通じて、なぜ彼はそれらと結び付いているのだろうか？

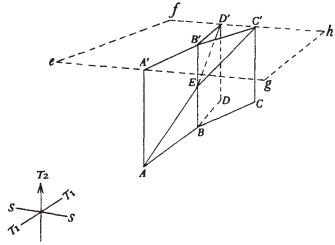


図13

これは、個々の観察者2たちを、基層と、図13の平面efhgに似た全般的な領域2を持っている、全般的な空間充塡観察者2との交差と見なすことによってのみ、説明可能である。そして、この全般的な観察者2と図中のさまざまな反応物との間の交

差の場所が、個々の領域1を構成するはずである。*

今の我々は、個々の観察者それぞれに属する連続における高位の思考者が、機械的な脳の思考という観点から考えることを学んでいることを見てきた。それで、もし我々がこの段階で止まるなら、全般的な観察者は、彼の空間充塡範囲全体にわたる自意識と心の底にある未知の要素であるはずで、彼は個々の思考者の接続網として、広く離れた場所場所で自分の差別化を図っていることになる。それが何を意味するのか、我々はすぐに理解するだろう。

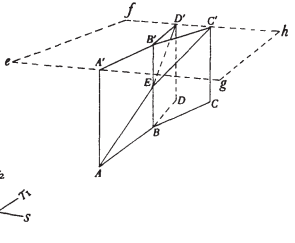


図13

＊**（原注）**……相対論の双曲線的世界の平面図では、個々の観察者1は、彼らの「軌跡」が平行にならない限り、すべての共通直線のいずれにもいない――今述べたことは、この惑星の住民に関する限り、実際のところ事実である。しかし、すべての場合において、これらの観察者1は、光の線の間の、斜めに交差する「砂時計のようにくびれた」範囲内に分布している。この範囲はその地図を通過し、その移動方向の問題は第二期相対論を導入する。

【訳注】ここで言っている「平面図」とは、おそらくミンコフスキー時空図を指しており、「光の線」とは、その図の光円錐（こうえんすい）の線を指していると思われる。

ここで我々は、最上位観察者の全般的領域1が、個人の体の線が親の幹から分かれることになる、脳の基層ネットワークのそのポイントに達すると、**個々の**観察者1が出現することに注目するのがよさそうだ。

今、この最上位普遍的観察者の領域2は、系統的に繋がれた脳の基層全体の時間1の延長を包含しているので、彼の注意は、その時間1の長さ全体を通してそのネットワークを移動することができるはずだ。

さらに、ある観察者2によるあらゆる干渉は、この最上位観察者の干渉であるはずだ。

従って、この最上位普遍的観察者は、現段階では、単なる機械的思考の基礎となる自意識、意図、および干渉のすべての源泉であると要約することができる。そして、脳の基層との交点において、彼は時間のあらゆる次元ですべてのありふれた意識を持つ生命体という形で具体化する。また彼は――そのように自身に形成されたネットワークの統一のためと、そのネットワークの大きさいっぱいに広がるべき注意の能力のために――、系図的に繋がれた意識的生命全体という独特な**擬人化**――統合的な観察者――を自身に含むはずである。そして、この「擬人化」は、彼の領域2の莫大な時間範囲と空間範囲によって、またその領域の思考者としての彼の経験の限りない年輪によって、我々のものよりもずっと大きくされたスケールで考えることができるは

ずである。

我々は、自分たちの主要な任務から、神学者による探求領域のように見える場所へとさまよい込んでいる。そういうのは彼に任せて（彼はその場合に合った驚くべき数の**格言**を見いだすことだろう）、我々はふさわしい仕事に戻るとしよう。

本書は、宇宙論としての連続理論の概略を紹介する以上のことは意図していない。そのような理論はすべて、心理学的、物理学的、神学的、目的論的側面を持っていなければならない。そのそれぞれについて、我々は簡単に見てきただけだが、それでも新しい分析方法によって切り開かれた研究範囲がどれほど大きくてどれほど有望なのかを示すのには十分な長さであった。とはいえ、これらのいくつかの範囲への適切な探求は、どの箇所でもより直接に関係している専門家の分野と見なされてきた。

しかしながら、普通の人は、連続理論をいかに**自分自身に**影響するものと見なすかについての要約された記述のようなものを期待することだろう。そのような記述はいつも適切とは限らない――厳格な批判的精神を持つ者にとっては十分明らかであろう理由で。それでも、今回の場合は、普通の人に直接影響を与えるすべての点を本の記述過程で触れなければならなくなったのだが、それは、重要な箇所で議論を中断したり、いわば宙ぶらりんの状態で理論を放置したりすることなく、それらの点の考察を

省略することが、たまたまできなくなったからなのである。先立つページ全体を通じてばらばらのパラグラフですでに述べたことを、ここで一箇所にまとめても支障はないだろう。

というわけで、ともかくも概略を書いておきたい。

1　連続理論は、「魂」のような理にかなったものの存在を明らかにする――絶対時間において明確な始まりを持つ個々の魂――**時間の別の次元にあって、その不朽性が、生理学者の時間の次元においての個人の明確な終わりと衝突することのない魂、**また、脳活動があらゆる現世的経験・連想的思考の形式的基礎を提供するという生理学者の発見を、その存在が無効にすることのない、そういう魂を、明らかにするのである。

2　その理論は、この魂とその精神的発達の本質が、進化、誕生、苦痛、睡眠、および死についての「理由」への満足のいく解答を我々に提供してくれるということを示している。

3　その理論は、単なる機械的思考の根底にある自意識・意図・干渉のあらゆる源泉である最上位普遍的観察者の存在を明らかにし、その者は自身の中に、系図的に関連したあらゆる生命の擬人化、および我々個々の能力をはるかに超えるような人間

的思考と予見の能力を持った、より普遍性の低い観察者を含んでいる。最上位観察者の中には、我々という個々の観察者、ならびに我々が枝であるその木が生きており、我々という存在を有している。しかし、我々には来たるべき「吸収同化」はない。我々はすでに同化されており、その傾向は分化へと向かうものである。

4　その理論の、超越的肉体のすべての肉と超越的精神のすべての心が一致するという証明は、あらゆる倫理学理論に必要となる論理的基盤を提供する。

5　その理論は、夢を説明する。予言を説明する。自意識と「自由意志」を説明する。同時に、普遍的な表象領域と個人的なそれとの間の関係の開示に関して、漠然と「テレパシー通信」と呼ばれているものの説明に最初の必須条件を提供する。

6　その理論は、現代物理学とも現代生理学とも矛盾することはない。

このすべてを達成可能な理論は、軽視されるべきではない。

第六部　批評家への返信

『時間の実験』は一九二七年に出版された。科学畑の人たちには甘やかしと言えそうなほど寛大に受け入れてもらい、その理論は意外にも一般マスコミによる継続的な注目対象となってきた。しかし、形而上学の世界には、これにそうとう強い疑惑の目を向ける人もまだ存在している。「無限後退」の入り口へと敵対者を追い込んだことを証明できる論争者に勝利が授けられた可能性を、非数理哲学の古風な法則が認めたことを思い出すと、これは驚くことではない。というのも、ここにあるのは、哲学には誤りがあったということ、また無限後退とは、結局のところ心とその客観世界との関係の適切かつ有効な説明であるということを、きっぱりと断言する本だからである。

この特定の哲学者たちにとっての問題は、夢の予見の証拠を受け入れたいと思う一方で、あらゆる無限後退は「悪」であるはずだと教え続けることであった。彼らは明らかに不可能を試みている。とはいえ、その努力はなされているため、私は以下でそれを説明してみることにした。まあ、もし私がそれをもっともらしく聞こえさせるのに失敗したとしても、読者は私を責めないでいただきたいところである。

まず最初に、「現在」の四次元的見通しと五番目の次元としての時間とを持った、四次元的観察者が受け入れられる（夢の予見が認められているので、これは避けられない）。しかし、この観察者の承認は純粋に経験的な根拠に基づいてなされ、今のところ後退は認められていない。次に、我々は覚醒時、見たところ三次元的な出来事の単純な連続を原則として知覚する、というこれまた経験的な事実を説明する必要がある。もちろん、もし受け入れられた四次元的観察者が光速で四次元を移動したならば、それは彼の四次元的な長さをゼロにまで縮ませることになり、そうすると時間1の「今」に注目しながら動いている三次元的観察者に対して彼を縮小させることになるということは、注意すべきである（この「今」は、『連続宇宙』に示されたように、光速で移動している）。だが、その場合、夢に表される四次元的見通しを達成するためには、彼は四次元的移動の速度を非常に遅くする必要があるだろう。そして、この種の可変速度を持つ単独の観察者に対する難点は、克服することができない。目を覚ましたとき、彼は覚醒したままだったほかの観察者たちに追いつくために、光速よりもはるかに速い速度で前へと疾走しなければならないだろう。ところが、彼はほかの者たちに追いつく**前に**光速に到達し、（通常の三次元的観察者になり、）その瞬間の彼の干渉は、多くの場合ほかの者たちにとって驚くべき奇跡と見なされるような効果を

生じることになるだろう（すなわち、彼は彼らの過去を変え、よって彼らの現在の状況全体も変えることができる）。単独の観察者が、自分の前方の四次元的広がりの一部をカバーするため、「今」の速度で四次元に沿って移動し、睡眠中に注意の焦点を広げるという概念は、彼の移動速度が彼を三次元に対して縮小した状態に保ち、そのような前方の注意の拡大を防ぐという事実によって禁じられる（また、心理学的な観点からは、例えば三日間をカバーするように広げられた「焦点」を持つ注意は、ぼんやりしたものしか知覚できないことにも注意すべきである）。そういうわけで、夢の予見と通常の覚醒時の経験の両方を説明するためには、我々は三次元的な副観察者――計器として使う「自己」――を備えた四次元的観察者を受け入れなければならない。だが、（このように議論を進めれば、）我々は、四次元的ならびに三次元的観察者は両者とも**経験的に**発見されていて、時間あるいは観察者たちの後退という概念に頼ることはなかった、と主張することもできる。

私はこの議論に意義を見いだすことができない。倍の数となる問題の二人の観察者は、忌まわしき連続の最初の二人の観察者とまったく同じように振る舞い、結果、その後退の妥当性の経験的証拠と見なされるかもしれない。公正な立場で言うならば、未遂に終わった妥協案の執筆者たちが、理論と実際の間のこの厄介な偶然の一致が、

合理的には偶然以上のものではあり得ないことを示すため、普通なら何らかの議論を起こすのが望ましいと認識したとしても、許容されなければなるまい。そして、実際、本書の第二十一章が、論理的に、また夢とは関係なしで、連続する観察者の存在を証明すると主張している事実を考慮するなら、それを行う必要性は絶対のものとなる。その申し立てられた証拠は、答えを待っている哲学者への挑戦である。反論を試みた者は誰もいない。図が理解できないことを口実に議論を無視する者はともかくとして、我々には、もし私の分析の第一段階が正しいのなら残りは自動的にそれ続くはずであるというのに、自分には正統性から初めて離脱するための根拠が理解できないと述べた、たった一人の執筆者による主張が押し付けられている。今、要求された根拠は第二十一章に詳細に述べられているのだが、その批評家は欠点を指摘しようとはしない。まるで私が「チェックメイト！」と叫び、対戦相手は「どういたしまして、こちらのマスに動かせますよ」と答える代わりに、椅子にふんぞり返ってただ「詰んだようには見えませんな」とのたまったようなものだ。このとき私にとっての正しい手順は、「よろしい、できるものなら逃れてごらんなさい」と言い、そしてもちろん「チェックメイト！」を繰り返すことだけなのである。とはいえ、その問題を解決する方が得策であることを考慮して、私は、自分の権利を進んで放棄し、あらゆる脱出経路がどのよ

うにブロックされているかを正確に示したいと心から望むものである。

本書の第四部で触れたヒントンと彼の先駆者たちは、四次元世界を横断する三次元的観察者という練り上げられた概念が、時間現象を描く正統な方法よりもどのように優れているかを示そうとはしなかった。正統的慣行では、一次元的時間を示すために選ばれた、空間的順序で配置された諸ポイントと、前から後への方向あるいは「感覚」を示す矢印によって、**外部の連続的な偶発事を見る想定された観察者に関係するものを含んでいる**あらゆる出来事を表すが、そのようにして、描かれた「時間の次元」を、描かれた前後の動きが可能な純粋に空間的なほかの次元から区別している。しかし、この正統的な描写は、連続の観察者の扱いにおける重大な誤りに繋がっている。それはヒントンが示すよう要求されたもので、彼が難局に対処し損なったのがそこだった。本書の第二十一章の最初の九ページが書

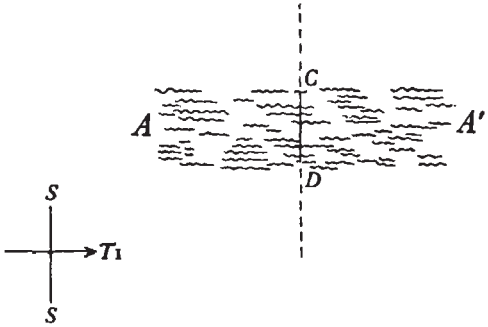


図 6

かれたのは、彼の手抜かりを補正するためだったのだ。

読者には、今、図6（下に再掲）を見て、**しばらく交差線CDを省いた**帯AA′を考えるようお願いしたい。私の敵対者は、我々が仮にスミスと呼んでおく観察者の脳の連続した状態を、まったく適切に表していると宣言するだろう。さらに、この脳の状態には特定の感覚与件が伴うことにも同意するだろう。しかし、彼は図にまだ表されていないスミスの存在は否定するだろう。彼は言うだろう、スミス――唯一のスミス――は我々が描いた脳である、感覚与件の観察者はいない、感覚与件はスミスによってなされた観察だ、と。読者は、筋が通って聞こえるようにすることを私に期待してはいけない――それは単に、私が暴かなければならない誤りなのだ。

私は争点を完全に未解決なままにしておくことから始めて、提示された感覚与件の「領域」を図4（下図参照）のCDとして導入する。この領域は物ではない。それは、関連する移動神経相関の空間的延長を示す、

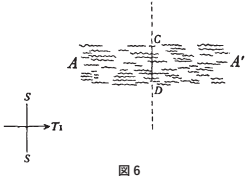


図6

図4

またそのような動きが三つの自由度を持っている（つまりこの領域が三次元的である）ことを示す、単なる記号にすぎない。私は、本書の前半部分で、この領域をしっかりと前面に置き続けてきた。特に、第四章の初めの四ページを参照してほしい。そこでは、その領域とその領域内をさまよう注意との間の混乱を避ける方法が示されている。さらなる安全のため、私は今関係のある議論の直前、一九四～一九六ページでその学習を再度強調しておいたが、領域が属している観察者がその領域に含まれる神経相関で構成される生物であろうとなかろうと、それはまだ未解決なままだ。

次の段階は、時間の絵に必要となる最初の試みとして、領域の**内容**の持続を図5に記す、あるいは「外挿」することである。そして、これが私が攻撃を加える場所である。私の反対者は、どんなプロセスで外挿AA′の性質が発見されると考えられるかを考慮に入れなかった。彼は、起源の知れないAA′から始めたいと思い、矢印を**足し**たいと思い（あるいは、たぶん矢印なしでも）、さらに続けてこう言いたいだろう。「これは一連の連続した出来事を表している。あなたは、これらの状態の一つが、あなたが『今』と呼ぶものであると断言するだろう。それは完全に余計な手順であり、せい

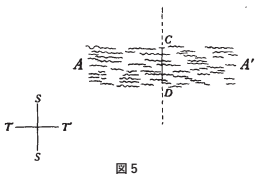


図5

ぜい図の好きな場所を選んで、そこに鉛筆で印を付ける程度のものだ。私はこれに意味を持たせることはできない」と。唯物論は幾度も、大きな効果とともにその策略の一部を用いてきた。だが私は、その指し手を未然に防ぐ。あらゆる現実の出来事の図は、**誰かの**経験から作らねばならない。今回の場合、私はその誰かをスミスとする。私は彼に、三次元的領域で起こっている変化を見てもらう。そして、その変化の記入を始めようとする**とき**を、彼に言ってもらう。彼がいつそれを言うことができるかということは、極めて重要なのだ。選択した時点で利用可能な情報から、スミスは地図AA′を用意する。もし彼が生理学者なら、関係するかもしれない感覚与件を神経相関の用語に、自ら翻訳することができる。そうでないのなら、彼は生理学者に助けを求めることができる。彼は、領域CD内の、外挿が行われるべく選択された時点で神経相関が占有する位置をマークする。彼は、自分が思い出せるようなすべての経験と活動の神経相関の状態を、適切な時間順に左側に配置する。そして右側には、論理的なプロセスによって予想できるような状態を入れる。物理学において「今」の重要性を確立するうえで非常に価値のあるこのスミスの予言については、やや不確実なところもあるけれど、それについて

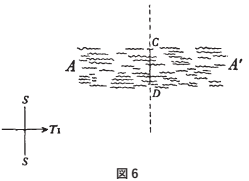


図6

は『連続宇宙』で扱われており、ここでは気にする必要はない。ポイントは、スミスによって作成されたこの時間地図においては、CDによって区切られた断面はこのスミス（「とき」を言う、そのスミスだ）に対して存在しているものを含み、その左右に対する断面は存在しているのではなくただ覚えているか予想される状態だけを含む、ということだ。従って、この図では、連続の観察者であるスミスは、ただ一箇所、CDによって区切られた場所にのみ挿入されることが可能となる。そして、このスミスは、図の中のどこにも描かれず、感覚与件を観察し、記憶し、予想する。さらに、このスミスは、絵の外側で、当人の「今」を参照して絵を描くのみならず、その「今」を過ぎた流れとしてA′のすべての状態を示すはずであることは明らかで、そのためCDの状態は、後に我々がまだ定義することに成功していない絶対時間の中で、彼にとって、彼がそのマークの右側に描いていた状態に置き換えられるだろう。

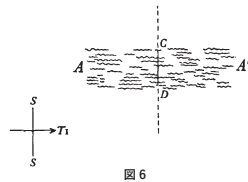


図6

さて、唯物論が好む仮定は、スミスと、スミスとは独立して存在している仮想外部世界との関係を調べると、その関係を描いた彼の絵は、（説明のつかない何らかの理由で）「幻想」であることを示すだろうということだった。唯物論者は、はっきりし

た進歩的な理由もなく、独立した作られた時間地図は、自分の地図を作成するスミスがCDとA′間の一連の脳の状態にすぎないことを示す、と主張するだろう。しかし、私はその指し手を予期し、逃げ道をブロックした。というのは、私は分析の最初に、この独立した観察者の助力を求めたからだ（一九九ページ第二段落参照）。読者であるあなたは、そばに立って、スミスの仕事の的確さのチェックを頼まれた。外挿が開始されることになる瞬間について、あなたはスミスに同意した。今は、**あなた**に対して存在しているものは全部CDのみにあるという点で、スミスのものに似たあなた自身の地図を作る必要があるはずだということは明らかである。あなたの地図では、あなたの「今」は、スミスのそれのように、時間1に沿って動いていると見なされなければならない。しかし、あなたは初めから、スミスには変化する内容を持った単独の三次元的表象領域があることに同意しており、あなたの図4では、あなたはスミスのその領域をあなたのCDに配置する必要がある（あなたは彼の傍らに立っていることを忘れないように）。彼の、その単独の三次元的な現在の領域は、**あなたの**地図においては、あなたの移動している「今」に同行して

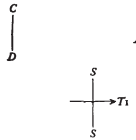


図4

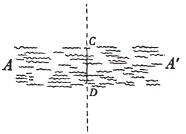


図6

いるはずである。でなければ、変化する内容を持った単独の領域を観察するスミスは存在しないだろう。自分の地図を作るそのスミスは、従って、自分のだけでなくあなたの移動している「今」にもいるのである。

すべての観察者は、あなたがスミスについて達したように、ほかの観察者についても同じ結論に達するはずである。このゆえに、すべての観察者は、自分および他人の三次元的な自己の「今」における存在について同意すべきであり、その「今」とは、時間1に沿って動き、それが相対論の規則で許可または規定されている範囲でのみ並び方が変わるものである。

このように、正統的な理論の支持者は完全に包囲されている。彼は、それまでなら、不正行為のペナルティを、幻惑されてしまった敵対者から背負い込むことなく逃れることができた場所が、ここでは攻撃の手順によって事前に拒否されたため、チェックメイトされているのだ。

その後は、私の敵も同意するように、自動的に後退が続く。

このとき私は、古典的哲学が、スミスと、彼の人生と、彼がその一部を形作っている世界は、すべてが度しがたく「堕落している」、という嘆かわしい事実に甘んじなければならないのではないかと懸念するのである。

そして私は、誹謗中傷に従事したいと思うこともなく、現在の読者については、本書の評決は明白であると付け加えてもよい。時間は、彼に影響しながら連続している。そして、その（彼にとって）極めて重要な時間との関係において、彼は連続する観察者なのである。

＊　＊　＊

次の批評は、やや遅れた時期に追加された（一九三八年一月）。

本書の第五部に先立つ部分は、証拠を集め、他人の理論――自分には受け入れにくい理論――を簡単なコメント付きで説明している探偵の物語である。発表された多くの批評は、これらの他人の理論を自分のもののようにすることでできている。例えばブロードは、私がヒントンを受け入れ、そこから続けていると言う。クルー嬢は、第十七章で私が言う「時間の背後の時間といったようなものにこの言及を使用することは、時間の長さを通る**動き**という仮説で始めたことの妥当な結果である」を引用している。だが、その章で私は、ほとんどの人が空間化した時間から**始め**、そうすることが明らかな後退を引き起こす、と指摘しているだけだ。

第五部では、探偵はコートを脱いで、嬢自身の理論に本気で取り組み始める。

私は、「偶発事」とはどういう意味かを調べている。クルー嬢は、出来事とは偶発的に起こることであり、出来事の偶発が出来事それ自体だと断言することは、後退を引き起こす誤信である、と言う。ワイルは、出来事は「偶発的に起こる」のではないと言う――我々がそれに出くわすのだ、と。ここで、クルー嬢は明らかに間違っている。出来事とは、例えば材料配置のような、それ自体では出来事ではない何かの偶発である。それが偶発し、それが出来事になるのである。さらに踏み込んで言えば、出来事が偶発的に起こるということは、彼女が避けようとしている後退を自分で導入することになる。ワイルもまた、ヒントンや普通の人のように、困難を回避している。この全員が、事前の根拠なしの仮定として、観察者2の観点を取り入れている。我々はさらに前から始めなければならないと思われる。そこで私は、**客観**世界で時間を認める際に正当化されるべき特性が何であるかの調査を続行するが、条件は、この時間が、観察されるものの変化の経験を説明するうえで、できるだけ大きな役割を演じなければならないということだ。

二つの特定の経験間に時間が経過したという直感は、時間を意識するために不可欠である。ゆえに、時間の概念は、一次元的**連続体**の概念であるはずだ。今ここで、客

観世界には空間間隔だけがあり、その中には時間間隔と誤解されているものがある、と言うことから始めるとすると、何らかの後退が証明される前に、我々は後退（と間違ったそれ）に対して立場を明らかにするべきであろう。そういうわけで、我々は客観世界に**時間**間隔を認めるつもりである。我々はさらに、その世界の出来事が、その時間間隔によって区切られ、「一方向的な」因果システムの構成要素となるという意味で、因果関係をその世界のせいだと考えるだろう。外部の「今」は必要だろうか？　否。というのは、出来事、材料配置の偶発は、一連の非常に多くの「今」を表すからだ。では、我々の絵を描き始めるとしよう。だが、どのように？　ここで認識論がその権利を主張し、我々は誰かの「今」から外挿しなければならないことに気づく。

外挿を行うスミスは、問題の連続体を、空間ではなく時間と見なそうとしている。それが一連の出来事を含んでいれば、その目的にとっては十分だ。しかし、保証を二重に確保するため、彼は、自分に対して過去と未来である外部の出来事が、現実でありまた共存していると前もって推定することを辞退する。彼は、（1）彼が「未来」かつ「非現実」とラベル付けした外部の出来事が「過去」かつ「現実」になること、そして（2）これは**それらの出来事に関する自分の記述の中に具体化できるものが何もない**ことによるものだということを続けて発見し、（a）問題の連続体を移動して

いる「今」があること、また（b）その「今」は形容詞ではなく、絵の中に持ち込まなければならない**物**であることを認識するよう強いられる。要するに、彼は、その連続に固有の現実特性を持たない一連の外部の出来事を移動しているような、また単に連続する出来事を観察しているという理由からその連続する出来事に現実性があると考えるような「自己」（スミス1）を発見するのである。その「自己」の、これら客観的な出来事を伴う連続的な偶然の一致は、一連の二重の出来事――観察に基づく出来事――を構成し、**この**連続はその表現に時間2を必要とする。そのとき、スミス1の視点からの純粋な時間であるものは、スミス2の視点からは、空間の特性を持ち、その中を移動できるもの、また時間の特性を持ち、その中で一方向的な因果システムであるものであることが明らかになる。

この本が、心理学者の「見かけの現在」に、その名前では言及しなかったことが指摘されている。しかしながら、それは観察者2の注意の四次元的焦点として導入されている。今、見かけの現在の研究者全員が、それが神秘的な中心――鮮やかさの頂点――を持つことに同意している。その中心は観察者1によって提供される。

聞くところでは、多くの人が、連続理論と夢の「願望成就」理論との間に何らかの衝突があると思っているらしい。そんなものはない。「願望成就」理論は、夢見人が

特定の夢の建造物を建てる、その理由の説明に関係するものだ。私は、彼がどこからレンガを集めてくるのかという、まったく違った問題に興味がある。

ある執筆者は、私が時間を実体として存在するものと想定している（すなわち、それ自体で存在しているものとして扱っている）と言った。その非難に正当性があるとは少しも思わないが――、あったとしても何か問題があるだろうか？　現代科学は、空間を実体として存在するものとしているのだ。

＊　＊　＊

C・D・ブロード教授に敬意を表し、私は現行の一九四二年版から、「無限遠で（at infinity）」という語句を、本書の前の版においてそれが登場したすべての箇所で削除している。不平を言われたその表現が、単に**さらに遠くの者に観察されるその観察者自身ではない観察者に対する、あなたの無限の追跡に終止符を打つことをあなたが決めたポイント**という厄介な語句の省略を意図したにすぎないことは、その連続の記述から明らかだ。いずれにせよ、本書の議論は「無限遠（むげんえん）で」という語句に基づいてはおらず、そのためこの表現の使用に対する異議は連続理論の理論に対する反論とはならない。おそ

らく、類似の例がこれをより明らかにするだろう。若い頃、私は、平行線は「無限遠点で」交わる、という言い方を習った。ブロード教授は、そのような定義ははっきりと自己矛盾だと不平を言うことだろう。問題は、「無限」という語の、非常に難解な意味の一つにあるのであり、ブロードには自分の意見を言う資格があるだろう。しかし、彼が仮にこう続けていたらどうか。「従って、平行線のあらゆる原理は誤信に基づいている。平行線は存在できず、我々は列車で移動しないようにすることが賢明である！」馬鹿げていることは明らかだ。とはいえ、これがまさに、連続理論に対するおびただしい攻撃すべてにおける主要な武器として、彼が用いた不合理な記述なのである。

連続理論への主たる反対は、当然ながら、本書一九〇～二ページで非常に用心深く攻撃された、特定の哲学者たちから聞こえてくる。彼らは「存在論者」として知られるグループに属し、その目的は実際に「ある」ものを述べることである。これは馬鹿げたことに聞こえるかもしれない。しかし、実を言うと、存在論者は彼らの名声にとって一つの大きな成果を上げているのだ。彼らは「存在（being）」と「実在（existence）」の区別を認めた――連続理論の後退に直接繋がる区別である（おそらく、彼らが後退にあまり言及しないのは、そのことが理由である）。さて、その者たちは、人間の心に関して、全

知を主張することを常としていた。人知に対する限界の可能性を認めることは、困難な問題に直面した哲学の活力にとって有害な、敗北主義的態度を取り入れることになると、彼らは考えた。このまったく賢明な判断は、徐々に規則へと固まっていった（彼らは規則を愛していた）。心の全知を否定するものはすべて、隠れた誤信を含んでいると見なされることになった。こうして、信じられないかもしれないが、彼らは考え得る不快な真実を発見することを自らに禁じる規則を可決したのである。それなら、最も強固なやり方でその禁じられた警報を発している自意識と時間の後退が、突き止めることがやたらと面倒な何らかの欠陥を含むことは確実であるとして、無試験ではねつけられたことも、驚くことではない。私は、この労力節約的な態度を取るにあたり、彼らは自分の仕事を怠っていたと指摘した。当然、彼らは今、そうすることで自分たちが正当化されたことを示したいと思っている。だが、怠慢は正当化できるものだろうか？

存在論の口実として十二分に通用するものは、昔、ブラッドリーによって進められた。彼は「現実は無限後退ではあり得ない」と言う。これは、そうではない、ということを、独善的に主張していることに注意されたい。だから、正しいか誤りか、それは純粋に存在論的である。それが、人間の精神的能力の問題――その後結局は、哲学

の、別のより生産的な支流、すなわち認識論へと転じた問題――を導入することはないのである。

連続理論は、存在論ではない。

存在論者を相手にすることなく、哲学が通例「既定物」と見なしている、ある分野の知識対象がある。それは、時間、空間、感覚与件、それに今ならこれも付け加えてもよさそうだが、自意識、などといった「絶対物」である。これらが「既定物」であるということは、それがほかの知識項目から論理的な手順によって導き出すことができないこと、また我々がそれをどのように自覚するかを説明することができないことを意味する。従って、我々のそれについての知識は論理的ではない。連続理論が関係しているのは、それら絶対的なものなのである。

まず、絶対的な「自己」を考えてみてほしい。ジョーンズを意識するジョーンズという意味では、自意識は非合理なものである（もし読者がこれを確信したいのなら、肉体が自分自身に反応できないのはなぜかを詳しく説明してくれるよう物理学者に頼むとよい）。しかしながら、ジョーンズ以外のジョーンズに知られている絶対的な物理世界の概念を導入するとき、我々は非合理な自意識を合理的なものに変える。知られているものとしてのジョーンズは、その外部世界の物理的実体になる。この知られ

ている物理的なジョーンズは、知る人ジョーンズよりも持っている特質が少ない（『連続宇宙』参照）。であるから、ジョーンズがこの下位の実体を認識していることに不合理さはない。そこでは、不合理で自意識的な生物であるジョーンズの無限後退が続く。彼は計器として彼に仕え、彼が平易な用語で言うところの自分の「自己」と呼ぶ外部の物理的実体を認識している、合理的な知る人の無限の連続に置き換えられる。色や音や、それと同類の感覚与件のような絶対的なものが、不合理なジョーンズに伴って後退する。それはただ、物理的なジョーンズがそれらに気づくことができないからだ。絶対的と見なすべきもう一つのもの、時間は、知られているジョーンズのような純粋に物理的な機構にとっては、動いている指針が通過する標準距離（通常は角度のある）である。しかし、その指針は「均一に」動くことが必須である。ここで「均一に」というのは、絶対時間の等しい秒で等しい距離を移動することを意味する。今、ジョーンズ1の時計が均一に動いているかどうかを判断しなければならないのはジョーンズ2であるため（再び『連続宇宙』参照）、その絶対時間の知識情報はジョーンズ2に転送される。そこから、それはジョーンズ3へと追いやられ、以下、あなたが後退に沿ってその責務を追いかけていくように続いていく。結果として、この絶対の不合理な知識情報は、不合理な「自意識的」生物とともに後退し、物理的な時間を、任意に

受け入れられた標準速度で動かれる標準空間と同じくらい均一なままにする。

しかし、後退であなたが選択した場所（最初の項の後）で止まると、あなたは、下位の物理的観察者の合理的な認識に加えられた不合理な「自意識」と、絶対的なものの不合理な知識情報を持った観察者（彼はその下位の「自己」が**自分のもの**であることを知っている）を抱え込むことになるだろう。合理的になるのは外部の世界の方なのである。

さて、これは存在論的記述ではない。そこには観察者、あるいは時間、あるいは感覚与件の無限後退が「ある」ことが、宣言されていない。存在論的記述とは、心が、感覚与件や時間や（これは別の本に入るべきだが）空間のような不合理な絶対物を不合理に認識し、心それ自身さえも極めて不合理に認識している、というものである。存在論者は二千年にわたってその記述に直面しており、当然、彼がさらに二千年の間、自分がそれについて何をしようとしているのかを疑問に思い続けることも完全に自由である。

連続理論者の記述は、**これらの不合理性から合理性を抽出する一連のプロセスが、物理学の信頼できる世界を作り出すプロセスである**、となるだろう。**それは完全に道理にかなった哲学であり、私はそれが、やがてはほかのすべてのものに取って代わる**

に違いないと信じている。

＊　＊　＊

H・G・ウェルズ氏は、彼が真面目に扱われることを意図しなかったもの、すなわち「時間の次元としての持続」という彼の記述を、私が取り上げ、それについてあまりに深く考えてしまったことを嘆いている。だが、私に出発点を提供したのは、ウェルズの『タイム・マシン』ではなかった（私は自分の子守と、「今」に移動される長さとしての時間、という彼女の説明に含まれる後退について、よく議論したものだ）。私を事に向かわせたのは、ニュートンによって断固として受け入れられた、**流れ**としての――つまり、ある点を通過している長さとしての――時間、という広く知られた観念からの脱出が不可能なことだった。「長さ」が、単に空間的なものであろうと時間や空間よりも基本的な延長の次元であろうと、「流れている」時間が後退的な概念

＊H・G・ウェルズ氏は～……この節は、『時間の実験』への批評（一九二八）ではなく、『新しい不滅性』への批評（一九三九）を受けて書かれたものである。本書「解説に代えて」『J・W・ダン氏の不滅性』参照。

であるという事実に変わりはなかった。私は、ウェルズ*の冗談の十年前に出版されたヒントンの才気ある分析を出発点として、彼、彼以前のニュートン、またさらに前の世代の人々が見落としていたものを発見するべく取りかかった――結果、彼らの記述は無意味に思われた。

連続した状態の順序を矢印付きの線で表すことは、常に道理にかなったことである。証明されることが求められるのは、すでに連続が表された線に沿った「今」の移動を熟考する必要性だった。というのは、その線に一方向性の空間を示させるのはこの移動だろうからだ。そのとき、私の先駆者たちは、事実上、こう言うことで始めた。「四つの次元の世界と、その中を移動している三次元的な観察者がいることにしよう」と――これが問題全体をはぐらかした。私は、認識論的な立場に近づこうとして、こう始めた。「外部の世界の状態を連続して地図に描いている観察者がいることにしよう」と。結果は、彼はその状態をある線に沿った連続する順に配置するだけでなく、作図の過程で、その線に沿って動いている下位の「自己」をも見いだすだろう、ということだった。彼は、単なる線のみで表された連続は、「不完全な外部の」世界――地図作製者を「さっ引いた」世界――でしかないという事実を、明るみに出すだろう。見いだされた「自己」を含む、より「大きな」世界（「今」はない）のためには、単純

な線での連続というやり方に追加の次元が必要となるだろう。

その秘密は、存在論的アプローチでは明らかにできなかったと思う。それは適切な方法論の報酬だったのだ。

ウェルズは、時間旅行をナンセンスだと書いた後、さらに続けて予見的な夢の説明を差し出す――四つの次元を占有している注意が、時間に沿って進むにつれて延長および短縮するするというものだ！　これについては、この本の中で主張されなかったものはない（二三四～七ページ参照）。しかし、**私**は、この四次元的な注意は観察者1に続く観察者2の注意であると言った。ウェルズは私に、これを変更して、それを観察者1の注意にさせたがっている。なぜなのか？　それは完全に誤った方法論であろう。それでは後退は避けられず、その必然として観察者2を伴い、そのために冗長になるだろう。それは不条理をもたらすことになりそうだ。というのも、この観察者1がそのように二、三日にわたって延長された一方で、一秒未満まで短縮されたも

＊ウェルズの冗談の十年前に～……『タイム・マシン』を「冗談」呼ばわりしているのは、ウェルズ自身がそう書いているからで、ダンに『タイム・マシン』をけなす意図があったわけではないだろう。ただ、ウェルズは連続理論をかなり辛辣に批判しているため、ダンはそれに多少カチンときていた可能性もある。

う一人の観察者1は、電気の火花で彼の体の真ん中を吹き飛ばすかもしれないからだ。そしてそれは、予見的な夢を説明**しない**だろう。ウェルズによれば、睡眠中に時間を移動している注意の拡大には無意識を伴い、その収縮には覚醒を伴うという。しかし、明晰さが少しでもある予見的な夢――ほとんど覚醒時の生活のように人々が動く夢――を得るためには、収縮と、その結果生じる覚醒が、ほかの覚醒している人々の数日前の時点で発生する必要があるだろう。これらの難点は、観察者2には当てはまらない。

要するに、ウェルズの提案は、当世の若者にとっては、ヴィクトリア朝的唯物主義がその混沌とした事例の提示において認めた一種の自由の、非常に貴重な実例である。

ウェルズは、私が英語の唯物論（materialism）を、すべての個人の「永遠の消滅」を主張するもののように書いている、と不平を言っていた。彼は、これが「論点先取の言い回し」であると宣告し、それが「私の思考の質を示している」と言う。これは我々をかなり驚かせる。私は、ウェルズが、一九一四年の戦争前にドイツ宮廷や軍隊サークルに浸透していた、その唯物論ブランドの首位唱道者であったニーチェのことを聞いていたのだろうと考えるべきだった。ニーチェは、永遠ではない消滅を信じていた。彼によると、世界全体は、無限の組み合わせを形成している物質原子の機械的な駆け回りであると

いう。時間が経つにつれ、彼は、任意の組み合わせが何度も繰り返されるはずだと考えた。結果として、我々はそれぞれ、消滅の数十億年後に、自分の過去の人生を繰り返すことに気づくということになる。この理論は軽薄な、ナンセンスなものであった。ニーチェは、科学にはまったく不案内で、熱力学第二法則が、物質世界の過去の状態のそのような繰り返しをはっきりと禁止していることを知らなかったのだ。

第三版付録

I　アーサー・エディントン（王立学会特別研究員）による注釈

この抜粋は、サー・アーサー・エディントン教授が書かれた手紙から、許可を得て印刷されたものである（ここで言及されている「ミンコフスキー世界」とは、アインシュタインが自分の理論のために採用した「時空」世界のことである）。

「私は『連続理論』に同意します。『時間の経過』は、現状ではミンコフスキー世界にはありません。私としては、『生成』は実際に物質世界にあると思っていますが、*古典物理学でのそれについての記述には定式化されていません（完全に決定論的な法則体系には、事実上無用なものです）。

敬具

A・S・エディントン

天文台、
ケンブリッジ、
一九二八年二月一日」

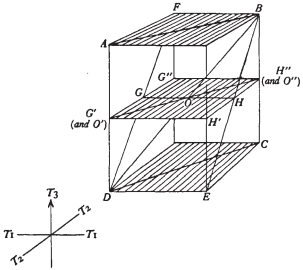


図9

＊**（原注）著者による注**……思うに、これを否定できる連続理論論者はいないだろう。図9の斜線′O″は明らかに、この図の垂線と同じくらい、観察者にとっての目標である。事実は、初項の観察者にとっての抽象的なものが、彼の第二項の眺望においては具体的となるようだ。

II　年齢因子

本書で提出された夢の理論が真実であるならば、夢見人の探求に開かれた時間1の未来の範囲は、その者の「今」が肉体の歴史における誕生点から死亡点へと移動するにつれて、だんだん小さくなっていく。当然、その領域の過去の部分は、相応にだんだん大きくなっていく。それらの変化は図14に非常に簡潔に示されており、ここでは各年齢点を通る垂直線が、対角線によって予見のための探求範囲（下部）と回顧のための探求範囲（上部）とに分けられている。

しかしながら、この図は実験者にとって実用的価値がほとんどない。夢見人の注意が領域の全範囲にわたって自由にさまようと仮定

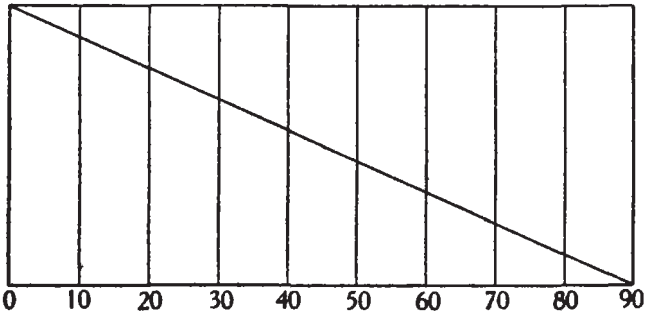


図 14

すると、夢の予見と回顧の要素は、「今」より何年も前または後の覚醒時の出来事に関連するだろう。実験者が図の妥当性をテストするためには、人生の終わりまで待つ必要があるわけだ。

今、夢の予見要素が覚醒時の生活で実現したかどうかを探す期間を、二週間に限定したとしよう。その切り離した単独期間に属する予見要素を、「重要な」予見と呼ぶことにしよう。そのとき、そのような重要な予見のための探求範囲は、対角線のわずかな太さと大差ない長さで表わされ、一方の回顧のための探求範囲は、変わらず対角線上部の垂線の長さで表されるだろう。その斜線の下の垂線は、実験においては価値のない予見のための探求範囲を表すことになるだろう。夢の回顧のための探求範囲は明らかに、重要な予見のための探求範囲よりも極めて大きくなるだろう。

次に、夢のイメージが懐古的なものだという証拠を探す過去の覚醒時生活期間もまた、二週間に限定したとしよう。これらの制限内での回顧を「重要な」回顧と呼ぶことにしよう。このとき、重要な予見と重要な回顧のための探求範囲は、完全にイコールになる――当然、誕生に続く、あるいは死に先立つ二週間は除くが、それは図から

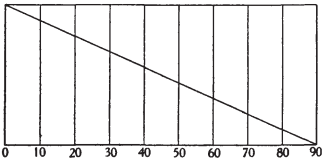


図 14

除外されると仮定すべき期間である。異なる年齢での探求範囲の比較を表した図は、今、図15のような形になるであろう。

中央線下および上の垂線の長さは、それぞれ重要な予見と重要な回顧のための探求範囲比率を示す。注意は、「今」の先後両二週間を完全に自由にさまようと想定される。

しかし、注意が目的なしにさまようと見なしてさえ、その**集中**がまったく制御されていないと想定することはできない。その反対の証拠が出てくるのを待つ間は、我々はさしあたり心理学の基本法則が有効であると仮定しておく必要がある。その法則の一つは、**興味**がそそられない限りは注意の集中はない、ということである。同様に論駁し得ない法則として、注意の集中がない限り記憶イメージは

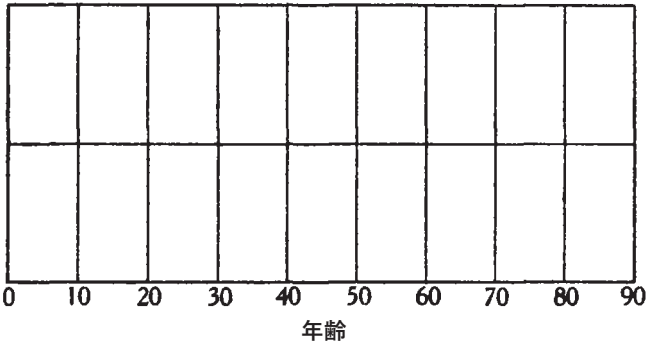


図 15

形成されない、というものもある。今、我々の実験は、**記憶される**ような夢しか扱うことができない。となれば、図14を、**記憶される**夢における重要な予見的および回顧的要素の比較比率を表すほぼあり得そうな図に変換するよりも前に、我々は異なる年齢における**興味**の傾向の問題に取り組まなければならないだろう。

その問題についての議論は、すべてがかなり推論的になってしまうはずだ。にもかかわらず、この非常に危なっかしい調査にあっても、大まかな指針として役立ちそうな一、二の一般概論があることはある。

最も単純な興味の形、すなわち**新しい**ことへの興味を考えることから始めよう。非常に幼い子供の注意は、おそらく未知のものや理解できないものよりも、おなじみのものや理解できるものに、より阻まれやすいだろう。またその反面、高齢者の興味のほぼすべてがよく知られた過去にあるという事実は、広く受け入れられている。老人の注意は、未来や過去へと導く連想軌道のネットワークに直面すると、過去への経路をたどり、昔日の場面や経験の中に幸福な気分で留まりがちになるであろう。人間の

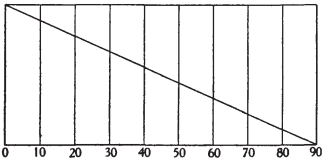


図 14

生涯におけるこれら二つの時代のどこかに、新しいものへの興味が最大になる期間があるのだろう。そのピークを、中年期のうちの若い方の側に置くという点に限っては、世論に従ってもよさそうに思われる。

しかし、目新しさだけが興味の刺激剤というわけではない。実際のところ、おそらくそれは**欲望**ほど強い刺激剤にはなり得ない。そして、（精神分析の理論によれば）非常に多くの夢は、過去に経験したのよりも失望の少ない世界を求める夢見人の気持ちを表現する構造に、意図的に組み立てられることを認識しなければならない。この夢の構造物は、ある程度のレンガ積みのコントロール――それは、究極的には注意の動きのコントロールである――を要求し、そのコントロール力は、覚醒時の生活と同じように、練習すれば高まるように思われる。そのとき、夢見人が修正しようと努めるような挫折は、**過去の**経験事である。過去においては、そうした挫折に関連するようになった脳のイメージ――精神分析学者が言うところの「シンボル」――も存在している。従って、たいていの場合「願っている」夢の建築者が進むのは、過去の方なのである。もちろんそれは不変の法則にはなり得ない。美に飢えながらも、将来の、幸運に恵まれた美とともにある貧困地帯の住人なら、夢の中で**前方に**動くという簡単な方法によって、彼または彼女の「願望成就」を最も容易に手に入れることだろ

う。読者にも、おそらく多くの同じような例が起こるであろう。しかしながら、私は、ほとんどの願望成就の夢が回顧を要求し、またそれはほぼ常に高齢者が関係しているケースであると推測したい。

今、ある夢見人の人生のある瞬間、すなわち動いている「今」のある位置での喚起可能な興味総量を、数字の2で表すことにしよう。また、この興味総量を、確認された比率で過去と未来の間で分配されたものと見なすことにしよう。もし、その興味がすっかり過去にあるとすれば、未来には興味は存在**しない**であろう。逆に、もし過去に興味が存在しなければ、未来の興味総量は2に等しくなるであろう。中間数の場合は、未来の興味に起因する値と同様に見なされる。

未来の興味総量は、このように0と2の間で変動するものとして扱われ、図15に示されるような、問題となっている時点においての重要な予見の可能性を乗算すべき要素となるだろう。そして結果として生じる積は、図15の中央線を上回るかもしれないし下回るかもしれず、垂線を二つに分割することで、その瞬間に起こる夢の中での重要な予見と回顧の相対的な可能性を

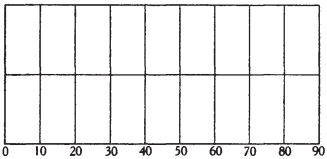


図15

示すことになるだろう。例えば、図16において、点Aは、四十七歳の垂線を、下部を0.5x、上部を1.5xの値の長さに分割する。ここでは、未来の興味は0.5の値となっており、そうすると過去の興味は1.5となる。前もって決定された重要な予見と回顧の可能性は等しく、それぞれが同じ値xを持っていた。x×0.5とx×1.5の二つの積は、垂直方向に分割された長さである。点Bは、別の年齢での可能性についての想像上の配分を表している。ここでもまた、興味には合計値2が与えられている。というのは、ここで刺激された興味総量が、「今」がAにあるときにかき立てられたのよりも大きいか小さいかはまったく重要ではなく、これは、あるかもしれない興味が何であれ、どちらが注意の動きの可能性を与えるかが**分配される**方法だからである。

今、興味因子のかなり推測的な性質を考慮すると、

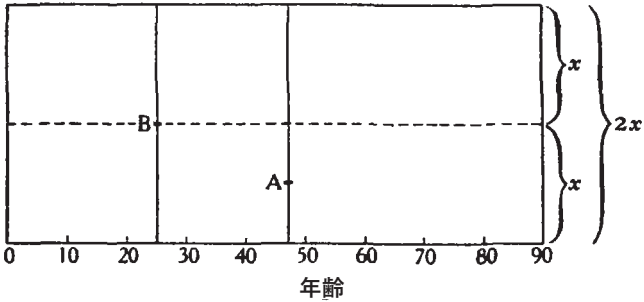


図16

異なる年齢での重要な予見と回顧の相対的な可能性を示す正しい曲線を描くことは望めない。しかし、少し前に甘受した一般概論が完全に誤ってはいないとしたら、その曲線は図17に示されたような一般的な**形状**を取るはずである。頂点はもっと高いか、あるいはもっと低いかもしれず、中年にもっと近いか、あるいはもっと遠いかもしれない。曲線の始点と終点は、完全に0になるほど低くなることはないだろう。だが、その曲線を実験で正しく決定できるようになるまでは、若年側の頂点と老年側の谷を受容しておくことが最も安全な方針のように思われる。

私は、二十五歳時の未来の興味に値1を与えておいた（その場合、過去の興味は等しい値となる）。その箇所での分布には若干の実験的根拠があって（もちろん、もっとずっとたくさん必要ではあるのだが）、そのため私は曲線の描き始めポイントを決

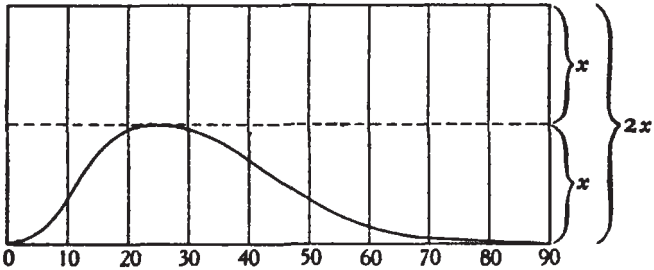


図 17

めるのにその証拠を使ったのだが、そうでなければまったくスタートできないであろう。また、私はその点を曲線の最高点として処理した。これについては、ありふれた注意以上の根拠はほとんどない。

思うに、読者は、この図が非常に多くの人々の平均的な曲線を推測したものであると理解するであろう。これは普通でない気質を考慮に入れていない。確かに、私はその気質には当てはまらないだろう。とはいうものの、私*は回顧の方に傾いてはいないし、私の場合、新しいものへの興味が、無意識のうちに悩まされているかもしれないフロイト派が言うところの過去への没頭を相殺するのに十分な程度には、まだかなり強いように思える。

夢の大部分の予見的および回顧的要素が、そのどちらであるかを**区別できる**わけではないことは、心に留めておく必要がある。我々が「混乱」要因と呼べそうなものが、ここで働く。想像力の構造のほとんどが「統合」――覚醒時におけるいくつかの異なる印象に関連した、いくつかのイメージの混合――であることは、心理学ではごく平凡な知識である（連続理論特有の教義ではない）。また、夢のイメージがほとんど同じ性質のものであることは、一般に受け入れられている――確かに、覚醒時の生活の場面と、混じり気のない写真みたいな類似性を示すものに出くわすことは、非常に稀

である。今、そうした混合構造の一つの中に、覚醒時の生活の年代的に確定的な出来事に属するものとして十分に認識できるほど特有な要素を見いだす可能性は、主として混合の**粗雑さ**とでも言えそうなものに依存する。統合が複雑になればなるほど――きめ細かくなればなるほど――、その分析はより困難になる。そして、夢のイメージを構築する練習を積むと、イメージを甦らせる練習と同じように、統合はよりきめ細かく、より美しく混合されるようになり、そうなると、過去または未来の、年代的に特有な覚醒時の出来事と関連付けることが、より容易ではなくなっていく。しかし、練習が増えるということは、年齢が重なることを意味するのだ。

この混乱要因は、異なる年齢の認識可能な回顧要素に対する認識可能な予見要素の比率に影響を与えることはない。それはどちらの発見に対しても同様に影響するからだ。ところが、実験者が年を取るにつれてそれがますます影響するという事実は、もしその個人が（問題となっている比率を見いだそうとするのではなく）予見の証拠だけを求めているのならば、成功の可能性は年が進むとともに減少することを意味する。これは、もちろん、本書の本文に記載されている実験を試みる人にも当てはまる。今、

＊私は回顧の方には～……この付録部分が掲載された本書第三版は一九三四年出版であるから、一八七五年生まれのダンは満五十九歳になる年で、はっきりと「老年側」であった。

図17はすでに、中年期以降に、認識可能かそうでないかにかかわらず、予見の**発生**の可能性に急速な減少があることを示している。混乱要因を考慮に入れるならば、その減少はさらにいっそう顕著になるはずである。

教訓は明らかだ。予見の証拠を得たいと願う人は、若い頃に実験することを強く推奨したい。遅くなればなるほど、成功の可能性は小さくなる可能性がある。すでに老齢の読者に対しては、この本をもっと早く書かなかったことをお詫びしなければならない。思うに、最善の方法は、自分の管理下で代理人に実験をやってもらうことである。しかし、これに関しては警告が必要だ。この実験はものすごく疲れるし、未熟な人間には、次の試みをする前に一週間の休息を取らせつつ、連続で二晩以上実験することを依頼すべきではない。さらに言えば、子供の場合は、次の付録Ⅲに書いたように、大量の実験から必要な情報を得る方がずっとよく、そのとき一人の子供に夢を思い出すための努力を何度もするよう頼む必要はない。

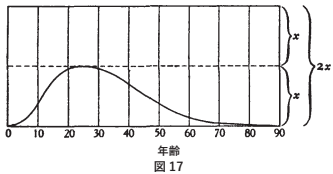


図17

Ⅲ　新しい実験

本書の第三部で扱った実験の主たる欠点は、誰にとっても暇な時間ではない一日のある時間帯に、多くの時間を割くことが求められることである。覚醒直前に発生した夢を細かいところまで正確に思い出し、書き記すためには、二十五分から四十分を要する。ということは、朝食に遅れても差し支えない場合を除き、通常よりも四十分早く起こされる必要があるわけだ――これは、ほとんどの家庭では、容易に手配できることではない。自分の夢を、ゆったりとしたやり方で本当に自由に書き記すことができるのは、好きなときに起きても支障がないくらい誰の干渉も受けずにいられる人々に限られる。残念なことに、我々がテストしたい年齢の人々（十八歳から三十四歳）は、その範疇にはほとんど含まれない。彼らが（この実験で望まれるように）新鮮な状況に身を置ける休暇中でさえそうなのだ。自分としては、一時間早く寝て、結果、それに応じて早く起きるという実に単純な手順によって、この問題を克服することができる。しかし、私以外のほとんどの人にとっては、唯一の解決策は目覚まし時計の購入にある。

次の問題は、実験それ自体の、すこぶるうんざりするような性質にある。これにつ

いては誰もが同意するように思われる。夢を思い出すと、非常に大きな精神的疲労が引き起こされるのだ。さらに、その夢を覚えておくという事前の決心は、四、五日後、夢それ自体を見ている間に、その人に影響を与え始める。実際どうなるかというと、夢を見ていること、そして夢を記憶に固定する努力をしなければならないことに、気づいてしまうのである。その結果生まれる気苦労は、健全な睡眠にとって有害であり、人々は不眠症が誘発されることを恐れて実験を中止することになる。

これら二つの困難がもたらす最終結果は、最大限の熱意を持って始めた実験者の大多数が三日目以降に脱落する、ということである。一方、長続きする人は、初めての小さな成果を得るや否や満足したと表明する傾向がある。

そこで、各実験者に必要な夜の数を減らす手段を工夫することが賢明であるのは明らかだ。すると、ここで別の困難が生じる。珍しい夢のエピソードの些細な詳細のすべてを書き記すこと、またたとえ翌日には「満足できる」にしても、問題の出来事があまりにありきたりすぎて証拠としての価値がない場合にその労力を避けること、などを身に付けるには、平均的な人間では少なくとも三日はかかるのだ。夢と、過去あるいは未来の覚醒時の生活において対応する出来事との間の関連に**気づく**技術（それは一つの技術であるから）をおぼろげにでも得るためには、明らかに三日はかかるで

あろう。実際は、最初の三日間の作業は、四日目までは正式に開始されることのない実験のためのトレーニングにすぎないのである。

繰り返すが、日数の削減は、以前の古い実験の基盤を削除することである。そこでの目的は、十四日の間に**どれくらいの割合の人が**、予見らしきものを引き起こすのに十分な強さの効果を知覚できるかを確認することだ。わずか三日の間にそのような効果を見いだせる人の割合がそうとう少なくなることは明白で、最初の三つの記録が教育的価値にすぎないものしか持たないという事実のために、その割合はさらに大幅に減少するだろう。その結果は、ほぼ確実に、そのような人が正常と見なされるか異常なのかという問題が依然として未解決のままになってしまうだろう。

今、例えば、一四〇〇人の人にそれぞれ三夜の実験をしてもらい、四二〇〇の記録を作成するとしよう。これは、三〇〇人の人がそれぞれ十四夜の実験をするのと同等であると断言できるだろうか？　否、この計算方法では、我々の問題に関係する情報、すなわち**観察された効果の各個人間での分布はどのようなものか？**　は得られないだろう。例えば、二〇〇例の効果が観察されたとする。これは七人に一人が成功したことを意味するのかもしれない――その結果は、この特有の状況（それぞれの者につき三夜のみの実験）においては、正常性の理論にとって非常に有利なものになるだろう。

しかしまた、まったく同様に、およそ二十一人に一人に、それぞれ三つの効果が観察されたことを意味するのかもしれない。その場合、残りの人が全然何も観察しなかったという事実を説明することは、極めて困難になるだろう。

こう尋ねられるかもしれない、それでも、記録された夢の総数を観察された効果の総数で割った結果は、**平均的な**人間が注目に値するものの観察を期待できるようになるまでに、いくつ記録をつけることが必要になるかを教えてくれはしないだろうか？否――理由は二つある。そもそも、三日間を超える記録を誰もつけないこのような大集団実験においては、最良の結果（八日目から十四日目までの連続した日数間に得られるもの）が失われてしまうだろう。また、たとえそうでなくても、つまり全員によってなされた最初の三つの実験が、もっと後のさらに経験を積んだ試行と同じくらい上手に行われたとしても、この大集団実験における効果あたりの夢の平均数は、**平均的な人間**に期待できる効果あたりの夢の割合と同じものではない。この「平均的な」効果観察者というものが存在するのか否かがまさに未解決の論点なのであって、これこそが実験が解決しなければならない点なのだ。少し前の例で見たように、記録された夢に対する観察された効果の平均は、失敗した実験者に対する成功した実験者の割合にかなりのばらつきがあっても、同じ値が得られてしまう可能性がある。

我々が検討しているような、大集団実験で記録された夢の総計に対する観察された効果の総計の割合には何の意味もないことを、今私は示そうと思う。重要なこと――決定的に重要なこと――は、**回顧を示唆する効果に対する予見を示唆する効果の割合**なのである。そして、このことを理解したとき、我々は新しい、真に科学的な実験の可能性に気づくことだろう。

＊　＊　＊

非常に多くの夢が覚醒時の出来事に似た出来事があるかどうかを調べられ、その出来事が夢の前後の等しい（なるべく短い）期間内に求められたと想像してほしい。もちろん、問題となっている覚醒時の出来事は、時間順的に特定可能である必要がある――その夢の前と後の**両方で**起きた覚醒時の出来事に似た夢の出来事は、カウントされることはない。

「過去に似ている」とか「未来に似ている」とかの表現は、今後の議論でかなり頻繁に繰り返されるため、何らかの省略形で書いた方がよいだろう。ここでは、過去に似ているものを「過去類似」、未来に似ているものを「未来類似」としておこう。

さらに、覚醒時の経験の結果である夢に起因する類似は、簡単に「因果類似」と書くことにしよう。

今、我々は、過去類似の中には、因果類似**ではなく**、純粋な偶然の一致によるものがたくさんある可能性が高いということを理解しておく必要がある。そして、これらの予想割合は計算可能なものである。偶然の過去類似が起こる可能性が一〇分の一であることが分かったと仮定する――それは 1/10 と書かれる。今、過去類似の中にこの種のもの（すなわち、それぞれの場合において 1/10 に等しい偶然の可能性を持つもの）を一〇〇〇発見したとすると、それら一〇〇〇の事例のうち十分の一はおそらく純粋な偶然の一致で、残りの十分の九は因果類似であると言うことができよう。

このことに注意しつつ、今度は未来類似に目を向け、同じような例を一〇〇見いだしたとしよう。この場合もまた、これらの十分の一はおそらく偶然の一致であり、残りの十分の九は因果類似であると言えるだろうか？　もしそのような推定の立場を取るのなら、我々は絶対に、完全に誤っているはずである。その証拠――**全**証拠――は、一〇〇の未来類似全部が純粋な偶然の一致であったことを示しているだろう。

というのは、夢と純粋に偶然一致する類似が、覚醒時の生活のある一定の期間内に見いだされる可能性は、その期間が夢の前か後かという問題にはまったく影響されな

いからだ。結果として、我々が検討しているケースにおいては、未来類似の中に見いだされる偶然の類似は、**過去類似の中に生じた似たような偶然の類似と等しい数**が期待できるはずである。発見された一〇〇〇の過去類似のうち、一〇〇はおそらく偶然の一致であったことが分かった。そうなると、普通の偶然の法則によって、同じ価値の一〇〇の未来類似が見つかることが期待できるはずなのだ。そして、これは我々が見いだした数そのままである。そのとき、それらの未来類似が期待される偶然の一致以上のものを含んでいると仮定することには、まったく根拠がない。それゆえ、我々が想像した結果は、古い夢の理論を裏付けるだろう。

個々の過去類似それぞれの「確率」（すなわち、単なる偶然によってそれが生じる可能性）が 1/10 でなく 1/100 で、それらの発見総数が 500 である場合、各一〇〇につき一、つまり 5 は（おそらく）偶然の一致であり、残りの 495 は因果類似であろう。その場合、未来類似のうちこの確率（1/100）の 5 の類似を見いだすことが期待できるはずだ。

要するに、もし 1/a が我々が検討しているような類似確率値で、n がこの確率値の過去類似数で、N がこの確率値の未来類似数であるならば、偶然の法則は、夢の古い理論が正しければ、N =（おそらく）n × 1/a となり、例えば今検討したケースでは、

N =（おそらく）500 × 1/100 = 5 であると仮定できる。

検討される事例の数が非常に大きい場合、偶然の法則に基づく予想と等式は、厳密な科学に基づくものに非常に近くなる。よって、そのような場合、古い夢の理論が正しければ、それはきっぱりと言い切ってよいことになる。

$$N = n \times 1/a$$

当然、これは次のように読んでもよい。

$$n = aN$$

ということはつまり、もし確率値 1/a の未来類似 N を見いだした場合、過去類似に同じような類似数は a 培存在するはずである。具体例を得るためには、前の例を逆にするとよい。それぞれの場合の確率値が 1/10（そのときは a = 10 になる）の未来類似 100 を見いだした場合、過去類似にはそのそれぞれが同様の確率値でその数の 10 培、すなわち、

$$n = 10 \times 100 = 1000$$

を見いだすことが期待できるはずだ。また、もしそれを見いだしたのならば、実験は古い時間の理論を支持していたであろう。

しかし、もしそのような過去類似の数nがaN **未満**であることが判明したら、そのとき証拠は、未来類似の中にも因果関係があるものがあることを示唆するだろう。もし**見いだされた**過去類似に対して**期待される**過去類似の割合が非常に大きければ、その示唆は、予見についての得心がいく科学的証明となるだろう。

この実験には次のような長所がある。

（1）作成された記録の数は重要でなく、同じ実験に参加する異なる個人間で変化してもよい。

（2）結果が求められている、過去と未来に同じように分割された期間は、異なる個人間で変化してもよい。

＊　＊　＊

心霊現象研究協会の「超常性論者」の友人たちとの議論の中で、私は年齢因子の効果についての問題を提起し、それによれば実験の理想的期間は若年期になると指摘した。自分の指摘を例証するため、実験の実施にオクスフォード大学から二十二名のボランティアを出してもらうよう手配し、彼らのそれぞれに二十一の記録を作るよう求めた。S・P・R（心霊現象研究協会）の要求を満たすため、私はその記録を完成後直ちにセント・ジョンズ・カレッジ特別研究員で心理学講師であるH・H・プライス氏に送り、彼がそれを未開封のまますぐに協会のロンドン事務所に送るよう手配した。どうやら未来の覚醒時の出来事のようだ、と確証できそうなものの発生が、重要な各ケースにおいて、客観的な立場の証人によって証言された。この機会を利用し、私はこの実験を支援してくれたすべての人に謝意を表したいと思う。

実験は古いものが意図された、すなわち、本書の十一章で説明されたものと同様の効果を発見できる人の割合がどれくらいなのかを確認するように計画された――各人が十四の記録を完成すべきであるとする（二十一というのは、単に安全性のために求められただけである）。あいにく、選ばれた期間がよくなかった――「学位試験（スクール）」として知られている試験の少し前だったのだ。結果、実験者の大半は早々に脱落し、必

要な十四の記録を完了したのは二人だけだった。その二人のうち、一人は失敗で、もう一人は驚くほどの成功だった。

そのとき、私は自分の敵対者の一人がひどい誤解をしていることに気づいた。彼は、近未来の覚醒時の出来事とは明らかに類似性のない夢の出来事は、すべて過去の夢としてカウントされるはずで、そのためそうした回顧的なものとして都合がよいと見なされる夢に対する未来と類似性のある夢の割合は、極端に小さいと考えていたのだ。彼の考えは、こういった計算を新しい理論に対する反対論として採用することであるように思われた！　私はすぐに彼に手紙を書いて、この種のもので証拠となる重要性がある唯一の比率は、過去未来両方が同じ条件下で収集されたときに、はっきりと未来に類似している夢の、同じようにはっきりと過去に類似している夢に対する比率だけであると指摘した。そして私は、（これを木の実を割るのに大型のハンマーを使うべきケースであると判断して）未来との類似の記録を探していた期間と同じ期間内に、過去との類似記録を調べるよう依頼する手紙を、オクスフォードの実験者たちに書いた。六人が、この方針に沿って注意深く集められた分析を送ってくれた。その結果を下に示す。（S・P・Rを満足させるために）私自身の同様の実験結果をそれらに付け加えるが、「超常的な」個人として分類すべきかどうかを確認するためのアイディ

アである。

というわけで、これが私が「新しい実験」と呼んだものの最初の「試行」であった。前に説明したように、私は連続理論のような論理的帰結の理論を、単に夢の証拠に**基づいた**だけで主張しようという意図は少しも持っていない。しかし、純粋で経験主義的な心理学者にとっては、次の七つの分析で明らかな、「良」の過去類似の、同様の未来類似に対する比率は、事実上確実なものと見てよい予見の統計的証拠を提供するように思われる。そして、これらの結果を科学的に**決定的な**ものに分類することから妨げるのは、すべての科学的実験が数回の繰り返しを必要とするという事実だけなのである。古い時間の理論では、理想的な比率であろうものからの離脱量があまりに大きすぎて、実験のさらなる拡張が修復をもたらしたかもしれないという考えを受け入れることを許してくれないのだ。

結果の評価は、それらの入手後かなりの時間をかけて私自身が行った。病気のせいで、各ケースで正確な確率を確認するために必要だったと思われる書面による質問を実行に移すことがまったくできなかった。だが、これは不要であることが後で分かった。というのは、最上級の未来類似の確率が 1/10000 未満という桁になることは確かだからだ。そして、古い理論では、このそれぞれは**過去側の 10000 の同様な類似**によっ

てバランスを取ることが求められる（読者がそれを理解したとき、この新種の実験の有効性の真価も理解するだろう）。その結果として、以下で私は、元々の大まかな分類法、すなわち「良」「中」「並」を固守した。

しかしながら、確率を判断するこの作業には、予期しない影響力を持つ心理学的罠があることが分かった。偶然似ている可能性は、覚醒時の出来事の時間的位置――すなわち、夢の前か後かどちらに来るか――によってまったく影響を受けないことが知られている。しかし、これを知ることと、それを実践することとは、まったく別のことである。過去類似の場合には因果関係もあり得るという認識は、**完全に独立した**偶然の一致の可能性判断に影響する。読者に一例を示そう。被験者の一人は、「骨相学者の図のような」部分部分に分けられている頭の夢を見た。彼は一か月前、大学の友人が持っている医学書の中でそういう頭を見ていたことを思い出した。これは回顧の明らかな例のように見えるが、どうなのか？　さて、私は嘘をついていた――その本は実は夢の**後に**見られたのであった。それは予見のどんな証拠になるだろうか？　医学を勉強している友人を訪ねる習慣があるとき、一か月の間にその被験者がそのような絵に出くわす可能性はどれくらいあるだろうか？　今度は、その判断はかなり違ってくる。それでも偶然の一致の可能性は、それぞれの場合でまったく同じであった。

そして、読者がこれを理解している今、私はその本が結局は夢の前に見られたことを認めるつもりである。

こうした類似性を判断する唯一の安全な方法は、類似性が過去のものか未来のものかについては完全に無視して進めることである。そして、この種のすべての実験においては、審査官はその立場に置かれるべきである。私は、現読者のためにこうすることを提案する。私が彼に、覚醒時の出来事が夢の前か後かについてはほんの少しのヒントも与えずに、類似している夢と覚醒時の出来事を説明する。そうすると、彼は私の評価に同意するかどうかを自分で決めることができる。もし同意しないのなら、彼は余白に自分の評価をメモすることができる――それは最終結果に対し、実質的な相違をほとんど、あるいはまったくもたらさない。最後に私は、どの夢が過去に関連し、またどの夢が未来に関連しているかを彼に伝えるだろうが、彼には、先を読むことなく自分自身の価値を見積もることを強く推奨するだろう。あたかもそれらが未来に類似しているかのように全体を扱うことにより、私は自分の困難を克服した。

さらに先に進む前に、対処しなければならない困難が一つ生じる。過去の場面や知っている人物を夢に見る人は、その後「誰それを見た」とか「しかじかの場所だった」とかを書き留め、それ以上の詳細を求めることなく、それは回顧だと思い込むに違い

ない――さらにその場面や人物が、夢の後に見られなかったならば。

しかし、そのように詳細でない過去との類似性をカウントするならば、彼が夢の後に観察された人物や場面に似ていると主張するとき、被験者の判断を等しく受け入れなければならない。そうでなければ、対応する過去と同様の類似性の削減を行うことなく、未来類似の類は取り除かれているだろう。もし我々が、視覚的な類似性に対するあらゆる主張はすっかり詳述されなければならないと主張するなら、それが困難を解決することはないだろう。夢の中の詳細を**全部**書き記すことができる者など、誰もいないからである。そして、夢見人は、夢の人物を過去に会った人として認識し、朝、その夢は回顧の証拠であることに気づき、必要な詳細を書き入れるだろう。似た者が夢の後に見た他人であったなら、彼は自分に警告するような認識を持つことはないだろう。そのとき我々には、過去あるいは未来との単なる視覚的な類似性というすべての主張において夢見人の判断を受け入れ、それを作る際に特別に注意深くするよう警告する以外の選択肢はない。幸いなことに、証拠は、この純粋に写真的な種類のものの中にはめったにない――夢の重要な部分は、通常、背景道具立てが単に補助的な役割しか果たさない**出来事**の方にあるのだ。例えば、現分析において、書かれたり素描されたりした詳細によって立証されないそのような主張は、わずか二つしかない。

被験者の平均年齢はほぼ二十歳であった。覚醒時の出来事を探す期間は、夢の前後いずれも二か月半に延長された。

以下はその結果である。

被験者A

所見　この被験者は芸術家で、彼の類似はすべてが純粋に視覚的なものである。珍しくて興味深いケース。

1　この夢は、テスト期間の前に生じた。

評価　なし。

2　覚醒時の出来事は、制限期間外であった。

評価　なし。

3　夢は、骨相学に関連した「カーテンに覆われた小部屋」についてのものであった。

覚醒時の出来事　被験者は、彼がカーテンに覆われた部屋の「ほぼ正確な模写」と書いているテントの中にいる手相見に相談した。

4

間隔　六週間。

評価　並。

夢は、骨相学者の図のように分割された頭についてのものであった。

覚醒時の出来事　被験者は、大学の友人が所蔵している医学書の中で、このように分割された頭を見た。

間隔　約一か月。

評価　並。

5

覚醒時の出来事は、制限期間外であった。

評価　なし。

6

覚醒時の出来事は、制限期間外であった。

7

夢の記録には、「薄い茶色のニスを塗った木製カヌー――片方の端の短い区画のために緑色の帆布（はんぷ）カバーが付いている」と記述されている。それはこう続く。「妹と私は緑色の帆布カバーの端の所に乗り、彼女は大喜びで自分の頭の上を覆うようにその帆布を留めた」

覚醒時の出来事　被験者は、エクスマスの学校に通う小さな妹を、スピードボートに乗るためにそこに連れ出したと書いている。彼らは、水しぶきから身を守る

ために緑色の防水シートを提供された。彼は「動き出したとき、小さな妹はとても興奮して、緑色の防水シートを顎まで引き上げ、しばらくその下で頭をかがめた」と書き加えている。彼は、「四角い船尾の隅に座って」顎まで緑色のシートを引き上げている興奮した妹によって提供された視覚的映像が、夢のイメージの元になったのではないかと書いている。

間隔　二か月半。

評価　並（間隔の長さのため）

夢の記録はこう書かれている。「タールで塗られ、並べて釘で打ち付けられた厚板と、半分に切られたいくつかの車輪から組み立てられた小さなボートで、一人で航行している夢を見た」。この記録は、この構造物についての下のようなスケッチを含んでいる。

覚醒時の出来事　被験者は、一人の男性に運ばれている、記録内にスケッチされたのと同じ形の、木製の構造物を見た。彼は、（その実際の構造物の）第二のスケッチを同封しており、それは三つの半円の木材が薄板で結合され、全体は車輪の「スポーク」が欠落していることを除いて、夢のイメージとの正確な類似を見せている。

8

間隔　ほぼ一か月。

評価　良。一か月の間にそのような物に遭遇する確率を見積もりたい読者は、次のように進めればよい。友人たちに、そういう構造物を見たことがあるかどうかを連続して尋ね、誰かが肯定的な答えを出すまでその作業を続ける。次に、否定的に答えた人の年齢を、月単位で合算する。その合計は、確率の分数 1/a の分母となるだろう。私自身の調査では、この分数は、これまでのところ 1/5400 に達している。そして、自分のエンジニアリングの経験から、もし分数がやがて 1/10000 を超える結果になったなら、驚くことになるだろう。

9　覚醒時の経験は、制限期間外であった。

評価　なし。

10　覚醒時の経験は、制限期間外であった。

評価　なし。

11　夢は、兵卒との戦いについてのものであった。

覚醒時の出来事　兵士の顔は覚醒時の生活で会った男のものであり、被験者はそれに猛烈な嫌悪感を感じていた。

評価　中。

この被験者は六つの記録を完成した。

被験者B

この被験者は九つの記録を完成し、過去に、あるいは未来にはっきりと分類できる覚醒時の出来事との類似がないことに気づいた。

被験者C

12 夢は、子供たちがちょっかいを出したため、車が通行すべき場所から外れてしまうというものだった。

覚醒時の出来事 自動車事故についての手紙。

評価 なし。詳細がまったく異なっていた。

13 被験者は、五月十九日から二十日の夜に見たと申し立てられた夢について言及し

ている。しかし、彼の記録の中にそのような夢を見いだすことはできなかった。

評価　なし。

14

夢は、被験者が友人の写真を撮ろうとしたものだった。

覚醒時の出来事　その友人がオクスフォード大を訪れた。

間隔　どうやら一週間を過ぎた頃らしい。

評価　中。

15

夢は、被験者が食べるようにとロールパンを出されたが、それらは彼が好むような固さではなかった。

覚醒時の出来事　被験者に提供されたロールパンの中には、彼が好むような固さではないものがあった。

間隔　数週間。

評価　なし。

この被験者は十二の記録を完成した。

被験者D

16 夢は、講義をする人物のものだった。詳細なし。

覚醒時の出来事　講義をする人物。

間隔　一日。

評価　なし。被験者はこれを自ら指摘した。

17 夢は、オクスフォード大の「グループ」運動についての会話だった。詳細は書かれていない。

覚醒時の出来事　会話の発生が夢に似ていると明言されている。

間隔　一日。

評価　なし。

18 夢は、被験者の部屋のテーブルが、壁際から部屋の中央に移動されていたというものだった（被験者は不快だった）。

覚醒時の出来事　ある知人が被験者の不在中に部屋に入り、書かれているようにテーブルを動かしたが、それはそのテーブルで書いていたもののためにもっと光

がよく当たるようにするためだった。

間隔　一日。

評価　中。

19　夢は、野外集会を統率するセント・オールディッ教会の牧師のものだった。

覚醒時の出来事　被験者は野外集会を統率するセント・オールディッ教会の牧師を見た。

間隔　十日。

評価　中。

この被験者は七つの記録を完成した。

被験者E

20　夢の記録はこう書かれている。「人造絹糸素材の、白いカウル型の襟の付いたドレスを着ている――見たところ煤（すす）のような、何か黒い汚れが付いていることに気づく。私はその汚れを消そうと試みる」

21

覚醒時の出来事　被験者は書いている。「ドレスの白い袖口から黒い染みを洗い落とした。そのドレスはカウル型の襟のものだった。襟も袖口も、どちらも人造絹糸であった」

間隔　五、六週間

評価　中。被験者は白い人造絹糸の襟と袖口が付いたドレスを所有している。彼女が五、六週間のうちにどちらかに黒い染みを付け、それを洗い落とそうとする可能性はどれくらいあるだろうか？　夢の中で汚れが付いているのは襟で、覚醒時の出来事では袖口であったことに注意。

夢は、被験者がローマ史における法律の詳細を解明しようとしているものだった。

覚醒時の出来事　被験者は、この夢を、自分がスッラの法律について初めて詳細に研究したことに関連付けている。

間隔　記載なし。

評価　中。私は被験者自身の判定を受け入れたが、それは主として過去の出来事に似ていたためである（これをここで認めてもよい）。しかし、思うにその本は夢の前にも**後にも**読まれており、そのため類似性が**はっきり区別できる**過去の覚醒時の出来事であることに同意する前に、実際は十分な詳細が求められる。

22

被験者は、その日にもてなされるべき学童たちの一団に会うよう誘われる夢を見た。彼女の友人と彼女は、ある部屋で彼らをもてなそうとした。

覚醒時の出来事　被験者と友人は、「ロンドン福祉施設からの多くの訪問者」をもてなす手伝いをした。

間隔　私はこれを書きそびれてしまった。だが、印象としては一日か二日くらいであった。

評価　中。訪問者は子供ではなく、夢の中にはロンドン福祉施設の記述はなかった（記載があった唯一の場所はウスターであった）。

23

夢は、角から紐を外して小包を開くというものだった。

覚醒時の出来事　彼女自身がそのようにして小包を開けた。

間隔　一日。

評価　なし。

24

夢の記録はこう書かれている。「小さな男の子が、蓄音機でドイツ語を学んでいると言う。フランス語はまだ知らない」

覚醒時の出来事　ドイツ語を学び、それからさらにフランス語を学ぶべきことが、被験者の友人に対して提案された――この順で。被験者はこれをふと耳にした。

25

間隔　一日。

評価　なし。

夢の記録はこう書かれている。「R・Fが私にお金の相談をする。私はそのことで、彼女に会いに自分の部屋の下の部屋に行く。問題はあまり筋の通ったものではない。彼女はこれについてR・Hに会うつもりだと言う」

覚醒時の出来事　被験者はこの夢を、ジュニア・コモン・ルームの会長との金銭問題の清算に関連付けている。

間隔　三週間。

評価　並。与えられた過去および未来の期間内に解決された財政問題が、ほかにも多くあったに違いない。被験者の夢の記録とコメントがあまりに簡潔すぎるため、ここでは大して役に立たず、類似性がどこかしら強かったという彼女の判断を信用するしかない。いずれにせよ、納金における不確かな類似にすぎないものとしては間隔が長い。

26

夢の記録はこう書かれている。「カレッジ・ホールに入ると、そこに私の兄弟が座っているのに気づいた。友人M・R・Hは、最後に見たときから彼は変わったと言う」

覚醒時の出来事　被験者の兄弟が彼女に会いにカレッジを訪れ、そのホールで食

27

事をした。友人は、夢と同じ発言をした。

間隔　三週間。

評価　中。三週間の間に兄弟がカレッジに会いに訪れる可能性は、著しく小さいとは言えない。そして、彼が変わったと友人が発言することは、かなりありそうなことである――もし彼が来るならば。

被験者は、「スイカズラの花……それぞれの花の花びらの先端部が、真ん中に紫を伴った黄色」になる「種」の夢を見た。

覚醒時の出来事　被験者は、その年に見た最初のスイカズラが、夢の、変態した後の花と同じ黄色と紫がかった花だったと報告している。

間隔　一日。

評価　中。

28

夢の中で、被験者はカレッジの学長と一緒にテーブルに座り、トマト風味のスープを飲んでいる。女性の学長は「柔らかい素材のグレーのドレス」を着ている。

覚醒時の出来事　被験者は、学長がディナーのとき以前に着たことのないグレーのジョーゼットのドレスを着ていたと報告している。

間隔　十日。

29

評価　並。

夢の記録はこう書かれている。「目が覚めたとき、私はかなりはっきりとこの文句を聞いた――『タイムズ』、四人の男の夢」

覚醒時の出来事　被験者は、この夢が、ジョン・バカン氏の本『カーテンの隙間』を自分が読んでいることに関連していると認めている。バカン氏は私への手紙で、この本は『時間の実験』に触発されたものだと書いている。それは、基本的に、『タイムズ』紙の一年先のページを共同で予想できるようになるまで、「ダン」の実験を練習する四人の男の物語である。興味は、主としてこの予知の部分を利用したことにある。

間隔　約二か月。

評価　良。『タイムズ』は一〇〇年以上も存在している。そして、その間の文学や会話において、当紙と「四人の男の夢」との何らかの特定の関連は一度も現れなかったと言ってしまっても、まったく安全であろう――バカン氏がその本を書くまでは。そのような関連性が重要な二か月以内に印刷されて作られる可能性は、結果として1/600以下となったが、おそらく**もっとずっと小さい**だろう。その数字（あるいはより可能性の高い小さい数字）に、必要な期間内に参照物が**被験者**

の目に留まるような性質のものである確率を乗算する必要がある。最終的な数字は、17数百万になるはずである。

夢の記録はこう書かれている。「気が付くと、会合の準備が急いで整えられたような小さな部屋にいる。私は最前列の低い椅子に座っている。左隣の高い椅子にはM・R・Hがいる。部屋の左側の壁には複数の鉄道のポスターが貼ってある。一人の男が話しに来る……。彼は言う、自分は休日にチェルシーに言ったことがある、と……。私の母が、磨いて片付けるようにと、私に何本かのティーナイフを渡す。

覚醒時の出来事　被験者は、ほとんどが休日に向けられる会話に参加していた。同じ会話内で、後に誰かが「チェルシー」の名を挙げた（被験者は、今挙げたものは自分の経験においては珍しいと言う）。会話中、彼女はM・R・Hの右隣、その椅子よりもずっと低い椅子に座っていた。部屋の中の一枚の大きな絵は、一度ならずポスターと呼ばれていた。会話の直前に、M・R・H（見たところ――被験者は「彼女」と書いている）は被験者のティーナイフ二本を借りていた。その後、被験者は、一緒に使っていたナイフをテーブル上のトレイに置いた。

間隔　一日。

評価　良。ここで確率の概算を試みるのも興味深いであろう。例えば、友人の部屋でのティーパーティ 1/2、友人の右に座ること 1/2、椅子の違い 1/2、「複数のポスター」への言及 1/100、休日への言及 1/1（学期末だったと考えられる）、チェルシーへの言及（被験者によれば、稀とのこと）1/200、ティーナイフの収集 1/2（彼女と友人のどちらかがそれをしたのだろう）。合計 1/2 × 1/2 × 1/2 × 1/100 × 1/1 × 1/200 × 1/2 ＝ 1/320000。

31

夢の記録には、ロッティ・レーマンの写真がファッションについての会話のきっかけになった、と書いてある。

覚醒時の出来事　被験者は何冊かの雑誌でその写真を見た。

間隔　八週間。

評価　中。

32

夢の記録はこう書かれている。「私はホノルルに向かっていたと思う。遠くに島が見える」

覚醒時の出来事　被験者が見た映画の中で、ホノルルへの接近が説明されていた。

間隔　二日。

評価　良。

33

夢の記録には、被験者とJ・Bが話されている言語について話し合っていて、被験者はそれをノルウェー語かフィンランド語だと言う、と書いてある。

覚醒時の出来事　被験者は友人に、「ノルウェー語文法」を猛勉強したかどうかを尋ねた――これは言い間違いで、「古ノルド語」と言うつもりだった。

間隔　一日。

評価　なし。

34

夢は、友人が「プログ」として知られる独特な体操を練習するというものだった。

覚醒時の出来事　彼女の友人は、入浴後に件の体操をやってみせた。

間隔　二、三週間。

評価　良。ここでは状況を明らかにしなければならないように思う。類似があるのは過去の出来事である。だが、収集した「プログ」という語は、夢に入っていたのではなかった。目覚めて記録を書くときに被験者に使用されたものだったのだ。従って、類似点は、体操の詳細と、それを実演したのが被験者の友人であるという事実だけなのである。例えば、友人が体操を実演したのが夢の「後」でも、「前」と同様評価は下がることになるだろう。これは、夢のイメージがどの覚醒時の場面を参照したのかという問題を生じさせるだろうからである。

35

夢の記録はこう書かれている。「手紙を探す。分類棚の中には折り畳まれた便箋、切手帳、多くの写真がある。カラー写真も分類棚の周囲にピンで留められている。便箋の一枚はリー嬢に宛てられたものだが、それがなぜHの分類棚にあるのか疑問に思う」

覚醒時の出来事　被験者はこう書いている。「……日、分類棚の周囲にたくさんのメモがあり、そのうちの一枚は明るいオレンジ色だった。それは、切手を貼っていない手紙をレターボックスに入れないようにという注意書きだった。リッチモンド嬢宛のメモを見つけ、疑問に思った……なぜそれがHの分類棚にあるのだろうか」

間隔　一日。

36

評価　中。切手への参照、および「リー*」と「リッチモンド」との間の（よく知られている）関連性に注意されたい。

夢の記録はこう書かれている。「窓から外を見ると、アメリカインディアンのような服を着た小さな男の子が見える。彼は事実上裸である……もっと小さな男の子が彼に会いに来る――普通の服装で……。私は庭をのぞき込み、その子たちが作った橋のようなものを見る……。手すりは非常に長い部品で作られ、所々で分

割されている。私はその個々の部品を一つずつ持ち上げる。

覚醒時の出来事　被験者はこう書いている。「私は小川に架かる橋を渡った。それはかなり粗末に、長くてやや薄い木材で作られていた。両側に手すりがあった」。彼女は、実際の橋と夢の手すりの間の類似点に注意を向ける。（橋の）「違う部分はものすごく合致しており、それらは夢の中で個々の部品を持ち上げたときの手すりのように、私の足の下で動いていた。橋を渡ってから間もなく、たくさんの小さな男の子が水浴びしているのを見た」

間隔　一日。

評価　良。

夢の記録はこう書かれている。「*ベイリアル学寮でのコンサートに行くところだが、何を着ようかと考えている。薄いドレスを着たらとても寒いので、大きなコートを着なければならないと思う」

覚醒時の出来事　被験者の友人（G・H・J）が、コンサートに何を着ていくべ

＊「リー」と「リッチモンド」との間の～関連性……リー・リッチモンドという野球選手がいた。彼はMLB初の完全試合を達成した名投手であった。

＊ベイリアル学寮……オクスフォード大の最も古い学寮の一つ。

きかを論じた。彼女は、以前とても寒かったので、ベイリアル学寮に行くためにはいつも毛皮のコートを着ていると、学期の始めに言っていた。

間隔　一日。

評価　並。

38

被験者はこのような夢を見た。低い椅子に座って高脚のテーブルに着いている。椅子は陽の当たる場所にある。女性が入ってきて、テーブルと「別の椅子」を動かし、そのためそれらも陽光の中に置かれることになる。

覚醒時の出来事　被験者は書いている。「髪を洗い、乾かすために陽光の中に座りたかった。陽光の中に座れるようまずテーブルを動かし、それから低い椅子を窓に持っていき、陽の当たる場所でそれに座った」

間隔　一日。

評価　並。

39

夢の記録はこう書かれている。「いとこのJ・Hが婚約した。私は彼のフィアンセと初めて会い、彼女が赤っぽい髪であることに驚いた」

覚醒時の出来事　被験者は、いとこのフィアンセのことが書かれ、彼女の髪の色触れた、自宅からの手紙を受け取った。

間隔　二、三日。

評価　良。

40　夢の記録はこう書かれている。「教会のような大きな建物に大勢の人がいる。私は彼らを囚人だと思った」

覚醒時の出来事　会話の中で、「刑務所内教会の礼拝というテーマが議論された」

間隔　二日。

評価　中。

この被験者は二十一の記録を完成した。

被験者F

この被験者は、未来との類似の可能性があるものを三つ、過去との類似の可能性があるものを二つ提出した。未来との類似の方は、評価なし。過去との類似の方は、一つは制限期間外、もう一つは時間順的に過去のものにはっきりと分類できなかった。

この被験者は十六の記録を完成した。

被験者G（私自身）

41

夢は、妻と私が予約を再確認するようにと提案する手紙を司教が書いてよこし、私は十日後に彼に会った、というものだった。

覚醒時の出来事　四年前に妻と私の結婚式を執り行った司教に会うため、お茶に行きたいと申し入れた。妻と私の間では、もう一度結婚式を繰り返したいという冗談が交わされている。そして、司教に会ったなら、私は確かにこのことを話したはずだった。病気で行けなかったのだ。

間隔　一～四日。

評価　並。

42

夢は、「イアハート」という名の探偵についてのものだった。

覚醒時の出来事　イアハート嬢（大西洋を飛行した女性）を新聞で見た。

間隔　一週間未満。

評価　中。一週間の間にそのような名前に出くわす可能性を、簡単に考慮しなけ

ればならない。

夢の記録はこう書かれている。「新しいダン型の飛行機が空に現れ、ひどく大きな音を立て、猛烈な速度で上昇している……。まるで逆さまに飛んでいるようだ……。あれは見失った飛行船を探しに出動した多くの飛行機の一機であると言われた」

覚醒時の出来事　「ダン」の飛行機は、無尾翼機の最初のものであり、一九一六年頃に終了した。一九二四年頃、このタイプは、「*プテロダクティルス」という名でヒル中尉によって復活させられ、私の特許から私の承諾と助言援助を加えて造られた。私は新しい「プテロダクティルス」の写真を新聞で見たように思う。また、別の新聞で、スタインフォース中尉（スピード世界記録保持者）に操縦された当機が、ヘンドンでの「バルーン・ハント」でほかの飛行機たちと合流しにいくところであることを読んだ。その後、私は、この「バルーン・ハント」についての説明を読んだ。バルーンは怪物のような形で（火星からの侵略者と思われ

＊プテロダクティルス……ジュラ紀から白亜紀にかけて生存した翼竜。原文は Pterodactyl と単数形で、しかも英語では P はサイレントで「テロダクティル」となるようだが、ここでは翼竜の名前であることが分かるように一般的な日本語表記にしておいた。

る)、スタインフォースはそれらの怪物を追いかけている別の防御機を抜き去り、リヴォルヴァーの銃撃でそれらを撃ち落としたという。彼は新しい「プテロダクティルス」で飛んでおり、新聞記事は、撃ち落とした「怪物たち」周囲での旋回が群衆を驚かせたと明言している。

間隔　二十日と二十四日。

評価　中。

44

夢の記録はこう書かれている。「義理の父が私に、未来の夢を見たと言った」

覚醒時の出来事　義理の父が私に、人生で初めての夢を見たばかりだと言った。

間隔　一週間ないし十日。

評価　良。可能性は、それが義父の人生で初めて記憶された夢だという事実から計算することができる。

45

夢の中で、私は映画館の外側を見ていた。ドア上のビラは、オーエン・ウィスターの物語に基づいた映画が上映されていることを示していた。夢の記録はこう言っている。「この物語は『ヴァージニアン』ではなく、ヴァージニアンの友人の一人の、同じようなカウボーイ物語であった」

覚醒時の出来事　昼食に来た友人が、リヴォルヴァー射撃のことを話し始め、そ

れから、ある点を説明するためオーエン・ウィスターの本『ヴァージニアン』の映画を見たかどうかを私に尋ねた。

間隔　三日。

評価　並。

46

夢の記録はこう書かれている。「アメリカ在住の親戚が、歩いていた胴蛇腹が崩れて脚を（後に首を）骨折していた」

覚醒時の出来事　ロサンゼルスのイギリス領事からの手紙を受け取ったが、それには、私の親戚が無一文でそこにいて、生計のための資金が送られなければ彼はおそらく追放されるだろうと書いてあった。私は、その日のほとんどを、その件についての手紙を書くことに費やした。その晩私は、ある「*ショッカー」の中で、家の側面に沿って続く装飾用の胴蛇腹から落ちた男のことを読んだ（H・C・アスタリーの『二つの殺人物語』）。この本には、その男のことが「体の下に左脚がひん曲がり、吐き気を催すような恐ろしい様子で小道に横たわっている」と書かれている（六二ページ）。だが、読者は、その男が死んでいるかどうかについては疑いを抱いたままである。もし本当に死んでいるのなら、主人公の親友が殺

＊ショッカー……残酷な場面などショッキングな描写を含む短編小説。

人を犯したことを意味するだろう（私はそれをほとんどありそうにない展開だと思った）。ところが、次のページで、その男に近づくことへの抵抗感に打ち勝った誰かが、彼はやはり死んでいることに気づくことが述べられている。

間隔　三日。

評価　良。私は生まれてからずっとショッカーを読んできたが、登場人物が、実際は首を骨折しているのに脚を骨折しただけだと思い込ませるようなケースに出くわしたことは、それ以前にはなかった。その期間を三日間という期間で割れば、確率値 1/6083 が得られる。それに、重要な三日間にイギリス領事からの手紙を受け取る可能性を掛けなければならない。個人的に、この最後の確率は 1/100 としたはずである。

47

夢の記録はこう書かれている。「鈍い灰色レンガで造られた小さな長方形の建物を見ている……。私がそれに直面したとき、右側に深い溝の境界線があった。私の右側の橋がその溝に架かっていた。電車の騒音が聞こえていた」

覚醒時の出来事　ホーシャムにある「慈善学校」（クライスト病院）を訪問した。途中のギルフォードで、自分の右手に溝と交差している橋を見た。鈍い灰色レンガ（ただし赤い屋根瓦）の小さな家に泊まった。それはもう一つの溝の奥にあり、

これを横切る別の橋が横にあったが、反対側だった。鉄道線路がドアから二十ヤードの所を通っていた。それでも、夜は列車が通らないので、安眠妨害になることはないと言われた。この最後の点は間違いだった。その夜、列車はおそらく三十分ごとに轟音を立て、私は何度も目を覚ました。

間隔　一日。

評価　並。

48

夢の記録には、直前の夢で触れた小さな家に、その建物が「シェヴァスの思い出のために」建てられたという碑文があったことが書かれている。

覚醒時の出来事　公開されたシェヴァス司教の記念碑を見た。

間隔　一、二週間。

評価　良。問題は単純だ。一、二週間のうちにシェヴァスという名前を含んでいる記念碑を見る可能性がどれくらいあるものか？　答えは簡単、その当人である私は、これまでの人生で、そのような碑を一度、たった一度だけ見たことがあった。その期間を一・五週の期間で割れば、確率は（ほぼ）1/1800となる。

私は十七の記録を完成した。

以上の夢で、このオクスフォード実験の結果リストは終わりとなる。そこで、読者が自分なりの評価の概算を完了したならば、私はどの夢が未来に関連しているように見え、どの夢が過去に関連しているように見えるかを伝えようと思う。

未来との類似性があるのは、夢番号3、7、8、18、19、23、25、27、28、29*、30、35、36、37、38、40、41、43、45、46であった。

過去との類似があるのは、夢番号4、11、14、20、21、22、26、31、32、34、39、42、44、48であった。

ここで結果をまとめておく。

結果概要

被験者	記録数	過去との類似			未来との類似		
		良	中	並	良	中	並
A	6	0	1	1	1	0	2
B	9	0	0	0	0	0	0
C	12	0	1	0	0	0	0
D	7	0	0	0	0	2	0
E	21	3	5	0	3	3	4
F	16	0	0	0	0	0	0
私自身	17	2	1	0	1	1	3
合計	88	5	8	1	5	6	9

結論

これらの結果に何らかの古典的な夢の理論を適応させることは、もちろん不可能だ。そのためには、過去類似が上記の未来類似を何千もの数で圧倒する必要があろう。実験をさらに拡張することによって過去類似のこの膨大な初期赤字を改善することも望めないだろう。未来類似はリードが大きすぎて、必要な範囲でそれらに追いつき追い抜く機会を過去類似に与えることは不可能だ。

ひとまとめにされたこれらの被験者が、過去よりも未来の夢を多く見たと思われることに注目してほしい。彼らの平均年齢が（私を除いて）、およそ二十一歳であることを思い出してほしい。

重要な徴候は、すぐには目に留まらないものである。予見のための特別な能力が存在する証拠などどこにもない。「超常性論者」は、被験者Eの未来類似が全体中十個あり、

＊（原注）……この夢は、バカン氏の本が出版あるいは批評される前に現れた。

結果概要

被験者	記録数	過去との類似			未来との類似		
		良	中	並	良	中	並
A	6	0	1	1	1	0	2
B	9	0	0	0	0	0	0
C	12	0	1	0	0	0	0
D	7	0	0	0	0	2	4
E	21	3	5	0	3	3	0
F	16	0	0	0	0	0	3
私自身	17	2	1	0	1	1	3
合計	88	5	8	1	5	6	9

ほかのすべての被験者をまとめた数よりも上回っていることに気づくかもしれない。**しかし、彼女の合計八個の過去類似もまた、ほかの記録された過去類似すべての数を上回ることに注目すべきである。**その証拠は、彼女の夢が、それと区別できる――過去と未来の――覚醒時のエピソードに、ほかの実験者たちのものよりもよりはっきりと関連していた、ということにすぎないのだ。

私のケースは、確かに珍しいものである。私は、自分が並外れたよい夢見人ではないというふりをしたことはない。五十六歳の私が二十代の被験者Eと競うことはできないが、実際は、私はその他の者には勝っている。とはいえ、ここでもまた、もし私の未来類似を五と数えるなら、過去類似は三となる（並の結果を無視すれば、私の未来類似は二で、過去類似は三であった）。私が予見のための特別な能力を持っているという証拠はないのである。

（完）

結果概要

被験者	記録数	過去との類似			未来との類似		
		良	中	並	良	中	並
A	6	0	1	1	1	0	2
B	9	0	1	0	0	0	0
C	12	0	1	0	0	0	0
D	7	0	0	0	0	2	4
E	21	3	5	0	3	3	0
F	16	0	0	0	0	0	3
私自身	17	2	1	0	1	1	3
合計	88	5	8	1	5	6	9

解説に代えて

H・G・ウェルズ『世界が進む道』（一九二八）より

19　精神生活の新しい光：J・W・ダン氏の夢の実験

古くからの友人であるJ・W・ダン氏が最近、彼が書いた新しい本『時間の実験』を送ってくれた。私はそれがとてつもなく興味深い本であることに気づいた。それは私の想像力を生き生きとかき立て、またたいていの想像力豊かな人々も、彼がその中で提示した奇妙な事柄には心を強く動かされると思う。まだまだ十分に注目されているとは思えないが。

何年も前、まだ前世紀のこと、ダン氏は初めて私に会いに来た。彼は当時陸軍の若い大尉で、南ア（ボーア）戦争に赴かなければならなかった。彼は、万一ボーア人の狙撃手が彼の存在を消滅させるようなこと、何かを説明できなくなるほどあまりにも唐突にそういうことが起こった場合に、失いたくないもの、あるアイディアを、私に伝えたかっ

たのだ。それは、彼が作った紙の模型で行った多くの実験に基づいた、V字型の翼を持つ飛行機のアイディアなのだった――それは申し分なく堅実なアイディアであり、後に非常に安定はしているけれどもあまり速くも機敏でもない機械で実現された。もしダンに実験のためのお金と機会があったなら、だいたい西暦一九〇二年か三年には彼が実用的な重航空機を組み立てていたことを私は確信しているが、彼はオレンジ川植民地の要塞勤務に行かねばならず、ほかの研究者たちが彼を通り過ぎてしまうまで、機械を組み上げるための自由は得られなかった。*

当時、空に関する実用的な関心を人々に持たせるのは極めて困難だった。彼が私の所にやって来たのは、私が飛行についての、かなり粗っぽい代物と見なされるものを書いていたからだった。私は、一九五〇年よりも前に、我々はきっと空を飛ぶだろうと言っていたのだ！　ものの見事な的中とはならなかったが、絶対に飛ぶはずがないという大多数の意見よりはましである。この堂々たる激励が、ダンの感謝と信頼を勝ち得たというわけだ。彼はそれまでにやったものをすべて私の手に託し、私は彼が殺されるか実験を再び進められるようになるまで、彼のためにそれをしまい込んで秘密にしておいた。彼は、自分が預けなければならないものをかくまってくれるほど自分を真剣に受け止めてくれる人を見つける前に、まったく面識のない私の所に来なけれ

ばならなかったのだ。

私はいまだにサンドゲイトの私の庭で過ごした愉快な午後をとても楽しい気分で思い出すのだが、その間ダンは、自分のアイディアのあれこれの特徴を実例として示した、ひらひらした小さな紙の模型を飛ばすため、壁を登ったり庭のベンチに飛び乗ったりしながら駆け回っていた。

そのとき彼は、私がそれまで出会った中でも最も忍耐強く粘り強い心の持ち主だという印象を与えた。彼の心には、マグネシウム光のような、音を立ててすべてを照らすようなもの――それはすべてを照らそうとするだろうが――はないものの、用心深く、観察的で、ついに手がかりを得ると不撓不屈となるのであった。彼が長いこと航空術のことに心を砕いていたこと、不健康と大戦とが彼を消耗させ、私から彼を部分的に覆い隠したことで、私は今になってやっと、彼が極めて注目すべき成果をたどっていたことを別の手がかりから知ったという次第なのである。

彼に事を開始させたのは、ごく普通の経験で、夢が、奇妙で不安定なやり方で、出来事を予示するように見えるという事実であった。我々の多くは予期的な夢を経験しているが、通常我々はそれについてあまりにも曖昧に捉えているため、その物語は話

＊だいたい西暦一九〇二年か～……ライト兄弟の世界初飛行は一九〇三年十二月であった。

す価値がほとんどなかった。ロンドンの書籍商タウンリー・サール氏は、先日、異常に明晰な夢について話してくれた。彼はカレドニアン・マーケットに並ぶ露店の間にいて、今日では一〇〇ポンド相当のトーマス・ハーディの『窮余の策』初版を見つけて購入する夢を見た。その印象があまりにも生々しかったため、彼は翌朝起床するとその市場に直行し、雨が降ってきていたので六ペンスで傘を買い、夢の露店があることを認めてそこに直行し、三巻を一シリングで手に入れ、純*益が九十九ポンド十八シリング六ペンスとなった。

これはめったにないくらいシンプルなケースである。通常の予示的要素を持った夢は、それよりももっと雑多なものが入り混じっている。私自身の夢は、長年心に焼き付いて離れないもので、はるかに典型的である。夢の中で、私は、氷の張ったネヴァ川の上を自転車で走っていた。自転車は氷の上で滑り、どんどん速くなって、次第に制御不能になっていった。私の前方には、白い毛皮を着た女性に御(ぎょ)されている、一頭の痩せた馬が引く大きな橇(そり)が現れた。私はどうすることもできずにそれに向かって滑り、馬と衝突してその頭にしがみつき、それを下に下げたところで目が覚めた。馬の頭にしがみついた瞬間は引き延ばされ、私に取り憑いた。私には、あの動物の耳と長い頬の感触の、生々しい感覚があった。その後、私は実際に自転車に乗ることを習い

覚えたのだが、その次の日くらいのこと、角を曲がると、裏通りに小さなチャリオットのような牛乳配達車がいた。私にはそれを避ける技量がなく、気が付くとポニーの頭にしがみついており、それは、夢で経験したのと寸分違わぬ剣呑（けんのん）な気分のうちに下に下がり、またあの橇馬と寸分違わぬ感触を持っていた。しかし、私はダンのように好奇心が強い質（たち）でも粘り強い質でもないので、その非常に印象的な経験を追求することはなかった。私は、その事故の前に誰かにそれを話すということもしておらず、こうした明らかに予示的な夢についての一般に知られている説明を無批判に受け入れた。

たぶん読者は、その「説明」をご存じであろう。それは、二つの脳半球の活動に同時性がないため、一方が他方にわずかに後れを取る、というものだ。二重の印象が存在し、第二のそれは前の出来事の記憶になるという効果がある。その理論によれば、本当の夢というものはまったく存在せず、あるのはただ、薄れゆく印象によって生み出された夢の記憶という錯覚にすぎないのである。これは、出来事がその擬似夢に似ている方は説明するが、違いの方を説明してくれないのは明らかだ。例えば、白い毛皮の女性とネヴァ川は、依然として説明される必要がある。私が、本当はあの夢を夢として見なかったというのなら、それらはどうやって私の記憶に入り込んだのか？

＊純益が～……十二ペンスで一シリング、二十シリングで一ポンドの時代である。

夢が正確に出来事のとおりではなかったのはなぜなのか？

ダンは、そのような経験を複数持っていたようである。例えば、オレンジ自由国で軍務に就いていたとき、彼はマルティニーク島の火山の大噴火を夢で見た。彼はそれがまさに起ころうとしているところを見ており、大地に裂け目が開いて、蒸気が噴出していた。彼が見たものは、実際に起こったこととはおそらくまったく似ていなかった。夢の中で、彼は住民に警告するための猛烈な努力をした。その数についてははっきりしていた。彼はこう叫んで目を覚ましたのだ。「四千人の人間が殺されてしまいます」。数日後、新聞が来た。見出しには、この大惨事と、四千ではなく四万の命が失われたらしいことが公告されていた。これらの見出しを読むことが、夢で予示された出来事だったわけだ。彼はそれらを慌てて読んで、数字を四千と誤って読み、その新聞はどこかに行ってしまった。だいぶ後になって、彼は、これら四千と四万という数字が両方とも間違っていることを知った。彼の夢は明らかに、実際の出来事ではなく、単に彼が新聞を見たときの心的印象の予期にすぎなかったのだ。

この手のことが何度か起こったことが、ダンに警戒態勢を取らせた。彼は、目が覚めたらすぐに、すべての夢を書き留めることに決めた。ベッドのそばにノートを置いておく。彼は目覚める瞬間に夢が生じていたかに意識を向けるよう自ら訓練し、夢が

虚空に消え去っていくときそれらを取り戻すことにかなり習熟した。彼は、より鮮明な覚醒時の印象を記した日中の日記も並行して作った。また、ほかの何人かに、この夢観察の仕事を引き受けてくれるよう誘いをかけた。彼は記録を蓄積した。こういったすべてのことを、彼はこの自著の中で非常に面白く語っている。そして、これらの観察から明らかになる魅力的な結論は、未来の心的印象は、過去の心的印象とほとんど、あるいは完全に同じほど、夢を作る上で重要な役割を担う、というものである。明日起こることは、昨日のそれとまったく同じように、切り取られ、かき乱されて、夢の流れの中に現れるのだ。

　我々のほとんどは、夢の作られ方について何らかの考えを持っている。何かの音や、内面あるいは外部の何らかの攪乱（かくらん）は、心的存在を無意識から覚醒へと引き上げる。心は忘れるということをやめ、記憶や注意は徐々に働き出し、放浪している心的内容はかき乱す感覚についての合理的な繋がりへの憶測と自分との調和を図る。その後、我々は目覚めて思い出すか、あるいは攪乱全体が忘却と無意識へと退いて沈んでしまうかのどちらかになる。我々のほとんどは、昨日の印象は特に目立って、昨日より以前の印象は明らかに少なく、その攪乱にいかに形と色を供給するか、また自らが妨げた欲望や抵抗した誘惑が、いかにこの人生の夢に逃れてきてその抑圧を破壊するかに、気

づいている。我々のほとんどが気づいていないのは、明日の印象のわずかな断片もまたその役割を分担している、その役割分担だと、ダンは言う。これが彼の発見の核心である。そのとき思い出されたことや歪められ薄れた抑圧から予兆を選り分けるのは難しく、そのためそれらは重要なものではなく、つかみどころがないもののように思える。予感は、並外れて目立つ場合にのみ、それらが現実の事実に現れるときに思い出され、気づかれて、そこで感知されるにすぎない。それらはかなり生々しいか、あるいはかなり特異なものである必要がある。しかし、より綿密に、より上手に見るようにすればするほど、夢の中に未来の要素がよりはっきり認められるようになると、彼は主張する。

さらに彼は、いわゆる自然な夢の観察に加えて、記録している意識レベルをほとんど超えないレベルに心的存在を残すため、注意がわざと緩められたときの心の状態も観察した。言ってみれば、心的存在に背を向けておき、次にそこにあるものが手の届く場所から出ていく前にそれを突然ひったくる、という次第で、彼はそうした心の局面の中にも未来と過去の印象がごっちゃになったイメージを発見するのである。

さて、私は、これらの事実を、ダンの考察に入ってこないほかの極めて多くの事実と、分かりやすい関係に置くことができるのではないかと思っている。この後に続く発言

において私は必ずしも彼に従うつもりはなく、またそれは私の自由になる紙面スペースではかなり不完全な発言とならざるを得ない。それは部分的には彼から得たもので、部分的には私自身のものを追加している。肝心な点は、我々の心は過去においても未来においても存在し、いわば我々が現実の瞬間と考えているものを超えて両方向に延長していると考え得ることだ。私はそれが、あまりにも常軌を逸した提案として読者を辟易させないことを願っている。我々のほとんどは、現実の瞬間とは何を意味しているのか、ということについてほとんど気にしたことがない。「今」とは何を意味するのか？　それはどれくらいの時間なのか？「今」の背後には過去が伸び、前方には未来が伸びているけれど、それ自体は無限小の瞬間なのだろうか？　我々は、過ぎ去った過去とこれからやって来る未来との間に、ただ閃光として、いわば持続のない閃光の連続としてしか存在しないのか、あるいは「今」は、過去と未来の両方へと膨らむものなのか？　これは、大多数の人々にとっては斬新で楽しい疑問であり、あるタイプの人たちにとっては大いに苛立ちを感じる疑問であろう。彼らは、あたかも自分たちが現在と実際に接触しているかのように過去や未来について話すことに慣れているので、その主張はまったく意外で理解しにくいものであろうし、それでもそれをよくよく考えてみるにつれて、それは意味ありげで厄介なもっともらしさを獲得し、「今」

はおそらくどんなときでもかなり重要な、特定の状況下ではまったく重要な、時間の一部になるかもしれない。過去の一部と未来の一部がともに「今」に加わる、と言うと逆説的に聞こえるが、実際の経験はその非論理的な見解に好意的な感触を与える。非論理的であることは、必ずしも誤っているとは限らない。人類は、過去と未来について誤ったやり方で考えてきた可能性もあるのだ。

次に提案したいのは、我々が物事に注意深くなり、現実の事実に刺激されるようになるにつれ、「今」はその中心に向かってより集中するということだ。我々がますます活発になり、「油断がなくなる」につれ、注意下にある「今」はいっそう鋭く、狭くなる。重大な局面においては、我々は、いわばほんの一瞬だけ生きているのだ。不注意、夢想、空想へと逆戻りすると、「今」は鈍くなり、どんどん広くなる。「今」は、催眠状態にあるときや、夢を見ているとき、まして夢のない眠りに落ちているときにはいっそう、意識の境界近くの下に広がるかもしれず、もしかすると、我々の精神生活の最初から終わりまでの大部分、またその全部にさえ広がるかもしれない。眠っている心や死んだ心には、過去も未来もない。奮起するとき、警戒するとき、目覚めて物事に注意を向けるとき、その曖昧な「今」が行動の瞬間に向かって引き寄せられる。しかし、注意が行動に飛びつくと、「今」は、それが生じてきた拡散された心の状態の、

かすかな、急速に消えてゆく印象を、我が身に漂わせる。

夢を見ているときと心が不注意なときの「今」が、不明瞭な分量で過去と未来の両方に及んでいるかもしれないというこの奇妙な考えは、ダンの夢および夢に準じるものの現象全体と両立し得る。ほかの仮定では、それらは説明できない。そしてそれは、タウンリー・サール氏の注目すべき物語や、その他多くの予感物語のようなものと矛盾しない。さらに、ギルバート・マリー教授は、彼がテレパシーと考えたものに関して、当惑させられるような事実、というのは懐疑論者なら当惑するということだが、そのような事実を最近発表した。そういう者は、アリスティデスの言葉を疑うのと同じくらいすぐに、彼の言葉を疑うことだろう。彼には、不注意証言の嫌疑すらかける余地はないのである。私は、彼の実験レポートを座右に持っていないのだが、実際、それらはとても不可解で困惑させられるものだ。彼はこんなふうにした。彼はいろいろな友人と一緒に、何か奇妙な光景や出来事を読んだり話したり同意したりする。次に、彼の娘が部屋に入ってきて、彼とその友人たちが選ばれた話題に心を固定している間、生じてきた、いわば浮遊している印象に心を向ける。この理論では、そんなふうに心を固定する必要はなかったのだが、行われたのはこういうことであると思う。やがて彼女は、自分に生じたものを言葉で述べる。彼女の推測の多くは驚くほど当たってい

た。その後彼女は実際に選ばれていたことを告げられたが、彼女はそれを、きっと説明されるのと同じようにかなり生き生きと見たのだろう。彼女は、自分が、選ばれた話題にどれくらい近づいているかを強く知りたがっていたことだろう。しかし、彼女が説明される前にその物事を見るであろうこと、それがいずれ彼女に説明されることになっていたということは、ダンが、新聞の見出しが彼の想像力の中に絵を呼び起こすよりも前にマルティニークの噴火を見ることと、完全に一致している。*もしマリー教授が、後で明かされることになってはいない自分の娘に対して場面を捉える試みをしていたら、極めて興味深いことになっていただろう。そうしなくても、それは、この仮説、起こったことは単に強い印象の予示にすぎず、正確にダンの予想夢の線上にあるということの確認となるだろう。

注意が覚醒時の鋭さから宙ぶらりんの状態へと沈滞するにつれ、心的な「今」が過去と未来に引き延ばされるという考えはまた、もっと目立つ、これまでのところ異常とされている催眠現象の多くを、解明された事実の一般集合と同水準のものにする。それまで面識のなかった人々の人生における名前や重大事件、と言ってもその人たちに個人的にしか知られていない名前や状況だが、そういうものを取り出すことにおいて比較的成功した多くの霊媒たちの芸当が、孤立した現象ではなくなるのだ。実用的、

肉体的、実質的な通常経験の「今」は数学的な瞬間であり、位置点であり、無限小の抽象概念であるという妄想を追い払い、また私がここで提議した、「今」は持続を持ち、その持続は過去と未来両方向への持続であり、注意の減退と外部現実との鋭い接触からの逸脱に伴って増大する、という見解を受け入れるや否や、それらの霊媒現象はもはや、毎日の現実と全然調和しないものではなくなるのである。

この推論によれば、人々はしばしば、レースの勝者、宝くじの当選番号、投機的な好機などを事前に夢で見ているに違いない。実際、見ているのだ。しかし、夢は、未来からだけでなく過去からも、また肉体的な欲求や渇望、希望、心的先入観、騒音やその他の印象の解釈や誤解からも、その素材を引き出す。それらが説得力のあるリアリティを持つことはほとんどない。我々の中の夢の芸術家は、本質的にまた度しがたく非系統的でとりとめがない。我々は皆、注意が識閾に向かって沈み込んでいくにつれ、連想において不正確となり、支離滅裂になる。眠っていたり、催眠状態だったり、麻酔をかけられていたり、夢を見たりしている人は皆、いわば正気ではないのだ。正気とは、覚醒状態である。従って、私は、次の大きなレースやルーレットで次の一時

＊もしマリー教授が～……この方法での実験も行われていたら、おそらく娘は選ばれた話題を「見る」ことはできなかったと思われ、ダンの説をいっそう強化したことだろう。

間に出る一連の数字に心を向けるに足るほど自分がしていることに敏感になり、同時に未来方向の心的状態を切り出すに足るほど自制をなくすという状態を、我々が保てる見込みがあるとは思っていない。タウンリー・サール氏に起こったようなことは起こるかもしれず、また実際に起こるが、そのような夢は贈り物なのであって、現在知られてるいかなる手段によっても強いて発生させたり誘発させたりすることはできない。実生活は現在にあるのだ。夢の状態は、麻痺状態同様、かなり特別な天賦の才に恵まれて守られた心を除き、危険な探検領域なのである。

一九二七年七月十日。

H・G・ウェルズ『J・W・ダン氏の不滅性』（一九三九）

何年も前、J・W・ダン氏と私がともに若かった頃、彼は私よりさらに若いのだが、私はよく飛行機の安定性について（彼は非常に注目すべき機体を作っていた）、また私が書いた『タイム・マシン』というパラドキシカルな物語について、彼と話したものだった。八〇年代には、科学の学生の間で、第四の（またその他の）次元についての思考遊戯が多く行われ、私の物語のトリックも、現実の物体はすべて互いに直角な長さ、広さ、厚さの次元のみならず、「持続」も持つと宣言していること、さらに前三者と後者の間のある種の違いを無視していることにあった。例えば、あなたはこれら三つの空間的次元の間で物体の向きを変えることができるが、時間は容赦なく一方向へと続き、そのようにほかの方向と入れ替えることはできないだろう。図々しさと比喩を器用に用いれば、宇宙や過去・現在・未来を厳格な四次元的システムとして提示することは可能なのであり、物語の語り手は、読者に異議を唱える時間を与えることなく、彼を遠い過去や来たるべき時代へとタイム・マシンで運び去ってしまったわけである。

そこでは、読者を追い回して息つく暇も与えなかった。読者を、例えば時間に入って上昇したり、時間に入って下降したり、地球や太陽の軌道から離れたりと、斜めに進ませないよう注意しなければならなかったが、それというのも、そのことが彼をして厄介な問題に注目させたり、それを尋ねさせたりしかねないためだった。こんなふうな。明日は二人、戻ったときには三人いるのだろうか？　かくして、ややおっちょこちょいで非常にだまされやすい読者を、寒冷化した地球やらエロイやモーロックといった退化した人類やらの、陰鬱な未来の世界へと引っぱり込んだのである。あの当時、世界は驚くべきペースで冷え込んでいると考える理由があるように思われていた。その後、数百万年かそこらで「低ポテンシャルの熱」へとすべてが縮小することに疑問を投げかける理由も現れたが、いずれにしてもそのことが面白い物語を作ったという、ただそれだけのことだった。

忘れられない昔日となった多くの快い日々や、明日の予想できない振る舞いへの不変の興味とともに、私は空間と時間の中を生きてきた。アインシュタインの鮮やかな図の中でやがて開花した進行中の仕事については、そのとき物理学者ならぬ私にはあずかり知れぬものだった。本人が最初に認めるだろうが、彼のこれらの理論は周知のごとく本質的には図であるため、それらは我々の神秘的な宇宙の構造を一つの宇宙と

して策定する新しく豊かな暗示的方法ではあるものの、日々の家庭的な問題や個人的な生活、自分は明日好きな人に会うだろうか？　とか、庭で朝食を取れるくらい晴れるだろうか？　とかいった問題には、まったく貢献してくれない。私はファンタジーを書いたが、それでやめておいた。しかしダンは、それの空間の次元としての持続という考えについて、かなり考え込んだ。私は今、彼がその卵をあまりにも温めすぎた（それについてあまりにも考えすぎた）と思っている。

それとはまったく別に、彼はほかのことも考え込んだ。彼は、自分の夢の中の、今後の出来事の奇妙な先取りに気づき始めた。彼はそれに多大な注意を払い、その観察結果を、極めて刺激的な本『時間の実験』で公表した。彼は、目覚めた瞬間に夢を記録するやり方を工夫し、夢の予告として通用しそうな証拠を集めた。それは、「今」とは数学的な瞬間ではなく、知覚できるくらいの時間を持続するものだという、しばしば無視される事実について考えさせる。我々の意識的な生活は無限の瞬間の絶え間ない流れであるという信念は誤りで、我々はある程度の長さの時間の断片の中に生きているのであり、我々の意識は映画フィルムとその映像のようなもので、無数の「今」は、継続しているという錯覚を作り出すべく、それらの間に感知の間隔を置くことなく互いに続いているのである。私はレイ・ランケスターとこのことについて話したの

を覚えているが、彼は、我々の脳細胞は血液と新鮮な酸素が脈動するその瞬間だけ生き、その後次の心拍がそれらを再び目覚めさせるまで無活動になる、ということを提唱していた。

完全な睡眠状態にある我々の脳は、おそらくずっと抑制されているか、意識レベルのはるか下方でほんのかすかに身動きするだけなのだろう。それから目覚めると、その細胞は刺激され、我々の活発化した脳が、考え、いくぶん不完全に合理化し、夢の軽率な配列に並べた、長くて支離滅裂な**今**を生成する。我々がその矛盾に気づくと、それはすぐに忘却の方向へと逆流し始める。ダンがこうした観察で興味をそそられた点は、この観察結果が、睡眠と覚醒の間の「今」は通常の経験の流れにはないということを示しているように思われることだった。制御されていないぼんやりした心は、わずかに時間を前進することができるかもしれない、あるいは少なくとも時間の次元に沿って先を見ることができるかもしれないという考えは、想像力を刺激するにはまずまず十分なもっともらしさを持っていた。それは、それまで光を通さなかったカーテンに擦り切れた場所を見つけるようなものだった。

ダンはしばらくの間観察結果を収集し続けたが、不幸なことに、彼もほかの誰も、このカーテンの薄くなった場所を広げたり貫通したりする手段を考案することができ

ず、やがて彼は観察と実験から外れ、自らが作った思索的な世界へとさまよい込んでいった。彼は『タイム・マシン』のパラドックスに戻ったのだ。その後、『連続宇宙』が世に出たが、そこに私は、次元の上に次元を積み上げ、時間A時間Bと続く時間を重箱のように並べることに熱中する彼と、私の親愛なる懐かしきタイム・トラヴェラーが、ダンの「観察者たち」としてタイム・トラヴェラーたちの全連続体へと増殖していたのを、一種の狼狽とともに発見したのである。それは厳かに行われていた。それは、ジーンズとエディントンが取るに足りないと思わせるよう計算された科学的かつ数学的な身振りでなされ、また非常に敏感な心の持ち主である我が友人J・B・プリーストリーにとってはあまりに刺激的な影響力を持っていたため、彼は我々の限られた時間を極めて驚くべきやり方で扱いつつ、一冊の本と三本の戯曲を立て続けに制作したのであった（少なくとも戯曲の一本は第一級の出来映えだ）。私は、ダンのこの進展を驚愕を深めつつ見つめていた。やがて私は、彼がフォイル書店の昼食会で、ピアノ伴奏付きで「連続理論」の哲学を解説していることを耳にした。そして今ここに、彼から譲られた別の本『新しい不滅性』があり、そこで彼は、宇宙のシャーロック・ホームズと東方の賢者との間の何らかの役割を担い、哲学者や科学者を陽気に見下し、「私」（ダン）と、「あなた」と呼ばれるワトソンないし引き立て役のような者との間

で、非常に注目すべき会話を交わさせている。彼らは極めて協和的なデュエットを維持し、引き立て役はダンを一卵性双生児のように先取りして援助する。この本は多くの人に信じられるようになることは請け合ってもいいが、それが受け入れられるのと同じくらい読み取られるかは疑わしい。それは「人々の理解」を容易に得られると主張している。私は、大衆がそれほどの引き立て役であるかどうか怪しく思う。私はこれが、一貫性がなく、理解しにくく、読みにくいことに気づいている。その分かりやすそうな説明の雰囲気と、まったく助けにならない図にもかかわらず、私にはこれが、元は五十年余り昔の『タイム・マシン』の中に冗談のつもりで置かれ、今はひどく腐ってしまった卵にすぎないように思われるのだ。

とにかくその新しい不滅性が「理解される」限りでは、ダンによると、あなたは生きて死に、この空間と時間の体系からより高い次元の生へと抜け出すらしく、その後、この現在の次元平面上で生きる人生のさらなる先はないため、あなたは好きなときにその人生を観賞し、そして――？　ほかに何をするのかははっきりしない。あなたが完了した人生を観賞することは、私にはブリッジの感想戦（ポスト・モーテム）とほぼ同じくらい魅力的なもののように思えるが、私はダンが引き立て役に約束するほかのことを把握することがどうしてもできない。どうやら、あなたはほかの人生を観賞するようだ。こんな慰

みが、あなたのために用意されている。

あなたの注意は再分割（すなわち複数の焦点を持つことが）できるため、それらの焦点の一つを私の注意が集中するポイントに集中することができる。そしてそれはもちろん心を共有するもの、あるいは笑止千万にも「テレパシー」と呼ばれるようなものである。

さらに、引き立て役がダンという存在に飽きて、ダンが引き立て役と縁を切るときは、

要するに、あなたの注意は、あなたである中心から放射し、分割し、超越的な心によってカバーされる全範囲にわたって動くことができる。あなたは、さらに何をお望みだろうか？

あなたは、何もすることがなく、軽食堂もないような、巨大な経験の博物館に行くことになるのである。こんな、まずありそうもない不滅を誰が望むというのだろう？ダンは、この連続理論家の不滅という祝福された希望がない現実生活は、「消滅への

疾走にすぎない」と言う。しかし、本来疾走すべきその膨大なコレクションからのいかなる脱出方法もないとしたら、彼が気の毒な引き立て役に明かすこの恐ろしい運命よりましであるなどとは言えないのではなかろうか？

ほとんどの人は、この世界は空間も時間もあまりにも興味深いものでいっぱいなので、死と来世についてはたいして考えていないと思う。宗教の教師はそのことに不満を言う。不滅性の問題が我々に公平に投げかけられたとき、あなたや私のような一般大衆が望むのは、もっとたくさんの同じ奇妙な混じり合いと、物事をし続けられること――とりわけ物事をし続けること、である。人生は、出会いであって光景ではなく、我々にとっての不滅は、この同じ日常的な良い物事がもっとたくさんあることにこそ意味があるのだ。宗教マニアだけが、人生を「永遠の消滅の控えの間」と考えている。これはダンの言い回しであり、また彼の思考の質を示すものである。消滅は終焉である。それは一瞬も続くことはないのであって、その「永遠の」には論点先取マニアがいる。こんなまずい考え方をする唯物論者はいない。私は今、ダンをその卵から引き剥がすことができればと望んでいる。彼は平衡感覚をすっかり失っている。彼は、自分が想像し、のぞき見し、その中で動き回るこの連続理論は、「生存の問題に関して、これまでに行われた完全に無意味なあらゆる議論を減少させるのに十分である。それ

は、世界のより真面目な本の大部分をただの紙くずに変えるのに十分である」と言う。いやはや、それはない。それはただ、ユーモアのない強迫観念にまで拡大された、愉快なパラドックスでしかないのである。

【訳注】底本には『土曜日の文学批評』十九巻十一号・一九三九年一月七日を使ったが、これは再掲で、オリジナルはほぼ同時期発刊の『十九世紀とその後』一二五号・一九三九年に掲載されたものらしい。後者は入手できていないため見ていない。

J・B・プリーストリー『人間と時間』（一九六四）より

第三部　第十章　ダンと連続理論

1

テレビ番組『モニター』を介して送られてきたすべての手紙を見て、どれだけ多く人がダンを読んできたかを初めて知ることになった。彼が挙げる実例と、夢をすぐに記録するようにという彼の助言がなければ、送られてきた最良の予見的な夢のうち、少なくとも三分の一は私のものにはならなかったと思われる。彼の連続理論についての概論を拒絶するのは難しいことではないのだが、今までのところ、彼は時間の伝統的な考え方への反対運動において最重要人物であり続けている。時間に取り憑かれた我々は彼に莫大な借りがあり、私はここでその一部を返済しようとするものである。

時間の問題自体はかなり広範に無視されており、それを解決しようとする試みも一般的には回避されているため、ダンは国民的人物にはならなかった。直近の戦争の間（彼が航空機の設計に戻ったとき）とその直後、彼は健康を害し、その境遇は決して

時間の偉大なる理論家J・W・ダン、自分で設計した複葉機の操縦席にて、一九一〇年撮影。航空学におけるダンの業績は、彼の理論的で鋭敏な心の証明である。そしてその科学的訓練が、彼が慎重かつ公正に時間の疑問に取り組むことを保証した。

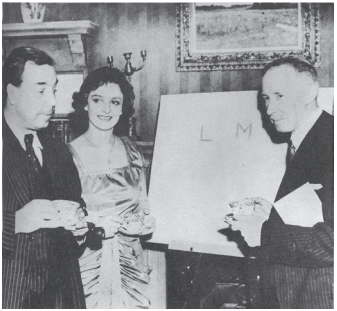
【訳注】これは『人間と時間』全三部全十二章の第十章で、当然のことながらその本の第九章までの内容に触れている箇所が出てくる。それらにはいちいち注釈を付けなかったが、通読に支障はないと思う。

楽なものではなかった。時間について考え続けている我々以外には、彼は誰からも忘れられていた。しかし、我々は彼を世界の英雄的先駆者の一人と見なすべきなのである。

ジョン・ウィリアム・ダンは、ジョン・ハート・ダン将軍の息子として一八七五年に生まれた。彼はボーア戦争で騎兵と歩兵の両士官を務めた。彼は、一九〇〇年に早くも航空機の実験を始めた。一九〇四年に「彼の名前で呼ばれている無尾翼型機安定版」を発明した。彼は、自分の型の単葉機と複葉機の両方を構築して飛行し、ついには一九〇六～七年に初めてのイギリス軍用機を設計構築し、一九〇七～八年に陸軍省によってひそかにテストされた。第一次大戦の初期には銃撃隊検査官を務めた。彼の最初の本は、彼が情熱を傾けたものの一つである浮き毛針（ドライフライ）フィッシングについてのものであった。『時間の実験』は一九二七年に出版され、順調に再版された。彼のほかの時間書籍には、『連続宇宙』（一九三四）、『新しい不滅性』（一九三八）、『何も死なない』（一九四〇）、および死後出版作である『侵入？』がある。一九四九年没。彼は十八代セー・アンド・シール男爵の長女と結婚し、一男一女をもうけた。古い『紳士録』によると、彼のクラブはユナイテッド・サービスとフライフィッシャーズであった。

夢中毒者だの変人だのといった、彼についてのありそうなイメージを払拭するのに役立ちそうなので、私はこれらのクラブについて書くのである。プロの「オカルティ

スト」でなければ、「秘密の先人の知恵」や「隠された知識」や幽体や霊気について知っているような者は、想像するのが困難である。私は『時間の実験』の最も早い、最も熱心な批評者の一人だったため、彼とは互いを知るようにはなったけれども、親密とは言えなかった。彼自身の提案で、彼は私の戯曲『時間とコンウェイ一家』の全出演者に自分の考えを説明したが、常に上手に演じてくれたある出演者は、彼が伝えたことを出演者たちが理解するふりをしていたときよりも上手になったわけではなかった。戦争の少し前、私は古代のブロートン城で夜を過ごし、そのとき彼は義理の兄弟とそこに滞在していて、我々はその幻想的な環境で最後で最長の会話をした。彼は明晰で大きな頭を持つ細身の男性だった。彼はイギリスの古い上流階級の軍事部門に属し、ぽつぽつと途切れるような喋り方で、あまりはっきりとした発音で話してはいなかった。彼は数学者とエンジニアを掛け合わせた昔の一般将校のように見え、そのように振る舞って



ダン（右）、女優ジーン・フォーブス・ロバートソンと私とともに――一九三七年ロンドンで撮られた写真で、ダンが『時間とコンウェイ一家』のこの出演者に自分の理論を説明するため会いに来たときのもの。

いた。そして、繰り返すが、彼は、予言者、賢者、中毒者、変人などを思わせる気配からは、想像し得る限りかけ離れた人だった。

アイディアと溢れるような熱意に満ちてはいるけれど、彼は才能ある説明者ではなかった。形而上学的な論争では、鋭く異議を唱えたプロの哲学者たちに、彼はかなわなかった。しかし、彼は誤りを犯したかもしれないけれど、私が信じたように、それは悪意のない間違いだった。彼は知的で誠実な人であり、行動家としての彼と同じくらい、勇敢な思想家であり執筆家であった。

彼の最大の功績は、後述するように、いくつかの夢において彼が最初「時間の変位」と呼んだものを発見したことと、その変位を説明したことであった。その後、我々時間質問者は、さまざまな神秘的薄暮や魔法的薄明のごときものから普通の生活の空気の中へとその主題全体を持ち込んだことで、彼に多大な借りがある。時間は、聖人、神秘主義者、聖なる瞑想者、魔法使い、魔術師、そして百歳のチベット大修道院長に対してのみそのトリックを露わにするものではなかった。ダンが証明できたかどうかはともかくとして、時間順の時間の束縛から逃れるため、我々は非常に特殊で困難なやり方で生きたり、おなじみの趣味気晴らしをすべて放棄したり、ジャングルで断食や瞑想をしたりする必要はないということを、彼は示したのである。

ある種の時間から別の時間に移動するには、神秘的な練習や魔法の妙技を必要としなかった。我々はそれを自由自在にすることはなかっただろうが、たぶん週に幾晩かは**していた**のである。そこで、ダンは自分自身の経験を注意深く調査した後、論証した。そして私は、彼がしたようにそれを首尾よく論証すること自体が偉大な業績だと思った。それは時間についての憶測の思潮や雰囲気を非常に劇的に変化させ、一方では哲学者の研究室や講義室から、また一方ではエセ神秘主義者や神智学的魔術師やいかさま師たちの閉ざされた地下室から、それを引っ張り出したのである。

彼は、時間についての型にはまった実証主義的思考に独自の立場で挑戦したと言われるかもしれない。彼はいかなる強い宗教的偏見からも始めなかった。彼は――我々の大半がそうであるように――奇跡的なものに対する秘密の愛を持ってはいなかった。彼には、いかなる神秘的な啓示も訪れなかった。彼は、現代社会に憤慨した感傷的な詩人ではなかった。彼は、手堅い軍事エンジニアというタイプで、趣味は空想的な思索でも思考を弄することでもなく、フライフィッシングであった。彼は、ユナイテッド・サービス・クラブで間違いなくそう言われていたように、またもっと健全な仲間たちがそんなことには何の実質的価値もないと知っていた一九〇六年に飛行機をいじくりまわしていたにもかかわらず、「健全な仲間」なのであった。

しかし、自分に説明できないこと――その「時間の変位」――が起こり、航空学の問題に頭を悩ませ続けたのとまったく同様に、今度はこの時間の問題に心を砕き続けることになった。彼の最終的な理論は、彼をあまりにも遠くまで連れて行ったかもしれないが、彼は不屈の現実的精神で問題に取り組み始め、それは、問題がそこにあると感づいたのにそれを無視した科学者たちの精神よりも、いっそう純粋に科学的なものであったことは否定できない。彼らのほとんど全員が、ダンのことも無視した。彼以前の多くの独創的な思想家と同じく、彼は厄介な存在だったのだ。

彼の独創性、完全に新しいアプローチ、その結論の猪突猛進ぶりについては、疑う余地はない。彼は道を開き、そして、私の保留条件がどうであれ、それは正しい道であると思う。彼は、空想的になることなく、我々の人生が時間順的な一次元的時間に完全に封じ込められているという、今やほとんど教義定説となっている考え方を拒否しているのだから、私の考えでは正しいのである。

例えば、プリンストンのW・T・ステース教授の『時間と永遠』に関する本を読むと、このような箇所が見いだされる。「神秘主義者は、両方の秩序、永遠のそれと時間のそれの中で生きている。彼は一方から他方へと走る。これは、神秘的な意識が彼らの中に発達するその度合いにおいて、別の人間にも当てはまる。しかし、この二重の存

在は、一方の秩序と他方の秩序との混乱を引き起こす」。今、もし私が、我々はこれら極端な二者択一――あまりにも狭い範囲限定である時間と、あまりにも広大で特色がない永遠――から救済される必要があると提唱するにしても、私はこの本や、著名な哲学研究者であるステース教授を非難することはない。私は二つの相反する秩序が本当にあるとは信じていないし、我々が自分に課した時間の概念という心的な手錠からは、「神秘的な意識」を通してのみ逃れることができるとも思わない。

我々は、自分の経験を考慮し、それからその含意とその概念の含意とを比較することによって、それを始めることができる。世界を分解したり泡のように破裂させたりする必要はない。この二者択一は、全体に狭すぎ、鋭すぎ、柔軟性がなさすぎる。そういうわけで、完全な時間の束縛がある世界とそれがまったくない世界との間の、この誤った選択を拒否したことが、私の考えでは、ダンの大きな功績である。彼は、誰もがほとんど疑問を持たずに受け入れていることを、それが事実に適合しないという理由から疑ったがために、時間をより長く、より綿密に調べたのであった。

2

『時間の実験』の中で、ダンは自分が見た夢を注意深く説明しているが、それは古く

は一八九九年に遡り、彼を時間の難問に直面させた。それについては本の中に見つかるので、ここで説明しても仕方がない。それらはそれほどドラマティックでも印象的でもなく、その点では私に送られてきた何百もの夢と比べて不利である（ダンの連続理論に対する最も厳しい批評家でも、この夢の説明の実直な正直さに敬意を払っているのが普通である）。それらに運命的な予言の雰囲気や感情的な調子はなかった。彼は自分が予言者になろうとしているのだとは感じていなかった。

ところが、次第に――「幽体浮遊」、千里眼、テレパシーのような考えを途中で拒否しつつ――彼は、何らかの神秘的な方法で、夢を見ている自分が時々未来の出来事を垣間見ているということを信じるようになったのだが、それらは新聞の見出しを一瞥したり小説の一章ないし二章を読んだりする程度のものだった。（思うに、その経験の中に、実際の出来事ではなく出来事についての伝達報道を事前に見たらしいということを示しているものがあったのは、幸運だった。それは、彼が最終的に成し遂げた理論にとって重要なことであった）。

第一次大戦勃発の一九一四年までに、彼は次のような見解に到達した。「私は、表面上は、現実との関係性における異常な欠陥に悩んでいた。ほかの点ではごくありふれた個人的経験が、たまに時間の正しい位置からずらされるという大きな障害を知覚

THE DAILY TE

VOLCANO DISASTER
IN
MARTINIQUE.

TOWN SWEPT AWAY.

AN AVALANCHE OF FLAME.

PROBABLE LOSS OF OVER
40,000 LIVES.

BRITISH STEAMERS BURNT.

One of the most terrible disasters in the annals of the world has befallen the once prosperous town of St. Pierre, the commercial capital of the French island of Martinique, in the West Indies. ing fuller information about the disaster, and of giving whatever assistance may be necessary.

A STORM OF MUD AND FIRE.

From Our Own Correspondent.
WASHINGTON, Friday Evening.

The following cablegram has just been received by the American Government from Consul Aymé at Guadaloupe:

"At seven o'clock a.m. on the 8th inst. a storm of steam, mud, and fire enveloped the city and roadstead of St. Pierre, destroying every house in the city, and of the community not more than twenty persons escaped with their lives.

"Eighteen vessels were burned and sank with all on board, including four American vessels and a steamer from Quebec named the Roraima.

"The United States Consul and his family are reported to be among the victims. A war vessel has come to Guadaloupe for provisions, and will leave at five o'clock to-morrow."

In an earlier despatch Mr. Aymé said: "I am unable to communicate with Martinique, but am informed that many people are killed there by frequent earthquakes."

The Navy Department has no ship available for relief service at Martinique. As soon as official information is received Mr. Hay will send a message of condolence to France.

withir
a few
Port P
ki
Lima
ta
Port-a
Quito,
Eartho
Santia
Shock
Whole
a
Eartho
Shock
Cape I
Point
Quito
Arequ
Per
wort
Shock
Sen S
The
that
the e
usual
range
jayas
gains
the e
"the
hot w
volcan

下、マルティニーク島モンプレー噴火の絵、一九〇二年五月八日。この日の少し前に、ダンはちょうどこのような噴火の夢を見ており（その夢は『時間の実験』に十分に記されている）、そのため後にロンドン・デイリー・テレグラフ（上）の記事を見たときに、彼は驚かなかった。その記事では死者の数を四〇〇〇〇人と推定していた。ところが、ダンは夢の中でその数は四〇〇〇人であると確信していた。このことが彼を、自分の夢は新聞記事を読むことを予見したもので、自分は単にゼロの数を読み違えただけである、という理論に導いた。実際のところは、その後の推定人数はどちらの数字とも違っていた。

することを強いられる、あまりにも類を見ない間違った何かに。そのようなことが仮にも起こり得るということは、極めて興味深い一つの知識ではあった。だが、残念なことに、このような状況では、それはたった一人だけの知識で終わるかもしれなかった――私だけの」

一九一七年、彼が手術から回復している病院で、彼の理論の発展にとって非常に重要な二つのことが起こった。ある朝、本を読んでいるときに、彼は「アルファベット文字が浮き彫りにされている輪を回すことで外される、よくあるダイヤル錠」に触れた部分に出くわした。これは彼に漠然と何かを思い出させたが、わずかな休止の後、彼は読書を続けた。しかしながら、彼は読書をやめざるを得ず、その錠に触れた部分に関係するものを「苦労してでも見いだそうと固く決心し」て、それを開始した。その後彼は、そのような錠を前の晩に夢で見ていたことを思い出した。「そのような曖昧で平凡な二つの出来事が関係していたところで、偶然の一致の可能性が指摘される必要はなかった。しかし私は、一年かそれ以上の間、そのような錠を見たことも聞いたことも考えたことも、思い出すことができなかったのだ」。このような場合、もし夢が記憶されているか、さらによいことに記録されるかができているならば、この奇妙な連想の兆しが伴うときに、ごく些細なものでも夢にまで遡ることが可能となる。

二番目に起こったのは、病院にいた別の二人の男性が予見的な夢を見たらしいということで、そのときはそのテーマが話されていた。であるならば、それらの現象は異常ではなく**正常**で、その夢――一般的な、誰もが見る夢――は、過去の経験のイメージと未来の経験のイメージが渾然一体となって構築された、と考えたらどうだろう？

ダンのアプローチは、私がテレビ番組で行ったそれとは反対のものになるはずであることは、今や明らかだ。そこで私は、経験を求めた――必ずしも予見的な夢でなくてもよいが、明らかにそれが大半を占めるだろう――、時間のありふれた考え方と矛盾するように見える経験を、である。そして、何が起こったのかはすでに書いた。どっさり寄せられた手紙は、多くが異様な経験の記録であり、たいていが一生に一度起こるかどうかという生々しい予見であった。しかし、ダンは別の側からその問題に取り組まねばならなかった。未来のイメージがすべての普通の夢の中で役割を演じていることを――たいていは不明確で紛らわしくされていて、そのため区別が難しいのだが――、可能ならば証明する必要があった。

それは例外的で人目を引くような何かの問題ではなく、ありふれた経験の中に見つかるかもしれない何かの問題であった。これは、夢が思い出される必要があり、また覚醒時の生活にそれと関連するものがあるかどうかを観察する必要があることを意味

した。そして、それは容易なことではないだろう。

さらには、夢は、大部分が取るに足りないこと――その人の生活で毎日起こること――に関するものである。そのような夢は、たとえそれが実際には明日の出来事に関連していたとしても、自然と昨日の似たような出来事に起因すると考えられてしまう。それからまたさらに、すべての夢の十分の九が覚醒後五秒以内に完全に忘れられ、その少数の方もほとんどひげ剃り作業を超えるほども長持ちしないのだ。思い出され、心の中で注目された夢でさえ、たいていはその日の午後までには忘れられてしまう。さらに加えて、前述の、必要な連想に対する部分的な心的禁圧。さらに加えて、無意識的な、事務的な不可能性の決めつけ。それで、過去においてともかくも注目されたのは、比較的印象的で、詳細で、また（おそらく）感情的な出来事の、ごく少数に限られるということが、かなりありそうなことになる。さらに、これらはテレパシーや「霊的メッセージ」に起因するか、あるいは、ほかの点ではどうも狂っているが、少なくとも、単一の・絶対的な・一次元的な、時間、という慣習的な用語で表現できるものに起因することさえあるだろう。

また、ほかに二つ困難があった。過去のイメージや現在の心の状態を象徴するイメージがもつれたものから、未来の考えられるイメージを解きほぐして取り出すのは難しいだろう。例えば、あなたがかつて知っていたような農家に泊まった夢を見たとする（過去のイメージ）。その古いキッチンが、いつの間にかモダンな会議室に変化した（現在の不安）。ごちゃごちゃと混乱した大きなグループがお茶のために到着するが、その中にはあなたの上司が何人かいて（現在の不安）、また三人の有色人種の男たちが互いに腕を組んでいる。あなたはこの三人と会おうとしているようだが（未来のイメージ）、これはすべて混乱の中である――私はちょっと一風変わったことを加えたけれど――この異様なイメージを解きほぐし、記録することは、容易ではないだろう。

ちなみに、もし数か月あるいは一、二年の経過期間があり（ダンは自分の小さな効果のためにこういうケースを期待していなかったが、その効果は、普通一日以内くらいの夢に続くものである）、その後あなたが腕を組み合った三人の有色人種を見かけ、そのときはもう夢の連想が弱くなっていれば、あなたはおそらく以前彼らを見たことがあるという漠然とした感覚に悩まされることだろう。

ダンが認め、直面した二番目の困難は、もし夢の後、夢のすべての詳細が記録でき、

夢との関連という観点から覚醒時の出来事の全詳細を考えることができたとしたら、偶然の一致があり得るだろうし、それを否定することはできないということであった。だが、ダンが指摘したように、一つの夢のエピソードとそれに続く覚醒時の出来事の中で、可能性のある偶然の一致に二番目が続き、二番目に三番目が続くならば、そのときそれらの同時発生が起こりそうにない確率は天文学的になり、運やでたらめな類似性は拒否されなければならない。

ここで覚えておくべきは、ダンは、私が告白した心的性向で始めたわけではないということである。彼は自身、ちょっとした数学者で科学者で技術者であった。彼の全経歴と訓練が、いかなる空想的な神秘主義めいた概念も思いとどまらせた。彼は「絶対的な・一次元的な、時間」への疑念で始めたのではなく、最初は自分が満足するために、自分の奇妙な経験を説明したかったにすぎない。彼の態度は、新しい思考が求められそうな考えを慌てて却下する科学者たちのそれよりも、真に科学的であった。

ダンは慎重に自分自身の実験を開始し、次にさまざまな友人や知人――その中には自分は夢を見ていないと言う者もいた――に自分と同じようにしてくれるよう説得した。彼は自分の実験を試す準備ができている人たちに対する助言の章を提供しており、私はここでそのいくつかを再掲しておこうと思う。

彼は、枕の下にノートと鉛筆を備えておくことを提案する。目が覚めたら直ちに、目を開くことすらしないうちに、急速に消えつつある夢を思い出すことに取りかかる。もし出来事を一つしか思い出せない場合は、その出来事に注意を向け、その詳細を思い出すよう努める。短いメモを取ること――それらには以前の夢から突然思い出された事件を含める必要があるだろう――、そして、後からそれを完全に書き出し、可能な限り多くの詳細を掘り起こし、記録するよう努める。「もし、その出来事が現実生活で起こるようなものであっても、それが奇異に思われるものである場合はいつでも、特に注意してこれを行ってほしい。証拠が最も得られやすいのは、その種の出来事との関連だからである」と彼は付け加える。

しかし、心に留めておくべきある事柄がある。旅行の前夜や劇場や映画館に行ったその夜は、単調な繰り返し生活の一部である夜よりもよい結果を生みやすい。ちょっとした興奮がプラスになるのだ。そのとき、我々が直前の章で見いだしたことを覚えておいてほしい――「夢を見ている心は、それが知覚するすべてのものに誤った解釈を付加する名人なのである。そのため、夢の記録は、(a)見られたものの実際の外観と、(b)その外観に対して与えられた解釈とを、別々の事実として記述するべきである」(例えば、私が引用した二つの夢のそれ――オレンジ色の野獣とインディアン・カヌー)

これも覚えておいてほしいが、――未来に関係する完全に明確な夢は極めて稀なので――さらに面倒なことに、大量の曖昧な素材とともに、未来のイメージが過去のイメージに溶け込んでいる可能性があるのである。

夢の詳細と覚醒時の詳細の比較は容易ではないだろう。多くの夢は、とりわけ最初のうちは何も生み出さないだろうが、ダンは、詳細を詳しく検討するとしばしば驚くような結果がもたらされると主張する。しかしながら、それは困難な仕事になりかねない。ダンは認めている。「覚醒時の出来事と過去の夢との間の類似性に探求する価値があることに気づくことは、逆に綴られた場合に何かを意味するかもしれない言葉に気を配りながら本を読もうとするようなものなのだ。心はそれを長時間続けることはできない」。心はその状態を保つことをまったく望まない。

覚醒時の心は、夢と、それに続く出来事の間の関連付けを受け入れることを、あからさまに拒絶する。それにとって、この連想は**あべこべ**なのであり、自らに認識させるや否や、それは即座に拒まれる。その知的な反乱は自動的で、すこぶる強力である。書かれた記録という議論の余地のない証拠を突きつけられてさえ、人は認めることを避けるためにどんな言い訳にでも飛びつく。ほとんど常に飛び

つかれる一つの言い訳は、その場面の隣接部分の不同性か、または「統合」の中に出来事に対応**しない**部分があるという事実である。……この問題は、……対応**する**場面または統合の部分があるという事実に、少しも影響を及ぼさない。

この実験を行うには、完全に新しい方法で自分の経験を調査することを自らに強いる必要がある。ダンは、「時間的経験の性質におけるこの奇妙な特徴」がなぜそれ以前に認識されてこなかったのかを、このことが説明すると示唆している。

彼は正しいのかもしれない。そして確かに現代は、人は夢の中ですでに見たり聞いたり感じたりしていたことを見たり聞いたり感じたりしている、ということを絶えず観察するには、彼らにとって都合の悪い時期であるだろう。我々は、最も鋭い注意が絶えず要求されている時代に生きている。間違えたハンドル操作や信号無視は、我々の人生を無残に終わらせることができる。我々は、かつて知られることのなかった最も狭い**今**のポイントを通して、物事に注意を向けなければならない。我々は**数ミリ秒**で命が吹き飛ぶ人間なのである。我々の「知的反抗は、自動的で、極めて強力」なものであり、それが――証拠をがっちりとつかまえない限り――火曜日の夢と木曜日の覚醒時の経験が部分部分で一致していること、また時間は我々が想定するよりも厄介

なものであるということについて、我々の理解を拒ませたとしても、驚くには値しない。

しかし、反抗はどちらの側にも働き得る。ダンは、自分と他人のため、一つの反抗、つまり上記の反抗を鎮めた後で、今度は別のそれを導いた――一般に受け入れられている時間の考え方に対する反抗だ。

彼の夢の理論には、特に過去と未来の出来事とそれらに見合った時間経過の関係のような厄介な問題があって、それは彼の本の後の版に見いだすことができ、そこを読むのは興味深い。しかし、ここでそれらに立ち入る必要があるとは感じない。重要なのは、彼が広く世間に認めさせるのに成功したものだ。第一に、正確な予知は、やや稀な、ことによると病的な夢に見られることに加えて、通常の平凡な夢にも見いだし得るのだが、それは原則として予知予見の明確な要素の注意深い記録と検査を通してのみ可能であること。我々は、夢を見るとき、いつもというわけではなく、特定の規則性もないとはいえ、実際は未来の垣間見を使用しているのである。第二に、我々の夢見ている自己は、従って、過ぎ去った時間内に完全には含まれ得ないこと。第三に、夢見ている自己のこの大きな時間的自由については、超常的で奇跡的なものは何もないということ。それは、少数の非常に変わった特別な人々に享受される特権ではないのである。そういう人々は、我々一般人集団の一部なのである。我々は――そうであ

りたいと思うかもしれないけれども――時間順の時間の奴隷ではない。この点において、我々は、最近こうだと見なした自分よりも強力で、おそらく高貴な生物である。

用心深い人――私がほとんどの航空専門家にそうあるべきだとイメージするような人――であるダンは、第一次大戦の数年後まで、私が彼を持ち上げたほどには上に行くことはなかった。彼が時間の問題全体に取り組む必要があると決心したのは、一九二〇年代半ば頃であったに違いない。そのうえ、彼は事業拠点として自分の実験を使うつもりはなかった。それらは彼に、我々の因習的な時間観が誤りであると確信させていた。よって、彼はその見解を拒否し、可能ならば自分のそれを作らなければならないと感じた。これは謙虚なものであり、虚栄心からのものではなかった。『時間の実験』の中で指摘するように、彼は、「科学的証拠」としてその特有の経験や自分の実験を差し出すことはできないと思った（私が、彼の全著作の間を擦り抜けていくのではなく、この一冊の本の、彼が修正することができた最後の版を用い、それを通じてダンの考えをたどっていることに注意してほしい。この本は最も重要で、よく知られたものである。とは言うものの、後ほど、ほかの本もざっと見るつもりである）。従って、これらの経験と実験、およびそれらから引き出したある結論は、時間の問題の**内側に**彼を進ませたと言われるかもしれないが、彼は新しく完全に非個人的なやり

方で、外側に、再び最初に戻ることが必要だと感じていた。

私としては、これは間違った決定だったと思う。あらゆる敬意――それに心からの称賛と愛情のこもった感謝――を込めつつ、私はここで、彼が間違った、致命的な方向を取ってしまったという自分の確信を宣言しなければならない。私は、彼は外側に戻るべきではなかったし、非個人的になることもなかったし、時間の問題への哲学的なアプローチもするべきではなかったと感じている。そうする代わりに、彼は、時間との個人的な関係を能う限り説明しようと努めながら、内側から掘り進んでいくべきだったのだ。しかしながら、その気質と受けてきた訓練のために、彼にはそうすることができなかったのかもしれない。ここには、航空学の問題と同じくらい、非個人的に取り組まれなければならない問題があったのだ。

それでも、彼には、その専門家気質よりも深いところにある、直感的ひらめきを自分に与えてくれる何かがあり――それらは最初から彼の夢に対する態度の中にあった――、それは彼がかき集めたすべての議論よりもずっと価値があり、最後までそのままだった。そうした議論の方は、すぐに脆弱なものと見られ、簡単に論破でき、次には無視することができるため、同じ批評界の中では、彼の直感的ひらめきが彼に見せたものを無視することもまた同じように容易であった。しかし、私は、彼の形而上学

的推論には欠陥があると思うものの、彼の直感が彼にもたらしたものの多くは新しさと真実さを併せ持ったままであり、また計り知れない価値を持つことに変わりないこともまた信じるものである。

3

ダンが『時間の実験』第四部に達し、自分の夢の経験を離れて理論的な解説に転じるや否や、私には、彼がほとんどすぐにうまくいかなくなるように思われる。彼は、時間の概念を二つの異なる矛盾した方法で使用すると主張しているため、悪手の方へと進んでいるのだ。彼の連続理論の全理論は、この疑わしく不安定な基盤の上に構築されている。彼がやっているのは、時間を空間化することと、同時にそれを動きとしても扱うことである。これでは、ケーキを取っておくのと食べるのを同時にやっているようなものだ。

前述のように、時間を空間的に見ることには異議はない。そのような見方は、たとえ議論の都合のためでしかないとしても、遅かれ早かれ避けられない。我々が合法的にできないのは、空間の余分な次元としての動きもなく横たわっている時間と、運動としてのその古い役割における時間の間を、擦り抜けていくことである。我々は、ど

ちらか一方のアプローチを取る必要がある。その二つの間を跳び越えることはできない。ところが、これがダンが最初からやっていることなのだ。それは彼の主たる議論の基礎となっている。

彼は、「普通の人」の形而上学を笑うことは完全に安全とは言い切れない、と我々に告げることから始める。「大衆の言語の中に正式に位置を占めるようになった基本理念というものは、完全に馬鹿げているものでも不当なものでもあり得ないのだ。というのも、そんなふうに認められているものは、少なくとも、問題となっている概念が何世紀にもわたる試練に耐え、言論が進んだ場所ならどこであれ躊躇ない受容が与えられてきたことを意味するからである」。思うに、これも疑わしい開始部であろう。大衆の言語とは、迅速で容易なコミュニケーションのための、一種の省略表現である。例えば、我々は太陽の周りを地球が回り、月が地球の周りを回っていることを知っている。だが、大衆の言語では、それらの動きを区別しない。太陽は昇って沈み、月は昇って沈み、また我々は依然として、かつて自分たちはこうだと想像していたように宇宙の不動の中心なのである。我々は皆これが真実でないことを知っているが、それでもいまだに、あたかもそうであるかのごとく話している――これは、単に自分たちの便宜のためでしかない。

さて、ダンは、この同じ大衆の言語の中に「二つの主たる概念――時間の長さと時間の動き」を発見する。彼は完全に正しい。我々は、あたかも時間が長さであるように――「長い」時間と「短い」時間について、「遠い過去」と「近い未来」について――話している。我々はまたいつも、進んだり流れたり過ぎ去ったりと、時間を動きのようにも言っている。しかし、そのような物言いはすべて、迅速な利便性の問題である。それは、太陽と月についての同様の物言いと、物事の真実へのいかなる洞察も表さない点では同じである。

しかし、ダンは自分の議論に役立つようそれを強制する。我々の何も考えていないような話は、時間の長さと時間の動きの両方を想定しているため、それなら我々は時間の長さに沿った時間の動きという考えを受け入れなければならない。そして今、我々はまずいことになっている。「時間内の動きは計測可能なはずだからである。移動要素が時間の長さに沿って同時に至る所にあるとしたら、それは移動していないのである。しかし、その動きを計測する時間は、もう一つの時間なのだ。そして、その第二の時間の『経過』は、第三の時間によって計測可能なはずである。こうして無限に続いてゆく」。我々は、ダンの連続理論の命取りとなる無限後退が目に入る場所にいて、また――ああ、悲しいことに――我々はそこに戻らなければならない。

ダンの夢の経験と実験を読み、それから「時間の持続と時間の流れ」と「連続時間」という後続の諸章を読むと、自分が疑わしく曖昧なものから明確で正確なものへと移動しつつあると想像するのは――彼もそうだったと思うが、そのように想像するのは――容易なことである。だがこれは、少なくとも次の点においては間違っているだろう。明確で正確に見えるものは、受け入れることができる現実には属していないということだ。現実にあるのは、経験、奇妙な予知、つかの間の予感だけである。それらは曖昧で空虚ではあるのだが、時間理論の霧やその移り変わる光の中ではほかのものに匹敵するように見えるかもしれず、またそれらは鉄鉱石の山のようにその大きな姿をぬっと現すのである。

議論がどこに移っていこうとも、時間を分けてしまうことは、概念をまるでクリスマス・ケーキのように切り分けようとするようなものだということを覚えておく必要がある。このすべての中で現実のものは、時間ではなく、我々の経験なのだ――五分以内に起こるかもしれないことを我々が知らないといった類いの経験、また来週の火曜日や来月や来年に起こることをちらりと見るかもしれないといった類いのもう一つの経験なのである。我々は、実際には自分たちがどんな可能性を持ち、どのような存在なのかを発見しようと努めている。言葉の罠の中に迷い込んだ可能性はあるにして

も、もちろんダンも基本的にはこれに気づいていた。

さて、ダンは書いている。

……我々は、時間が固定された観察者の前で、時間が、経過するか増大するか蓄積するか自身を消費するか、何であれ動かず変化しないでいる以外の何かをするとするならば、その第一の時間の活動またはそれに沿って時間を決める別の時間、その第二の時間で時間を決める別の時間、といった具合の、明らかに無限である連続があるはずだ、ということを理解している。そして我々は、この時間の背後にある時間という、目につきやすく確固とした知的展望に直面したことに気づいたあらゆる哲学者たちが、（a）その場合の真の連続要素は何なのか、そして（b）その連続性は重要性が判明するような類いのものであるのかないのか、等を確かめるため、一刻の猶予もなく、その明白なる連続の性質への徹底的かつ系統的な調査へと進んだのだろう、と思うかもしれない。……

ここでの彼は、イラクサ（進んで困難に立ち向かう）をつかむだけでなく、近くの驚いている哲学者の顔の穴にそれを突っ込んでいるが、それは、哲学が考えられ教えられてきたいかなる場所におい

ても、無限後退が常に嫌悪の目で見られてきたことを、彼がよく知っているからである。彼は、恐るべき子供（アンファン・テリブル）の役をしばらくの間楽しんでいる。

一つの短い章で楽しんだ後、次に彼は黒板と指し棒と多くの図を用いて、自分が活発な数学の達人となる長い章を開始する。その方法と図は、私の女性通信者のかなり多くを挫折させたと想像され、彼女たちは、『時間の実験』の前半は楽しんで読んだけれども、後半は道に迷ってしまったと告白したのである。実際は、我々が彼の時間についての後退的見解を受け入れる限りにおいては、図は十分に明解で適正なものである。しかし、そこには言葉の策略（トリック）（彼が単に我々をだましている場合）や罠（トラップ）（彼が思い違いをしている場合）があり、特に観察者の表象領域を説明するとき、彼は続けてこう言う。「彼の領域における現象は、動き回り、変化し、消滅するように見える。また、これらの変化には『時間がかかる』ように見える」。それからも彼は、この「時間がかかること」を繰り返し強調する。しかし、その変化とは時間である。あるいは、もし我々がそれについて厳密にしたいのなら、それらは我々が時間の概念をそこから抽出する経験のようなものを表している。この時間が「かかること」を強調することによって、彼は、時間とは、広大なガソリン・スタンドのようなもので、常に視界外のどこか別の場所にあるけれども、我々が動き続けることをいつでも支援することが

できるものであると、自分に言い聞かせている。

私は、時間という広範囲にわたる漠然とした用語が、二、三の異なる種類の時間をカバーしていることが判明するかもしれないということ、我々が空間的な比喩を用いて、時間が多次元的なものであると都合よく考えることができることを、信じてもよいし、実際のところはそうしている。だが、時間を、長さ、その長さに沿った動き、そしてその動きの計時として組み合わせるということは、**真の**時間がまだ十分に知られていない以上、単純にはいかないだろう。そして我々は、主として事実の記述に変換されている暗喩によって、行くことを望まない後退へと追い込まれていくのである。

時間の後退的な連続は、同じような観察者の連続を要求する。時間1には観察者1，時間2には観察者2、という具合に無限に続いていく（のだが、実際にはダンは、絶対時間には十分に無限を有してきた究極の観察者を提供する）。ここで私は、――先に示唆したように――我々が演じるこの観察者という消極的な役を疑っていると言わねばならないが、それは、これもそこで言ったように、我々の世界という劇場では、我々は観客ではなく役者の一員であると感じているからである。我々は、場面を見つめながら自分の人生を過ごすわけではなく、**その中にいるのである**。

もちろんダンもそれは知っていた。後の方で彼は、未来を変えるための干渉の問題

を回避せず書いている。それにもかかわらず、我々を観察者に仕立てることにより、彼はそれを自分のために少し容易にしたと思う。そして、ここで私は、彼の1、2、3と続いていく観察者たちが異なる人物ではないということをはっきりさせておくべきだと思う。彼らは、いわば掘り下げた我々自身である。しかしながら、後退のどこかでより高位の存在たちが引き継ぐはずで、そうして究極の観察者のための下地を作っていく。

ダンは、開始前は慎重だったかもしれないが、一旦始めてしまえば、思索的自信不足に悩むことはなかった。彼の観察者隊とでも呼べそうなものは、すべての時間の次元に対する注意を提供しただけではない。それはまた我々の自意識の問題の解決にも貢献したとダンは主張する。

「自意識のある」観察者を合理的に定義するには、どうしたらよいだろう？――その者を、カメラのような自意識のない記録装置と区別するための定義とは？あなたはおそらく、問題の個人は彼が「自分自身」と呼ぶ何かが観察していることに気づいているはずだ、という自明の理を言明することから始めるのではなかろうか。その言明は、言い換えると、この「自己」とその観察が自意識のある人

間によって観察される、ということだ。しかし、彼はこの客観的実体を、自分に属するものとして観察することが不可欠である――彼はこう言うことができなければならない。これは**私**「自身」だ、と。そしてそれは、彼が**最初に考慮された「自己」を所有している「自己」**に気づいていなければならないことを意味する。この第二の「自己」の認識には、同じ理由で、第三の「自己」の認識が含まれる――以下、無限に続いてゆく。

要するに、我々は、時間企業を保持するために無限後退に参入するのだ。私個人としては、行くのは絶対に拒否する。

このうち、私は今回一度だけ、評価された学術企業に入る。一九四九年に初版が出て以来着実に版を重ねてきた著作、ギルバート・ライル教授の『心の概念』を読んだ人なら誰でも、彼が、後退の罠を我々に示すことによって、意識の意識という考えをどんなふうに退けているかを覚えていらっしゃるだろう。「停止位置はない。そこにはいかなる心理状態や心理過程も埋め込んでいる無数の意識のタマネギ皮がなければならないだろう」。私に必要な能力があったとしても、ライル教授のさまざまな結論に挑戦するだけのスペースはここにはない。しかし、私は、それらを非常に疑わしい

と思っており、今の彼の多くの哲学仲間同様、彼が行動主義者やより攻撃的な実証主義者にひそかに弾薬を渡していると感じることは避けられないと、あえて言いたいと思う。そして、もし後退とともにあるダンが心についての自分の考えを詳しすぎるくらい詳しく説明しているとするならば、ライル教授はそれを簡単にしすぎていると思う。

我々の中には慎重に置かれた言葉の罠に容易に捕らわれそうな者がいるからといって、また我々は議論を急ぐために大ざっぱに書くことがあるかもしれないからといって、我々の現実の概念全体が誤っているということにはならない。「あなたの家が燃えている」と叫ぶ者は、「your」と「house」と「is」と「on」と「fire」が意味するものを正確には定義できないかもしれないが、それでもなお彼は極めて重要なことを言っているのかもしれないのだ。

今、私は、カードを「引かせる」手品師のように、「そしてそれは、彼が**最初に考慮された『自己』を所有している『自己』**に気づいていなければならないことを意味する」という文でのように、ダンが後退の策略を働いていることを認めようと思う。これを受け入れると、落とし戸が開き、我々はそこを降り、後退へと陥っていくわけだ。そのような無限の自己はない。自意識は無限の後退には至らない。しかし、たとえそ

のように思われるとしても、それは異なった自己たちという概念から抜け出さなければならないことを意味しない。その理論がどんなものであろうと、私には、自分自身を異なる自己に分割するという我々の慣行を守る用意がある――無限の自己に、ではなく、**三つ**の自己に、である。

自己1がいる、我々は自己を意識しているのであるから、それは常に客体である。自己2がいる、それは主体または客体の可能性がある。この自己は自己1を観察するが、同様に自己3によって観察され得る。この最後の自己は客体ではない。それを観察するほかの自己はいない。私が今しているように、我々は紙の上に自己3を置くことはできるけれど、実際のところは自分の自己3には気づいていない。それは究極のものである。では、三つの自己の仕組みを見てみよう。

自己1は「私はダンにもライル教授にも同意できない」と言う（これはいわば、闘争の中での、雑然とした意見、感覚、偏見の言葉である）。自己2は「私はダンにもライル教授にも同意できないということを知っている」と言う（これは闘争の外で、その主題について話したり書いたりする準備ができていると言っている）。自己3はおそらく何も言わず、ダンやライル教授について何の関心も持たない。しかし、もし話すことを強いられたら、おそらくこう言うだろう。「私、自己3は、自己1がダン

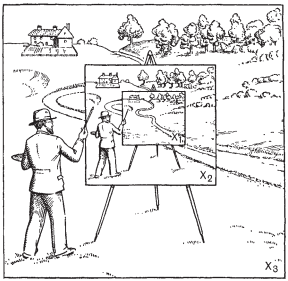
とライル教授に同意できないことを自己2が知っているということを知っている。で、たぶんこれが、私が考慮に入れなければならなそうなものだ」

大きなストレスがかかるとき、自己3はほかの二者の前に出て、支配する。ここに私が覚えている実例がある。自己1は航空機内でひどい音を聞き、座席から自分が放り出され、旅行鞄の一部にぶつかったことに気づいた。自己2は恐ろしい事故が起きようとしていることを知っていた。自己3は言った。「さてさて、生きたままフライにされるというのはどういう気分なのか、すぐに分かるだろうな」。ほかの二つの自己とは違って、自己3は本当に気にしない。まるでほかの二者に、ただ何となく付き合っているだけのようだ。

しかしながら、この三つの自己は、たぶん分離の問題を除けば、連続していない（自己1は、分離不可であるか、それがまったく機能していない。自己2は、知識を獲得して整理するために分離が必要である。自己3は、それがただ究極であるということから、我々が理解できない方法で完全に分離している）。これらを一連の観察者と呼ぶことは、その異なる機能と性質を見落とすことになる。必要なら、――同じ動詞を使用すると問題が単純化されすぎるが――我々は意識している（1）ことを知っている（2）ことを知っている（3）、と言うことができる。こういう言い方は好きでは

ないものの、それでも私は、普通の人間の経験の不可欠な部分として、この「我々が知っていることを知っていること」を擁護する覚悟はできているつもりである。しかし、それ以上の「知っていること」は何も追加しない。自我は後退的ではないが、三つの用語は要求するのである。

『連続宇宙』の中に見られるように、ダンは、自分の絵の中に自分が認識しているもの全部を入れようとしている狂気じみた画家を紹介することにより、自分の理論を面白おかしく図解している。彼は、この象徴的な例をあまり真剣に受け止めていないが、我々がひとたびX3に到達したらX4、X5、X6と永遠に続けなければならないと主張する準備はできていたであろう。それに対し、私の主張は、狂気はともかく、理性ならX3で止めることができるということである。後退は、それ自身のほかは何も追加しない。だが、彼がその絵に続いて書いてい

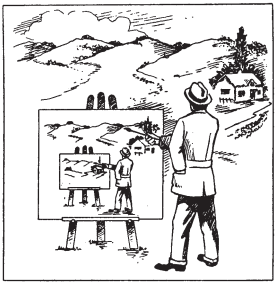


ダンは無限後退――彼の連続時間の考えの主要概念――を、世界の絵を描こうと試みている画家によって図解する。彼の前の風景を描いた後、彼は何かが欠けていることを悟る――自分だ。それで彼はイーゼルを後ろに移動し、自分をその中に描き込む。だが、まだ何かが足りない――自分を描き込んでいる自分である。それで彼はもう一度イーゼルを後ろに動かして――以下続く。

【訳注】右図は『連続宇宙』掲載のもの。底本掲載の図は次ページ。

ることはやや重要である。

*このたとえ話の解釈は十分明白である。この画家は、彼自身が持つすべての知識を授けられた生物を自分の絵の中に描き込もうとしており、描かれた生物が描くであろう絵によってその知識を象徴しているのである。そして、そのように描かれた知識は、その絵を描くのに使われた知識よりも常に少なくなるはずであることが、十分明らかになる。換言すれば、**人間科学が描くことができる心は、その科学を描くことができる心の、十分な表現にはなり得ない**ということである。そして、その不十分さを修正するプロセスは、無限後退の連続的な段階を踏まなければならない。



【訳注】右図は底本掲載のもの。『連続宇宙』ではなく『何も死なない』から引いた図であるが、X1・X2・X3の文字が入っていないので、参考図としては今ひとつだろう。

この最後の言説は、私の意見では彼の全般的な議論への結論としては不要なものだが、それには見て見ぬふりをしておいて、我々は、すぐ前の、心と科学についての言

説を慎重に検討するべきである。私には、それは真実であり、しばしば都合よく忘れられる限界を示すように思われる。科学は、科学者が存在している現実から抽出することによってのみ機能し得る。驚くほどの複雑さを発見し、我々を魅了してほとんど盲目にするにもかかわらず、科学は、それ自身の考慮事項によって徹底的に平易化せざるを得ない。

それにもかかわらず、現実は非常に豊かで奇妙なものだが、我々はそこに時間と観察者自身の無限後退があると考える必要はない。しかるに、『連続宇宙』で開発された純粋に形而上学的な彼の時間の理論が、たとえ脆弱で隙だらけであったにしても、ホームグラウンドにいるダンは自分の思考において最初の頃と同じくらい先鋭的であった。それゆえ、後退的なものが、議論が実際にはそれを必要としないときにまで持ち出されるのだが、それに対する彼の情熱は、彼の中のある種のいたずら好きな要素や、専門家を嘲り、彼らにショックを与えたいというアマチュア哲学者として彼の欲求から来ていると感じざるを得ない。「ああ、あなたは無限後退を見てみたくありませんか？　よろしい、私の方をご覧なさい！」その結果、彼は破壊的批判を招いたのみならず、それに対して自らを広くさらしたままにした。

＊このたとえ話の〜……『連続宇宙』第二章「画家と絵」からの引用。

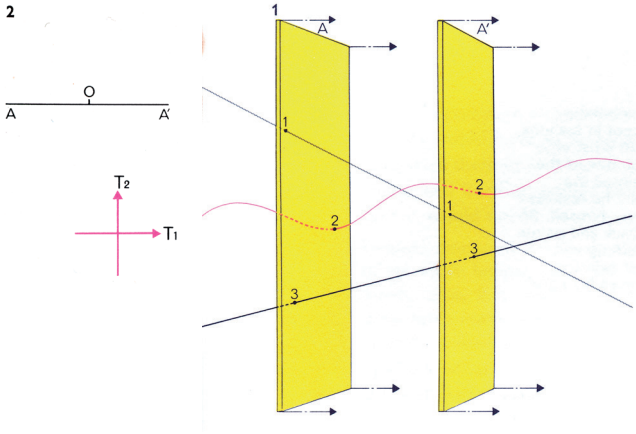
しかし、彼は自分の時間理論の後退的な性質についてずいぶんけんか腰で強調していたけれども、それがどのように機能するかのより詳細な説明が後退の最初の三項に限定されていたことは重要である。時間1、2、3。観察者1、2、3。実際のところ、彼が必要としたのはこれだけだった。

我々が、例の古代の城で最後に会ったとき、私は彼の無限後退を論難し、彼にそれを放棄するよう求めてみた。最終的に彼は、後退はしないであろうことを認め、それは単なる見かけ上のもの、知られていない辺境砂漠の蜃気楼のようなもので、人間の知力と交差することはない、ということを示唆さえしたのである（おそらく、その晩彼は客を迎える側だったので、それほどたくさんのことを受け入れてくれたのだと思う）。H・E・ゲリエ中佐は、私よりも多くダンと会っている人で、そのことに関する限りでは彼をあまり理解していなかったのだが、こう書いている。「物理的または精神的な経験に対して実用性のない理論を除き、後退は開始部以外重要でないということは、死後出版された『侵入？』という本の第一章最終段落で主張されている」。かつて、既知の海岸線一つを残し、大きな空白スペースをドラゴンやその他の怪物で埋めていた中世の地図作成者さながらに、ダンは自分の後退へと突入した。それは彼に多くの害をもたらした。自分の時間の考え方に挑戦されたくない専門家たちは、防

御力の弱い部分がここにあると見抜くと、突撃し、その後、自分たちが彼の連続理論の概論を打ち砕いたと感じたときには、時間について彼がしたかもしれない本当の発見まで無視して満足した。

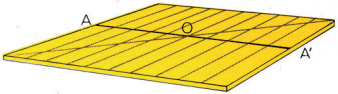
（【訳注】図が見開きなので次のページへ）

図1は、時間は空間の三つの次元と同じくらい現実的な四番目の次元である、という考えに基づいている。左側の平面の番号付きの点は、時間の特定の瞬間における空間内の物あるいは出来事の位置を表す。右側の平面は、時間における後の瞬間を表す(時間の次元は左から右へ)。物／出来事の空間的な位置が変更されたため、各数字の位置は異なっている。各瞬間、それらの点は静止している。実際の動きは平面によってなされ――我々はそれを「現在の瞬間」として観察している――、それは時間の中を動く。我々の記憶は点が動いたことを自らに告げる。しかし、我々の三次元の観察では、それらは静止していると認識される。だがそれらは四次元的であり、「持続」(交差している線)を持つ。よって、我々の三次元的な観察は、移動している現在の瞬間(移動している黄色い面)によって四次元的実体を認識する。さて、ダンは、現在の瞬間が動くなら、その動きを計測する時間があるべきだと主張する。図2では、Oは特定の瞬間――観察者の「現在の瞬間」――を表し、A′はその時間における動きを表す。Oの瞬間を計測するには、時間2が必要となる――第五の次元である。

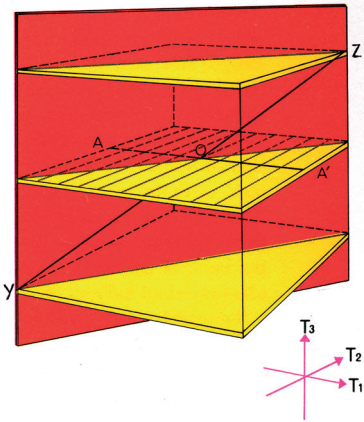


時間2の動きをページの垂直方向としよう。今、実体が時間1で持続を持っていたのとまったく同様に、それらは時間2で持続を持つ。これは青い線で表されている（図3）。Oが時間1のAA′に沿って動くにつれ、AA′自身は時間2で移動する。よって、Oは対角線をたどり、それが時間2の現在の瞬間の動きを表す（図4）。対角線は、五次元世界における四次元的観察者の現在の瞬間である。この時間2の観察者は観察者2と呼ぶことができる。時間2における観察者2の現在の瞬間は、計測することができる――時間3によって。図4を傾けて平面として表示し（図5）、時間3の瞬間をページの垂直方向としよう。すると、時間2の現在の瞬間が時間3で上に動くにつれ（図6）、Oは対角線YZをたどる。これは第六の次元である時間3内の、現在の動きを表す。しかし、時間3は計測することができる――時間4によって。以下、果てしない時間の連続が続いていく。ここで特に興味深いのは、観察者2は時間1（AA′）の全体を観察できるけれども、通常彼の注意は時間1における観察者1の注意に従う、というダンの主張である。観察者1の注意が弛緩しているとき――睡眠中のような――のみ、時間2の注意は時間1をさまようことができる。そうなると、観察者2は、夢の中で観察者1の未来を見るということもあり得る。

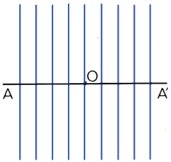
5



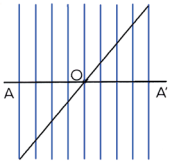
6

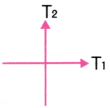


3



4





4

今から我々は、ダン自身の真の基盤であると私が考えているものに戻る。ここで彼は、夢の中で――一生に一度というわけでも、恐ろしい災害の危険にさらされているときでもなく、定期的に――我々は、過去を見るのとまったく同様に、未来も見ていることを発見した。それはどんなふうに起こり得るのか？　どんな働きをするのか？

彼の説明を理解するには、時間1とその観察者1、それに時間2とその観察者2を承諾する必要がある。後者が観察するのは、観察者1の「脳の状態」（彼の時間1の経験）とダンが呼ぶもの――通常の覚醒時の生活に属する「感覚現象、記憶現象、そして連想思考列」である。さて、観察者1が目覚めると、2は、我々がすっかり精通している三次元的焦点を使って観察者1が時間1で発見しているものに、注意を向ける。

ところが、時間2における観察者2は、四次元的見通しを持っている。これは、観察者1の「未来の」脳の状態が、観察者2の検査に対し、1の過去の脳の状態と同じくらい開かれているらしいことを意味する。だがそれはまた、観察者1が眠っているときには、彼の三次元的焦点は、観察者2のためのガイド、あるいは「移動している集中指標」としての役割をもはや務めることができないことも意味する。そのとき後

者には、――その多くが観察者1にとっての「未来」であるところの――広い時間1の範囲を持った四次元的焦点が残される。

しかし、観察者2は、適切に注意することも集中することもできない。時には彼は、予見的かつ明晰な夢において自分がするはずであるのと同じくらい、事をうまく運ぶかもしれない。だが通常は、無活動状態で眠っている観察者1に導かれることのない観察者2は、その四次元的焦点が五里霧中の状態で、それは時間1に沿ってあちこち動き回り、彼の経験をナンセンスなものにするのである。

時間1と時間2、観察者1と観察者2の間のこの関係が、たいていの夢はかなり困惑を招くものであると我々が理解している理由を、ダンにうまく説明させている。

夢の間じゅう、あなたは夢の光景を、領域1で経験するものに似た三次元的光景の連続として解釈しようと努める。それでも、あなたの焦点の長すぎる時間1の長さが、常にあなたを打ち負かす。見られるために固定されたままのものは何もない。すべてが流動的な状態にある。あなたの光景は常に、探し求められている時間1の瞬間の直前と直後から構成されている。そして、集中した焦点を維持しようとするあなたの試みの断続的な破壊のため、夢物語は切れ切れの光景の連

続で現れる。あなたは旅に出る……そして、ついには不意に自分が何者なのかに気づく。あなたは常に、覚醒時の観察において慣れている方向――すなわち時間1の前方――に注意の動きを確実に保とうとするが、注意は必ず弛緩し、それをもう一度引き締めると、たいていは間違った場所に焦点が当てられ、夢物語の前の場面を再観察していることに気づく。あなたは、覚醒時なら関連イメージの列として認識しているであろうことを追跡し始める。ところが、その旅の最中ではあなたの注意はやや弛緩しているため、実際に知覚されるものは、その列の最初のイメージに直ちに最後のイメージが続くようなものかもしれない。壁を通ることなく家に入るように思われるのは、もちろん四次元世界では極めてありふれた偶発事の一つである。

ここで私は、これが我々のほとんどの夢、特に確固たる努力なしでは覚えておくことができないようなものの十分な説明となる一方で、すべての夢の説明にはならないという私の信念を記録するため、ダンを遮らねばならない。というのは、この三次元的または四次元的焦点の混乱の外にある夢――急激な変化や支離滅裂さのない明晰な夢、また明らかに象徴的な人物が役割を演じる強烈に劇的な夢など――があるからで

ある。我々が容易に覚えておけるような、また決して忘れないような夢や、我々の感情が深く関わるような夢は、観察者2と、観察者1の「脳の状態」との関係によっては完全に説明することはできない、というのが私の考えである。何かほかのものが働いているのだ。

ダンは、彼が「途切れのない睡眠の本当の夢」と呼ぶものにそれを指摘しており――観察者1の身体感覚に由来する断片的な夢とそれらを区別するために――、そういう夢では、我々は激しい痛みを感じないし、「明るい太陽に幻惑されることも、大きな騒音に耳を聾されることも、着心地の悪い衣服に苛立たされることも、罵られたりぎょっとさせられたり疲れさせられたりすることもない。夢は」、彼は続ける、「十分現実のように思えても、覚醒時の生活のこれらすべての不快な強い特性を欠いている。我々は、自分の肉体の存在にほとんど気づかない」

これは真実だが、新しいものではない。一般に受け入れられている説明は、我々は「これら不快な強い特性」を、夢ではその信号を運ぶ神経が機能していないために、回避しているということだ。しかしこれは、夢は、痛みの感覚を引き受けてきた――またこれから引き受けるであろう――観察者1の脳の状態（時間1の過去と未来）の中を行く、観察者2の混乱した旅から生まれてくる、と主張しているダンにとっては、

役に立たないだろう。そういうダンの説明は非常に巧妙なもので、そのような感覚の強さは我々がそれに集中する注意に左右されるとのこと、また四次元的見通しを持つ観察者2は、観察者1ができる――また必ずそうする――ようには自分の注意をピンポイントに向けることができないとのことである。時間2の焦点は、あまりに広すぎ、弛緩しているのだ。

ここでの彼は、夢の感情的な性質については何も言っていない。が、彼に続けてもらうことにしよう。

今、夢を通じて、覚醒時の感覚的経験について考えるのと同じように、あなたはその夢について**考える**。あなたは、自分が夢で見るものの重要性を値踏みする。あなたは夢の状況に対処するために素朴な計画を立てる。あなたは夢の中でつい今しがた起こったことを覚えている。……そんなのはどう見ても幼児レベルの思考であると言ったら言い過ぎになりそうだ。というのも、それは大人の生活に属する概念――例えば政治思想のようなもの――を含むからである。とはいえ、我々は、領域1の連続する脳の状態の検査に伴うものに比べ、それが並外れて貧弱な種類の思考であることは全面的に認めてもよいかもしれない。……

ここで彼は、我々の覚醒時の経験は時間1で機能している観察者1を伴う、と言っている。そして、我々の夢の感情的な性質については依然として何も言ってくれないので、彼のために私があえて言っておこうと思う。

恐怖から純粋な喜びまで、夢の中で我々に押し寄せてくる感情がある――覚醒時の生活の中ではめったにないような混ざり気のない感情や、幼年時代を思い起こさせる感情である。そのとき我々は、見えない恐怖やさまざまな悲惨の薄闇や暗闇から、大いなる輝かしい歓喜の頂点に努力することなく到達するまで、よろめき歩くことができる。我々は、あまりにも惨めに押しつぶされたり、またあまりにも膨大な幸福を得ることは決してない――夢の中では時々あることを除いては。

従って、我々は夢の中の生活において、ダンが示唆するように、子供のように考えているだけでなく、彼らのように感じているのかもしれない。言い換えれば、この四次元的な観察者2は、推理力は弱いけれども、ある強い混ざり気のない感情を経験するための大きな能力――いつも使われているわけではないにせよ――を持つということだ。彼は、我々が覚醒時の生活でいると思われる位置よりも、天国や地獄にずっと近いと言えるのかもしれない。

時間1において鮮明な焦点を持った観察者1が、観察者2および随行するほかの全観察者を**教育している**ということ――今、私は複雑な技術的証拠と議論をいくらか省いているが、ひとたび彼の主要な理論が受け入れられてしまえばこれで十分だろうと思う程度のものである――、それがダンの確信である（とはいえ、我々は必ずしも受け入れる必要はない）。我々は考察する必要がある、彼が言うように――

自分の注目に対して提示されるものを**解釈することを学んでいる**高位の思考者という興味深い概念、覚醒時間中の、絶え間ない三次元的注意や、その驚くべき連想機械装置部分のすらすらと動く自動的動作を備えた、脳、この彼の追従者であるものに含まれる教育的プロセスという興味深い概念……。結局のところ、優れた知性のためのどんな能力が高位の観察者に潜んでいるとしても、それは発達を待つ能力なのである。最初は脳が先生で、心が生徒だ。心は、脳に基づいて自身を陶冶することによって、構造と個性を得るための奮闘を開始する。進化は、ことによると八億年も、脳の発達に向かって進んできた。……そして、その自立的で自己発達的な活動とは別に、脳が、萌芽期の魂に、考えることを教える機械としての役割を果たすことは、今や明らかである。……

これは、我々も認めるべき、大胆で素晴らしい概念だ。それは宗教と科学進化という二つの対立する学派に属する二人の手ごわい敵対者たちを、和解させ始める。一見したところ、これは驚くべき解決法を提供している。しかしながら私は、その強情な後退の考えによって、ダンの地位は徐々に損なわれ、著しく弱体化されているとあらためて感じる（以下に引用がないことをここでお詫びしたいが、単純にその余地がないだけである。私としては、応酬できない人間を不当に扱っていないことを願うばかりである）。

思うに、すべての混乱と困難は、どんどん高位に進む「階級」に属する観察者たちの無限後退を、彼が背負い込んでしまったことから来ている。というのも、時々彼は、あたかも想像できない終点のどこかに、またの名を神という全知全能の究極の観察者がいるかのように書いているからだ。またある時には、直前の引用に見られるように、彼は、学校の上がっていく学年のような連続する時間を伴う、個々の心や魂のための自己教育プロセスに言及している。神は我々を教育している――こう言うとき、我々は慣れ親しんだ場所にいる――と信じることはできる。これよりは難しいが、我々が神を教育していると信じることも可能だ。しかし、この時間と観察者の無限の通景に

沿って、もっと先で何が起こっているかを理解するのは不可能だと思う。それにまた、私にはそれが存在するとは信じられない。後退は完全に誤りである。

今や我々は、難しい部分に到達した。簡潔に、かつ容赦なく言わせてもらおう。未来は、見ることができ、見ることができるがために、変えることができる。しかし、見ることができ、変えることもできるというのなら、それは刻々と経験するために並べられた堅固に存在するものでもなければ、また刻々と創造するのに役立つ存在しないものでもない、ということにもなる。存在しないのなら見ることはできない。しっかりと置かれ固定されているのなら、変えることはできない。観察されたり、またおそらく経験されたりするほど十分に確立されているのに、それ自体を変えることができるというこの未来とは、いったい何なのだろう？

私は、「干渉」の実例を取り上げて、できるだけダンの用語を使って説明してみようと思う。とある小川を訪れ、石鹸を取りに行かねばならなかったので幼児の息子を置いてそこを離れ、その後戻ってみると幼児が死んでいるのに気づいた、という夢を見たアメリカ人の母親のケースを考えてみよう（本書『人間と時間』二二五ページ）。覚醒時の生活で、自分がこれと完全に同じ状況になったことに気づいたとき、彼女は自分の夢を思い出し、幼児から離れるつもりだったのを急に変えた。ここでは彼女を

X夫人と呼んでおく。すると、時間1の観察者1としては単純にX1夫人となり、時間2の観察者2としてはX2となるだろう。

今、X1夫人が眠っている間に、X2夫人はたまたま時間1で先の方にあるものを見た――小川を訪れ、石鹸を取りに行き、幼児が死んだところを。この経験は、目覚めたときのX1夫人にとって記憶に残る夢となる。しかし、ピンポイント指定された**今**が第四の次元に沿って動くので、X1夫人にはほかにも注意を向けるべきものがたくさんある。最終的に、もはや夢を思い出せなくなったX1夫人（この人はもちろん物理的存在ではなく心的存在であって、X2夫人も同じである）は、小川に到着し、幼児を下ろして、服を洗う準備をする。彼女が幼児から離れようとするちょうどそのときX2夫人が干渉したと言ってよく、それでX1夫人は幼児を抱き上げる。そしてその時点で、X2夫人がX1夫人の時間1の未来として見たものが**変更される**。時間2からの干渉と時間1における行動によって、そのような行動が可能な**今**の時点において、時間1でこれから起こるであろうことは完全に異なったものになり、死ぬところだった幼児は救われ、やがては成人に成長するのである。

（当面の問題から我々を引き離し、前に扱ったものに戻してしまうが、私はここで、X夫人の夢は、時間の要素が抜け落ちた単なる警告として合理的に受け入れることは

できないという点を指摘しなければならない。**もし**友人たちが言っていた小川のうちの一筋に行き、**もし**洗濯することと石鹸を取りに行くことを決め、**もし**愚かにも幼児を一人で残しても安全だと思ったのなら、幼児は水に進入して溺れるかもしれないということを、彼女は夢の中では自問していない。ことによると、これらの**もし**と漠然とした不安とが、彼女が後に小川で認識したおびただしい数の鮮明な詳細を作ることを不可能にしたのかもしれない。だから、X夫人は、自分自身を欺いて多少の嘘を加えていたか、あるいは予見的な時間の経験に正真正銘関与したかのいずれかである。そして、私としては、時間の因習的な考え方がかき乱されないままにしておきたいがため、この婦人やほかの何百人もの人たちを非難する必要がなぜあるのか、その理由が分からないのである）

時間1の行動に繋がるこの時間2の干渉は、時間1の未来を変え、自由意志と決定論との古い争いを終わらせる機会を提供するように思われる。我々の存在が一つのレベルにあると仮定した場合は、その対立意見を和解させることができない。時間2からの干渉がなければ、我々の人生は時間1の長さに沿って決定されていると言ってもよさそうである。しかし、もしその時間にいる我々の観察者1が、観察者2の時間2からの干渉を無視することがなければ、我々は、差し出された選択肢を受け入れなが

ら、ある程度の自由意志を享受しているとも言えるだろう。

我々は、――これらのダンの用語で――困惑を招く未来が現在に影響を与える（FIP）効果も説明することができ、これは「手紙」の章の第二節に既出のものである。よって、ドクターAとB夫人の事例に戻ってみよう（本書『人間と時間』二〇一ページ）。今、ドクターAがB夫人と恋に落ち、彼女と結婚した。これらの出来事は、彼の時間1の長さに沿った「脳の状態」をいくらか興奮させるのに関与したはずだ。彼の観察者2は四次元的なやり方でさまよっているが、この興奮に注意を向け、反応したはずである。これは予見的な夢をもたらしたかもしれないけれども、それがなかったからといって、時間2から時間1への伝達の完全な欠如を意味するわけではない。すでに見たように、知らないB夫人の名前を見ただけで、それが個人的な手紙ではなく公式の通知であってさえ、ドクターAには異様な興奮を感じさせたのだ。それは、時間2の彼から時間1の彼へのプレゼントであった。

ここまでで、我々はまだ本当に難しい部分には到達していない。ここで、大きな難問が立ちはだかる。『時間の実験』第二十五章において、ダンは的確な質問をすることから始めている。

観察者2は、観察者1の（時間1においての）「先」にあるものを見るので、そこには彼にとって見るべき何かがあるはずである。そして、そのように確実にそこにあるものが何であれ、それは時間1を用いる観察者1の視点からは「事前に決定された」ものであるに違いない。すると、疑問が生じる。この「何か」とは何なのか、そして観察者1は、どのように彼の時間1の「今」に干渉することによって、それを変えることができるのか？

その後、この短い章の残りの部分全体にわたって、彼は、記述している観察者に関連する観察によって記述される世界について、また、我々の存在は常に、我々が統一性のある心的な絵を描くことができる世界の外にあるということついて、さらには、我々が記述する物理世界は、時間1においては決定論的だが、移動している時間1の「今」において我々が観察者1と「接触点」を持つもののように見えるということについての、読者の目に印象的に映る記述を行っている。しかし、彼は、上の極めて重要な質問には答えを与えてくれていない――**この「何か」とは何なのか？**

X夫人とその子供に戻ろう。そしてもう一度、時間1におけるX1夫人、時間2におけるX2夫人を呼び出すことにする。ダンならこう言うだろうが、死んだ幼児の夢

は、X1の「未来の」脳の状態の一つに対するX2夫人の注意から生じる。時間1のX1夫人は、幼児の死を見るだろう。時間2の彼女はすでにそれを見ており、そのために生じた夢である。それから、すでに説明された干渉がある。

しかし、この死んだ幼児は何なのだろう？　ダンの理論では、X2夫人やX3夫人とは違って、X1夫人は幼児を**想像**することができないのだから、それはイメージを超えるものでなければならない。彼によれば、X1夫人は、時間1の長さに沿って**今**とともに動いているはっきりした三次元的焦点を提供するが、それには必要となるかもしれない何らかの推論も伴うことになる。彼女は、想像部門ではなく、現実にX2夫人の役に立つ、記録仕事に携わっているのだ。

従って、もし彼女の時間1の、未来の脳の状態に死んだ幼児がいるならば、三次元的焦点で観察されるべき、二十ポンドくらいの、**実際に**死んだ幼児がいることになる。そして、もしそうなら、X1夫人がX2夫人に促されて自分の未来を変える行動を取ったとき、彼はどうなったのだろう？　幼児はどの世界で死んだのだろうか？　私としてはその疑問から逃れることができないし、私の考えでは、ダンはその答えを提供してくれていない。残念ながら、それは**重大な**疑問のままになっている。

私が彼を追跡できる限りでは、ダンが後に、物理世界を描いた我々の絵、すなわち

我々の脳の状態とは無関係に独立して存在する物理世界を主張することは、単に「唯物論」にすぎない、と示唆しているのは確かである。しかし、ひとたび彼がその形而上学的理想主義の極端な態度を取ってしまうと、彼はその後退する観察者たち、時間が限定されてはいるがはっきりと焦点を合わせられ、ゆっくりではあるが確かな三次元的経験を有する観察者1によって教育される全存在である観察者たちの、その間の関係についての彼の理論全体に、崩壊をもたらすように思われる。

時間1で彼が経験していることは、物理世界における我々の生活であり、それは時間1でもある。我々は、自分の教育のために、幼稚園のおもちゃのようにそれを必要としていると、彼は示唆する。我々は、この不器用で限定された身体レベルでスタートしなければならない。しかし、その後人がそれをもはや必要としなくなったときには、ダンは、それを消滅させるのみならず、それがなかったようなふりをしているように、私には感じられる。そういうわけで、彼は依然として私に質問させたままなのだ。**死んだ幼児はどうなった？**

5

ダンをまだ読んだことがなく、『時間の実験』と『連続宇宙』の手ごわい晦渋（かいじゅう）さを

避けたいと思う読者は、後に一般大衆向きに書かれたもっと短い二冊の著作で始めるのがよいだろう（ただし、何とも皮肉なことに、定期的に再版される必要があるのは『時間の実験』なのである）。後の、これら二冊のもっと短い著作とは、まず一九三八年に出版された『新しい不滅性』、それに一九四〇年に出版された『何も死なない』である。この両著は、タイトルが示すように、連続理論の総論の簡易化された説明も含んではいるが、力点はダンの来世の考えにある。

我々は不滅の存在である、と彼は主張する。我々の観察者1が、第四の次元に沿った旅の終わりに達するとき、我々が時間1で「死ぬ」のは事実である。そのとき、時間1の干渉と行動の全可能性に終わりが来る。これが観察者2の（観察者1の脳の状態を通じた）時間1の経験を限定するが、時間2に存在する観察者2の死を伴うことはない。注意を向けるべき時間1の経験――観察者1が眠っているか注意を弛緩させているときを除き、観察者2はこれをしているということを思い出してほしい――がもうないので、そのとき観察者2は、観察者1が時間1でしていたように時間2を経験する。すなわち、それは彼にとって、我々も知るような普通の連続した時間である。彼の四次元的焦点が第五の次元あるいは時間3に沿って動くとき、彼はもう一度学習を最初からやり直す必要がある。人と物は、同じものもあるだろうし、同じでないも

のもあるだろう。我々は、この死後の存在様式を、混乱し歪められてはいるけれども、夢の中で垣間見る。

すでに見たように、観察者2の時間2における四次元的焦点は、夢の混乱と歪みを生み出す。彼には、眠っている観察者1のクリアな三次元的焦点と合理的な誘導が不足している。しかし、この観察者2は、ダンが指摘するように、「時間1で広く隔てられた二つ以上の感覚印象を混合する」ことができる（例：観察者1は、ショーウィンドウで青いドレスを、その後別の場所である少女を見る。観察者2は、これらのイメージを一つに混合することができる。そして、確かに我々の夢は、しばしばこういうイメージの混合を我々に見せている）。彼は、時間2の「来世」において、我々がひとたびその生き方を理解できたなら、作曲家が音符で、また画家が絵の具でするのとだいたい同じように、我々は、自分の時間1に存在する全要素を用いて、混合し、結合し、組み立てることができるであろう、ということを示唆する。

彼はまた、我々の個人的な人間関係に起こるであろうことも示唆している（次の引用では、角括弧内の参考注記は私のものであることにご注意願いたい）。*

小さい「今」［時間1］と呼べそうなものの世界においては、会合は、二人の

人間の体が近接している状態である。両人の注意は、その擬似時間［時間1］の瞬間に焦点を合わせられ、会合の本質である心と心のコミュニケーションは、終始、通常の発言や合図といった手段に従ってなされる。大きい「今」［時間2だが、今でも死後でも観察者2の時間1でもない］の世界においては、あなたの注意はある場面を訪れ、あなたが求めているそれを再び見るかもしれない。あなたは再び話された言葉を聞いたり、同じ抱擁をされたりしたりするかもしれない。しかし、その他人の注意はそこにはないかもしれない。その場合、**会合**はない。さらに、大きい「今」の世界では、コミュニケーションは言葉や身振りによるのではなく、（後で説明するように）共通の意識野という媒介を通じて行われる。心は心と直接通じ合う……その世界での会合は、もしそれがほんの一瞬よりも長く続くのであれば、相互の願望が必要となる。しかし、もしあなたがそれを目いっぱい味わう気なら、それを超えるのものが必要となる。そこで倫理の出番となる。まず、あなたが探し求めているものが彼あるいは彼女の世界構築に携わっていること、それに、その目指す構築があなたが計画するものと本質的に異なることがかなり確実であることを、どうか心に留めておいてほしい。そのときあなたは、あ

＊次の引用では〜……これは『新しい不滅性』第十二章からの引用である。

なた自身の王国の小さな**神**になることができる。あなたは、あなたが望むとおりにすべてを実現させることができる。あなたが思い出すことのできるどんな年齢でも、あなたはかつて知り合った誰とでも再会することができる。彼らはあなたを歓迎するだろう――もしあなたがそれを望むなら。彼らは、かつての小さな諍いにおいて、結局はあなたが正しかったことを認めるだろう。しかし、現在のあなたがとんでもない愚か者でない限り、あなたはこの従順さが真実のようには思えないことに気づくだろう。それらの言葉はあなたによって口述されていること、愛情はあなた自身がでっちあげたものだったということにあなたが気づいたとき、それは恐ろしい瞬間となるだろう。あなたは、その人生でいつも望んでいたものを手にするだろう――すべての願いが満たされた世界を。それは私的な歓びの小さな天国であり――完全な孤独の地獄である。それを回避したりそこから逃れたりするためには、あなたはあなたの統治権の一部を進んで譲る必要がある。ほかの者を喜ばせるために構築する心構えが必要となるのだ。……

単純でよく吟味された倫理――それほど悪くはない――だが、私には、年配の航空エンジニアによるまことに感慨深い直感的ないし想像的努力を背景として、書かれてい

るように思われる。

死後出版となった『侵入?』（これは、ダン夫人が言うには「切迫感をもって、慢性的な不健康状態の中で」書かれたもので、推敲もされず、完成さえしなかった）は、それ以前に書かれたより重要な諸作に比べ、その問題と方法においていっそう個人的であり、より宗教的な調子で書かれている。最後の方には、時間の問題と直接の関係はないが、そこから完全には離れていない一節があって、それは我々の、*最後のダンからの引用としてふさわしいものである。

神経物質のシステムにおける神経エネルギーの流れは、抵抗が最も少ない経路をたどる傾向がある。この種の流れは、もちろん「自動的」と言ってよい。そのような自動的な流れは、（関係している**属**の生活史において）制御不能で無意識になる傾向がある。……**常習的な干渉なしで何世代にもわたって特定の自動的活動が機能するに任せると、まず制御不能になり、次に無意識なものになるだろう。**

さて、ここで、日々の必要に応じることにおいてのあらゆるストレスや危険や困難が、長いこと消え去っている文明を想像してみよう。そこでは、相互の社会

＊最後のダンからの〜……『侵入?』第十章からの引用。

的規則遵守と、それと連動した相互の社会的配慮の慣例遵守が、全員にとって当たり前の習慣となり、そのため個人は仲間づきあいの欠乏や感情的欲求の拒絶に苦しむことがない。その世界では、音楽、美術、娯楽がすべて国家によって提供され、凡庸な大多数の要求に従う。その世界では、「燃え上がる魂」など、あきれるような時代錯誤となるだろう。何が起こるだろうか？

人間の素晴らしい脳は、当然、新しい、型にはまった状況に素早く適応するだろう。循環するそれぞれの情勢への反応は完璧なものだろうし、心はすべきことがなにもない状態である。心は休むことができる。それは、自分の機械的な従者である脳のこびへつらった活動を、静かに座って称賛することができる。心の干渉は、もはや少しも必要とされない。征服された自然から妨害されることもなく、人類にその状況を続けさせてみよう。長期的には、結果はどうなるだろう？

人間は、ほぼ完全に無意識な自動人形になるであろう。

これに対しては、人間はほとんど機械のようになるだけでなく、すぐに自分たちを**劣った**機械と見なすようになる（今、コンピューターやその他の電子機器を誇らしげに紹介する人間の中に、この徴候が見られる）と、付け加えることもできるだろう。優れ

た機械が支配するようになるだろう。しかし、人が、機械が知ることのできない時間の中に心が存在することを理解したならば、決してそうはならない。

ここで私は、この章の最初に述べたことを事実上繰り返す――我々の中で時間の問題に何らかの関わりを持つ者は、ジョン・ウィリアム・ダンに大きな借りがある。彼の、時間の後退的概念と強烈な個性は、私がしたように、拒否されるかもしれない。彼が時間後退の形而上学的根拠のために相手のグラウンドで戦ったとき、プロの哲学者たちは彼を打ち破ったと思われるかもしれない。これも私がしたことだが、彼は、自らが舞台に持ち込んだウサギを追いかけるのに、あまりに長い年月を、またあまりに多大なエネルギーを浪費したと感じられるかもしれない。しかし、彼の夢の実験と、夢見る自己の分析は、私には、この分野のほかのすべての人間の努力を合わせることでできるものよりも、さらに価値があるように思われる。

今では、ダンの仕事を考慮することなく時間の問題を真剣に検討することは、何人たりともできるものではない。それは、彼の存命中、本来そうあるべきほどには広く認識され、評価されたことがなかった。彼は、我々の偉大な独創的人物ならびに解放者の一人として、依然として称賛され、名誉を与えられなければならない。私は、これらの感謝および大声で叫ぶ愛情のこもった**ブラヴォー**を、彼の観察者2ないし3に

伝える何らかの方法があるものと思いたいのである。

パリ広場の二十四時間。地下鉄の開始と最初の人の気配から、忙しい日中を経て、夜と地下鉄の終了へ。最後に散水車がやって来て、また別の日が始まる。これは我々になじみ深い時間順の、一次元的な時間である。ダンの理論には欠陥があるけれども、彼は、――自分の観察に基づいて――こういう「種類の時間」こそが存在する唯一のものなのだという考えと矛盾するものが我々の経験の中にはある、と主張した人々のうちで、最も重要な人物の一人であり続けている。